KAPPA NOVELS

連作時代小説

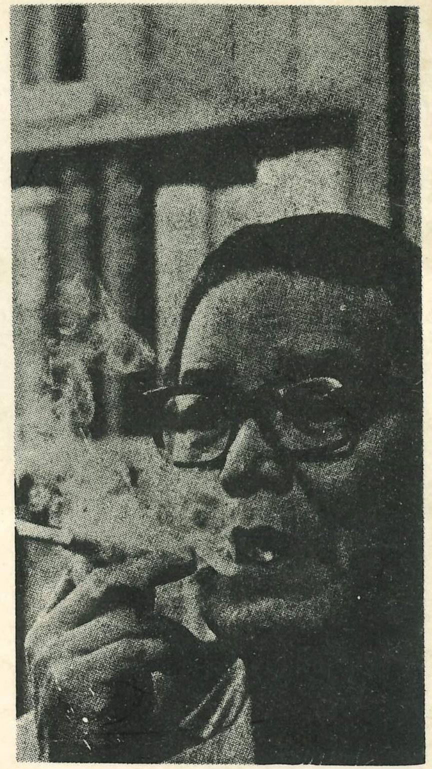
悪の捕物帖

佐賀潜

KOBUNSHA

江戸の四谷を縄張りとして、にらみをきかせる鳴海屋弁蔵は、盗人あがりの岡っ引きだった。蛇の道はへびのたとえどおり、彼は闇の世界に生きた前科者だけがもつ鋭い勘を生かして、つぎつぎと難事件を解決する……。

全裸でさらしものにされた人妻の心中死体が、別の女とすりかえられていた謎を追う「心中さらし」など十編を収録。この『悪の捕物帖』は、検事、弁護士、テレビの人生相談の回答者として〝現代の悪〟を見つめてきた著者の、作家的集大成ともいえる、異色の悪漢小説である。



（仕事場でくつろぐ著者）

作家としてスタートした最初の作品が時代小説であった佐賀潜は、自分の本領は時代ものにあるという。この夏、胃ガンの疑いで入院したが、死の病床で、書名を考え、「著者のことば」を書いた。この真摯な姿勢から、〈佐賀潜 捕物帖〉の決定版であり、遺作ともなった本書に寄せる、彼の深い愛着と自信がうかがえるのだ。

KAPPA NOVELS

悪の捕物帖・佐賀 潜

¥480

(分)0-2-93(製)02181(出)2271 (0)

悪の捕物帖

連作時代小説

光文社

佐賀 潜

KAPPA NOVELS

連作時代小説

悪の捕物帖

佐賀 潜

デザイン 伊藤憲治

この捕物帖は、いわゆる〝勧善懲悪〟を旨としたものではない。正義の味方であるべき捕方、目明かしもまた、過去に暗い影を宿し、権力を巧みに利用する悪の一味だったことを知るならば、捕物が単なる〝十手もの〟に終わるはずはないであろう。無法者が、法の代行者として、庶民を支配していたという事実をもとに、ぼくは、江戸時代の悪――それも、追われる者の悪と、追う者の悪とを、この作品の中で書いたつもりだ。

「著者のことば」

連作時代小説

悪の捕物帖

『江戸黒絵図』改題

佐賀 潜

KOBUNSHA
カッパ・ノベルス

目次

心中さらし　5
屋根から来た男　42
女敵(めがたき)討ち　80
医師道庵(どうあん)の顔　118
すりの季節　156
さいころ師　194
私娼窟(ししょうくつ)の女　232
悪の人別帳(にんべっちょう)　269
逃亡者源次(げんじ)　307
古着と小判　345

本文のイラスト　御正　伸

心中さらし

一　千日墓地

天明五年二月十九日――。

四谷坂町、畳屋甚左の家で、内儀のあきと番頭新兵衛が、心中した。死体は、店の裏側につづく母屋の、内儀の部屋で発見された。二人は、鴨居から細引を吊るし、覚悟の縊死をとげたのだ。

主人甚左は、これを町名主に報告し、同心浦島平内の出役があって、検死の後、二人の死体は、坂町から五、六丁はなれた千日谷の墓地の前にさらされた。

今から百八十余年前のことである。

そこは深い窪地になっていて、右手が信濃町の高台寺と大名屋敷で、うっそうと樹木が茂っている。左手に小高い丘があり雑木林。その中間がいわゆる千日谷という湿地帯をなしている。少し雨が降れば、水が溜まり、ぼうふらの溜まる池となってしまう。その低地の奥に無縁墓地があった。

おあきと新兵衛の死体は、その湿地帯のはずれ、松岩寺の土塀の前にさらされた。太い丸太を組んだ柵が建てられ、全裸のまま、くくりつけられた。

心中者のさらしは、この時代の定法だった。元禄以後、太平に慣れた江戸市民の中に、退廃的気風がはびこり、自由恋愛の末、心中する者が多かった。

心中の発祥地は、遊郭吉原で、自由廃業できない遊女が、気の合う男を求め、情死をとげた。これが一種の流行となり、毎月一件や二件の心中事件があった。幕府は、情死の風習を断ちきるため、心中さらし――の制度をこしらえた。が、この制度は、天明五年、四谷坂町の心中さらしの以後、廃止された。

千日谷の、おあきと新兵衛のさらしは、江戸中の大評判となった。原因は、おあきの死体の黒いしげりにあった。おあきは美人ではないが、五尺二寸の体は肉づきがよく、盛り上がった乳房の隆起、腰のあたりの曲線など、死体ながら、男たちは、溜息を吐くほどだった。

朝から日が昏れるまで、押すな押すなの人だかりとな

ったのは、体の中心をなす部分が、異常なほど黒いひろがりを見せていたからだ。

両肩を縛られ、両足を丸太に結わかれ、白日のもとに全裸をさらしていたのだから、見物人たちは恐怖と感嘆のうめきをあげた。

しげりは、通常、三角形の黒いかげりをつくるものだ。が、おあきの場合は、腹部の中ほどから、つけ根にかけて、熊の肌を思わせるほど密生していたのだ。

一日千人——と言われる見物人も、日が昏れると、影をひそめてしまう。森と林の谷間の無縁墓地は、いくら物好きの江戸の町民たちでも怖ろしかったからだろう。

ところが、三日後、おあきの死体に、奇妙な現象がおこった。評判になったしげりが、跡かたもなく消えてしまったのだ。

「いたずら者が、盗んだ」

「なんのため、盗んだだろう」

見物人たちがささやきあった。

おあきは、畳職甚左の後妻である。

畳屋といっても、甚左の店は、格式があった。幕府の御用畳師に、伊阿弥家という一族がある。畳職人は、町人だから名字は許されないのだが、とくに、名字を許されていた。これを受領名という。甚左は、伊阿弥家の下職で、江戸城中の畳替えがあれば、伊阿弥家の配下として、仕事を受け持った。したがって、畳屋といっても、町人相手の畳職人とはおのずから違った風格を持っていた。間口五間の店構えは、堂々としていたし、土間には、畳の芯がうず高く積まれ、畳表が丸められ、さし込み棚に入れてある。右脇に一段高い畳敷きの帳場があって、番頭や手代が帳つけをやっている。

二階が、手代や丁稚の居間。土間を通りすぎた奥が、母屋になっていて、そこに甚左夫婦と、養女のおぎん、女中たちが住んでいる。店と母屋の間に、植込みがあって、建仁寺垣で囲いができていた。

おあきが、甚左のところへ、後妻にきたのは、五年前の十八歳の秋である。甚左は、当時四十歳だから、二十二歳の年齢差があるわけだ。甚左の先妻は、前年の暮、疱瘡をわずらって死亡した。夫婦の間に子どもがないので、牛込袋町の酒商三河屋の娘おぎんを養女にもらった。おぎんは、十歳の春、もらわれてきて、心中事件のあったときは、十七歳の娘盛りになっていた。

おぎんは、後妻のおあきになじまず、そのため、家の中はなんとなく冷たかったという。おあきが家付番頭の

新兵衛と通じたのは、そんな家庭の空気が反映したのかもしれない。姦通は、明暦以後、男は引回しのうえ、獄門。女は、死罪と定められた。姦通が、発覚すれば、処刑されるより情死を選ぶのが人情だろう。

甚左の家に、文吉という手代がいた。

年は二十歳になったばかりだが、読み書きもできるし、畳刺しの腕もたしかだった。彼は、荏原郡桐ケ谷村の百姓の二男に生まれたが、十二歳のとき、甚左の家へ丁稚として、八年の年季奉公にあがった。

文吉は、年と共に頑丈な体格となった。身長は、五尺六寸を越え、体重も十九貫を突破した。甚左の店の中でも腕力は群をぬいていた。だから、力仕事があると、必ず、文吉が言いつけられた。

内儀と番頭が心中し、千日墓地へさらされてから二日目の晩、文吉は、甚左に呼ばれた。竹垣の木戸を通り、庭づたいに奥座敷へ出向いた。甚左が、十畳の座敷に腕組みしてすわっている。文吉は、廊下へ両手をつき、頭を下げた。

「こっちへ上がれ」

甚左の声が、重く沈んだ。

文吉は、ずり膝で、主人の前へ進み、怖る怖る顔を上げた。

行灯の明りを半顔にうけた片眼が光った。

文吉は、思わず身ぶるいをした。

甚左は、いわゆる怖い主人で、めったなことでは笑顔をみせたことがない。無口で、ぎょろりとした眼で睨まれると、手代、丁稚たちが震えあがる。畳職人でありながら、武士のような引き締まった風貌をしている。

二重瞼の眼は大きく、小鼻が張っていて、結んだ口元は一文字に裂けている。鼻の両脇に太い皺があって、頰骨がとがり、見るからに偉丈夫という感じがする。文吉は、この主人に、特別、眼をかけられた覚えはない。ただ、通い番頭の十兵衛が、

「旦那は、お前に眼をつけていなさる。辛抱すりゃ、のれん分けはまちがいないよ」

と言ってくれたことがあるだけだ。

「文吉、おめえ、今から千日墓地へ行ってくれ。あっちへ着くころはちょうど五つになる。あたりは真っ暗だ。人目につくことはねえ」

甚左の声は低いが、力がこめられた。

文吉は、「へえ」と言ったものの、後がつづかず声を飲んだ。千日墓地は、昼間でも怖いところ。まして、内

儀と番頭の死体がさらしてあると思うと、背中へ冷水を流しこまれたような恐怖を感じた。

「怖いか」

「へえ……おかみさんと番頭さんの……」

「そのおあきの死体をもらいに行くんだ」

「無縁墓地へ葬られるんじゃないんですか」

「そうだ。けどな、考えるとかわいそうだ。番頭の新兵衛と道ならぬことをやったのは憎いが、ほとけになっちまった者まで、さらすのはむごすぎる。そう思わねえか。ご政道に楯をつくようだが、毎日、千人もの人が、おあきの裸を見にきている。わしは、今日も、そおっと、人垣の中から見てきた。ふびんで仕方がなかった。だから、おあきの死体を、こっそり運びてえのだ」

甚左の頬に薄笑いが浮かんだ。

「じゃあ、私が、おかみさんを、丸太杭からおろすんで」

「そうだ。そして、代わりの女の死体を、前と同じように、縛りつけてくるんだ」

「代わりの死体……それは、どこに……」

「さらし場の奥が、無縁墓地、そこに菰に包んだ女の死体がころがしてある。いくつかたまったら、墓地の番人が埋めるんだろう。家内の死体を丸太からはずしたら、無縁墓地へ持っていけ。そして、菰の中の死体を担いで、丸太杭へ縛りつけてくるんだ」

文吉は、答えず、膝の上の拳固を握りしめていた。順序はわかったが、とてもできそうに思えなかった。

「旦那……私一人じゃとても……」

「一人じゃない。墓地に、もう一人いる。わしが頼んだ男だ。その男は、お前に気づかれないように見張りをしている。おあきの死体を運ぶのは、その男の役目だ」

甚左の眼がぎらぎら燃え立った。

主人の命令は、鉄石のように重い。

文吉は、全身を堅くしながら、

「へえ、やってみます」

と、震え声で答えた。

「人に見られるといけねえ。これを着て行け。ここで着換えるんだ」

甚左が、傍らに置いてあった風呂敷包みを、ほうり出した。文吉は、風呂敷をあけた。黒っぽいめくら縞の着物と、へこ帯が出てきた。文吉は、すばやい動作で着替えた。

「風呂敷で、頬冠りをしてゆけ」

文吉は、風呂敷を三角にたたむと、頬冠りをした。

「番人小屋が、太い松の下にある。見とがめられねえように、気をつけるんだ。気付かれたら逃げろ。明日の晩やればいい。町方の御用聞きも、めったなことじゃ見回りにはこねえところだ。安心して行きな。ことわっとくが、おあきの死体を墓地へ運んだら、そこに黒ずくめの男がいる。口をきくんじゃねえ。その男は、お前が誰であるか、知ってはおらん。ただ、日当をもらって、おあきの死体を運ぶ役目を受け持ってるだけだ」

「わかりました」

「ここに銀が少しある。お前の日当だ。持っていけ」

甚左が、紙に包んだ銀貨をほうり投げた。文吉は、それをふところにねじこんだ。文吉は、頭を下げ、主人の前を引き退った。

「履物は、そこの踏石の上に、麻裏がある。それをはいていけ」

文吉は、背中で主人の声を聞くと、麻裏草履をしっかりとはいた。植込みの中まできたとき、後ろをふり返った。主人が、見ているような気がしたからだ。が、主人のいた座敷は、灯が消え、二階の角の部屋の障子が明るく灯っていた。

文吉は、一瞬の間、その窓を仰いでから、裏口より外へ出た。文吉の足は早い。大股をとばし、千日谷へ向かう。二階の窓の明りが、眼先にちらついてくる。主家の養女おぎんの顔が浮かんできた。庭をへだてて、母家と店と離れているので、めったなことでは、おぎんの姿を見ることはできないが、たまには、ばったり顔を合わせることもあった。

文吉が、おぎんにひそかな思いを抱いてから、久しい年月が経つ。文吉が、桐ケ谷村から甚左の店へ丁稚にあがってから、一年後、おぎんは、養女としてもらわれてきた。十三歳の文吉は、十歳のおぎんの姿に心をときめかした。思春期の愛らしい異性への思慕だろう。少年文吉は、おぎんの姿を胸に抱きながら、成長していった。とくに口もきけず、十日に一度、半月に一度ぐらい、姿を見るだけだったが、おぎんと手をからませる夢をなんども見た。

文吉は、須賀丁をすぎ寺町へはいると、おぎんの面影を、頭の中から払いのけた。町を出はずれれば、そこが千日谷だからだ。

松岩寺の土塀の脇を通りぬけると、眼の前に、心中さらしが、暗がりの中にぼんやりと見える。文吉は、土塀に背中をつけ、眼をみはった。

夜目が慣れてくるにしたがい、二つの死骸が、白く映ってくる。丸太杭に縛られ、髪を垂らした姿がはっきり見えてくると、文吉は、息を吸いこみ、一歩一歩近よった。枯草が踏みにじられているのは、押し寄せた見物人のせいだろう。文吉は、杭の前まで行くと、姿勢を低くして、あたりを見まわした。

杭の間から奥をのぞく。真っ暗な中で、風に、林の梢がざわざわと鳴っている。左手に、大きな一本松が、枝を張り、その下に小さな家がある。雨戸の隙間から、ちらちらと明りが洩れる。中は、起きてる——と思うと、警戒心より、何かほっとした思いが湧いた。

文吉は、起き上がると、杭の裏側へまわり、まず、おあきの足もとの縄をほどいた。死体が、ゆらめいた。杭をよじのぼった。両足の裏で丸太をはさみ、両手で杭をつかみ、木のぼりの形で、上辺の十字に組んであるところへ手をかけた。縄をほどく。死体が、ずしりと音を立てて落下した。

文吉は、丸太をとびおりた。死体を抱き起こし、後ろへ腕をまわそうとしたとき、手が、腹のあたりに触れた。文吉は、ぎくりとして手を引っ込めた。異様なしげりに、肌の粟立つ思いがした。〈噂の種はこれだな。旦那が、なきがらを取り換えようとするのも、あたりまえだ〉と思った。

死体を背負った。首筋に、ぞっとする冷たさが沁みこむ。重い。文吉は、奥の暗がりをめざして進む。枯草を踏みしめ、闇の奥へ眼をこらす。そこに、旦那から頼まれた誰かがいる——と思うと、勇気が湧いてきた。

石くれに足がさわる。

足でさぐりを入れる。

石で囲いができている。墓地だ——と思った。石をまたぐ。足もとから、ずるずると潜りこむ。文吉は、おあきの死体を、やわらかい土の上に置くと、あたりを見まわした。

番人が、くべたらしい線香の匂いがする。塔婆らしいものが、四、五本ぼんやりと眼につく。菰に包まれたものが、石囲いのそばにみつかった。めりこんだ足を抜くと、囲いの外へ出た。草履の泥を、石で叩きおとした。

菰の中から死体を出した。やはり全裸の女だった。文吉は、それを背負った。内儀の死体よりいくらか軽いような気がした。丸太杭まで戻った。

死体の両肩から縄をかけると、縄の端を持って、丸太をよじのぼった。腕丸太に縄を引っかけ、満身に力をこ

め、縄を引いた。死体が徐々に持ちあがる。頂上まで引き上げたとき、文吉は汗みどろになっていた。縄を固定し、足に縄をかけようとした。手が下腹部に触れた。あるべきしげりが、何もなかった。

文吉は、死体を吊るし終わると、こわごわ、下腹部へ顔を寄せた。手で触れたときの感触は、まちがいなかった。黒いかげりはまったくなく、闇の中に、三角形の隆起が、陶器のような白い光沢を放っていた。

彼は、〈かわらけだな〉と、つぶやき、ふたたび墓地に戻った。おかみさんのなきがらを、菰に包んでおこうと思ったからだ

ところが、見当をつけ、石囲いの中を覗いたが、たしかにそこへ置いたはずの死体がない。文吉は、場所をちがえたかな——と思い、左右を手さぐりで捜した。しかし、今吊るした死体の菰もなくなっていた。

今まで張りつめていた思いが、にわかに崩れ、膝頭がふるえてきた。旦那が頼んだ誰かが、持っていったと考えたが、知らぬまに、煙のように現われ、重い死体を運び去ったと思うと、なんだか妖怪変化の仕業のような気がしてきた。

彼は、逃げ出そうとした。そのとき、枯草の中からむっくり起き上がった者がいた。文吉の足が動かなくなった。走ろうとするのだが、前へ出ない。黒い人影が、跳びこんできた。闇の中に、銀光がひらめき、その光が文吉を突いてきた。刃先が右の二の腕をかすめた。文吉は、とびのいた。

「待てッ」

人影が、詰まった声をあげ、追ってきた。文吉は、走った。死体さらしの脇を抜け、松岩寺の土塀の瓦に手をかけると、中へ跳び越えた。

石塔のならぶ間を走り、植込みの中を抜け、山門脇の土塀をよじのぼり、須賀丁の通りへ出た。人家の軒下にとびこみ、後方を振り返った。追ってくる者はいなかった。

文吉は、店先の天水桶のかげに身を潜め、声の主が誰であるかを考えた。「旦那の声に似ていたな」文吉の口から、つぶやきが洩れた。彼は、なんども「待てッ」と言った底力のある声を思い出した。その声は、重く沈み、押えつけるような響きがあった。

〈旦那だ。旦那の声にちがいない。なんのために、俺を殺そうとしたんだ。心中さらしの死体を誰かと取りかえることは、御政道に刃向かうことだ。けど、どうせ無縁

墓地へ葬られる死体だ。どこかから無縁仏を持ってきて、取りかえたところで、大して悪いことじゃなさそうだ。もともと、かみさんをふびんに思って、俺に言いつけたんだ。それならなぜ、俺を殺す必要があるんだ〉

文吉は、坂町の店へ帰ろうか、帰るまいか、迷った。声の主が旦那なら、帰ったら危ない――と思った。

彼の足は、左門丁へ向いた。

須賀丁の通りを出はずれ、左へ曲がった一帯が左門丁である。その町の奥まった路地に、八十戸の長屋を持つ目明かし弁蔵が住んでいた。弁蔵は、文吉の身元引受人だったのである。

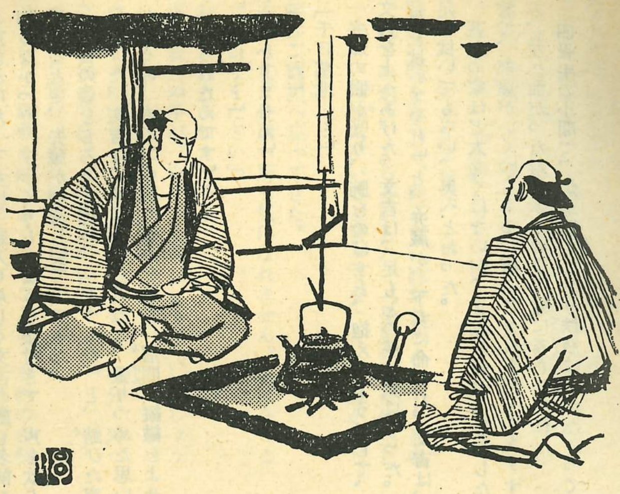
二　目明かし弁蔵

屋主弁蔵は、文吉と同じ荏原郡桐ケ谷村の百姓の出だ。文吉の父清蔵とは、腹ちがいの兄弟だった。弁蔵が兄で、清蔵が弟である。弁蔵は、継母と折合いがわるく、十五歳のとき家をとび出し、江戸へ出て、浮浪者となり、やがて盗っ人の群に投じ、一人前の泥棒になった。弁蔵は、二十一歳のとき、同心榊原重太郎の手によって捕縛されたが、一味の隠れ家を差し口した功によって放免となった。弁蔵は、榊原に正業につきたい――と頼み、左門丁の乾物商鳴海屋金兵衛の店で働くようになった。初めのうちは人足のような下働きだったが、目から鼻へ抜ける利口者だったので、二年後に、手代に抜擢された。

しかも、きりりとした男前だったので、金兵衛の一人娘おしもに思われ、婿養子となったのである。しかも八丁堀の榊原の家へ出入りしているうちに、十手を預かる身となった。目明かし、岡っ引きは、通常、同心の手先となっているが、奉行所に登録されている役人ではない。したがって、定まった給金をもらっているわけでもない。半年で、二朱が目明かしの手当の相場で、下女が三両近く取っていたのだから、半年二朱は、いわば無給に等しかったのだ。

だから、目明かしは、正業を持ち、暮しが安定している者か、ゆすりたかりをやって、稼いでいた者が多かった。前身も、弁蔵のように、過去に暗い影を持つ者が、十手を預かっていたという。前歴者ほど、町の動勢をさぐり、同心の諜者の役目を果たすのに、便利だったからだろう。

左門丁の通りへはいるところに木戸があった。右手



に、"虎床"と油障子に書かれた浮世床がある。左側に、番太郎が住む番小屋がある。木戸は、四つ刻(午後十時)になると、番太郎が閉める。

文吉が、木戸を通りすぎようとしたとき、番小屋の障子が開いて、年老いた番太郎が出てきた。文吉は、ぎょっとして足をすくませた。

「誰だ。今ごろ……」

と、番太郎がしわがれた声をかけた。

「へえ、弁蔵屋主の甥っ子、文吉で。坂町の畳屋甚左の店からきたんです。おじきのとこへ、泊まりにいくんで」

文吉は、早口で答えた。

「ほう、親分とこの甥御さんかね。今、木戸を閉めるとこだった。行きなせえ」

番太郎の言葉つきから、文吉は、〈弁蔵伯父は大したもんだ〉と思い、木戸を通り抜けた。

鮨屋、蕎麦屋、薬屋、呉服屋などの店がならんでいる。その先に、鳴海屋と書かれた漆塗りの看板が出ていた。

大戸が閉まっていたので、裏口へまわった。文吉は、雨戸を叩き、「畳屋の文吉です」と、大声を出した。しばらく戸を叩いていると、眠い眼をこすりながら下

女が出てきた。「おじきを頼ってきた。畳屋文吉だよ」と声をかけた。下女は、新入りらしく文吉の顔も名前も知らなかった。びっくりしたような眼付きで、声を飲んでいるとき、弁蔵が着流し姿で出てきた。

文吉の姿をじろりと眺め、「どうした」と、錆びた声をかけた。文吉は、伯父の顔を見ると、張りつめた思いがゆるみ、右の二の腕の痛みを感じ、眉間に縦皺をよせた。

「やられたんです」

「誰に……」

「わかりません」

「どこだ」

「千日墓地……」

弁蔵の眼が光り、腕をのばすと、抱えるようにして、文吉を上へあげた。文吉は、足もとの泥が気になった。

「足を拭いてやれ」と、弁蔵が、下女に命じた。文吉は、足を拭いてもらい、奥へとおった。

甚左の家ほど大きくはないが、骨組みのがっしりした家で、部屋がいくつもある。磨きこまれた廊下をすすみ、左へ曲がった離れふうの小座敷にみちびかれた。

四畳半の小間で、炉が切ってあり鉄瓶に湯がたぎっていた。弁蔵が、床の間を背にしてあぐらをかいた。文吉は、その前に膝をそろえた。

「さ、わけを言ってみろ」

弁蔵の声はやわらかい。

「今夜、五つ、初夜の鐘が鳴る前、旦那が俺に妙なことを言いつけたんです」

と言って、文吉は、ありのままをしゃべった。弁蔵の眉宇がけわしくなり、口元が引き締まってきた。顔が長く、鼻が高い。いわゆる役者面だ。が、色が黒く、眼付きが鋭い。年は四十八の初老。長年、十手を預かり、町方として睨みをきかしてきた貫録が滲んでいる。

「おめえのふところにある金を見せてみな」

弁蔵にいわれ、文吉は、甚左からもらった包み金を思い出し、金包みをつかみ出した。弁蔵が、それをひろげた。一分銀が、十枚出てきた。

「もう一ぺん聞くが、おかみさんの身代わりに吊るした死体、あそこんところが、ずんべら棒だったと言うんだな」

「そうです。まちがいありません」

「無縁墓地でおめえに刃物をふるってきた男、待て――という声、甚左だと言うんだな」

「たしかに、あの声は……」

弁蔵は、黙りこくって考えこんだ。文吉は、その姿をまじろぎもせず睨めていた。弁蔵がとつぜん、「刺された腕を出してみろ」と言った。文吉が、右腕の袖をまくった。弁蔵は、じっと眼を据えていたが、「こいつは、匕首だ」と、声を沈ませた。

弁蔵は、席を立つと、廊下で「誰かおらんか」と怒鳴った。廊下を走ってくる音がした。「長屋の寛斎先生を呼んでこい。怪我人がいると言ってな」と、弁蔵が命じた。

弁蔵が、部屋へ戻ってきた。

「怖ろしくて、畳屋へ戻る気になれません。しばらくここへ、置いてください」

「それより仕方がねえだろう」

「旦那の殺しの手が、のびてくるんじゃないでしょうね」

「俺のところにいりゃ、大丈夫だ。けどな、当分、外へ出るな。寝泊まりは、この部屋がいい」

「やっぱり旦那は、何か罪に……」

「心中さらしの取替えは、よくあることだ。身内の心情を思うと、とがめ立てする筋合いはねえ。が、問題はおめえの殺しだ」

「心中さらしのすげ替えは、おとがめはないんですか」

「どうやら、さらしの御定は、坂町の一件限り、廃止になると聞いている。むごい話だからな。無縁仏は、めずらしいことじゃねえ。番人に頼んで、似つかわしい死人をちょうだいして、吊るし替えるのは、いわば、おおっぴらだ」

「じゃあ、なぜ、私を殺そうとしたんです」

「さっきから考えていたんだが、どうも腑に落ちねえ。おめえは馬鹿力があるんで、旦那も、頼んだんだろうよ。誰でもできる仕事じゃねえから、一分銀十枚をはずんでくれた。本当なら、無事、吊るし替えができたんだから、それでいいはずだ。何も、おめえを殺すことあねえ。殺すってことは、何か、うしろ暗いことがあることを、自分で、証拠立てるようなもんだ。まして、おめえは、人並はずれて腕力がある。殺しそこねる公算が多い。それくらいなことは、甚左ほどの人間が、わからぬはずがない」

弁蔵は、腕組みしたまま、静かに語りつづける。文吉に話しかけるというより、自分の考え方を、たしかめているように見える。

「私も、旦那がまさか——と思ったんです」
「かりに、おめえを殺さなけりゃならねえわけがあったとしても、甚左が、自分でのこのこ千日墓地まで出てくるはずがねえよ。ただの畳屋じゃねえ。格式もあれば、財産もある。人を使うことは、わけなくできる」
「すると、誰か人を使って……私を……」
「問題はそこだ。さっきも言ったとおり、おめえを殺さにゃならねえわけがない。だから、おかみさんの死体を運んだ奴と、おめえを刺そうとした奴とは、別の人間じゃねえかと考えているんだ。おめえが、どこの誰だかわからねえ女の死体を、丸太杭に吊るしにいってる間に、甚左から頼まれた奴は、おかみさんの死体を運び去ったはずだ」
文吉は、聞いてなるほど——と思った。
長屋に住む寛斎という医者がきて、文吉は、傷の手当をしてもらった。

弁蔵の探索がはじまった。
文吉は、鳴海屋の離れで、傷の手当に専念し、一歩も外へ出なかった。ただ、毎日、外から帰ってくる弁蔵から、さぐりのあらましを聞き、不安な日々を過ごしていた。文吉が、弁蔵から聞いた調べのあらましは、次のとおりである。
弁蔵は、文吉がころがりこんできた翌朝、六つ刻（午前六時）になると、手下の平六を連れ、千日墓地へ向かった。棒縞の羽織と着物、裾をはしょり、白い股引の脛をとばしていく姿は、四十八とはみえない敏捷さがある。若いころ盗っ人として、江戸の夜の町を突っ走った経験が、おのずから滲み出ているようだ。房のない十手を腰にさしているが、羽織の下で見えない。
「平六、急ぐんだ」
と、声をかける。
「へえ、でえじょうぶだ」
と言って、弁蔵の後を追う平六の足は、おくれ勝ちとなる。平六は、このとき二十六歳、三年前女房をもらい弁蔵長屋に住んでいる。以前は大工だったが、博奕で身を持ちくずし、食いつめて、弁蔵に拾われた男である。
弁蔵が急いだのは、見物人が集まらないうちに、身代わり死体をたしかめておきたかったからだ。
〈甚左の内儀おあきの下腹は、熊の肌。身代わりは、ずんべら棒〉弁蔵は、走りながらそんなことを考えた。
千日墓地へ着いた。朝日が、御城の方角からのぼりはじめ、心中さらしが、金色に輝やいている。そこは通路ではないし、朝が早いので、人の姿は見えない。弁蔵は、松岩寺の土塀の前で、呼吸をととのえると、死体へ歩み寄った。

「むごい」
と、弁蔵の口から、呻きに似た声が洩れる。平六が、弁蔵のうしろから、出歯の顔を突きだした。
下腹部に眼をやった。弁蔵の眼が、凝結する。三角形のくびれをえがく盛り上がった部分に、あるべきものがなかった。弁蔵は、話に聞いたことはあるが、いわゆる〝かわらけ〟の実物をまのあたりに見たのは、初めてだった。平六が、
「ふえッ」
と頓狂な声を上げた。
「平六、そばへ寄って嗅いでみろ」
弁蔵が、声をかけた。その部分が、他の肌より一段と輝やきがあったからだ。平六が、怖る怖る鼻を近づけた。しかも、指の先で、ちょっと触れた。
「旦那、麝香入りのすりみがきですぜ」
平六が、びっくりしたように言った。
弁蔵は、答えず、死顔を仰いだ。ふっくらとした肉付きのいい顔。鼻は高くはないが、愛らしさがある。乳房の隆起、腰の線を見ているとき、
「この女、生娘じゃねえ。年は二十歳前だが、商家のかみさんていう感じだ」
と、弁蔵は一人言を言った。
弁蔵は、丸太杭をはなれると、無縁墓地へ歩み寄った。平六が後ろから、「もってえねえ話だ。旦那、すりみがきを、あそこまでほどこしてるのは、あの女、ただ者じゃござんせんぜ」と声をかけた。
弁蔵も、それを考えていた。
〝すりみがき〟とは、女の化粧の方法で、踊子たちが、よく使った。踊子は、一種の売春婦で、遊芸を身につけ、素人ふうの身なりをして、宴席に出る。酌もすれば、踊ったり唄ったりする芸者のようなものだ。
化粧の仕方がたんねんで、肌の艶を出すため、梨の汁、玉子の白身、あるいは糸瓜の汁などに麝香をまぜ、顔の肌をたんねんにこすると、ぴかりとした光沢が出てくるのだ。白粉をぬりたくった顔より、はるかに美しく見えたという。
町家の娘でも、おしゃれな女は、ひそかにすりみがきをやったようだが、概して、遊女や踊子の間に流行して

いたものだ。
「あの部分の、すりみがきは、商売女というんだな」
「あっしも、道楽の限りをつくしてきやしたが、かんじんのところまで、すりみがきのある女にゃ、いっぺんしかお目にかかったことはねえんで。まして、かわらけは、拝んだこたあはじめてで」
「俺の眼力じゃ、あの女は、生娘じゃねえな。なぜっていわれると困るんだが、相当男を食ってる体だ。生娘の体は、なんともいえねえ張りがある。いくら若くても、さんざん男に抱かれた体は、崩れがみえる。これは、俺の勘だが」
「あっしも、ぴんときましたぜ。おどろきましたな、親分の眼のいいのにゃ」
「しかも麝香入りのすりみがきは、踊子なら、売れっ子だな。商家の新造なら、相当な大店のかみさんだな」
「それが、無縁仏……旦那、事件ですぜ」
平六に言われるまでもなく、弁蔵は、それを考えていた。大きな丸石で囲われた墓地ができている。掘り返してないところは、枯草が見え、掘ってあるところは、赤黒い土となっている。
無縁墓地は、引取人のない無宿者や、行路病者を葬るところだ。隠れた部分にまで、麝香入りすりみがきをほどこす女が、無縁であるはずがない。殺して、無縁墓地へ担ぎ込んだんだ――。
弁蔵は、その結論に達すると、番人小屋へ向かって歩き出した。大きな松の下に藁葺小屋がある。平六が、雨戸を叩いた。六十がらみの、腰の曲がった老人が出てきた。老人は、浅市といい、弁蔵の顔を見ると、ぺこりと頭を下げ、
「お早ようござんす。何か、ご用で」
と言った。
弁蔵は、皺だらけの顔へ、食い入るような視線を当てた。
眉毛に白毛がまじっている。その眼が、不安げにまたたいた。
「浅市、ちいと聞きてえことがあるんだ。包まず本当のことを言ってくれ。昨日、無縁仏が担ぎこまれたなあ何どきだ」
弁蔵は、当て推量でかまをかけたのだ。すりみがきのある女を、誰かが殺し、ここへ持ちこんだものと見当をつけたのである。
「へえ、持ちこまれました」

「どこの町内の奴だ」
「仲丁の若い奴らで……」
「おめえと顔見知りか」
浅市は、首を横に振った。
「ほう、知らねえ奴か。それで、何どき、なんと言って持ちこんだんだ」
「暮六つ（六時）まぢかで……仲丁の紀井様の江戸屋敷の裏手、道ばたで、どこの誰かわからねえが、若い女が死んでいた。手厚く葬ってやってくれねえか――と言って置いてきましたんで……ビタ銭二十文置いてきやした」
「なるほど……その後で坂町の畳屋から使いの者がきたな」
「親分、よくご存じで。番頭の十兵衛さんが見え、すまんが心中さらしの死体をもらいたい――と言ってきました。銀二枚をくれやした。あっしは、心中さらしがあるたんびに、ほとけの取替えがあるんで、よろしゅうござんすと言って、承知しやした。親分、お見のがしにしてくだせえ。悪気はねえんで」
浅市が、口元をわななかせた。
「梯子を貸してくれ。さらし女の体を改めてえから」
弁蔵は、取り替えられた女の体に、殺しの跡が残っているものと判断した。浅市が、小屋の脇に横たえてある梯子を担ぎ出した。平六が、受け取ると、丸太杭まで持っていき、腕丸太に立てかけた。
弁蔵は、梯子をのぼると、女の体を子細に調べた。ざんばらの髪の毛の中を、たんねんに調べ、首のあたりに眼を注ぐ。傷はなかった。首を締められた紐の跡を捜したが、痕跡はない。肩から胸、脇腹、背中、臀部、太股、脛、足の先まで、眼で見、手で触れながら点検した。傷跡らしいものは、わずかに両手首に、かすかなくびれ跡があっただけだ。
〈ということは、女は、手首を縛られたことになる。なんのため結わかれたのか。死因は、外見上、見あたらない。心の臓でもわずらっていて、結わかれた衝撃で、息をとめたのだろうか〉
弁蔵は、梯子をおりると、浅市の前へ歩み寄った。
「仲丁の若い奴ら……どんな風体で、何人きたんだ」
「はたち過ぎたくれえの若い衆が二人。大八車に菰で包んだ死骸を持ってやってきやした。薄暗かったんで、面相はわかりませんで……」
答える浅市の眼に、おののきが見えた。

三　養女と後妻

文吉は、弁蔵から、千日墓地探索のあらましを聞いた。問題は、仲丁の紀井屋敷裏で死んでいたという女にある――と思った。

「平六を走らせ、仲丁一帯を探らせたが、千日墓地へ、女の死体を運んだ奴は、見当もつかねえ。それで、ひょっと思いついたんだが、甚左の養女おぎんのことだ。俺は、あいにく、その娘にお目にかかったことはねえ。だから、もしやと思って聞くんだが、おめえが吊るし替えた女、おぎんじゃねえだろうな」

「まさか……私が坂町の家を出るとき、中庭から座敷をふり返ったんです。座敷の明りは消えてましたが、二階のおぎんさんの部屋には、明りがついていました。だから、おぎんさん、二階にいたはずです」

「おめえ、吊るし替えるとき、女の顔を見たのか」

「暗いのと怖いので、見るどころじゃなかった。でも、もし、おぎんさんなら、何か感づいたはず……」

文吉は、首を垂れ、おぎんの面影を眼底に浮かべた。

「文吉、すまねえが、もう一度、千日墓地へ行ってくれ。日暮れにゃまだ小半刻ほどある。手拭で顔を包み、うちの店の半纏を着て行け。たぶん、見物人がいるだろう。人混みにまぎれ、さらし女の顔をよく見てきてくれ。もしかしたら、おぎんかもしれねえぜ」

文吉は、ぎくりとした。おぎんさんが、なぜ、殺されなきゃならないんだ。おかみさんと番頭の不義に、なんのかかわりあいもあるはずがない――。文吉は、そんな反問をしたかったが、口をつぐんでしまった。

彼は、鳴海屋の屋号を染めぬいた半纏を着て、手拭で頬冠りをすると、外へ出た。歩度を急がせているとき、傷がうずいた。松岩寺の土塀が見えるころになると、暮色がただよいはじめた。

塀の裏手にまわった。五、六人の見物人がいた。

「ひでえことをしやがる。きれいに、かんじんなところを、盗んでいきやがった」

職人らしい男が、怒鳴るように言った。文吉は、人々の間から、女の死体を仰いだ。自分が担いできた記憶より、だいぶ痩せて見えた。〈吊るされているうちに、干上がったんだろう〉と思い、顔を見上げた。色が黒ずんでいて、頬がこけていた。

文吉は、ほっとした思いを抱いて、引っ返した。

「よかった。おぎんさんじゃなかった。おぎんさんが殺されるはずがない」

文吉の口から、溜息まじりにつぶやきが洩れた。

彼は、土塀に沿った道を、左門丁へ向かった。そのとき、遊び人ふうの着流し姿の若い男が、文吉の後を尾けていた。文吉が、〈変だな〉と思い、後ろを振り向いた。男は、樹木の枝の下闇に姿を隠した。文吉は、得体の知れぬ怖れを抱き、夢中で突っ走った。

文吉は、鳴海屋の裏口から走りこんだ。胸がつぶれるほど息がはずんでいた。台所で、水を飲んでいるとき、弁蔵が顔を出した。文吉は、眼だけで会釈すると、弁蔵の後にしたがい、離れ座敷へはいった。

「どうした？　さらしの女……」

「ありゃ、おぎんさんじゃなかった。ほっとした気持ちです」

「そうか、俺の勘もにぶったようだな、取り替えた女が、おぎんだと思ったよ」

弁蔵は、苦笑した。

「おぎんさんだったら、こうしてなんかいられません」

弁蔵の眼がうごいた。文吉の言葉を、聞きとがめたらしい。

「おめえ、おぎんに惚れていたな。ありていに言ってみろ」

「本当のことを言うと、畳屋へ丁稚にあがってから、一年目、おぎんさんが牛込の袋町、三河屋からもらわれてきたんです。私が十三、おぎんさんが十でしたが、私は、一目見たときから、好きになりました。それ以来七年間、思いつづけて……」

「それで……体のつながりでもできたのか」

「とんでもない。ろくすっぽ、口もきけなかったんです。旦那の眼が光ってたからです。店の若いもんは、誰でもおぎんさんが好きだったんです。中でも、私より一年上の多七が、おぎんさんに夢中になっていました。私は、多七の心のうちを知ると、うかうかしちゃいられない。多七に先を越されると思い、二度ほど、おぎんさんの二階の部屋へ忍んでいったことがあります」

文吉は、当時を回想しながら、畳屋における出来事を語った。それを要約すると、次のような経過となる。

最初は、去年の春先だった。

四つ半（夜十一時）ごろ、文吉は、雨戸を叩く風音で眼をさました。床をならべて寝ているはずの多七の姿が見えないので、もしや――という予感におどろいた。多

七がおぎんの部屋へ——と思ったのである。
　文吉は、足音を忍ばせ、床をぬけ出した。階下へおり、土間の通路を通り、中庭へ通ずる潜り戸を開け、外へ出た。建仁寺垣の柴折戸の内鍵がはずされ、夜風にゆれていた。
　文吉は、中庭へ忍びこんだ。二階を見た。おぼろ月が、松の梢を透いて見え、おぎんの部屋の雨戸が閉まっていた。文吉は、息を殺しあたりを見回した。そのとき、二階の屋根の辺でかすかな物音を耳にした。文吉は、体をのしあがらせ、屋根をみつめた。屋根瓦から、むっくり起き上がった人影があった。月明りに浮かんだ男は、まぎれもなく多七だった。
　文吉は、ぎょっとすると、思わず松の垂れ下がった枝をつかんだ。枝がゆれ、がさがさと音を立てた。多七の姿が、裏側へ消えた。文吉は、柴折戸のそばで、多七を待ち伏せた。
　多七が、出てきた。文吉は、いきなり多七の腕をつかむと、店の中へ引き入れた。多七は、文吉の腕力にかなわぬことを知っているのか、素直についてきた。
「俺、心配だったんで、見にきたんだ。とんでもねえことをするじゃないか」
　文吉は、多七の腕を、しびれるほどつかんだまま、低い声をかけた。
「誰にも言わんでくれ。俺、おぎんさんのことを思うと、寝られないんだ。いっぺん、寝てるところを見てえと思って……ただ、それだけだ」
「今まで、寝てるの見たことあるのか」
　多七が、首を横に振った。
「旦那にみつかったら、それこそ、殺されちまう。あんな真似は、やめたほうがいい」
　多七は、嗚咽しながら、
「もうやらねえ」
と言った。
　文吉は、多七と仲がよかった。体格は正反対で、文吉は大柄だったが、多七は、小柄だった。だから、二人で仕事を担当しているとき、力仕事は文吉が受け持ち、畳刺しを多七が担当するほど、意気が合っていた。
　多七は、神田多丁に住む棒手振魚屋のせがれで、文吉が来る一年前に丁稚に上がっていた。小柄でしかも童顔だったから、いつまで経っても子どもっぽかった。
　文吉に、意見をされてから、多七の屋根づたいは、やんだようだ。が、まもなく、二人の寝室が変わり、手代

は、それぞれ三、四人の丁稚と寝ることになった。丁稚の監督をするためだ。だから、屋根づたいがやんだといっても、多七の口から、
「あんな真似はやっていない」
と、聞いているに過ぎなかった。
　文吉は、多七の断念を聞くと、自分でも、おぎんの寝乱れた姿を見たくてたまらなくなった。昨年の夏の夜、文吉は、眠られない焦慮から、思い切って〝覗き〟を決行しようと思いたった。宵のうちに、用にかこつけて中庭へはいり、柴折戸のかんぬきを外しておき、合わせ目に折れた小枝をはさみ、押せば開く準備をととのえ閉めておいた。
　二階の屋根へ上がるには、裏側の風呂場の窓を足がかりにする以外にない。文吉は、屋根へのぼった。おぎんの部屋は、夏のことゆえ、雨戸が、両側一尺ほど開いていた。軒先に両手をつき、逆さになって、部屋の中を覗いた。蚊帳が吊ってあり、行灯の芯が、地虫の鳴声に似た音を立て、ぼんやりした灯を放っている。桃色の長襦袢の裾が乱れ、足のふくらはぎから、膝頭のあたりまでが見えた。文吉は、息苦しく喘ぎながら眼をみはった。
　体を支えている腕が、感覚がなくなるほどしびれてきた。文吉は、あきらめて、後ずさりをはじめ、下へおりた。文吉が、厠の脇の離れまできたとき、男と女のささやきを聞いた。羽目板に体をくっつけ聞き耳をたてた。内儀と番頭新兵衛の声だった。
〈おかみさんと新兵衛と怪しい〉とは、耳にしていたが、それが本物だと知ると、文吉は、発覚したときのことを考え、身震いした。
　主人の甚左が、一つ屋根の下で寝ているのに、なんと大胆なことだろう。文吉は、主人夫婦の仲が、さめているにちがいない——と思った。事実、甚左は、いつも、母屋の中央の十畳の座敷に寝ている。内儀は、その部屋から、三つも部屋を通り越した裏側の離れに寝ている。
「旦那さまとおかみさん、一緒に寝たことないんだよ」
とは、口さがない下女たちの噂だ。
　それから五日ほど経った夜、文吉は、ふたたび覗きに出かけた。が、蚊帳の中に、毛深い男の足が見え、おぎんの足がからんでいた。文吉は、悶絶するほどおどろき、危うく屋根からずり落ちるところだった。
　やっとの思いで、裏側から下へおりたが、それ以来、文吉は、覗きをあきらめた。
　文吉は、以上のいきさつを、長々と語り終えた。煙管

でたばこを吸っていた弁蔵が、太い溜息を吐いた。

「おぎんは十七の小娘、甚左は分別盛り。一つ屋根の下で、二つの色事。おかみと番頭の心中……その死体の取替え。色事は、めったにねえ話だ。だが、千日墓地は、つまらねえことになったな。身代わり死体が、おぎんでなくちゃならねえと、目星をつけたんだが、おめえの眼で、おぎんでねえことを確かめたんじゃ、話はおしまいだな」

「でも、今、千日墓地から、私の後を尾(つ)けてきた者があるんです」

文吉は、土塀の暗がりに隠れた男のことを思い出した。

「どんな風体の奴だ」

弁蔵の語気が、鋭くなった。

「二十五、六の、遊び人ふうに見えました。私は、突っ走って逃げたんです」

「見物人は、いたか」

「五、六人……」

「暗がりで、おめえを刺してきた奴の仲間じゃねえか。それにしても、おかしな話だ」

「私にも見当がつきません」

「でもな、おめえを今日、千日谷へやったんで、いくらかわかってきた。身代わり死体は、どこの誰だかわからねえが、おめえを殺さにゃならねえわけは、どうやら、甚左のうちの中にあるようだな」

「そりゃ、どういうことなんです」

「原因は、色事だよ。甚左は、年がいもなく、養女のおぎんに惚れたってことだ」

「でも、私は、おぎんに指一本、触れちゃいません」

「しかし、おめえは、見ちまった。養父と養女……二人のくっつきは人の道にはずれている。知れたら、伊阿弥家の仕入れは差止めになるだろう。これじゃ動機にならねえかな」

弁蔵が、苦笑い(にがわら)を浮かべた。

弁蔵は、甚左の店へ乗りこんだ。文吉が、弁蔵から聞いた経過は次のとおりだ。

弁蔵は、甥の文吉の身元引受人でもあるし、左門丁と坂町は、目と鼻の先だから、たまには、顔を出すこともあった。目明かしには、管轄の定めがないので、どこへでも出て行くが、おのずから縄張りらしいものができていた。弁蔵は、主として四谷のうち、大番丁、右原丁、

左門丁、須賀丁、伊賀丁、尾根丁、南丁、橋丁を縄張りとし、同じ四谷でも、塩丁、坂町、北伊賀丁、簞笥(たんす)町、荒木丁、舟町、愛住丁は、荒木丁に住む金貸業で十手を預かる桐屋勘兵衛の縄張りだった。

したがって、弁蔵が、坂町の甚左の店を訪ねるのは、御用の筋ではない。あくまで、文吉が世話になっている挨拶だった。それも、めったなことでは、顔出しはしなかった。というのは、弁蔵は、甚左の格式張った態度が、気に入らなかったからだ。もう一つの理由は、荒木丁の勘兵衛とも、うまが合わなかった。勘兵衛が、弁蔵の前身を知っていて、

「鳴海屋さんは、その道の出だから、勘がいい」

などと、厭味をいうのが耐えられなかった。その勘兵衛と、甚左は親戚同様のつきあいをしていた。風説によると、勘兵衛の金融業の元手は、甚左が出しているという。

弁蔵が、甚左の店を訪ねれば、勘兵衛につつぬけになる。それがいやだったが、弁蔵は、あえて訪問した。母家の奥座敷に通され、床の間を背にしてすわらせられた。弁蔵は、まず、内儀の不幸の悔みを、いんぎんに述べた。

「家の仕守り、ゆきとどかず、面目もない」

甚左が、堅い言葉で答えた。

「とっくに上がらにゃいけなかったが、ご無礼しとります。実は、文吉の奴が、ころがりこんできまして、ご心配をかけ、申しわけござんせん。千日墓地の一件、聞きました。ご心情、ごもっとも……お察しします」

弁蔵は、やわらかく言いながら、甚左の顔面を鋭くとらえた。

「お目こぼし、ありがたく思ってます。いくら不義密通とはいえ、ふびんに思い、ま、葬ってやったわけです」

「心中さらしの取替えは、いわば、見て見ぬふり……お気づかいご無用。それより文吉の始末……どうしたもんでしょう」

「文吉は、なんと言っとります?」

「千日墓地で、一度は殺されかけ、二度目は後を尾けられ、すっかりおびえちまいまして、とてもお店には……」

甚左の眼が、かすかな光を放った。

「ほう、いったいなんのことだろう。私は、あくまで、おあきのなきがらが欲しかっただけ、番人に使いをやって、仏を一体もらいまして……それだけのことです。どうか、文吉のことよろしくお頼みします。これは、八年

の年季明けの金、お納めください」
甚左が、小判らしく金包みをさし出した。
弁蔵は、甚左の金包みを出す手が、匕首でもつき出すように思え、息を詰めた。暗闇の中で、文吉を刺し殺そうとした手を、連想したのだ。
「これは、ご丁寧におそれ入ります。けど、こいつはお預けしておきましょう。事がすべて納まれば、文吉も、こちらへ戻らせていただくかもしれません。それまで……」
弁蔵の声は重い。甚左の顔面が引き締まった。
「それが、わしに何か関係でもあると、思っていなさるんですかい」
「殺しと、尾行……それです」
「事——と申しますと……」
甚左の声が、荒くなってきた。
「あるかもしれねえし、ないかもしれねえ。事件というやつは、予想もできねえ裏があるもんでね」
弁蔵は、強いて甚左を挑発しようと考えた。言葉どおり、事件の筋は、何もわかってはいない。が、臭いがするのだ。目明かしの勘ではなく、盗っ人の勘だ。十五の年から、六年間、役人の目をかすめ、他人の金を盗んできた弁蔵が、おのずから身に沁みこませた鋭い勘が、甚左の心底を見抜こうとしているのだ。
「親分は、荒木丁の了解を得て、ここへ調べにきなすったのかね。それとも……」
「勘兵衛さんに無断できたと言ったら、どうなるんだね。文吉の引受人として挨拶と、しらじらしい嘘は、言うつもりはねえよ。おおっぴらに御用の筋だと言う考えだ」
「何か、勘違いしていなさるようだ。さらし者の取替えがいけねえなら、奉行所でもどこでも参りますぜ。それとも、わしが文吉を殺そうとでもした証拠があるんですかい」
「証拠は、養女のおぎんさんだ」
弁蔵の声は高い。甚左は、ぎくりとして身構えた。
「おぎんがどうしたというんだ」
「さあ、会わせてもらいやしょう。文吉の奴が、世話になった礼も言わにゃなんねえから」
弁蔵は、立ち上がった。甚左も、反射的に座を立つと、弁蔵の前に踏みこんだ。
「おぎんは、実家へ戻った。おあきが番頭と心中すると、急にふさぎこみ、気うつという病いになったよう

だ。当分、養生させるつもりで、帰したわけだ。たぶん、三河屋の本家、焼津浜に行ってるはず……残念ながら、そんなわけだ」
甚左の眼から、火でも発したような光がとび散った。
「ほう、保養の転地ですかい。それなら、会うわけにゃいかねえ。おかみさんは亡くなり、おぎんさんは旅じゃ、さぞかし、寂しいこって……お察ししますよ」
と言うと、弁蔵は、廊下へ出た。
甚左が、立ったまま、拳固を握りしめ、
「二度ときてもらいたくねえ。御用の筋があれば、荒木丁を通してくれ」
と怒声をあびせた。

四　坂町界隈

弁蔵長屋も春めいてきた。
溝板の脇から、草が萌えだし、井戸の裏の柳も芽吹いてきた。文吉は、表通りへは出ないが、木戸のある長屋の中だけは、退屈しのぎに歩くこともある。
千日墓地の心中さらしも、人の噂から消え、死体は、無縁墓地に葬られた。文吉は、噂が消えるのを待って、身のふり方を考えようと思った。相談を持ちかけようとするが、弁蔵の機嫌がわるい。眉間に縦皺をよせ、何かを考えているのを眺めると、身上相談を口に出せない。
そんな折り、弁蔵が、文吉の居間へはいってきた。
「このあいだ、おめえが見に行った心中さらしの女、まちがいなくおぎんじゃなかったと言うんだな」
その声に、文吉は、ぎくりとする怖れを感じた。明らかに、自分を疑っていることがわかったからだ。
「へえ、まちがいありません」
「腑に落ちねえことがある」
「私が、嘘を吐いているとでも……たしかに、おぎんさんじゃなかったんです」
「それじゃ聞くが、最初、吊るし替えた女の死体、暗くてわからねえらしかったが、二度目に見に行ったときの死体と、おめえが、吊るした死体と、おんなじと言えるか」
弁蔵の眼が鋭く光り、語尾に力がこめられた。
「そ、それは……」
文吉は、口ごもった。わからないのだ。二度目に見に行った死体を、もう一度担がせてもらえば、重さや、背中や肩にふれる感触で何かわかるかもしれない。が、見

ただけでは、おぎんさんでない――ということがわかるだけだった。
「おんなじだったかどうか、わからねえと言うんだな」
「そうなんです」
　弁蔵は、それきり口を噤み、腕組みした。眼を閉じ、何かを考えている。近寄りがたいものが感じられる。
「妙なことを聞くが、おめえの一年上の多七という手代、どんな奴だ」
「背は、私よりだいぶ低く、五尺二寸ぐらい。瘦せていて、子どもっぽい顔をしていました」
「その多七とおぎん……できてたんじゃねえか。つまり、甚左の眼をかすめて密通……あれだ」
「まさか……そんなこと、できっこ……」
「ないと言うんだな」
　文吉は、うなずいた。
　そのとき、障子の外で人の足音が止まり、
「ただ今戻りやした」
と、手下の平六の声がした。弁蔵が、
「いいから、はいれ」
と、重い声をかけた。
　平六がはいってきた。後ろの障子を閉めると、ずり膝で、弁蔵の前へ近寄った。鼻のつぶれた丸い顔だ。眼が細く眠っているように見える。小柄だが、骨組みはがっしりしている。
「両方、当たってきやした」
　平六は、顎をつき出しながら言った。
「まず、牛込袋町のほうは、どうだ。化けて、聞込みをやったんだろうな」
「へえ、三日間、日に二度ずつ、一合枡の冷や酒を飲みにいきやした。大工職人に化けやしてね」
　平六が、鼻孔をうごめかしながら、しゃべりだした。それによると――、
　江戸城牛込御門の橋向こうは、大名屋敷と寺の多い町だ。袋町は、酒井屋敷、加賀屋敷の間にはさまれた庶民の町。北町との境の大通りから、だいぶ入りこんだ路地に、二間間口の酒屋の店がある。おぎんの実家、三河屋である。
　平六は、昼休みと、夕方の二回、三河屋の店で枡酒を飲んだ。どんぶりの中の塩辛を箸でつまみ、てのひらにのせると、ぺろりと飲みこみ、一合枡の角から、冷や酒を一気に飲むのだ。
　主人は、五十がらみの骨と皮ばかりのように瘦せた男

で、ほとんど、口をきかない。四斗樽から、一合枡に酒を注ぎ入れると、だまって平六の前へ持ってくる。それでも三日目となると、主人は、愛想を言うようになった。
「だいぶ、お好きなようで……」
「そうよ。大工は一日稼いで四匁二分、そのうち、半分は酒代に消えちまうぜ」
「結構なご身分ですね。わしらは、店持ちといっても、その日暮し……」
「冗談でげしょう。三河屋は、娘さんを坂町の畳屋さんへ、養女に出してるそうじゃねえか。いいご身分とは、とっつぁんのこった。大そうなべっぴんと聞いてますぜ。いっぺんおがませてもらいてえと思ってるんだ」
「それがねえ、このごろ、体をわるくしましてな」
「ほう、恋の病いにでも取りつかれたというのかね」
　主人の瘦せた頰が、ぴくりと動いた。
「年のころのせいか、気うつというやつですよ。困ったもんです」
「そりゃ、気の毒なこった。で、親元下がりにでもなったんですかい」
「それが……畳屋へ戻るのはいやだというんで、仕方なく、三河のわしの本家へ養生にやってるんで……年ごろの娘というものは厄介なもんですよ」
　主人が、薄笑いを浮かべた。平六は、これ以上、聞くことはないと思ったのだ。
　文吉は、聞いてほっとした思いを抱いた。おぎんに、異変はない――と知ったからだ。弁蔵が、納得したのか、
「ふん」
と言った。
「多七のほうは、どうだ」
　弁蔵は、平六の顔を睨みながら堅い声をかけた。
「神田多丁の金兵衛長屋の棒手振魚屋、仁助というのが、多七のおやじでして、女房と子ども三人を抱え、やっとこさと生きてるくれえの貧乏でがす」
「多七は、いなかったのか」
「長屋の連中に当たりやしたが、正月の藪入りにも姿を見せなかったと言ってやす。多七のおふくろに当たってみても、答えは、おんなじで、あの子が通い番頭にでもなったら、みんな引き取ってもらうつもりだ――と言ってやした」
「へえ、長屋の評判じゃ、よくできたせがれだと言って

おりやした」
「それで……多七はどうした？」
「四谷坂町、畳屋を中心に、たばこ売りに化けてさぐったんだが、どうも、店にゃいねえという噂を小耳にはさんだんで……甚左の店じゃ、たばこを吸うのは、通い番頭の十兵衛だけ……うめえことに、国分のきざみを売りつけ、ちいとばかりおしゃべりしてきやした」
「で、多七は、どうなったんだ」
弁蔵の語気がせきこんできた。
「こちらに神田多丁の魚屋のせがれ多七さんが、ごやっかいになってると聞いとります。まじめにやってますか、私は多七さんのおやじさんと懇意でして——と聞きやした。すると、多七は、よくやってくれる。今、三河の焼津浜まで、旦那のご用で出かけて留守だ——と言うんでさあ」
「なるほど……焼津浜……おぎんと多七」
弁蔵が、眼を光らせた。
「なんだか判じ物みてえなんで、裏口から母屋へはいりこみ、下女たちに、丁字焼を手土産にして、顔をつなぎやした。こっそり、多七の話をきり出したところ、三人の下女が、顔を見合わせ、黙ってしまいやがった」
「返事をしねえのか」
「さようで……しばらく経ってから、一人が多七さんは、三河だ——と、言ったんでさあ。旦那、どう判じたらよろしいんで」
文吉は、二人の話を聞きながら、体を堅くしていた。おぎんさんが、焼津で養生……旦那のご用で、多七が焼津へ出かけた。おぎんと多七——二人の面影を頭の中で追いかけ、ねたましい思いに、めまいがした。
黙っていた弁蔵が口をきいた。
「平六、いよいよ荒仕事だ。畳屋へ忍びこめ。文吉、おめえが手引きだ。素面じゃいけねえ。面を変えろ。平六は、たばこ売りに化けて、昼間のうちから、母屋へはいりこめ。文吉は、夜ふけてから、中へ忍びこむんだ」
「二人で、何をやらかすんで」
と、平六が、詰まった声で聞いた。
「俺は、今までいろいろ考えすぎたようだ。けどな、甚左の奴が臭えことだけはまちげえねえ。こいつは俺の勘だ。多七もおぎんも、焼津にゃ行っちゃいねえよ」
弁蔵の呻きに似た声がのしかかる。
「親分は、なぜ、そ、そんな……」

「甚左、十兵衛、袋町の三河屋の亭主、そして下女の話……みんな焼津だ。こいつは、口裏を合わしてるとしか思われねえんだ。しかも多七が、おぎんのいる焼津へ、甚左のいいつけで出かけるわけはねえ」
「そりゃ、どういうわけなんで」
「甚左は、おぎんと道ならぬ関係があった。多七は、おぎんに惚れていた。甚左は、それを知らぬはずがねえ。それなのに、多七をおぎんのいる焼津へ行かせる馬鹿はいねえよ」
「するてえと、多七は、どこに……」
「畳屋の中にいらあね」
「おぎんは？」
「やっぱりいるかもしれねえ。ひょっとしたら、死んでるかもわからねえ」
文吉は、ぎくりとすると、かちかちと歯を鳴らした。
弁蔵が言葉をつづけた。
「平六は、母屋の勝手口で、下女とおしゃべりをしたら、外へ出るふりをして、どこかに潜るんだ。だから七つ半（五時）ごろがいいだろう」
「危ねえ仕事ですね」
「盗っ人の忍びこみの手口だ。文吉は、顔にかまどのすすをぬって面を変え、職人ふうに化けて、五つ半（九時）に勝手口の潜りへ行け。平六が中から、かんぬきをはずしておく」
文吉は、上体をのり出し、
「私は、何をやるんです」
と聞いた。
「二人で縁の下へもぐるんだ。母屋の縁の下だけでいい。手さぐりで、土を掘った跡をさがすんだ。死体が、埋めてあるかもしれねえ。あったら掘り起こせ。そのために、小鍬を用意していけ。掘ったら、死体を火打ち石で確かめろ」
弁蔵の顔が強ばり、大きな眼が燃え立ってきた。
「たしかに、縁の下に……」
文吉は、口元をわななかせた。
「まちげえねえ。出かけるのは今夜だ。俺は、御用の装束で、簞笥町と北伊賀丁の境い目、呉服商伊勢善の蔵の前で見張ってる。調べがすんだら、そこまで戻ってこい。もし、気づかれて追われた場合も、そこへ逃げてこい。追手は、俺が話をつける」
「坂町は、桐屋勘兵衛の縄張り……ひょっとしたら、桐屋の手先が、見張ってるんじゃねえかと思うんで……」

「馬鹿野郎、目明かしに縄張りはねえ。桐屋が怖くて捕物ができるか」
　弁蔵が、大声で怒鳴りつけた。勘兵衛への憎悪をひき出しているようだ。文吉の全身に、緊張感がみなぎってきた。
　その日、日暮れ前に、平六がたばこ行商人の身なりとなって、弁蔵の家を出た。頭に手拭をのせ、荷箱を背負い、尻をはしょった姿は、誰がみてもたばこ売りにちがいなかった。
　文吉は、初夜の鐘が鳴る前に、身支度をととのえると、
「しっかりやれ。みつかったら相手を傷つけちゃいけねえ。逃げの一手だ」
　と言う弁蔵の声におくられ、外へ出た。
　ふところに紙に包んだすすが入れてある。すすを塗るのは、坂町へ近づいてからでいい――と考えながら、夜道を急いだ。北伊賀丁へはいったとき、初夜の鐘を聞いた。
　坂町の北沿いの道に出た。
　外濠つづきの土堤がある。松林がつづき、おぼろ月が、ぼんやりと梢の上にあった。文吉は、暗がりにしゃがみこむと、顔にすすを塗り、黒い布で頰冠りをした。
　畳屋の裏手に出た。
　土塀に木戸がある。文吉は、あたりをみまわしながら、木戸に近よった。そっと押す。手ごたえなく開いた。中へ忍びこむ。暗いが、どこに何があるか、わかっている。
　塵箱の位置から、見当をつける。尻をはしょった。ぶるっと身ぶるいが出た。甚左の精悍な顔が、眼先に浮かんだからだ。
　勝手口の次が風呂場、厠、次が納戸、そのとなりの離れふうに出っぱっている部屋が、内儀と番頭が、心中したところ。ぼんやりした月明りに軒が見え、窓がある。雨戸が閉まっている外側に、太い格子の桟が打ってあった。
　縁の下に、ぎっしりと角石が詰めこまれている。〈変だ。開かずの部屋にしたのかもしれない〉と思った。文吉は、その出っぱった部分をまわり、母屋の廊下の下へ潜りこんだ。
　そこに、打合わせどおり、平六がうずくまっていた。
　平六が、すり寄ってきた。
「まだ早い。どうやら奥は起きてるようだ」
　平六が、耳朶に口を寄せた。

「奥なら、旦那だ」
　二人は、それきり黙りこくった。文吉が、少しずつ奥へすすむ。縁の下は、案外、きれいだった。四つん這いになり、手さぐりですすむ。奥の座敷で、人の気配がした。文吉は、停止した。
　咳払いが聞こえた。呼吸をしずめ、耳をすます。甚左の寝ているたたずまいが、文吉の眼に浮かぶ。おぎんの顔、多七の顔が眼底に映る。千日墓地で背負ったおかみさんの死体の感触がよみがえる。
　四半刻（三十分）ほど静止していると、奥座敷から、寝息が聞こえてきた。部屋は、八畳と十畳と六畳の三つ。いずれも、襖で仕切られている。甚左は、まん中の十畳に寝ているらしい。
　文吉は、動き出した。平六が右脇をすすむ。一寸きざみに、玄関先の広間まで行き、また戻る。座敷の下を十回以上、往復したが、死体を埋めた掘土は、手先にふれなかった。
「ないな」
　と、平六がささやく。
「帰るより仕方がない」
　と、文吉が答えた。
　二人は、出口へ向かった。そのとき、文吉は、異様な呻き声を耳にした。彼は、平六の袖を引き、合図をおくった。二人は、耳を傾けた。声は、どうやら内儀が使っていた離れ座敷からのようだった。
　文吉は、全身を粟立て、膝頭をふるわせた。〈おかみさんか番頭さんの幽霊だ〉と思ったからだ。平六が、縁側の下から外へ出た。文吉は、その後につづいた。
　平六が、離れの羽目板へ体をすりつけた。文吉は、窓の外側の格子の桟に手をかけ、やっとの思いで立ち上がった。中から、声が聞こえる。
「おぎんさん、おぎんさん……どこにいるんだ。俺は死ぬ。ああ……ううう……俺は死ぬ。おぎんさん、おぎんさん」
　きれぎれに声がする。声の主は、多七らしかった。
「あの声は、誰だ」
　平六が、低い声で聞いた。
「多七にちがいない」
　文吉が、声をわななかせた。
　平六は、しゃがみこむと、縁の下へ詰めてある角石をはずそうとした。持っていた小鍬を石の隙間へはさみ、こじ動かそうとした。石がずれた。平六が、手をさしこ

み、中を調べた。
「奥のほうも、いっぱいの石だ」
と、平六が言ったとき、庭の植込みで、がさこそと音がした。文吉が、振り向いた。十間ほど後ろに、孟宗竹の藪が見える。竹の葉ゆれがしたと思った瞬間、唸りを上げて、ぴかりと光るものが、稲妻のような線をえがいてとんできた。
文吉は、咄嗟に上体をしずめる。つづいて光の矢が飛来する。文吉は、平六の帯をつかんで体をしずめさせようとした。「危ねえ」と、詰まった声を上げ、平六は、とび出した。
文吉も走ろうとした。銀光が、顎の先をかすめ、左の袖を羽目板に縫いつけた。藪の中から、人がおどり出た。
文吉は、右手で縫われた刃物をつかみ抜くと、勝手の木戸を目がけ、突っ走った。足は、北伊賀丁へ向いていた。箪笥町の境い目にきた。暗がりの中に弁蔵が立っていて、片手をあげた。
文吉が走り寄ると、
「逃げろ」
と、弁蔵が詰まった声をかける。弁蔵の後に従い、走った。平六が、いつのまにか、文吉の脇を走っている。須賀丁を経て、左門丁へはいった。弁蔵は、並足に変えた。
「死体は？」
「ありやせん。けど、離れ座敷に、多七がとじこめられていやした」
と、平六が答えた。

五　おとり捜査

弁蔵の家へ戻ると、
「二人とも風呂へへえれ」
と、言われた。文吉は、平六と一緒に、風呂へはいった。そのとき、右手に、しっかりと畳の刺し針を握っているのに気がついた。
文吉は、行灯の明りに近づくと、針を眺めた。六寸針だった。柄の先に丸みの玉ができていて、火箸の三倍もある太さ。先端が鋭くとがっている。
平六が、覗きこんだ。
「畳針だな」
「そうだ。竹藪から手裏剣のように投げたんだ。旦那にちがいない」
「あすこでお陀仏になるとこだったな。すげえ、手裏剣の腕だ」
平六が、そう言って首をちぢめた。文吉は、甚左の針投げを、一度だけ見たことがある。六年前、甚左の先妻が疱瘡をわずらって死んだ夕暮、母屋の屋根に、からすが五、六羽むらがり、無気味な鳴き声をあげていた。
文吉は、奉公にあがって二年経ったばかりの丁稚だった。明朝の葬式にそなえ、母屋の庭掃除をしていた。甚左が、縁側から庭先へ出てきた。けわしい眼つきで、屋根をのぞんでいたが、ふところから刺し針を取り出すと、屋根へめがけて投げつけた。
またたくまに、三本の針を投げ、三羽のからすを射抜いた。からすは、針を刺されたまま、屋根からころげ落ちた。文吉は、なぜか恐怖にふるえた。甚左の身構えた体から、すさまじい殺気でも感じたのだろう。
時経て、このことを十兵衛番頭に語った。
「針投げは、旦那の特技だ。誰も真似のできない技だよ。でもな、お前さんたちはただの畳屋、まちがっても、あんなことを覚えるんじゃない」
十兵衛から、そんないましめを聞いたことを、思い出した。
「甚左を捕るのは、なまやさしいこっちゃねえな」
と、溜息まじりで平六が言った。
「坂町の旦那……やっぱり捕えるんで」
「そいつはわかんねえが、どうやら大捕物になるんじゃねえかね」
二人は、ぼそぼそと話し合いながら、体を流した。風呂から上がり、文吉の居間へ戻った。腕組みしながら、弁蔵が待っていた。
文吉は、刺し針をみせ、針を投げられた経過を説明した。弁蔵の眉間がぴくりと動いた。文吉は、六年前屋根のからすを射落とした折りのことを語った。平六が、離れ座敷の唸り声を、身ぶりをまじえて、話をした。
「多七は、かわいそうに座敷牢だな。ということは、おぎんとくっついていたことになる。普通なら、お払箱が落ちだ。おぎんは、やっぱり、焼津浜かな」
弁蔵は、つぶやくように声を落とした。
「甚左を捕るんですかい」
と平六が聞いた。
「見込みちげえだった」
と弁蔵が答えた。

　文吉は、翌日から鳴海屋の店を手伝うようになった。丁稚でもなければ手代でもない。荷物の積み出しやら、客の応対をしているとき、店先へ、ぬっとはいってきた男がいた。五十がらみのでっぷり太った男だった。
　番頭の安兵衛が、もみ手をしながら、
「親分さん、お久しぶりで……何かご用で」
と、丁寧に口をきいた。
「弁蔵さんいるかい」
　男が、横柄な口のきき方をした。
「へえ、おりますです」
　安兵衛が、そう言って奥へ行こうとしたとき、弁蔵が、のれんを分けて出てきた。
「こりゃ、桐屋の親分、さ、おかけなすってくだせえ」
　弁蔵が、座布団をすすめた。文吉は、この男の顔を知っていた。坂町の店へときどきやってきて、物も言わず、奥へ通るのを見ていたからだ。文吉は、顔を見られてはまずいと思い、積み上げた俵物の陰に体を沈めた。
　桐屋勘兵衛が、上がりはなの座布団に腰をかけた。
「鳴海屋さん……坂町の一件、何を勘ぐってるか知らねえが、手を引いてもらいてえな」
　勘兵衛が、顎をしゃくった。肉付きがよく、髭の剃り跡が青い。眼に赤味があって、いくらか出目だ。
「坂町の一件というと……」
「しらばっくれるのも、いい加減にしてもらいてえな。心中さらしの死体買い……こいつは事件にならねえ。ほじくったって、物になるはずのもんじゃねえんだ」
「なるほど、千日墓地は、事件じゃなさそうだ」
「だったら、もういいじゃねえか」
「何も、手はつけちゃいねえんだが」
「ゆんべ、坂町へこそ泥がへえった。知らせをうけ、畳屋へとんで行ったよ。何も盗まれた物はなかった。けどな、どうやら鳴海屋の手下らしい臭いもしたんだ。もし、そうならわけを聞かしてもらいてえな」
「なんのことか、見当もつかねえ話だ」
「そんなら盗っ人かもしれねえな。縁の下をごそごそ這いまわるたあ、奇妙な泥棒もあったもんだ。まさか、親分が、昔の地金を出したわけでもあるめえし……」
　文吉は、俵の陰で、体を堅くしていた。
「桐屋の……冗談かね、そりゃ……おらあ怒るぜ」
　弁蔵の語気が荒くなった。
「鳴海屋に怒られちゃ、ふるえがくらあ。今のは、言葉

のはずみ……かんべんしてくれ。どうだろ、なんとか手を打ちてえんだが」
　勘兵衛の声が、やわらかくなった。
「ようがす。顔を立てやしょう。しかし、八丁堀の出役……こいつはわしにもどうにもならねえ。それが承知なら、俺は手だしはしねえよ」
　弁蔵は、低いが力のある答え方をした。
　勘兵衛は、から笑いを残して帰った。
　それ以来、弁蔵は、事件のことを口にしなかった。が、天気さえよければ、平六を連れて外出した。どこへ行くのか、何を調べているのか、文吉には想像もできなかった。
　一カ月ほど経った。
　十日ほど、弁蔵の姿が店から見えなくなった。町に鯉のぼりが立ちはじめた五月の初め、日焼けした弁蔵が戻ってきた。
「焼津へ遊びに行ってきたぜ」
　そう言って、弁蔵が、文吉の前にあぐらをかいた。
「おぎんさん、どうしましたか」
　文吉が、せきこんで聞いた。
「いなかった。焼津に、たしかに三河屋という酒屋があった。牛込袋町の三河屋の兄貴さ。さぐりを入れたが、おぎんはやってきた形跡がねえんだ。それに、江戸の弟と焼津の兄貴とは、仲違いしてることもわかった」
「すると、おぎんさんは、どこに……」
　文吉の胸が波を打った。
「そいつがわかりゃ、苦労はねえ。勘兵衛の申入れがあったんで、大っぴらに調べるわけにゃいかねえ。けどな、こうなったら俺も意地だ。草の根を分けても、おぎんを捜し出してみせる」
「おねがいします」
と、文吉は、口に出し、顔を赤らめた。
「若けえということは、いいもんだ。けど、おぎんが、生きてみつかるかどうか……」
「やっぱり、死んでるんで……」
「そいつは丁半博奕みてえなもんだ。半とでるか、丁と出るか……生きてたとしても、座敷牢の多七が先口だな」
　文吉は、首を垂れた。多七が、とじこめられている理由が、痛いほどわかったからだ。
　三日目の夜——。
　平六が、血相変えてやってきた。あいにく弁蔵は、寄

合いがあって留守だった。平六が、文吉の居間へやってきた。
「袋町の三河屋、引っ越ししたぜ」
「なんだって……で、おぎんさんは？」
「また、おぎんさんか……無理もねえ。けどな、おぎんの姿は、見当たらねえんだ。引っ越し先は、北町の表通りの角店、油屋の店を居抜きで買い、盛大な開店ひろめもやった。間口四間、奥行八間の立派な店構えだ」
　文吉は、平六が息をはずませているのを聞いても、なんの感動も湧かなかった。
「それが、おぎんさんのいなくなったことと、何か関係でも……」
「おめえさんは、図体ばかりでかくて、ちいとにぶいようだな。元手は、畳屋が出してるにちげえねえ。なぜだかわかるか」
「わかんねえな」
「おぎんさんのいなくなった口止め料、我慢代……俺の勘ぐりだが」
　文吉は、脳天を殴られたような気がした。
　文吉と平六が、額を寄せ、低い声で話し合っているとき、弁蔵が戻ってきた。寄合いに出かけたというのに、弁蔵の顔が、ひどくよごれ、尻はしょりのままだった。
「明日から、また仕事だ。二人は棒手振魚屋に化けて、坂町界隈をうろつけ」
　弁蔵の表情はやわらかく、口元に薄笑いを浮かべている。
「親分、何を狙うんで……」
　平六が、顎をつき出した。
「狙うんじゃねえ。狙われるんだ。だから、面はそのまま。ただ、姿を魚屋に変えるだけだ。文吉は、天秤を担げ。平六は、畳屋を中心に、呼び売り、ご用を聞き歩け」
「時間は？」
「四つ刻から五つ半、つまり日暮れどきをねらえ。あたりが暗くなりかけると、何かが起こる。それを、俺が狙っているんだ」
　文吉が、膝をのり出し、
「何が起こるんです？」
と聞いた。
「そいつはわからねえ。ただ、ひょっとすると甚左の刺し針がとんでくるかもしれねえ。平六、文吉、二人とも針だけは気をつけろ。万が一にも、針に縫われねえように、注意するんだ」

　文吉は、刺し針を投げられた夜の怖ろしさを思い出し、身ぶるいした。平六が、
「いよいよ、大詰め、こうこなくちゃ、面白くねえ」
と言った。
　翌日の四つ刻から、二人の棒手振がはじまった。文吉が、盤台を二つ、麻縄で吊るし、天秤棒で担ぎ、平六が、「かつを、かつを、初鰹」と言って呼び歩く。魚は、早朝、魚河岸から仕入れてきたものだ。
　坂町を中心に呼び歩くのだが、甚左の母屋の勝手口へ、何度も顔を出す。下女が、
「おや、お前さんたばこ売りじゃないか。商売替えかい」
と声をかけた。
　二日目の夕方。二人が、呼び歩いていると、甚左の家から、声がかかった。勝手口から中へはいり、天秤をおろしたとき、下女が、
「あんた文吉さんだね。なんでまた、棒手振なんかに……」
と言って眼を丸くした。
　文吉は、
「しょうがねえ。食うためさ」
と伏し目勝ちに答えた。平六が、どこで覚えたのか、出刃の手さばきよく、鰹の切身をこしらえた。そのとき、下女の一人が、勝手口の木戸のかんぬきを掛けた。
　文吉は、見慣れぬ下女の動作をいぶかった。何か言おうとしたが、声が出ない。〈ここにとじこめ、針だな〉と思った瞬間、庭の植込みのあたりから、唸りを生じた光る線がとんできた。
　文吉は、
「危ないッ」
　と平六に声をかけ、体をかがめた。つづいて三本の針が飛来し、一本が、平六の耳朶をかすめ、盤台の上の俎に突き刺さった。そのとき、勝手口の外で、駆けよる多人数の足音がした。
　木戸が強い力で破られ、数人がおどり込んできた。鉢巻きたすき姿は、まぎれもなく捕方だった。
　刺し針が、何本もとんできた。捕方が、いっせいに体を伏せた。すると、庭先にも、おびただしい人の足音がした。
「畳屋甚左、神妙にしろ。八丁堀の同心榊原の旦那のお出ましだ」
　と弁蔵の声がした。
　刺し針の矢は、やんだ。捕方が、いっせいに、孟宗竹

の藪の中へ突っこんだ。平六が走った。文吉は、その後を追った。

「畳屋甚左は、逃げも隠れもしねえ。なんの科だ。ご法度は何もしておらんぞ」

と、甚左のダミ声が、藪の中から聞こえる。

「とぼけちゃいけねえ。たった今、おめえは棒手振魚屋二人に、刺し針を投げたじゃねえか。殺しだぜ。幸い、二人とも無事だったが、罪は免れねえよ」

藪を囲んだ捕方の後ろから、弁蔵が怒鳴り返した。

「なんのための、探索なんだ。おとりを使って、わしの家へ忍びこませた。怪しい奴と睨んで、わしは、自分の体と、家を守るため、刺し針で脅しをかけただけだ」

「ごたくは、白洲で言ってもらおうじゃねえか。みんなかかれ」

弁蔵の合図で、捕方が藪へ突っこんだ。甚左は、両手に縄をかけられ、引き出された。弁蔵が歩み寄った。甚左が、踏みとどまり、弁蔵を睨んだ。薄暮の中に、その眼が鋭く光った。

「わしに、なんの恨みがあるんだ」

「恨みなんかねえ。けどな、千日墓地で、俺の甥っ子文吉を殺そうとした。文吉は、腕を刺された。傷口は斜めだったんで、匕首に見えたが、まちげえなく畳針だった」

「わしは知らん」

「この傷の治療をした医者、寛斎の口上書がある。それと、刺し針。おめえさんが、刺し針の使い手であることの証明もある」

「畳屋は、誰でも、刺し針を使う」

「そりゃ、畳表を止めるだけのもんだ。畳屋甚左は、人殺しのため使うんだ」

そのとき、同心榊原重太郎が、甚左の前に近寄った。

「畳屋甚左、神妙にせい。われわれは、すでに須賀丁の観雲寺の墓地から、二人の女の死体を掘り出し、確かめてある。のがれぬところと観念し、お白洲で尋常に白状しろ」

榊原の凛とした声が、鳴りひびいた。甚左は、がっくりと首を垂れ、曳かれていった。文吉は、「二人の女の死体」と聞いて、歯をかちかちと鳴らした。そのとき、捕方二人が、幽鬼のように痩せ細った小男を、両脇から抱えてきた。

文吉は、その男が多七と知ると、思わず走り寄り、手を握った。

多七が、うつろな眼を開けた。

「俺だ、文吉だ」

文吉は、声をふるわせた。

「やっと助かった。俺、おぎんさんと仲良くなったんだ。二人が、納屋で抱き合ってるところを、旦那に踏んごまれ……」

多七は、そこまでやっとの思いでしゃべると、へたへたと崩れすわった。弁蔵が、

「店へ連れて行け。医者を呼んでやれ」

と声をかけた。一行は、甚左を囲んで外へ出た。

文吉は、弁蔵に追いつくと聞いた。

「おぎんさん……やっぱり……」

「死んだ。殺されていたよ。かわいそうに、刺し針で、みぞおちを刺されていたんだ。俺が、吊るし替えた死体を調べたとき、傷は見あたらなかった。鋭い針の先が刺されても、抜けば、肉がふさいでしまったんでな」

「じゃあ、おぎんさんは、多七とくっついていたんですね」

「そうだ、心中さわぎのどさくさの晩、二人は、店の裏の納屋の中にいた。甚左は、踏んごむと、多七を縛り上げた。おぎんの手を縄で結わき、針で一突きだったようだ」

文吉の胸が痛んだ。おぎんのふくよかな面影が、眼底に映り消えた。

「すると、私が吊るし替えた死体……ありゃおぎんさんだったんですか」

「そうだ。甚左は、若い後妻を持ちながら、おぎんがだんだん育っていくにつれ、いやしい考えを持ったんだ。かわいそうなことをした。夜毎、おぎんを抱いてたもんだから、内儀はほったらかしだった。だから、番頭とできちまったのさ」

「私が、二度目に心中さらしを見に行ったとき、おぎんさんじゃなかった。その死体は、誰なんです？」

「甚左の悪知恵さ。かみさんは黒いやつがいっぱい……だから、おぎんのものを、剃り落とし、盗まれたと見せかけたのさ。そのままだったら見分けがついちまうからな」

「もう一人の女は……」

「その女は、芝神明の白首さ。心臓をわずらって死んだ奴を、甚左はやくざ者に銭をやって、無縁墓地へ持ちこませた。おめえが二度目に見にきたことは、やくざも見ていたし、番人の浅市も知ってたんだ」

文吉は、心中さらしの情景を思い出し、

「それで、番人が、おぎんさんの死体と取り替えたんですね」
と聞いた。
「浅市の奴は、左門丁の番屋に叩きこんである。やっと泥を吐きやがった。これだけのからくりを段取りしたため、野郎は、甚左から五両の手当をもらっていやがった。ほとけさんで商売をしていたんだな」
弁蔵が、低い声で笑った。文吉は、自分の足もとをみつめながら、おぎんの面影を頭の中で追っていた。弁蔵が、文吉の背中を叩き、
「おぎんのことは忘れるんだ」
と言った。

屋根から来た男

一　夜の捕物

呉服行商人、金兵衛の娘おれんが、月三両のお手当で、近江屋藤兵衛の妾になったのは、十七歳の秋だ。父親金兵衛は、四谷塩丁に間口六間の店を構える呉服商近江屋から、毎日、十反ぐらいずつ、呉服を仕入れ、唐草模様の風呂敷に包んで、背負い歩くのだ。
おれんの家は、塩丁の隣り町、愛住丁の源太長屋にあった。おれんの下に、三人の弟妹がいて、生活は極度に苦しかった。おれんは、父が疲れが出て寝込んでいるときなど、ときどき、近江屋へ使いに行き、呉服物を預かってきたり、支払いの清算に出かけたりした。
そんな折り、近江屋の主人藤兵衛が眼をつけ、父親に、
「お前さんとこの娘、おれんはいい娘だ。わしが世話してもいいが……」
と持ちかけた。
金兵衛は、
「娘がなんと言うか、聞いてめえりやす」
と言ったものの、おれんを承諾させる自信がなかった。困ったもんだ——と思い、おれんに、話を持ちかけると、意外にも二つ返事で承知した。
「あたし、お世話になるわ。でも月々のお手当三両より下じゃいやです」
おれんは、十七という年に似合わず、妾奉公の手当の額を口にした。というのは、父親が、背負い呉服屋をやっていても、月の儲けは、せいぜい一両前後だった。
そのころ、職人の手間賃が月に一両二分で、これだけあれば、寝酒の一合ぐらいは飲むことができた。が、一両では、親子五人、腹一杯めしも食べられなかった。
おれんは、四谷舟町、全勝寺の裏側、藤兵衛の持家である二階建の家に囲われた。三両のお手当のうち一両だけは、父親へ渡し、自分は婆やを一人使い、安穏な生活にはいったのである。
それから一年経った。
藤兵衛は、すでに六十歳となり、頭に白いものが増えはじめ、体力のおとろえが、おれんにも感じられた。藤兵衛は、四年前に妻に病死されて以来、後妻を持たなかった。長男豊蔵が、
「お妾ならいい。後妻は、いろいろ面倒だから」
という言葉に従ったのだ。
藤兵衛は、毎晩、六つ半（七時）になると、舟町の妾宅へやってくる。おれんを相手に、五勺ほどの酒を飲み、夕食を共にする。そして、翌朝、五つ刻（八時）になると帰って行く。
ところが、その夜は、近江屋から使いがきて、
「大旦那は、今夜はお見えになりません。少々、取り込みがあったもんですから」
との口上だった。しかも、その使いがきたのは、四つ半（十一時）をすぎてからだった。
「取り込みって、なんなの？」
「へえ、実は大旦那が、夕方、軽い卒中で倒れ、医者を呼んだり大さわぎ……ところが五つ半（九時）ごろ、泥棒がはいりまして」
おれんは、聞いてぎくりとした。
「旦那の容体は？」
「へえ、大したことはありません。お医者さんが言うに

は、ひと月も寝てれば、なおると言ってます」
「そう、よかったわ。で、泥棒のほう……何を盗まれたの」
使いの小僧は、それだけ言うと、あたふたと走り帰った。
おれんは、旦那の病気のことを考えた。旦那にもしものことがあったら——との思いが頭の中をかすめた。三両のうち、一両は実家、二両のうち一両二分を毎月使い、二分ずつ縁の下の瓶の中に貯めている。
まだ、六両しか貯まっていない。せめて五十両貯まったら、旦那と別れてもいい——と、一人言を口にした。おれんは、自分の言葉を聞いて、ぶるっと身ぶるいした。頭の中のどこかで、金さえ貯まれば、旦那が死んでもいい——と考えていることがわかったからだ。
婆やは、すでに階下で眠っている。おれんは、朝がおそいから、眠けがさしてこない。旦那の卒中が、気になってならず、用意しておいたお膳の上の酒を口にした。
ほんのりと酔いがまわってきた。行灯の灯芯が、地虫の鳴き声に似た音をたてている。塩丁の大店の奥座敷で、家の人たちに取り囲まれて、寝ている藤兵衛の面影が浮かんできた。が、不思議なくらい、会いたい思いは湧いてこない。当分、こないと考え、何かほっとした感じを抱いた。
六十歳の男と、十八歳の女とでは、愛情のかけらもないらしい。藤兵衛の手慣れたしぐさによって、体を任せているにすぎない。性のよろこびとはこんなものか——と思うほど、つまらなかった。
それゆえ、おれんはときどき、ゆきずりの若い男に、ふと、心をときめかすことがあった。出入りの魚屋の若い衆、植木職人などが、熱っぽい眼を向けると、おれんは、頬に血をのぼらせるのだった。
おれんは、所在なさに、帯の間から懐中鏡を出すと、行灯に顔を近づけて、鏡の中の自分を眺めた。おくれ毛が、二筋三筋、頬のあたりにまつわり、中高の顔は、旦那が「お前はだんだんきれいになるね」と言ってほめた美貌だ。
おれんはふと、もし旦那が死んだら、あたしは誰の持ち物になるのかしら——と思った。そのとき、障子の外の屋根の上あたりで、何かの気配がした。すでに九つ刻（十二時）になっているので、おれんは、無気味に思い、行灯の灯を消し、窓辺に立った。

雨戸を閉めるため、静かに障子を開ける。空に、雨雲に覆われた半月が、ぼんやりと見える。おれんは、しばらくそこにたたずみ、屋根の暗がりに眼を据えた。
おれんは、息を殺した。
闇に、眼が慣れてくるにしたがい、屋根の形が見えてきた。隣家の平家の屋根は、内藤新宿の魚屋魚政の隠居所、その向こう隣は、四谷荒木丁の家主の妾宅。
屋根と屋根の間に、槙の木が黒々と見える。そのとき、表通りへ走ってくる多勢の人の足音がした。御用提灯のあかりが、ちらちらと眼に映る。五、六人の足音が、あわただしく行き来する。
「あっちだ」「こっちだ」と、ダミ声が聞こえ、二人ばかり、魚政の隠居所の前で足を止めた。
〈泥棒らしい〉
おれんは、このときになって初めて、旦那の家へ泥棒がはいったことを思い出した。捕方は、行きすぎた。眼と鼻の先の屋根の上で、黒いものが動いた。おれんの眼が、それを追う。黒い影が、屋根の稜線から斜面に少しずつ体をずらしはじめる。
おれんの喉が乾く。
生唾をごくりと飲みこむ。斜面までずりおりてきたとき、雲の間から月が顔を出した。ほんの一瞬だったが、若い男の顔がちらりと浮かんだ。引き締まった眉毛の太い顔だった。
男は、動かなくなった。捕方の足音が戻ってきた。
「動いては、だめよ」
と、思わず、おれんは口走った。
男は、死んだように動かない。
「まちげえなく、この辺だ。路地裏へはいってみろ」
と、太い声がひびき渡る。おれんは、声の主は目明かしの桐屋勘兵衛だと思った。旦那の藤兵衛の話によれば、勘兵衛は、近江屋へしげしげ出入りしていて、しょっちゅう包み金をもらっているという。
近江屋から、盗難の届けをうけると、さっそく手先の者をつれ、駆けつけ、付近の張込みをやり、泥棒を追いこんできたのだろう。
勘兵衛の手先らしい男が、おれんの家の裏手へまわってきた。裏は、寺の築地塀で、幅六尺ほどの空地がつづいている。欅や椎の木が生いしげり、一寸先もわからぬほど暗い。
提灯が走る。
足音が走る。

おれんの眼が、それを追いかける。提灯が消え、足音が遠のいた。おれんは、窓から顔をつき出すと、

「もう、行っちまったわ」

と、低い声をかけた。が、屋根からの返事はない。風があって、屋根の人の着物の裾がひらめいた。

「どうしたっていうの。いくじなし。勘兵衛さんたちは、いないんだったら」

おれんの声が、少し大きくなった。屋根の人が、片手をあげ、声を出すな――というような仕種を示した。月光に浮かんだ手が、青白く、しかもすんなりのびているのがわかった。

暗がりの中で、沈黙の凝視がつづく。

おれんは、その人が、まるで自分と何かの因縁があるように思えてきた。そして、もう一度、顔をはっきり見たいと思った。一瞬ではあったが、眉毛の太い、きりりとした顔が、瞼によみがえってきた。

役者のようでもあったし、そうでもないようだった。年のころは二十歳前後らしい。この人は、本当に泥棒なんだろうか。嘘のような気もする。ほんとに、じれったいったらありゃしない――と考えているとき、屋根の上が動いた。

顔が上がった。

おれんは、咄嗟に、男を助けようと思った。助けてどうするのか、助けた結果が、どうなるのか――そんなことは考えず、ただ、助ける方法を真剣に考えた。

「待って……今、なんとかするから」

おれんは、声をかけると、みだれ箱に入れてある寝巻の腰紐をつかみ取った。窓に幅一尺ほどの出窓ができている。おれんは、その窓枠へ、腰紐で腰のあたりをくくりつけた。隣の屋根と、窓枠との距離は、ざっと七尺ほどあったので、体をのり出し、手をのばそうと考えたのだ。

おれんは、そろそろと上体をのり出させ、手をのばした。男が、屋根の斜面に足を踏んばり、手を泳がせた。が、まだ、一尺ほどの間があった。おれんは、いったん窓枠へ戻ると、帯を解いた。その半分を、自分の腰に巻いたまま、体をせり出し、手をのばしながら、帯の端を投げた。

男が、帯をつかんだ。

男は、

「ひい、ふう、みい」

と掛け声をかけると、帯を引き寄せる反動で、窓枠へ

とび移った。意外にも小柄な男で、軽業師のように身軽だった。

おれんは、紐を解くと、男を座敷へ引き入れ、雨戸を閉ざすと、行灯の明りをつけた。男は、茶ぶ台の前に、膝をそろえてすわると、深々と頭を垂れた。

「ご新造さん、すんません。このご恩は、生涯、忘れねえつもりだ」

男が、声を沈ませながら言った。

おれんは、帯をしめ終えると、男の前にすわった。答えず、男を眺める。

「顔を上げて」

と、声をかける。男が、顔を上げ、おれんをまじまじとみつめる。

色が青白く、眉の太い、鼻すじのとおったいい男振りだ。右顎の脇に、一寸五分ほどの刀傷の跡がある。それがかえって、色の白さを浮き立たせ、一種の凄味すら感じさせる。

おれんは、息を飲みながら、その男を見据えた。見ているうちに、体がふるえてきた。恐怖からではない。こんないい男、見たことがないと思うと、胸血が、はげしく波を打ってきたのだ。

男の眼が、きらりと光った。

おれんの眼とかちあい、もつれた。

男の眼が、やわらかくなった。

「ご新造さん、俺は、いたちの清吉という盗っ人だ。年は十九……生まれは、中目黒村の鬼子母神……親父は、その神主。けど、俺は、妾の子だ。十五のとき、おふくろが死んだんで、それから風来坊。江戸市中をほっつき歩いてるうちに盗っ人になっちまった」

「あんた、入墨は？」

「おかげで、まだねえ。俺の親分は、赤坂天神裏の、大八という人だ。天神の大八といやあ、ちっとは名の知れた盗っ人。だが、お縄をちょうだいして獄門になっちまった」

「じゃあ、ねぐらはどこ？」

「宿なし、もっとも無宿もんにゃ、きまったねぐらなんか、あるはずはねえよ。ご新造さんは、たぶん、お妾奉公と見たんだが、ちがうかい」

「図星だよ。六十じいさんのお守役、でも、いいあんばいに、病気で寝込んでいるのさ。そりゃそうと、お前さん、今夜、どこで仕事をしたんだね」

「大きな声で言えねえが、近江屋藤兵衛の倉だ。銀十両

……たんまり稼いできたんだ」
おれんは、清吉の言葉の途中で、
「ええッ」
と、詰まった声をあげた。清吉の表情がうごいた。二人の視線が、からみあったまま、一瞬、定着した。
「あたしの旦那は……近江屋藤兵衛。でも、あんたを助けたこと、後悔しちゃいませんよ」
おれんは、うふふと、喉の奥で笑った。いたちの清吉を助けたことが、奇妙なまわりあわせに思えたのだ。
〈旦那は、あたしの体をお金で買った。その旦那のお金を清吉が盗んだのは、まるで敵討ちみたい……〉
清吉は、畳に額をすりつけ、手拭に包んだ銀を、さし出した。
「申しわけねえ。このとおりだ、ご新造さん。でも、なぜ、俺を助けなすった。本当のことというと、俺は屋根からずらかることができたんだ。けど、月明りに浮かんだご新造さんの顔をみながら、俺は、何かに引きずられるように、帯をつかんでしまった」
清吉が、泣き声を絞った。おれんの胸に、針で刺したように、痛みが走った。
「何を言うんだね。あたしは御用提灯を見たとき、あんたが、近江屋へ押し入った泥棒じゃないかと思ったんだよ。でも、助ける気になったんだよ。どうしてだか、よくわからないんだけど……」
おれんの顔にやわらかい微笑が浮かんだ。清吉が立ち上がった。
「こんな気持ち……はじめてだ。いつか、ご縁があったら、恩返しに上がる。どうぞ達者で」
と言うと、窓へ近よった。おれんが、追いすがった。
「いけない。張込みがつづいているわ。明日まで、押入れにかくれていたら」
おれんは、清吉の袖をつかんだ。

二　押入れの中

清吉は、押入れの中にねぐらをこしらえてもらった。布団をしいて、枕をあてがい、足をのばしてもつかえることがなかった。五尺二寸五分の体が、さいわいしたのだ。
おれんが、階下へおりて、手桶に湯を汲んで持ってきた。
「さ、体をお拭きなさいな。きれいになれば、よく眠れるよ」
おれんが、そう言っておしぼりを作ってくれた。何回も手拭をしぼり替えてくれる。清吉は、三日も風呂にはいっていなかった。上から下まで、ていねいに体をぬぐった。
おれんが、食い物を入れてくれた。刺身と新香とご飯を、清吉は、がつがつと胃袋へ流しこんだ。お茶を飲み終えると、おれんが、清吉の前にすわった。
「あたしがいいというまで、ここにいるんだよ。おしっことお便は、桶を持ってきてやるから……」
おれんが、頬をゆるめながら、低い声をかける。清吉は、しみじみとその顔をみつめた。かわいい顔だ。まだ、娘のあどけなさがのこっている。
「ご新造さんは、不思議な人だな。旦那の倉から盗みを働いた俺を……」
「また、それを言う。もういいのよ、そんなこと。あたしは、あんたを追ってきた目明かし、桐屋勘兵衛という奴が大きらいなんだよ。近江屋の大旦那へのおためごかしに、用もないのに、あたしんとこへ見回りにきて……助平ったらしい眼つきで見ていくのさ」
「へえ、勘兵衛とは、そんな野郎なんですかい。捕まってたまるもんか」
「まあ、頼もしいわね。泥棒って、おもしろいの」
「そりゃ、一度やったらやめられねえよ。けどな、おっかねえ仕事だ」
「下の部屋に、少し耳のとおい婆やがいるからね。気をつけてくださいね。あたしも、そろそろ寝るから……」
おれんはそう言うと、押入れの上の段から夜具を取り出し、窓ぎわ近くへ敷いてから、
「おやすみ」
と言って、襖をしめた。
清吉は、暗闇の中で、眼をあけていた。行灯の灯を消す音がした。おれんは、横になったらしい。清吉は、おれんが気になって仕方がなかった。
耳をすました。かすかな寝息が聞こえてきた。清吉は、襖をほんの少し開け、隙間からおれんの寝床のあたりへ、眼を向けた。
暗い。なんにも見えない。
清吉は、息を殺し、闇の中へ眼をさらした。だんだん闇に眼が慣れてきた。布団の形が見える。白い顔が、ぼんやりと眼に映る。清吉の体の血が、音を立てて走り出した。が、歯を食いしばった。

〈女犯すべからず〉
親分から教えられた盗っ人の掟を思い出した。

清吉の親分天神の大八は、いわゆる骨のある泥棒だった。清吉は、十六の夏、大八に拾われた。こそ泥をやって、飢をしのいでいたが、三日も食わぬことがあった。

ふらふらになって、人家の軒下に倒れているとき、通りがかった大八に助けられた。大八は、黒装束に身を固めていたから、盗みの帰りだったろう。

大八の家には、十一人の若い者が寝泊まりしていた。表向きは、人入れ稼業ということになっているが、正業はまったくしていない。みんな、昼間は寝ていて、七つ半（午後五時）になると起き出してくる。

それから朝めし。清吉と同じような小僧が三人いた。三人を集め、大八の説教がはじまる。

「盗っ人も、いろいろ流儀があるが、大八流は、ちいとちがうところがある。それを一つ一つ言うから、よく腹ん中へ叩きこんでおくんだ」

そう言って、大八が、三人を順々に眺める。眼玉のぎょろりとした怖い顔だ。鼻の穴が天井を向いていて、おでこに赤いあざがある。そのあざから、太い毛が生えている。

大八が、口のすっぱくなるほど、教えた掟の五カ条とは、次のようなものだった。

一つ、女犯すべからず。

二つ、仲間の者をしゃべるべからず。

三つ、銀以外の金は盗むべからず。

四つ、刃傷すべからず。

五つ、忍びの跡を残すべからず。

「盗っ人の仕事は、夜中だ。若い女が寝ている場面に出っくわすことがある。けどな、決して手を出すんじゃねえ。女にうつつをぬかしていると、捕まる羽目になるんだ」

これが、第一の掟の解説だった。

「運わるく、とっつかまっても、仲間のことはしゃべっちゃならねえ。一網打尽になっちまうからだ。ご赦免になったとき、仲間が、あったかく迎えてくれるんだ」

二つ目が、こんな意味だった。

「天下の通用金はいろいろある。けどな、金は、めったなことじゃ使わねえ。町の銭の中では、銀がいちばん値打ちがある。これなら、使っても怪しまれるこたあねえ」

三つ目の掟の説明である。

「殺したり傷つけたりしたら、まちげえなく獄門となるんだ。盗っ人は、銀だけを盗めばいいんだ。あとは、逃げればいい」

四つ目は、こう説明した。

「忍びこんだ跡は、逃げるとき、消しておけ。あとで捕方が調べりゃ、どこの組の者がはいったか、見当がつくぞ」

五つ目の意味は、これだった。

清吉は、第一の掟を心の中で復誦した。

〈おれんはいのちの恩人だ。まかりまちがっても、おかしなことになっちゃいけねえ〉

清吉は、静かに襖をしめた。

清吉は、ぐっすり眠った。

襖の外で、何やら音がした。眼をさまし、襖を少しあけた。朝になっていた。おれんが、桶を二つ持ってきた。一つには水がはいっていて、一つはからだった。

「お早よう。下で婆やが、台所の仕事をしてるから、音を出さないで……からの桶はお便用……ご飯は後で、なんとかするわ」

おれんは、すでに薄化粧をしていた。夜の顔より、はるかにきれいだと思った。清吉は、顔を洗い、から桶に用を足した。

階下から、味噌汁のにおいがただよってきた。清吉は、空腹をおぼえ、生唾を飲みこんだ。おれんは、なかなか上がってこない。朝めしだな——と思い、清吉はあぐらをかいた。

そのとき、誰やら人が訪ねてきたようだ。

清吉は、二つの桶を押入れの中へ入れ、襖を閉め、聞き耳を立てた。

「お早よう。ちいと上がらしてもらうよ」

「おや、親分さん。たいそう早いおでましで……何か、捕物でもあったんですか」

「ゆんべ、近江屋の旦那の倉へ、盗っ人がへえったんだ。知らせを受けて、若いもんを集め、すっとんで行った」

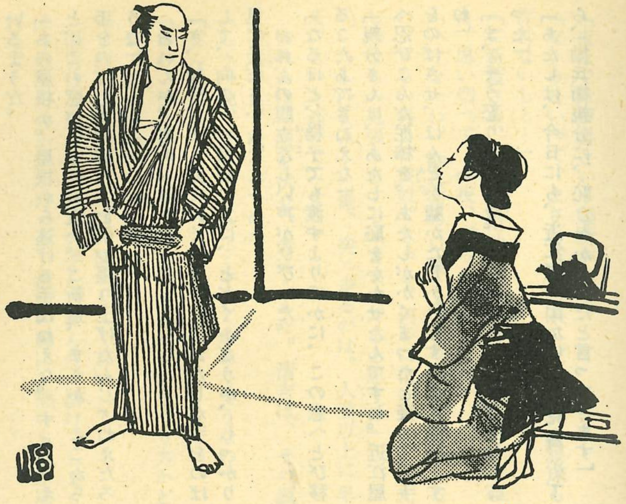
「それで、捕まえてくだすったんでしょうね」

おれんの笑い声が聞こえる。

「すんでのところで、逃がしちまったよ。総勢七人で、辻々、路地うらまで張りこんだ。塩丁の味噌権の天水桶のかげに潜んでいる奴を、取り囲んだんだ。けどな、逃

げ足の早い野郎で、横っとびに走りやがった」
「なあんだ、捕まえたんじゃないんですか。あたしは、近江屋さんがやられたんで、親分さんが、捕まえたとばかり思ってましたよ」
「ひやかしちゃいけねえ。別に、どじを踏んだわけじゃねえ。向こうがすばしっこかっただけだ。野郎は、愛住丁から舟町へ逃げやがった。追いかけているうちに、だんだんはなれちまい、野郎の姿を、この辺で見失ったんだ。ご新造……ゆんべ、何か変わったことあなかったかね」
「あたしんとこへ、逃げこんだとでもいうんですか」
「そういうわけじゃねえよ。遠目で見たんだが、野郎は、魚政の隠居か、ご新造のとこあたりで消えちまったんだ。で、今も、隣へ寄ってきた。するてえと、ゆんべ四つ半刻、たしかに屋根の上で、ごそごそ、音がしたと言っていたんだ。隣は平家、こっちは二階家、いっぺん、二階から屋根をみせてもらいてえんだ」
　おれんは、ほんのしばらく考えたらしい。少し間をおいてから、
「ええ、いいですとも。どうぞ。お上がりになってくださいな。ご案内いたしますよ」

　二人が、階段をのぼる気配。
　清吉は、頭から布団をかぶり、息を殺した。
　二階の窓を開ける音がする。
「なかなか、いい部屋だな」
　勘兵衛らしい男は、部屋のたたずまいを見まわしているようだ。
「いいもわるいもありませんよ。旦那がご病気じゃ、仕方がないじゃありませんか」
「大旦那、ちょっくら治りそうもねえようだぜ。軽いようだが、何しろ卒中だからな。ご新造も、まさか浮気もできねえな」
「親分が、しょっちゅうお見回り……お妾奉公も、なみたいていじゃございませんよ」
「まさか、俺が、ちょっかいを出すわけにはいかねえな」
　勘兵衛が、笑いながら、おれんの手でも握ったらしい。
「親分、冗談はよしてくださいな。あたしは、商売女のあがりじゃありませんよ。根は、堅気のおぼこ娘……これでも、近江屋の大旦那に心中立てくらいする気でいるんですから」
「冗談さ。かんべんしてくんな。ところで、隠居所の屋根たあ、あれだな」



「そうです。あの向こうが、荒木丁の家主銀十さんの妾宅……」
「隠居所の屋根に、たしかに人がいたというんだ。ご新造……まさか、知っちゃ……」
「だって、あたしは、旦那が倒れたと使いの小僧さんから聞いて、びっくりしちまい、ずうっと、下の上がりはなで、へたりこんでいたんですよ」
「するてえと、俺たちが、通りを走ってくるのは、知ってるわけだな」
「ばたばたと、足音を聞きましたよ。こっちだ、あっちだ――と怒鳴っている声も耳にしましたよ。けど、旦那の卒中ときいて、亡くなられることばかり考えていたんですよ」
「ふむ、無理もねえ話だ。大旦那がもしものことがありゃ、お払箱……そんなこたあねえと思うが、万に一つ、そうなったら、どうだろ、俺が、世話をしてえんだが」
「縁起でもないことを言わないでくださいな。でも、そのときがきたら、きっと考えるでしょうね」
　清吉は、おれんが親分の気を、わざと引いているのがよくわかった。目明かしは勘がするどい。清吉は、そのことを自分の体で知っていた。勘兵衛の疑いは、まだ、

晴れてはいない。なんとなく、頭の芯にしこりを残しているようだ。

「あの屋根か。屋根から逃げる手はねえな。するてえと、この窓がいちばん近い。ご新造、まさか、ここから手をのばして、盗っ人を引っ張り上げたんじゃねえだろうな」

　おれんが、窓から体をのり出したらしい。

「さ、親分、よく見ておくんなさい。あたしが手をのばして、向こうの屋根の人に、とどくかどうか、しっかり見てくださいな」

　おれんの腹立たしい声がひびいた。

「なるほど、梯子でも渡すよりほかに、この窓へとび移るこたあできねえな」

「親分さんは、あたしに恥をかかせたんですね。近江屋へ忍びこんだ泥棒を、あたしがかくまったと疑って、手をのばさせ、ほんとか嘘かたしかめなすったわけですね」

「ま、そう怒りなさんな。お役目がら……仕方がねえこった」

「あたしは、今日にも、近江屋へ出かけ、お見舞がてら、勘兵衛親分に、恥をかかされたと言ってきます」

「そいつはかんべんしてくれ。俺は、何も疑ったわけじゃねえよ。もしもの場合を考えただけだ」

「どっちにしても、疑ってることだけは、まちがいありませんね」

「じゃあ、こんりんざい、疑ぐるのはやめとしよう。おそれ入ったな」

　勘兵衛は、大声で笑うと、階段をおりた。おれんが、その後にしたがい、

「どうも、ごくろうさんでした」

　と、挨拶する声がした。

　清吉は、ほっとする思いを抱いた。

　とんとんと階段を踏み鳴らす音がした。おれんが、襖を少しだけ開いた。

「冷や汗が出たわ」

　おれんがそう言って白い歯を見せた。

「俺は、布団をかぶっていたんだ。歯の根が合わなかったよ。ありがてえと思い、手を合わせてえくらいだ」

　清吉は、手を合わせ、頭を下げた。

「これから、どうしようと、考えてるの」

「ここに長居はできねえ」

「真っ昼間、逃げ出せば、みつかってしまうし……」

「夜は、木戸番という難所がある」

「だからといって、まさか、屋根裏に、あんたの寝床も作れないし……」

「ご新造さん、俺、これ以上、めいわくをかけたかねえ。思い切って、今夜、ずらからしてくれ」

「いけないわ。勘兵衛の口裏じゃ、あたしを疑ってるわ。ずるい男よ、彼奴。きっと、何かに化けさせ、あたしのうちの見張りをするにきまってると思うの」

「いちかばちか……俺、突っ走るのは、人並以上に早え。きっと逃げてみせる」

　おれんは、眼を伏せ、考えこんだ。清吉は、その顔を、穴のあくほどみつめた。

「もう一晩、ここにいて……手だてがありそうなの」

「どんな手だ」

「まだ、言えないわ。その方法が、たしかなやり方かどうか、調べてみたいの」

「じれってえ話だ。一口、聞かしてくれ」

　清吉は、思わずおれんの手をつかんだ。溶けてしまうようなやわらかい手だった。清吉の胸に、熱いものが溢れた。

　おれんが、その手を握り返してくれた。

三　宵の逃亡

　おれんは、まもなく外出した。出しなに、

「二階のお掃除は、しないでおくれ。あたしが帰ってからするから」

　と、婆やに言いおいた。

　おれんは、付近の町をぶらぶらと、買物でもするようなようすで歩きまわった。勘兵衛の手先が、どんな見張りをやっているかを確かめるためだった。

　顔見知りの手先が、二人ずつ組んで、足を急がせていた。おれんは、会釈を送ると、足早に行きすぎる。

「ご新造さん、ゆんべ何か変わったこたあなかったですかい」

　と、色黒の若いもんが顔を近づけながら声をかける。

「桐屋の親分、じきじき二階の座敷まで踏んごんで、お調べずみだよ。何をまごまごしてるんだね」

　おれんは、蓮っ葉な声を残し、歩み去った。〈これじゃ、うっかり出られない。出れば御用――にきまっている。何かうまい方法はないか〉おれんは、そんなことを考えながら、愛住丁の源太長屋へ足を向けた。

長屋木戸をはいると、両側に、小さな家がびっしりならんでいる。まん中に板の蓋のある溝がある。おれんは、駒下駄で溝板を鳴らしながらすすんだ。
「まあ、おれんちゃん……おっかさんが心配してたよ。近江屋の旦那が卒中で倒れなすったそうだけど、おかげんどうなの」
と声をかけた。
「軽いと聞いているので、十日か半月もすればよくなるんじゃないかしら」
おれんは、そう言って笑みをおくった。
長屋の楽しみは、他人の噂話だ。藤兵衛が倒れたことと、おれんのお妾奉公が、どうなるかは、大きな話題となっていたのだろう。
おれんは、井戸の右手の、親の家の格子をあけた。母のおかねが、
「心配してたんだよ」
と言って、手を取らんばかりにおれんを中へ入れた。
六畳と三畳の二間。二人の弟が、おれんにまつわりついた。十二と九つである。おれんは、二人に波銭を二枚ずつやった。二人は、にこっと笑うと、駄菓子を買うためか、外へとび出していった。
おかねが、渋茶を淹れてくれた。旦那の話、泥棒のことをしゃべりだした。おれんは、母が賃仕事で仕上げたらしい唐桟の着物と羽織が、たたんであるのに気がついた。ふと、この着物を清吉に着せ、逃がしてやろう——と思った。
「この着物と羽織、ゆずってもらいたいの。世話になった人にあげたいと思うから」
おれんは、言いながら、清吉に着せた姿を頭の中にえがいた。
「だって、お前、今日お届けするんだよ」
と、母がびっくりした表情をした。
「近江屋さんへいって、おんなじ生地を買ってきて、いそいで縫えば、あさってには出来上がるんじゃない。どこのご注文だか知らないけど、あたしのほうは、今じゃないと都合がわるいのよ」
「何を急ぐんだね。そんなに……」
おれんは二分銀二枚を帯の間から出すと、
「これは、毎月のおきまりじゃないわよ。着物のお礼」
と言って、着物を膝の上にのせた。しっとりした肌ざわりがして、上物だとわかった。
「困ったねえ、あんたは、言い出したらきかないから

ね。じゃ、なんとかするよ」
おかねは、銀二枚をつかみ取った。
おれんは、風呂敷を借りて着物を包むと、
「また、くるわ」
と言って立ち上がった。おかねが、
「もう少し、いたら。どうせ、旦那は、おいでがないんだから」
と、おれんを見上げた。
「ことわっておくけど、この着物のこと、桐屋勘兵衛の手先のもんがきても、けっしてしゃべらないで」
「お前、何かわるいことでもしてるのかい」
母親の表情が曇ってきた。
「わるいのは親分。近江屋へ出入りして、お宝をもらっていながら、あたしに手を出そうとしてるのよ。いやらしいったらありゃしない。だから、この着物をさし上げるあるお店の若旦那のこと、妙に勘ぐって、困るからよ。わかったわね。彼奴の手下は禁物」
おれんは、それだけ言うと外へ出た。長屋木戸の前に、さっき会った勘兵衛の手先が立っていた。おれんが出てくると、身をひるがえし、姿を消した。
おれんは、こんなに張りこまれていたのでは、なまはんかなことじゃ、清吉を逃がすのはむずかしい——と思った。
〈彼奴らは、あたしを疑っている。蝮のような勘を働かしているらしい。盗っ人みたいな勘……清吉も盗っ人。この勝負、どうなるのかしら〉
おれんは、足を急がせながら、声を立てて笑った。今まで味わったことのない緊張が、からだ中にみなぎってきた。おれんは、その緊張に、胸元がわくわくしてくるような気がした。
途中、足袋を買った。〈下着と、草履は、旦那の物がある。それを着せてやればいい。帯も角帯の、極上物がある。それを締めさせてやればいい〉
そこまで考えたとき、ふと、清吉とふたたび会えないことに気がついた。胸の締めつけられる思いがしてきた。
〈当分、押入れの中にいてもらおうかしら。いやいや、それはできない。婆やが気がつくし、勘兵衛も、きっと嗅ぎつけるにちがいない。逃がしてやって会える方法はないのか……〉
おれんは、真剣に考えだした。
家へ戻ると、

「誰か、こなかったかい」
と、婆やに聞いた。
「表を掃いていましたら、桐屋の旦那が足をとめ、ご新造さんいるかい――と言うんですよ。にやにや笑って……今、愛住丁のおふくろさんとこへ行きましたよ――と言ってやりました。そしたら、またくるよと言って行っちゃいました。いけすかないったらありゃしませんね。目明かしのくせに……」
おれんは、聞いて、身ぶるいした。
なんともいえない絶望感が、重くのしかかってきた。自分の考えが甘すぎたようだ。このまま、清吉と一緒に捕まるなら、心中してもいいような思いが、頭の中をかすめた。
おれんは、唇を噛んでうなだれた。婆やが、寄り添ってきて耳朶へ口をあてがい、
「知ってるんですよ。二階の押入れの中……とうに気がついていたんですけど、黙っていたんですよ。さっき、二階へ上がり、ちらりと見ちまってね。すまないことをしたと思いましたけど……」
と、小声でささやいた。
おれんはぎょっとした。
婆やの顔がこわばり、じっとみつめている。胡麻塩の髪が、皺だらけの顔にまつわり、あるかないかのように眼が細い。その細い眼の奥が、ぎらぎら光っているようだ。
「どうして二階へ……」
「おかみさん、一つ屋根の下で、三人の者が住んでて、その一人だけが除け者となったら、うまくいきっこありませんよ。三人が、力を合わせなけりゃ」
「そりゃそうだけど……婆や、助けてくれるのかい」
「わたしは、おかみさんが好きなんですよ。十二のときに死んじまったお銀という娘に、そっくりで、眼つきなどまるっきりおんなじ。だから他人ごととは思ってないんですよ」
おれんは、婆やの真意をはかりかねて、考えこんだ。
婆やは、名をつねといい、おれんがこの家に住むようになったとき、父親の金兵衛が、得意先の鳴海屋弁蔵にたのんで、その世話によって住みこむようになった。年は六十一だが、腰もまがらずしゃんとしている。
もとは、大工の女房だったが、亭主は飲む打つ買うの道楽者で、四十八のとき、後家となり、弁蔵長屋に住んで針仕事で生計を立てていた。気っぷはさっぱりしているが、気の強いところがあって、おれんとときどき衝突することがある。
が、すめばけろりとして、笑ってしまう。そんな婆やに対し、おれんは、身近なものを感じていた。

「婆や、手助けしてくれるって、いったいどんなやり方？」
おれんは、婆やの手をつかんだ。
「桐屋と鳴海屋さんは、おもてづらこそ目明かし同士として、うまくつき合ってますけど、根は、仲がわるいんですよ。せんだっての、千日墓地の、心中さらしの一件。勘兵衛さんが、坂町の畳屋甚左をかばって、弁蔵親分の邪魔をしましたね」
「知ってるわ。そのはなし……」
おれんは、心中さらしを見にこそ行かなかったが、寄るとさわると噂で持ちきりで、とうとう、鳴海屋が、甚左を御用にしてしまったことを聞いていた。
「わたしは、弁蔵親分が好きなんですよ。もう少し若けりゃ、おか惚れするくらい……おかみさん、二階の若い人、苦労の末、お助けして、それっぱなしじゃつまらないじゃないですか」
おれんは、酸いも甘いも心得顔の婆やの胸のうちを知って、顔を赤らめた。
「そりゃ……会えるに越したことないわ」
「ですから、あの方を、弁蔵長屋へ入れてもらったらどうかと、考えたんですよ。左門丁なら、眼と鼻の先……尾けてくる桐屋の手先を、うまくごまかしさえすれば、会いにいくことくらい、なんでもありませんよ」
婆やの眼に、艶冶な色が浮かんだ。年を取っても、情事を考えただけで血がさわぐようだ。
おれんの頬がゆるんだ。
鳴海屋弁蔵は、会ったことはないが、世間の噂によれば、情味のある人らしい。八十何戸もある長屋も、うまくおさめ、定回り同心にも受けがいい――と聞いている。清吉さんが、そこの長屋に住む。あたしが会いにいく――。
おれんは、うふふと喉を鳴らすと、とんとんと階段を踏み鳴らし、二階へ上がった。
襖が半分開いていて、清吉が、横になっているのが見えた。
「婆やとの話、大方聞いちまった。鳴海屋弁蔵は、俺の親分の敵みてえな男だ」
と、清吉が、冷たい声で言った。

「なんですって、かたき……そりゃまたどういうわけなの」
おれんは、押入れの前に腰を落とした。
「天神の大八が、二年前獄門になったのは、弁蔵の差し口だったと聞いてるぜ。その長屋へのこのこへえっていけば、たちまち御用。ねずみ取りの罠へ自分ではまりにいくようなこたあしたくねえよ」
おれんは、息を詰めた。
「知らなかったわ。そんなこと……」
「俺、今夜、ずらかるよ」
「夜は、危ないわ。あたしの考えじゃ、宵の口がいいと思うの。人通りはあるし、顔はよく見えないし……それに唐桟の着物と羽織、足袋までそろえてあるわ。どこかの若旦那に化けて、夕ぐれどき、出て行ったら……」
「じゃあ、そうするか」
そのとき、婆やが、上がってきた。
清吉が、あわてて襖を閉めた。
婆やが、おれんの後ろへすわった。
「よく聞いてくださいな。わたしが親分に頼めば、けっして目明かし根性なんか出しませんよ。天神の大八さんは、運わるく親分の手下の平六さんに尻っ尾をつかまれちまい、平六さんも引っ込みがつかず、親分の耳に入れちまったと、聞いてますよ。あいにく大八さんのふだん持ってる七つ道具、てのひらにはいるくらい小さなのこぎり、手かぎ、のみ、小刀、やっとこなどの束が、仲丁の料理屋さんの勝手口に落ちていたんで、のっぴきならず、御用にしたんですよ。鳴海屋の親分さんの悪口言ったら、泥棒稼業はつとまりませんよ。わたしは、だてやすいきょうで、助けようというんじゃないですよ」
婆やが、襖に向かってわめいた。
「わかったわ。でも……」
おれんが、そう言って襖をみつめた。
長い沈黙がつづく。
おれんと婆やが顔を見合わせ、眼くばせを送る。清吉が中から返事をした。
「わかった。俺、どうせ捕まってたかもしれねえんだ。それがこうして、一晩でも、ご新造さんのおなさけをうけた。盗っ人みょうりがつきるぜ。婆やの言うとおり、今宵、左門丁へ行ってみよう」
襖が開いた。清吉が中から出てくると、二人の前に膝をそろえてすわり、頭を下げた。
「婆や、お酒の用意をしておくれ。ありったけご馳走をこしらえ、清さんの門出のお祝いをするんだから」
おれんは、婆やに言いつけた。
婆やが、階段をおりて行った。
おれんと清吉の眼が、からみ合ったまま動かなかった。言葉以上の心の交流が、火花をまじえたようだ。
婆やがこしらえてくれた料理で、二人は、こっそり酒宴をひらいた。
清吉の頰が赤く染まった。おれんは、ほんのりと酔った眼で、その顔をまじまじとみつめた。全身の血が音をたてて、駆けめぐるようなたかぶった気持ちになってきた。
おれんが、手をさしのべ、泳がせる。清吉が体を反らせ、
「盗っ人の掟だ。触わっちゃいけねえ」
と、詰まった声をあげた。おれんは、我にかえると、唇を嚙んだ。やるせない思いが、胸を突き上げてきた。
暮れ六つ（六時）の鐘が、聞こえてくる。婆やが、身支度をして、清吉の衣類を持ってきた。おれんは、清吉の着替えを手伝った。下帯から襦袢は、旦那のものを着せた。
唐桟のおついの着物と羽織。角帯を締めると、ふるいつきたくなるような男ぶりとなった。おれんの眼が、清吉の動きを追う。
清吉と婆やが、勝手口から出た。おれんは見送りながら、こみ上げてくる涙を押し殺していた。

四　追手の眼

清吉は、婆やのつねと肩をならべ、裏口から外へ出た。入相の鐘が鳴るのもまもなくのころだ。仕事を終えた職人たちが、仲間づれで帰ってくる。商売のすんだ棒手振が、鼻唄まじりで足を急がせていく。
買物帰りのかみさんたち、足をとばしていく小僧、病家の帰りらしい医者の姿など、舟町の通りは、けっこう人通りがはげしい。
清吉は、いかにも大店の若旦那らしく、足もとをいくぶん内股にして急いだ。おれんと台所で別れるとき、涙をためていた顔が、しきりに思い出される。
〈俺は、ご新造さんに惚れちまったようだ。あんないい女とは、お目にかかったことがねえ。あったけえ気持ちが、俺の胸へ沁みこんできやがった。今まで、ただの一度だって、こんな思いになったことはねえ〉

清吉が、そんなことを考えていると、婆やが声をかけてきた。

「若旦那、ご心配なさらないでくださいな。何やらお考えのようですけど、万事は、わたしの胸三寸……婆アですけど、頼りにしてだいじょうぶですよ」

すっかり言葉つきを変え、ていねいに話しかける。清吉は、なかなか腹のすわった頭のいい婆さんだ――と思った。

「よろしく頼みます」

清吉は、調子を合わせて答えながら、あたりに眼をくばる。

「色事というものは、危ない橋を渡ってこそ、たのしみも大きいんですよ。わたしだって、覚えがありますからね」

清吉は、答えずふくみ笑いを洩らした。婆やが、追手の眼を警戒し、ことさら、おしゃべりをする気持ちが、手にとるようにわかったからだ。

「こう見えても、わたしは、たった一度だけ、亭主の眼をかすめ、浮気をしたことがあるんですよ。二十九のときにね。相手は屋根職人、きりりとしたいい男でしたよ。亭主が、飲んだくれて帰ってこない晩、わたしは、物干竿に、足袋を残しておくんです。それを合図に、男が屋根から……」

婆やが、言いかけた言葉を飲みこんだ。清吉は、何かの異変を感じとり、体を堅くし、暮色の濃くなってきた通りを見すかした。

「桐屋の親分が、味噌倉のかげに……」

婆やが、声を沈め、早口で言った。

倉の白壁の前に、暗がりから浮き出たように、目明かし姿の男が、尻はしょりで立っているのがわかった。

「どうする?」

「わたしに任しといて……」

二人は、小声でささやき合うと、倉の前へ近づいていった。避ければ、かえって怪しまれると思ったからだ。

「おや、親分さん、御用の筋で……」

と、婆やが、勘兵衛に声をかけた。

「婆さん、どこへ行くんだね」

と言いながら、勘兵衛の鋭い眼が、清吉の顔をとらえた。清吉は、どきりとしたが、平静をよそおい、軽く頭を下げた。

「神田多丁の金物屋の若旦那ですよ。ちょいとばかり、

色事でしくじりましてね。大旦那から、きついおこごと……勘当するとまで言われ、明日あたり、千駄ケ谷村のお寺まで……ご住職に、取りなしをお願いしようと思いましてね」

「寺はどこだ」

「順正寺……」

「この方の名前は?」

「太七郎さん、亡くなったわたしの亭主が、大旦那に世話になったんですよ。こんなお世話をして、借りを返しておこうってわけですよ」

「神田多丁のなんという金物屋だ」

「駿河屋……親分さん、妙に勘ぐるのはやめてください。今夜は、わたしの以前の知合いへ若旦那をおあずけして、明日の朝、わたしがお寺へ連れていく段取りなんですから」

婆やは、なかなか、しっかり者らしい。清吉は、聞いていて、勘兵衛が自分の顔を知らないのが、幸いだと思った。

天神の大八の手下の中でも、番頭格の者は、入墨もあるし、島送りになってご赦免になった者もいる。そんな連中は、目明かし連に顔が知られているが、清吉は、まだ下っ端だった。一度も捕まったことがなく、御用の筋には顔を見られていなかったのだ。

勘兵衛が、清吉に歩み寄ってきた。

「太七郎さんといったな、年はいくつだ」

「はい、十九で……」

「色事でしくじったといったが、相手は、どんな女だ」

「店で働いている下女のお品……」

「ほう、お妾さんじゃねえのか」

勘兵衛が顎をつき出し、腹の底からひびいてくるような声を出した。清吉は、どきりとした。〝お妾さん〟とは、おれんのことを指していると思ったからだ。

「とんでもないことです」

清吉は、震えながら答えた。

「なんだか、そんな臭いがするぜ。舟町あたりの、若い囲われ女……一夜の出会いで、できちまったのとはちがうか」

勘兵衛の語尾に、力がはいった。

そのとき、婆やが口をさしはさんできた。

「なんのことでございましょう?」

「何を言ってるんですか、桐屋の親分ともいわれる旦那が……舟町とは、聞き捨てになりませんね。というの

は、うちのおかみさんのことですかね」
婆やの語気が、強くなり、勘兵衛を睨み据えた。清吉は、汗ばむほど手を握りしめ、生唾を飲みこんだ。
勘兵衛が、突然、笑い声をたて、
「すまんかったよ。御用の筋の勘ぐりという奴でな。足をとめてわるかった」
と言って、味噌倉の路地の暗がりへ姿を消して行った。
婆やが、清吉を見て、歯を見せた。
二人は、足を急がせた。
「疑ってるな」
「睨(にら)んでますよ。彼奴は、蝮(まむし)だからね」
「誰か、後を尾けてるんじゃないか」
婆やが、後ろを向く。
「暗くって、わからないけど、たぶん……」
「このまま、左門丁へはいっていいのか」
「仕方がありませんよ。わたしは、勝負だと思ってますよ」
「なんの勝負だ」
「弁蔵親方が、あんたをかくまってくれるなら、勘兵衛と勝負……」
「………」
清吉は、言いかけた声を飲んだ。
勝負——とは、運を天にまかせることだ。が、勘兵衛には、御用の筋という大義名分がある。弁蔵は、盗っ人をかくまったというひけ目がある。勘兵衛が、かさにかかってくれば、弁蔵には勝ち目はない。俺は、お縄だ——。
おれんに会いたい。おれんと抱き合ってからなら、あきらめもつく。できることなら、弁蔵長屋から、勘兵衛の手のとどかぬところへ、逃げのびたい。虫が良すぎるかもしれねえが、おれんと一緒ならなおいい——。
清吉は、あてもないことを考え、苦笑した。婆やが、
「思い出し笑いは、人がわるい」
と言って、くっくっと喉を鳴らした。
左門丁の木戸が見えてきた。
番小屋の油障子が、明るく灯(とも)っている。
清吉は、誰かが、後を尾けてくる気配を感じた。
「後を尾けられているよ」
と、低い声をかける。
婆やの足が早くなった。
番小屋の障子が開いた。〝四谷左門丁〟と書いた高張

提灯に、番太郎が灯を入れた。あたりが明るくなった。
婆やが、顔なじみらしく、
「今晩は、わたしですよ」
と番太郎に声をかけた。
「なんだ、おつねさんじゃねえか」
と、年老いた番太郎が答えた。
二人は、木戸口から中へはいった。
後を尾けてきたらしい商人ふうの男が、番太郎のそばへ歩みより、何か言ったようだ。清吉はちらりと後ろを向き、そのようすを見てとった。
桐屋の手先だ——と思うと、足もとがもつれた。
婆やが、長屋木戸へ駆けこんだ。清吉は、後を追った。婆やが、木戸の柵の隙間から外を覗いた。商人ふうの男が、通りの質屋の軒下から、じっとこっちを睨んでいる。
二人は、鳴海屋弁蔵の勝手口から中へはいった。
婆やが、内儀らしい女に、いんぎんな挨拶をした。
「親分さんに、お目にかかりたいんです。この方は、神田多丁の金物屋の若旦那……わけがあって、うちへは帰れないんですよ。お知恵を拝借したいと思いましてね」
内儀が、愛想よく答え、二人を中へ招じ入れてくれた。
二人は、奥まった座敷へ通された。
お茶を飲んでいるとき、弁蔵がはいってきた。清吉は、その顔を知っていた。赤坂、四谷界隈で、盗みを働いている者にとって、鳴海屋は、目の上の瘤(こぶ)だ。ことに弁蔵は、親分の天神の大八をお縄にしたので、大八の身内の者なら、誰でも、弁蔵の顔を知っている。
弁蔵は、二人の前にあぐらをかいた。
「おつねさん、台所での話、小耳にはさんだよ。事情は、おおかた見当がついた。で、わしに頼みとは、なんだね」
弁蔵は、錆びた声をかけながら、清吉をじろりと睨んだ。清吉は、ぶるっと身ぶるいした。勘兵衛より、はるかに怖い感じがした。弁蔵が、以前は泥棒で、天神の大八より兄貴分にあたることも知っているだけに、よけい怖いと思ったようだ。
この時代の目明かしには、前身が泥棒だった者がかなり多かった。同心に、盗っ人の所在を差し口して、前歴おめこぼしの恩典に浴し、十手を預かる身分になったということだ。弁蔵もその一人で、正業は鳴海屋という屋号で、乾物商を営んでいることも聞いていた。

婆やが、勘兵衛をごまかしたように、清吉を金物屋の若旦那に仕立てて事情を語った。

弁蔵の鋭い眼が光った。

「おつねさん、わしの眼はフシ穴じゃないよ。舟町と左門丁は、眼と鼻の間だ。塩丁の近江屋へ盗っ人が忍びこみ、銀十両を盗んだことも、耳にはいってるぜ」

婆やが、びっくりして声を飲んだ。

「勘兵衛が、舟町あたりで、泥棒を見失い、目下、辻々に張込みをやってることもわかっているよ。そこにいる若い人……よく聞いてくれ。だからといって、わしは、あんたをそのホシだとは思っちゃいないんだ」

清吉は、息を殺し、婆やと顔を見合わせた。

「舟町のおれんさん、ますますきれいになったろうな。おつねさんを世話したお礼に、いっぺん店にきてくれたが、わしは会わなかった。けどな、おれんさんの顔は知ってるぜ。通りがかりの姿を拝んだことがある。いい女だ」

「親分さん、遠まわしの話はやめてくださいな。この若い衆は……」

「おっと待ちな、みなまで言っちゃいけねえ。聞いちまってからじゃ引っ込みがつかんからね。太七郎さんとやら、わしの長屋に、しばらく、身を潜めていなすったらどうです?」

弁蔵が、微笑をうかべながら言った。

清吉は、弁蔵の表情を見守った。

〈この男は、敵か味方か。俺を、いたちの清吉と知っている。知っていて、婆やに打ち明けさせなかったのは、何か、含むところがあるのか。弁蔵長屋に、とどまることが、いいのかわるいのか……〉

清吉は、思いまどった。

「わしは、妙な性質でね。窮鳥ふところにはいれば、これを助けるなんて、もったいぶった考えはないが、追われる者を、首っつりの足を引っ張るようなこたあしたくねえんだ。あべこべに助けたくなってしまうんだよ」

「はい、ありがとう存じます」

清吉が、頭を下げたとき、弁蔵が、いきなり腕を出して、清吉の手をつかんだ。清吉が、てっきり捕縄と思い、のがれようとしたが、その手は、金縛りにあったように動かなかった。

弁蔵が、清吉の右手を持ち上げ、てのひらにじっと眼を注いだ。

「この手は、まちげえなく大店の若旦那の手だ。おなご

をかわいがった手だな。盗っ人の手じゃねえ。盗っ人は、大した力仕事はやらねえが、きゃしゃな割合に、てのひらが堅い。この手はやわらかいな」

弁蔵が、手をはなし、うふふと喉の奥で笑った。そのとき、障子の外の中庭のあたりで、物の音がした。弁蔵が、ことさら大声を出して、

「若旦那、ま、当分ここにいなすったらいいでしょう。ちょうど、この奥の井戸の手前の長屋が、一軒空いてますよ」

と、まるで外へ話しかけるように言った。

内儀が、座敷へはいってきた。弁蔵のそばへにじり寄ると、何やら耳打ちした。弁蔵の表情に、一瞬、緊張の色が浮かんだ。内儀が部屋から出て行った。

清吉は、婆やに案内されて、弁蔵の家を出ると、長屋へはいった。六畳と三畳の二間、玄関と台所はあるが、厠はない。両側に八軒ずつの家がならび、まん中の奥に井戸がある。その右手に、共同厠が二つならんでいる。

婆やが、使いに出て、布団やら、ちょいとした勝手道具、茶ぶ台を買いととのえ、持たせてよこした。

「おつねさん、どうだろう。弁蔵親分、俺をどうしようっていうんだろう?」

「さあ、わたしも、今、道々考えてきたんだけど、たぶん、助けてくれると思うんだけど……でも、少々心配なとこもあるね」

婆やが、眉間に皺を寄せた。

「親分は、俺のこと、何もかもお見通しだな。勘兵衛と対立してまで、俺を助けてくれるとは、思わねえよ」

「ようすを見てから、逃げたほうがいいかもしれないね」

「でも、逃げれば、おれんさんに会えねえ」

清吉は、口に出してから、しまった——と思い、頬を赤くした。

五　忍びあい

近江屋藤兵衛の病状は、思ったより重かった。月末になると、手代の吉蔵が、その月の手当三両の外に、当座のお手当として、十五両を持ってきた。

「大旦那は、寝たっきりです。まず、半年は、起きられそうもありません。お気の毒ですが、しばらくご辛抱ねがいます」

と言って、吉蔵が帰った。

おれんは、この十八両と、縁の下の六両を合わせ、二十四両の金を持って、清吉と二人で、遠いところへ逃げ出してしまいたい——と思った。

それには、清吉と会わねばいけない。が、日のうち、三度も勘兵衛が、顔を出し、用足しに出かければ、必ず手下の者が、後を尾けてくる。

婆やが、手下の者に銀一枚を握らせ、聞いたところによると、

「おれんが、弁蔵長屋へ行けば、長屋にいる太七郎は、いたちの清吉だとの証明がつく。それを待っているんだ」

と、言われた。

だから、一日置きぐらいに、婆やを清吉のところへ使いに出すが、婆やは、舟町から愛住丁へ出て、東大久保村へはいり、大番丁をまわって、左門丁の弁蔵長屋へ行くのだ。

途中まで、必ず、誰かが尾けてくるが、愛住丁のおれんの親元へ顔を出し、尾行者をまいていた。したがって、おれんが、清吉に会いに行くことなど、とうてい、不可能だったのである。

が、おれんは、なんとしても会いたかった。婆やの話によれば、

「清さんは、一目でいいからご新造さんに会いたい——と言ってますよ。会えば、決心がつくんですって」

と、言う。

「どうかしておくれ。あたしは気が狂いそうなんだよ」

「だって、おかみさんが行けば、勘兵衛が清さんをしょっぴきますよ。それでもいいんですかね」

「だから、相談してるんじゃないか」

こんな会話が、毎日かわされた。

おれんは、それこそご飯も喉に通らないくらい思い悩んだ。

「おかみさん、考えてみたんですけど、ここにいたんじゃ、とても抜けられませんよ。おっ母さんの看病という名目で、愛住丁に行ってたらどうです。愛住丁なら、勘兵衛の眼が遠のくはず。闇夜の晩をえらんで、こっそり抜け出せば……もっとも、わたしが行くように、遠まわりして……」

婆やに言われ、おれんの決心がついた。

おれんは、当座の手まわり品と、あり金ぜんぶを、肌にくくりつけると、愛住丁の源太長屋に出かけ、それきり舟町へは、戻らなかった。

三日目の夜、初夜の鐘が鳴るとおれんは、長屋を出た。

黒っぽい縞の着物に、濃むらさきの羽織を着て、頭から手拭をかぶり、緒太の草履をはいて、いったん東大久保村へはいり、大番丁へ向かった。

夜は、雨曇りで、星屑もみえず、道はひどく暗い。おれんは、夜道の女の一人歩きが、怖いことを知っていた。寺の築地塀がつづき、こんもりと生い茂った木の下闇を、急いだ。

眼さきに、清吉の面影がちらつく。道路上の石くれにつまずき、たたらを踏む。暗いが、おれんには慣れた道だった。子どものころ、永住寺の築地塀へよじのぼり、柿の実を盗んだことを思い出した。

塀を出はずれると、大木戸がある。

木戸がとざされるには、まだまがあった。それでも、番小屋から、勘兵衛の手先が、とび出してくるような気がした。足早に、駆け抜けた。声をかける者はいない。

大番丁の町並にはいる。町家の灯あかりが見え、おれんは、ほっとした気持ちになった。左門丁へはいった。おれんは、ふと、弁蔵長屋に見張りがついているはずだと思った。

長屋木戸は、まだ開いている。が、そこに勘兵衛の手下が見張っているとしたら、とても、中へはいれるはずがない。どうしよう——と考えているうちに、鳴海屋の店構えが見えてきた。

おれんは、商家の軒下に体をかくしながら、鳴海屋の店先へ走りこんだ。小僧や手代が、おどろいた表情で、おれんを見守った。小僧が、大戸を閉めようとしているときだったので、びっくりしたのだろう。

「親分さん、おいでになられたら、お会いしたいんですが」

と、おれんは番頭に声をかけた。

そのとき、縄のれんをかき分け、弁蔵が顔を出した。その眼が、ぎらりと光り、

「早く、大戸を閉めろ」

と、小僧にいいつけた。そして、おれんに向かい、

「さ、奥へ通んなせえ」

と、おれんが何も言わぬうちに、低いやわらかい声をかけてくれた。

おれんは、奥へ通った。

頭を下げ、畳に両手をついた。

「あたしは……舟町の……」

と、おれんが言いかけると、弁蔵が、

「承知している。みなまで言っちゃいけねえ、半刻ほど、ここにいたほうがいい。そしたら長屋木戸を閉めさせる。話は、それからだ」
　と言った。
　おれんは、内儀のもてなしをうけた。お菓子とお茶を出された。おれんは、お茶だけ飲んで乾いた喉をうるおした。
　内儀が、
「いつぞやは、おつねさんのことで、わざわざお越しいただき申しわけありません」
　と、愛想よく話しかけてくれた。おれんは、ひとしきり婆やの話をした。
　裏口から出て行った弁蔵が戻ってきて、
「さあ、行きなせえ。お待ちかねだ」
　と言った。
　おれんの胸が、鳴った。
　弁蔵が内儀に眼くばせをする。内儀が、おれんをうながし、裏口から長屋の通りへ出た。左側の軒ぞいにすすむと、内儀が、
「どうぞ」
　と言って、格子を開けてくれた。
　清吉が待っていて、内儀に会釈をすると、素早く雨戸を閉めた。
　おれんは、何か言おうとしたが、声が出ない。清吉が、手を取るように中へみちびいてくれた。
　三畳と六畳の二間。家財道具は何もない。茶ぶ台と、座布団と、台所に鍋釜、茶碗るいが見えるだけだ。
　二人は、立ったまま、顔を見合わせた。
「清吉さん……」
　おれんが詰まった声をあげる。
「ご新造さん……」
　清吉が、声をふるわせる。
　おれんは、なつかしいその顔を、まじまじとみつめた。清吉は、舟町の家で見たときより、色白となり、病人のように頰の肉が落ちている。それがかえって、凄艶に見えた。
　清吉が、
「俺、会いたかった」
　と、喉にからんだ声を上げ、おれんにしがみついた。
　おれんの胸が、つぶれるほどおのいた。かつて、経験したことのない感動が、全身を駆けめぐった。
　二人は、抱き合ったまま、崩れすわった。

頰を寄せ合い、何も言わずに、しっかりと腕をまわしていた。清吉の涙が、おれんの頰をぬらした。
　隣の家で、台所の洗い物の音がしていたが、やがてその音もやんだ。
　二人は、どちらがするでもなく、おのずから倒れ伏した。体の中に、たぎりたつものをぶつけ合い、四肢をからませた。おれんは、自分の体が、火のように燃えたっているのを知った。
　呼吸を断続させ、肌を寄せ合い、たがいにいのちの泉を、ほとばしらせた。さながら、夢幻の中をさまよっているような、雲の上を浮上しているような、ひとときだった。
　清吉が、膝をそろえてすわり直した。
「おれんさん、すまねえ、俺、掟を破っちまった。ゆるしてくれ。盗っ人は、女に迷っちゃならねえ定めがあるんだ。でも、ここにいる間は、毎日、おれんさんのことばかりを、考えていたんだ」
　おれんは、清吉がはじめて、自分の名を呼んでくれたことがうれしかった。しかも、男と女の接合が、こんなにまで感動の多いものであることを、はじめて知った。
〈旦那とのそれは、苦痛ではないが、やはりご奉公だったわ。清吉さんとは、おたがいに好き合っているから……〉
「あたし、うれしいのよ。はじめて、女としてのよろこびを知ったわ」
　おれんはうわずった声をあげた。
　二人の忍びあいは、こうしてはじまった。
　が、おれんは、弁蔵の指示にしたがい、昼間は、鳴海屋の家にいて、内儀の手伝いをさせられ、夜の五つ半（九時）になると、清吉の家へ忍んでいく。
　朝は、六つ刻（六時）になると、鳴海屋へ戻る。勘兵衛の手下が、しょっちゅう清吉の家を覗きにくるからだ。
「おれんさん、いったいどうするつもりかね」
　と、弁蔵が聞いた。
「いつまで、こうして、ご厄介になってもいられませんし……実は、思い悩んでいましたんですの」
　おれんは、お手伝いの針仕事の手をやすめた。
「清吉は、なかなか、気っぷのいい奴だ。盗っ人にしとくのはもったいねえ男。だからといって、清吉と、おいそれと夫婦になるわけにゃいかねえようだな」
「はい……そりゃ、わかっております」

おれんは、答えたものの、わかってはいなかった。清吉と添いとげることばかりを考えていたのだ。が、二人が、どこで住み、どうやって暮しを立てていくのか、見当すらついていなかったのだ。

「おれんさん、わしも若い時分のことを思い出すと、なんとしても、二人を一緒にさせてやりてえ——と考えているんだが……」

「親分、どうかおねがいします。さぞかし、あたしのような女を、不義女と、思っておられるでしょうが、なんとしても、あの人と」

弁蔵が、やわらかくおれんをみつめている。おれんは、その眼をじっと受けとめ、必死になって頼んだ。

「わしはな、お前さんが、十六や十七の生娘で、六十男に銭で買われた身上を、ふびんに思っているんだよ。女も男も、惚れ合った同士が、夫婦になるのが、いちばんいいのさ」

おれんは、その言葉を、胸に沁みこませた。弁蔵が、言葉をつづけた。

「実はな、わしは、清吉を盗っ人稼業から、足を洗わせることを考えているんだ。天神の大八を、獄門にさせたのは、このわしだ。その子分の清吉が、ひょんなことで、わしのところへ迷いこんできた。わしは、お縄にするか逃がすか……考えあぐねたんだ」

弁蔵の眼が、うるんできたようだ。おれんは、息を詰め、その言葉を、一語も聞きもらすまいと、体を堅くしていた。

「考えると、天神の大八を御用にしたとき、わしの役目はすんでるような気がするんだ。親を失くしたはぐれ鳥が、めしを食うために、盗みをやる。あたりまえの話だ。そいつをわしが助けて、まともな人間にしてやるのが、獄門になった大八への、せめてもの供養じゃねえかと、考えついたわけさ」

弁蔵が、静かに笑みをうかべた。おれんは、その顔が、菩薩のように見えてきた。

初夜の鐘が鳴った。

それから半刻ほど経ったころ、おれんは、裏口から、外へ出ようとした。弁蔵が後ろから、

「今夜は、出ちゃならねえ」

と、声をかけた。

おれんは、はっとして足をすくませた。

弁蔵が、

「勘兵衛の手先が、図々しく、わしの長屋へはいりこみ

やがった。あれを見ろ」

と言って、雨戸をほんの少し開けた。

月の明るい屋根の上に、二つの黒い影が、へばりついている。おれんは、歯の根をふるわせ、その場にしゃがみこんでしまった。

弁蔵が、雨戸を閉めた。

「清吉には、言ってある。当分、おれんはこられねえ。桐屋の眼が光ってるから——とな」

おれんは、弁蔵に抱えられ、座敷へ戻った。畳に顔を伏せ、会えない悲しみを、歯を噛んでこらえた。

おれんは、一歩も外へ出られなかった。毎日、鳴海屋の奥まった部屋へ、引きこもり、針仕事をする以外、方法がなかった。

清吉の身を案じ、眠られぬ夜をすごし、枕をぬらしていた。おれんは、愛することの苦しさを知った。

ひどい雨降りの昼下がり、清吉が裏口からはいってきた。おれんが裏口へ出ようとすると、弁蔵が、

「いけねえ。奥で会いな」

と、声をかけた。

二人は、仏壇のある奥座敷で、膝をくっつけ、手を取り合った。

「おれんさん、今日は、お別れにきたんだ」

と言って、清吉が、顔をゆがめた。

「いやよ。別れるなんて……死ぬわ、あんたがいなくなれば、死ぬより仕方がないわ」

おれんは、体をふるわせ、詰まった声を出した。

「よく聞いてくれ。このごろ、毎日、真っ昼間、勘兵衛の手先が、俺のいるところを、覗きにくるんだ。鳴海屋の親分さんは、やさしくしてくれ、堅気になれ、そして、添いとげることを考えろと、言ってくれるが、そんなうめえ方法なんか、あるはずがねえよ」

「あんた、一人で逃げるのね」

「この雨じゃ、張込みもねえだろう」

「どこへ行くの」

「あてはねえ。どこかに落ち着いたら、きっと知らせる。それまでの辛抱だ」

「あたしも、一緒に行くわ」

「そいつはいけねえ。おれんさんが一緒じゃ、俺が、いたちの清吉ってことにきまっちまうんだ」

そのとき、襖が開いた。弁蔵がはいってきて、二人の前にすわった。

「清吉、よく聞け。鳴海屋弁蔵は、ただの目明かしじゃ

ねえ。わしが信用できねえなら、逃げるがいい。が、ちったあ頼りになると思うなら、もう少し我慢をしろ」

弁蔵の語尾に力がはいった。

おれんが、台所で朝のご飯を食べているとき、ひょっこり婆やのおつねが顔を出した。

おれんは、

「婆や」

と言って、しがみついた。おつねが、おれんに手を取られながら、上へあがった。

「こようかこまいかと、考えたんですけど、大事な話なので、やってきました」

「大事な話って……桐屋のこと？」

「それもありますが、近江屋の大旦那が、ゆんべ亡くなったんですよ」

おれんは、ぎょっとしたが、悲しい思いは露ほども、湧いてこなかった。

「そうだったの」

おれんは、藤兵衛の面影を、ちらりと瞼のうらにえがいた。脂ぎったぶよぶよした丸顔が掠めたが、何か、ほっとした思いがした。

清吉と、これから先、どうなっていくのか、さっぱり見当がつかなかったが、ばくぜんと、二人きりで遠いところへ、行ってしまいたい――と考えていた。が、そんな淡いのぞみの裏側に、いつも藤兵衛の顔が、浮かんでいたことは、まちがいなかった。

そのたびに、おれんは、うしろめたい思いを抱いた。不義――という言葉に、強いこだわりはなかったが、清吉と肌を合わせていることは、やはりいけないことだとの、自戒があったのだ。

〈旦那が死んだ。あたしは、何をしてもいいんだわ〉

おれんは、体の中に、力が湧いてくるような気がした。

「ゆんべ、その知らせに、手代の吉蔵さんがみえまして、若旦那のこころざしだといって二十両持ってきたんですよ」

婆やが、紙に包んだ金をさしだした。おれんは、包みをあけると、中から、銀で五両を取り出し、婆やの手に握らせた。

「このお金、取っといておくれ」

「なんでわたしに、お金を……」

「あたしは、もう舟町には、戻らないつもりだよ。家財

道具、着物一式、あんたにあげる。売ろうと、使おうと勝手にしておくれ」

婆やの顔が、こわばってきた。

「あの人と、逃げるんですね」

おれんは、答えず、眼をみはったまま、頷いた。婆やは、しばらくおれんをみつめていたが、

「そんなこと、できることじゃありません」

と、声をどもらせた。

おれんは、

「勘兵衛の眼が、光ってるというんだね」

と、ふるえ声で言った。

「桐屋の親分が、近江屋の旦那が亡くなるとすぐやってきたんですよ。おれんは、なぜ鳴海屋にいるんだ。お前が、逃がしたな――と言って私を、責めるんです。おかみさんが、こちらにいること、承知してる以上、逃げられっこありません」

婆やの声が、重く沈んだ。

おれんは、背中に冷たい水を流しこまれたような恐怖におののいた。

勘兵衛が、あたしがここにいるのを知っている以上、逃げることは不可能だ。四六時中、手下の眼が光っているだろうし、長屋木戸の外へ、一歩でも踏みだすことは、罠にはまるような気がした。

まして、清吉と二人で、逃げることなど、とうていできないことと思うと、眼先が、真っ暗になってきた。

「わたしは、いま、考えついたんですけど、いただいたお金……勘兵衛の手下どもにくれてやり、お目こぼしをしてもらおうと思いついたんですけど……」

「だめよ。そんなことしたって、お金をただもらいで、清さんを捕まえるわ。そして、あたしも、泥棒をかくまった罪で……」

おれんは、自分でもびっくりするほどの大声を出した。婆やが、今にも泣き出しそうな顔をして、

「困ったことになってしまった」

とうめき声をあげた。

声を聞いて、弁蔵が顔を出した。

「窮すれば、通ずってことがある。ま、おとなしく時を待つんだな」

と言いながら、二人の前にあぐらをかいた。

おつねが、ていねいに頭を下げ、

「親分さんに、とんだごめいわくをかけまして、なんとも申しわけありません」

と、挨拶をした。

「おつねさん、あんたの根性に惚れて、わしは、二人をなんとかしようと、考えたんだよ。当世は、人情がうすくなって、江戸も住みにくくなった。そんなご時世に、あんたのような根性のある江戸の女がいるてえことは、うれしいじゃないか」

「いやですね。手ばなしでほめられちゃ、わたしは、早早に退散しなくちゃ、いどころがなくなりますよ」

「わしは、勘兵衛と大勝負をかけているんだ。あの野郎のやることはきたなくていけねえ。近江屋藤兵衛が死んだのをいいことにして、おれんさんを、狙うだろう」

「そうなんですよ。十手をちらつかせ、旦那の生きてるころから、おかみさんに言い寄ってたんですから……」

「勘兵衛は、清吉がわしの長屋にいる限り、手出しはできねえ。わしは、神田多丁の金物商、駿河屋の若旦那太七郎さんを、頼まれてお預かりしているだけだ。それを証拠もねえのに、わしの膝元から、しょっぴくわけにはいかねえよ。けどな、ここから一足外へ出れば、わしにかかわりのねえことになる。野郎は、それを待ってるわけだ」

弁蔵の眼がぎらぎら光ってきた。

おれんは、その顔をみつめながら、〈二人の親分が睨み合ったまま、どっちにも手だてはない。動いたほうが負けになる〉と、自分の心に言い聞かせた。

おれんは、清吉に会えないもどかしさに耐えながら、日を過ごした。婆やが、こっそりと冬物の着物や、下着をとどけてくれた。

風の強い日がつづいた。

その晩、長屋に住む一人者の棒手振の勇次が死んだ。酒を飲みすぎ、脳卒中で、寝ているうちに息を引き取ったという。年は、四十三。一度、かみさんをもらったが、飲んだくれのため、逃げられてから、河岸へ行って、魚を仕入れ、天秤で担いで売り歩き、儲けは、ぜんぶ酒代に当てていた。

おれんは、勇次に、二度ほど会ったことがある。台所口から、魚の切身をとどけにきたときだ。ひょうきん者で、

「弁天さまの身代わりじゃねえか。これほどのべっぴんにお目にかかったこたあねえ」

と言って眼をみはったことがある。

おれんは、今夜のお通夜、あたしも行ったほうがいいかどうかを、弁蔵に聞いた。

「明日の朝、六つ半（午前七時）出棺する。そんとき、焼場までついていってくれ。うちのかみさんが、風邪気味だから、代理としてな」

「勇次さんて、気立てのよさそうな方でしたから、行かせてもらいます」

「おれんさん、焼場がすんだら、千駄ケ谷村の順正寺まで行ってくれ。寺へ着いたら、住職から、あんたの行く先を聞くんだ。教えられたとおり、行くがいい。だから、二度とここへ帰ってこなくていいんだ。あり金は、みんな持っていくんだな」

弁蔵が、眼を輝やかせながら言った。

おれんは何か言うつもりだったが、声が出なかった。清吉は、どうなるのか――が、聞きたかったのだ。

「清吉は、ほど経て、お前さんのところへ、行かせる。そしたら、二人仲良く暮らすんだ。ただ、愛住丁の親御さんたちへは、じかに連絡せんほうがいい。何か、用があったら、わしのところへ知らせなさい。わしのほうから、知らせてやるから……」

おれんは、じっと弁蔵をみつめた。

信じていいのかわるいのか――一瞬、迷った。が、弁蔵の眼がやわらぎ、

「おれんさん、わしは、ただの目明かしじゃねえよ。長年、お役人、捕方の眼をかすめて、生きのびてきた経験があるんだ。桐屋勘兵衛に負けてたまるもんか」

と言ったとき、おれんの疑念は消えた。

「婆やのこと、よろしく、おたのみします」

「なあに、おつねは、また、この長屋へ引き取るよ。うちの勝手仕事を手伝わせて、暮らしは立てさせるようにするよ」

「じゃあ、あたしは、ただ、お棺について行けば、いいんですね」

「そうだよ。勇次にはすまねえが、いいときに死んでくれた」

弁蔵が、喉の奥で、かすかに笑った。

おれんは、翌朝、暗いうちから眼をさますと身支度をととのえた。着替えの着物を、風呂敷に包み、あり金ぜんぶを、肌に巻きつけた。

台所で、前夜の残り物で腹ごしらえをしているとき、弁蔵の手下の平六がはいってきた。

「ご新造さん、親分から言いつけられているんで、荷物、あっしが預かっときます」

いていた。

「荷物、持ってってくれるんですか」

「そういうわけにゃ、いかねえんで。どうせ、桐屋の手先が、後を尾けてくるでがしょう。ご新造さんが、大風呂敷を持ってるとなると、疑われますぜ。ですから、申しわけねえが、荷物は、棺桶の中へ入れとくんで、へえ」

おれんは、勇次の死体と一緒と聞いて、いやな感じがしたが、着替えがなくては困ると思った。

「じゃあ、よろしく、おたのみします」

おれんは、風呂敷包みを、平六に渡した。

出棺は、六つ半刻だった。

長屋の男衆が、四人で、白い布で覆われた棺を担いだ。かみさんたちが五人、おれんと平六をまじえた計十一人が、長屋木戸を出て行った。

おれんは、木戸を出るまで、清吉のいる家を眺めた。表の雨戸が閉まっていて、清吉が、出てくる気配はなかった。おれんは、胸のしめつけられる思いを抱いた。弁蔵が言うように、二人が、遠いところへ落ちのびて、暮らしていけるようになるのか。それとも、これきり、離ればなれになるのか、不安で仕方がなかった。

仕事に出かける職人たちが、三々五々、往来していた。棺にしたがう女たちは、言葉を発する者はいない。みんな俯向いて、地面を眺めながら、棺について行く。死んだ勇次のことを考えているのだろう。

おれんは、清吉の面影を、思い浮かべながら歩を運んだ。二十九日前の夜更け、屋根の上から、清吉を救い出した出来事から、二人が肌を合わせるまでを、順々に、頭の中で追っていた。

平六が、肩をならべて歩いてきたが、

「やっぱり、桐屋の若いもんが、尾けてますぜ」

と、低い声をかけた。

おれんは、ぎょっとした。

「後ろを振り向いちゃいけねえ。焼場へ行ったら、うまくまいちまうから」

おれんは、答えず、不吉な予感にふるえた。弁蔵とちがい、平六がなんとなく頼りなげに思えたからだ。

左門丁から信濃町へ出て、右へ曲がった。

「勘兵衛の奴、ご自身でお出ましだ」

平六が、横目を向けながら、詰まった声を出した。おれんの胸が波を打ちだした。

焼場へ着いた。

七組も、葬式があって、柵の中に人があふれていた。勇次の棺は、人混みの中を急いだ。焼場の裏手にまわった。

平六が、

「走れ」

と声をかけた。棺を担いだ四人の足が早くなった。五人の長屋のかみさんたちが、引っ返し、人混みにまぎれた。おれんは、平六にうながされ、棺を追いかけた。

道は、下り坂になり、両側に、雑木林が生い茂っている。四半刻も林の中を走ると、田圃道に出た。橋を渡り、ふたたび林の中の道へはいった。のぼりきると、台地になっていて、順正寺と扁額のある山門が見えた。

棺はその中へはいった。本堂の右手の庫裏の中へ、棺が消えた。おれんは、息をはずませると、平六と一緒に中へはいった。

住職らしい六十年配の僧侶が、出てきて、

「ごくろうじゃった」

と、誰に言うでもなく言葉をかけた。

「ご新造さん、あっしらの役目は、ここまでで……じゃあ、あとは、ご住持の言うとおりにしてくだせえ」

平六は、それだけ言うと、四人の男をうながし、外へ出てしまった。

住持が、棺の白布を取りのぞき、蓋をはねのけた。釘が打ってなかったのだ。

中から、清吉が起き上がり、住持に、深々と頭を垂れた。

おれんは、思わぬ清吉の姿に、まろび寄ると、

「清吉さん」

と、喉のちぎれるほどの声をあげた。

「おれん……これでやっと二人きりになれたんだ。みんな、弁蔵親分と、お住持のおなさけだった」

清吉が、おれんを抱きしめ、頬をすり寄せた。

「二人の行き先は、中目黒村の正覚寺。清吉の父親がいた寺だ。残念ながら、お父上は、もういない。が、寺は、鬼子母神だから、参詣の人が絶えない。門前に、小さな家がある。二人は、そこで、土産物屋でもはじめたらいいだろう」

住持が、静かに語った。

「その家、住んでもいいんで……」

と、清吉が聞いた。

「鳴海屋さんが、手金を打って、買い取りの話がつけてある。後金は、おれんさんの手持ちの金で、払ったらい

いだろう」
おれんが、
「弁蔵長屋の勇次さん……死んだのではないんですか」
と聞いた。
「勇次は、ぴんぴん生きとるよ。この寺で、寺男として引き取ることの、話がきまった。勇次、出てこんか」
住持が、大声で呼んだ。
見覚えのある勇次が、笑いながら出てきた。
「ご新造さん、おめでとうございんす」
と勇次が、ひょうきんな声を出した。

女敵討ち

一　美人後家

たばこ売りの浅吉が、越後長岡在から江戸へ出てきたのは、半年前、十九歳の夏である。初めは、浅草西鳥越の米穀商越前屋へ、米搗き人足として雇われたのだが、百姓の出であるのに、生来の非力で、半年足らずで暇を出されてしまった。
浅吉は、郷里へ舞い戻ろうと思ったが、その年は、全国的な飢饉で、村へ帰っても、自分が食う米は、一粒だってないと考え、江戸に踏みとどまる決心をした。が、広い江戸に一人の知人とてなく、すき腹をかかえ、ふらふらと、町中を歩きまわった。
夜は、寺の山門の下で眠り、昼間は、なさけ深い人にめぐり合うことをねがい、あてのない彷徨をつづけていた。

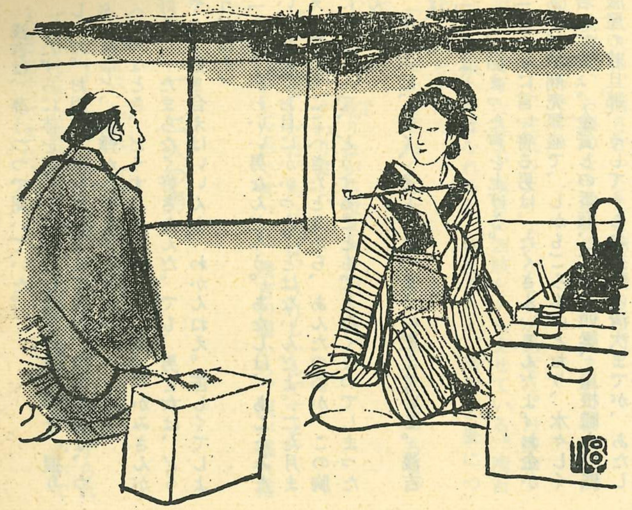
米搗き人足で稼いだ一両二分の金も、残り少なくなり、やっぱり田舎へ帰ろうかと考え直したとき、浅吉は、たばこ売りの弥作老人に出会った。
彼が、牛込河田丁の月桂寺の山門前で、土塀にもたれ、ぼんやりと道行く人をながめているとき、弥作に声をかけられた。
「若いの、何をしているんだね」
浅吉は、たばこ売りの人相を眺め、一目で人のよさを見てとった。年は、六十にちかく、手拭をのせた髪に、白いものがちらほらとみえ、くぼんだ眼をしばたいた。
「俺、職さがしをしてるんだ」
「年はいくつだ」
「十九だよ」
「生まれ在所はどこだ」
「越後の長岡だ。米搗き人足にきたんだが、ごらんのとおりの痩せっぽち、力がねえんで暇を出されちまった。越後へけえるか、どうしようかと考えているところだ」
弥作は、背負っていたたばこ箱を地におろすと、二つ三つ拳固で腰を叩いてから、浅吉のそばへ寄ってきた。
「ふむ、いい男振りだな。おめえは、たばこ売りをやりゃ、大当たりをするぜ」
浅吉は、その言葉をいぶかった。
「俺が、なぜ、たばこ売りに向いてるんだ」
「若いの、よく聞きな。俺も、若いころは、仲丁の弥作さんといわれたたばこ売りだった。神田鍋丁の叶屋から毎日出ていく売り子は、十七、八人もいたが、俺のたばこが一番よく売れた」
「なぜ、売れたんだね。おんなじたばこじゃねえのか」
「俺の面をよくみろ。三十年も前は、水もしたたるような男振りだった。たばこ屋の得意先は、女が多い。おんなじたばこでも、つい、若くていい男のたばこを買うのが、人情ってもんだ」
浅吉は、そんなものか――と思った。
「どうだ。俺と一緒に、やってみねえか」
浅吉は、二つ返事で承知した。彼の異常な運命が、このときから始まったのである。
弥作は、四谷仲丁の弓兼長屋に住んでいた。このあたりは、屋敷町が多かったが、谷町との境い目に、ひとかたまりの長屋があった。中でも弓兼長屋は、四畳半一間の棟割で、家賃も一カ月四百文だったから、最下等に属

するものだった。
　家主は、弓師兼四郎で、市ケ谷七軒丁の店はせがれにゆずり、仲丁の隠居所へ引っ込んでいる。隠居所の裏に四十八戸の長屋を持っていて、店子のめんどうがいいので、誰でも長くいつく者が多かった。
　たばこ売りの弥作も、二十五のとき、この長屋で所帯を持ち、以来二十九年間住みついている。土台が腐りはじめ、柱が曲がり、戸障子のたてつけがわるいが、弥作にとって、ここがよほど住みごこちがよかったのだろう。
　浅吉は、弥作にともなわれて、弓兼長屋にやってきた。まず、めしを食わしてもらった。冷や飯にお湯をかけ、いわしの干物で、たらふく胃袋に押しこむと、気分がおちついてきた。
「俺の得意先は、四谷と牛込だ。三日目ごとに買ってくれる店が、ざっと、百五十軒ある。つまり、毎日、五十軒ずつまわらにゃならねえわけだ。けど、この年じゃとてもまわりきれねえ」
「するてえと、俺に、半分くれえまわれというのかね」
「半分じゃねえ。百軒をおめえにゆずる。俺は、仲丁、尾張丁、麹町、市ケ谷田丁、砂土原、神楽坂、築土、袋町、払方……そこまでを受け持つ。おめえは、あとの四谷、牛込ぜんぶをまわってくれ。俺が、いっしょにまわって面通しをさしてやる」
　弥作は、浅吉に、たばこの講釈をはじめた。たばこ箱から、紙包みのたばこを出した。
「こいつが四文粉というやつで、一番安い。上物は、薩摩の国分、次が和泉新田、それから高崎ものだ。昔は、五分切で飲みにくかったが、このごろじゃ、地切といって、火つきがよく、味がよくなった」
　浅吉は、それらのたばこを手に取って、しみじみと眺めた。江戸の女たちは、こんな物の煙を吸うのかと思うと、不思議な気がした。
「俺は、年寄りだからたばこ箱を背負っていくが、若い奴らは、手でさげていくんだ。こざっぱりした棒縞の着物、角帯をしめ、真っ白い股引の尻をはしょり、頭に手拭をのせ、たばこ屋でござい――といって、はいっていくんだ。おめえなら、かみさん、後家さんたちが、吸わねえたばこまで、買ってくれるぜ」
　浅吉の胸が、明るい希望でふくらんできた。彼は、自分の容貌に自信があったわけではないが、村にいるころ、娘たちから大さわぎをされたし、米穀商越前屋の女中たちからも、言い寄られた経験があったのだ。

　浅吉は、まず、仕入れを教わった。神田鍋丁の叶屋まで出かけ、売値の二割安で買い入れる。叶屋と屋号のはいった箱を貸してもらい、浅黄の平紐を十文字にかけ、手でさげていく。
　非力の浅吉だが、中身がたばこだから、重いとは思わなかった。
「おめえは、見るからに惚れ惚れするなあ。きっと売れるぜ。二人の暮しの銭は、売上高の割合にしようじゃねえか。どうせ、俺は、おめえの何分の一かにきまってるが、これも何かの因縁だと思って、そうしてくれ」
　弥作が、口ごもりながら言った。浅吉は、もちろん異存がなかった。
　町並の木々が、芽を吹くころになると、浅吉のたばこ売りも板についてきた。
「たばこ屋でござい」
　と、すらりと、言えるようになった。弥作が、言ったように、よく買ってくれた。中には、
「毎日、きておくれ。あんたなら、引出しがあふれても、買いたいね」
　と、言ってくれた美しい後家さんがいた。

　四谷須賀丁、谷町へ抜ける通りの角に、〝芋仙〟と看板のぶらさがっている焼芋屋があった。江戸では、三軒目といわれる店で、お茶うけ時になると、安楽寺の築地塀のきれめまで、客が行列をつくるほどだった。
　江戸に焼芋屋ができたのは、天明四年の秋からである。前の年の夏、関東を中心に大暴風雨がつづき、田は濁流につかり、いわゆる天明の大飢饉となった。そのため、餓死した者が十万二千人にのぼったという。
　この飢饉から、江戸の町民は、芋を食べるようになった。焼芋屋が、ふえたのは、米不足の補給というより、焼きたての芋の味が、江戸っ子ぽの舌に適合したからのようだ。
　芋仙の主人川越屋仙八は、繁盛のさ中に、四十一の若さで、卒中で急死した。女房は二度目で、お銀といった。お銀は、深川の踊子（芸者の前身）の娘で、子どものころから遊芸のみちを身につけていたが、母の職業をきらい、牛込弁天丁の床屋へ嫁入りした。ところが、三年目に死別し、須賀丁の髪結いをしていた叔母のところへ同居するようになった。
　芋屋の仙八は、お銀の美貌に目をつけ、半年前に、後妻にもらったばかりなのに、深酒のため、心臓をわずら

い、急死したのだ。
お銀は、二十六歳で芋仙の女主人となったのである。店は、番頭の清次がとり仕切り、大僧小僧八人を使い、六つの芋釜で、四つ半（午前十一時）から宵の六つ半（午後七時）まで焚きつづけていた。
店がたてこむと、お銀が、たすき掛けで二の腕をあらわにして、赤い前掛をつけ、客の応対をする。お銀の姿を見たさに、芋を買いにくる若い衆も多かった。
このお銀が、浅吉の得意先で、「毎日きておくれ」と言った客なのだ。浅吉は、言われたとおり、毎日、四つ刻（十時）の暇な時間を狙って、芋仙の奥座敷へ出かけた。
浅吉は、たばこを売りたい気持ちと、お銀の顔をみたい気持ちと、入りまじった思いで、裏木戸から、庭を経て、座敷の縁側にたばこ箱をおろし、
「たばこ屋でござい」
と、声をかける。
「さ、上がっておくれ」
と、障子のかげから、お銀の声がする。
浅吉は、紺足袋の甲を、手拭ではたくと、「ごめんなすって」と言って、座敷へ上がる。
八畳の座敷で、お銀の居間だ。
床の間、ちがい棚、衣桁、鏡台、みだれ籠、箪笥。
お銀は、長火鉢の前にすわり、
「こっちへ寄って」
と、笑みをふくむ。浅吉は、胸をおののかせながら、にじり寄る。
錦絵から抜け出たように美しい。黒繻子の襟をかけた大柄の縞の着物、朱の帯をしめ、煙管をくわえた姿は、男なら誰でも息を飲むほどである。
ぼってりと肉付きがよく、肌は陶器のように艶がある。やわらかな鼻の線、涼しげな一重瞼の眼、ほんのり紅を塗った口元は、こぼれるほどの愛嬌がある。
浅吉は、まだ、女を知らなかった。が、二た月余りのたばこ売りで、多勢のかみさん、ご新造たちを知った。が、お銀ほどの、見ているだけで、息が詰まってくるような女に、会ったことはなかった。
浅吉は、おそるおそる長火鉢の前へにじり寄った。
「ありったけ、薩摩を置いてきなさいな」
「昨日も、四匁玉をぜんぶお買い上げくださり、今また……ぜんぶ……」
「あたしは、あんたが好きだから、買うんだよ。えんり



ょすることないじゃないか」
浅吉は、答えず、まじまじとお銀をみつめた。お銀の口元がほころび、糸切歯がちらりとみえた。
お銀が、長火鉢をまわって、浅吉の側へ寄ってきた。
「あたしは、亭主のない後家……お店の仕守をしてるけど、苦労が多いんだよ。番頭の清次を指図し、八人の若いもんを使って、商売してるけど、女あるじというものは、弱いもんなんだよ」
お銀の手が、浅吉の手をつかんだ。
その手は、溶けてしまうほどやわらかく、あたたかかった。浅吉は、息苦しく胸をはずませ、歯の根をふるわせた。
「あんたは、女を知らないね」
「へえ……」
「かわいい人……あたしが、首ったけに惚れたといったら、どうしてくれる？」
「おかみさん、とんでもねえことを……」
「本気なんだよ。もし、あんたがあたしを抱いてくれるなら、夫婦になって、このお店を二人でやっていこうと考えているんだけど」
お銀が、耳朶でささやいた。

浅吉は、夢うつつで聞いていた。
いたずらに体を堅くし、汗ばむほどお銀の手を、握りしめた。お銀が、頰をすりよせてきた。浅吉の胸は、つぶれるほど、動悸がたかまった。
〈こんなとき、どうすりゃいいんだ。俺は、かみさんが好きだ。たまらなく好きなんだ。でも、男と女は、どうやって抱き合えばいいんだ。わかんねえ。苦しくてしょうがねえ〉
「なんてかわいい男なんだろう。あたしは、あんたみたいな男に、お目にかかったことはないんだよ。二た月まえ、初めてここへきたときから、あんたの姿が、この胸に沁みこんで、どうすることもできなくなってしまったんだよ」
　その声は、甘く、そして火のように燃えている。浅吉は、
「すんません」
と、詰まった声を上げる。
「あたしに言い寄る男は、たくさんいるんだよ。お金があって、商売繁盛で、しかもごらんのとおり、水々しく若いでしょ。金貸しの番頭、大工の頭梁、屋根職人、呉服屋の若旦那、そしてうちの番頭の清次までが、あたしに色目を使うのさ」
　浅吉は、清次と聞いてぎょっとした。
　芋仙の店をきりまわしている二十六、七の男だ。浅吉は、二、三度、顔を合わせたことがある。五尺五、六寸もある大男で、体格もがっしりしている。色が黒く眉毛が太い。二重瞼の眼は大きく、浅吉を見る眼がきつかった。浅吉は、清次の怖い眼が、なんの意味かわからなかったが、今、やっとそれに思い当たった。
〈あの男は、おかみさんに惚れているんだ。おかみさんを手なずけ、この店の婿になろうと考えているんだ。だから、おかみさんに近づく俺をきらって、怖い眼をするんだろう〉
　浅吉の胸に、男の血がたぎりたってきた。
〈あの男に、おかみさんを取られちゃいけない〉との、闘争心が、浅吉の心をゆさぶったのだ。
　浅吉は、
「おかみさん」
と、詰まった声を上げると、お銀にしがみついた。お銀が、
「浅吉さん」
と声を出し、胸を合わせた。

　二人は、抱き合ったまま倒れ伏した。
　浅吉は、お銀のなすがままに任せ、生まれて初めて女の体を知った。
　生ぐさく、狂気のようなひとときが過ぎた。お銀が、裾をはだけたまま、浅吉に四肢をからませている。浅吉は、お銀からはなれると、膝をそろえ、両手を畳につけ、頭を下げた。
「かんべんしておくんなせえ。こんなことになっちまって……」
　浅吉は、吃りながら泣き声を出した。
　お銀が、すわり直し、
「何をお言いだね。あたしは、うれしいんですよ」
と、はずんだ声で言った。浅吉の眼から、涙が溢れ落ちた。

二　二人の男

　浅吉は、毎日、お銀へ会いに出かけた。
　恋——というより、お銀の女体に憑かれ、引きずられていくような毎日だった。二人の朝の逢う瀬は、やがて人目に立ってきた。
　夏がすぎて、初秋の風が吹きはじめると、芋の売れゆきがよくなる。夏場は、夏枯れといって、芋屋は休業状態になるが、秋になると、人々は、塩をふった焼きたての芋を思いだすのだ。
　浅吉が、例のように裏木戸からはいりかけると、そこに清次が立っていた。顔をこわばらせ、浅吉の前に歩み寄り、
「おめえさん、何しにゆくんだ」
と、尖った声をかけた。
「へえ、たばこを持ってめえりました」
　浅吉は、ぎょっとしたが、さりげなく返事をした。
「とぼけるのも、いいかげんにしろ。俺は、何もかも知っているんだ」
「何を……でしょう？」
「おめえ、おかみさんをまんまと手なずけているようだが、亡くなった旦那から、俺は頼まれているんだ。芋仙をまもってくれとな。芋仙のあるじは、おかみさんだ。そのおかみさんに、悪い虫がついたとなっちゃあ、黙ってるわけにゃいかねえんだ」
　清次が、浅吉の胸ぐらをつかんだ。強い握力で、今にも呼吸が止まるほど苦しくなってきた。清次の顔が、み

にくくゆがんだ。
浅吉は、何か言おうとしたが、声が出ない。今にも、締め殺されるような気がして、恐怖が、全身を走った。
そのとき、女の声がした。
「清さん、やめて……あんたになんのかかわりもないじゃないか」
浅吉が、声のほうを眺めると、髪結いのおとらが、裸足で縁側から、駆け寄ってきた。おとらが、清次の腕にしがみつき、
「やめてったら」
と、金切り声をあげた。
清次は、腕をはなすと、いきなり浅吉の頬を平手で殴(なぐ)りつけた。浅吉は、その場にのけぞり倒れた。清次は、
「のこのこ、訪ねてきたら、承知しねえぞ」
と、ダミ声を残し、木戸から出て行った。
おとらが、倒れた浅吉を抱き起こしてくれた。
「なんて怒り方なんだろう。あたしって者がいるのに、焼きもちをやいたりして……」
おとらが、清次の後ろ姿へ、怒りにふるえた声を叩きつけた。縁側に、お銀が姿を見せた。
「こっちへおはいり……なんてことをするんだろ。まるで、あたしの亭主みたいに、腹を立てて。話はあとでつけるから、おとらさん、連れておいでな」
その声に、おとらが、浅吉をうながした。
浅吉は、耳鳴りがする頬を押えながら、お銀の側へ歩み寄った。
お銀が、手を取らんばかりに、浅吉を座敷へ上げた。おとらが、お茶を淹れた。
「おかみさん、私と清さんを、一緒にさしてくださいな。そうすりゃ、あの人だって、おかみさんのことを、あきらめるんじゃないですか」
おとらが、真剣な表情で言った。
浅吉がお銀から聞いたところによると、清次とおとらは、二年も前からできているという。主人が生きているころ、二人を夫婦にする話が持ちあがっていた。
おとらは、今、二十六歳、清次と同じ年だった。仙八は、芋屋をはじめる前まで、小口の金貸しをしていた。四谷荒木丁に住む、桐屋勘兵衛という目明かしが、やはり金貸しを営んでいたので、勘兵衛に、資金をまわし、利ざやを稼ぐこともしていた。
清次は、金貸し仙八の手代として、取立業務を担当していた当時、お銀のもとへ出入りしている髪結いのおと

らとねんごろになっていたのだ。
仙八が、金貸しをやめ、芋屋をはじめると、清次は、住みこんだまま番頭に昇格した。仙八が、清次とおとらをめあわせようと考えているとき、死んでしまった。二人の一緒になる話は、のびのびになっていたのである。
浅吉は、今、おとらの話をきいて、清次とお銀の暗い関係を感じとった。
「そうだね。それがいちばんいいことなんだけど、清次の奴、あたしに妙な考えを持って、困っているんだよ」
お銀の眼が、浅吉の視線と重なった。その眼が、どぎまぎして、伏せられた。
「おかみさん、まさか、清さんと……」
おとらが、唇をふるわせた。
まん丸い顔だ。大きな眼がいくらかとび出していて、鼻の穴が上を向いている。大柄な女で、髪結いらしい小粋(いき)さが見えない。
「何をお言いだね。あたしは芋仙のあるじ、清次は、番頭じゃないか。とんでもないこと、言わないでおくれ」
お銀の眼が光った。
「でも、あの人が……そう言ってましたよ」
「そりゃね、あんたに愛想づかしをするため、ありもしないことを言ったのさ」
「だって、私は、あの人と……」
「体の関係ができてるというんだろ。そんなことは、ちゃんと知ってるよ。それとこれとは、話がちがうんだよ」
おとらが、唇を噛んでいる。
浅吉は、その横顔を眺め、一途に清次を思う女心を感じとった。
「おとらさん。近いうちに、清次によく言っておくからね。なんとか、あんた方が一緒になれるように、段取りをはかってみるから」
お銀の言葉にうなずくと、おとらは、帰って行った。その姿が、襖の外へ消えると、お銀が、浅吉の手を取った。
「あんたも痛い思いをしたり、いやなことを耳にしたり、気の毒だったけど、我慢しておくれ。あたしは、清次なんかとは、なんでもないんだから」
浅吉は、答えず頭を垂れていた。お銀と清次との関係が、否定されるとなおさら、本当のことのように思えてきた。
清次のすさまじい剣幕は、ただごとじゃない。お銀を

寝取られた嫉妬に狂っているとさえ思える。浅吉は、ぶるっと身ぶるいすると、これから先の、お銀とのあいびきに、おじけづいてきた。

「でも、俺、こわくなってきたんだ」

浅吉は、ふるえ声を出した。

「彼奴は、気ちがいさ。だから、これからは、あたしのほうから、あんたの家へ行くよ。もちろん昼間……弥作さんが、あきないに出て行った留守を見はからって……」

「やっぱり朝の四つ刻で……」

「弥作さんは、朝が早いと聞いてるよ。あんたは、弥作さんと一緒に、あきないに出かけ、ころ合いをみはからって、戻ってくりゃいいじゃないか」

お銀が、そう言って、浅吉を抱きしめた。浅吉は、清次の顔を思い出したが、

「じゃあ待ってる」

と、声を沈ませた。

翌朝――。

浅吉は、弥作といっしょにあきないに出かけると、近いところを一回りして、約束の四つ刻前に、弓兼長屋へ戻ってきた。お銀が、しばらくするとやってきた。

浅吉は、表の戸も、窓の雨戸も閉め、お銀と抱き合った。事が果てると、お銀は、

「また、明日来るわ」

と、まるで用事でも済ませたように、帰って行った。

こんなあいびきが、三日つづいた。

が、四日目も五日目も、お銀は、姿を見せなかった。

六日目、浅吉が、いらだちながら、茶ぶ台の前にあぐらをかいていると、見知らぬ三十男が、

「たばこ売りの浅吉さんとこは、ここかい」

と言ってはいってきた。

絹物の羽織と着物、角帯をしめ、白足袋に草履ばきの姿は、大店の番頭という感じがした。

「へえ、てまえが浅吉ですが」

浅吉は、上がりかまちへにじり寄ると、ていねいに挨拶した。男が、羽織の裾をはらって、腰を落とした。

「わたしは、荒木丁の桐屋の番頭、大四郎というもんだ。芋仙の亡くなった主人とは、商売上のことで取引きがあってな、そんな縁故で、お銀さんの後見役を引き受けていたんだが」

大四郎が、じろりと浅吉をみつめた。眼つきに鋭さがあって、武士のような感じがした。鼻すじがとおり、一

文字に結んだ口先がいくぶんしゃくれている。浅吉は、何か威圧を感じ、

「へえ、お噂はお聞きしております」と、こわごわ答えた。

「つかぬことを聞くようだが、おめえさん、お銀さん、どこへ行ったか知らねえか」

大四郎は、顎を引き、語尾に力を入れた。

浅吉は、どきりとした。

「おかみさん、どうなすったんです?」

「おい、しらばっくれるのもいいかげんにしねえか。わたしは、目明かし桐屋勘兵衛の番頭だ。御用の仕事こそしてねえが、調べの筋は承知してるんだ。お銀とおめえが、くっついていたことは、わかってるぜ。清次に、横っ面を殴られ、こんどは、お銀のほうから、おめえのところへ通ってきたことも、お見通しだ。さ、お銀を、どこへかくまったか、ありてえに言ってみろ」

大四郎が、怒鳴った。その声が、浅吉の腹わたにひびいた。

「へえ、たしかに、三日間だけ、ここへめえりました。けど、四日目から、姿を見せねえんで……今日が六日目、いったいお銀さん、どこへ……」

「おめえ、その言葉、嘘はねえだろうな」

「こんりんざい……嘘なんか……旦那、あっしは、たしかに、おかみさんに、惚れやした。けど、しがねえたばこ売り、身分がちがうんで、会っていながら、別れることばかり考えていたんです」

浅吉は、泣き出したくなる思いをこらえていた。

「それでも、離れられねえのが色のみちというもんだ。清次の眼が怖くなって、お銀を、眼のとどかぬところへ、隠しておく。よくある手だ」

浅吉は、だんだん不安になっていた。お銀が、自分から逃げるはずがない。清次と関係があったとしても、いわば雇人にすぎない。清次が、いたたまれず、暇をもらうことはあっても、主人が、姿を消す理由が飲みこめなかったのだ。

「旦那……教えてくだせえ。おかみさんのいどころ……」

「馬鹿野郎、知ってりゃ、わざわざ、こんなこぎたねえ長屋へなんか、くるはずがねえ。本当のこと言わねえと、桐屋の親分に話をして、番屋へ引っ立てるぞ」

大四郎が、浅吉の肩をつかんだ。その腕に、怒りがこめられているのがわかった。

「ほんとうなんだ。なんにも知らねえ。あっしは、三日間、こうしてお銀さんのくるのを待っていたんで……いたちが道を切ったように、ぷっつり姿を見せなくなったんです。毎日、いらいらして待っていたんです」
大四郎が、腕を組んだ。しばらく考えてから、口を開いた。
「浅吉、おめえ、お銀さんから、金銀とりまぜ、八十両ばかりの金を、預からなかったかい」
浅吉は、
「とんでもねえことです」
と答え、大金が紛失している理由を考えた。
大四郎は、
「また聞きにくる。わたしのきたこと、誰にも言うな」
と言って、外へ出て行った。
浅吉は、それから四半刻ほど、お銀のことを考えていた。〈おかみさんは、八十両のあり金を持って、行方をくらましたんだろうか。なぜなんだ。大四郎は、金の紛失を、なぜ、知っているんだ。清次は、何も知らないのだろうか。髪結いのおとらと、清次の縁談は、どうなったのだろうか〉
あれこれ考えたが、思いあたることはなかった。浅吉は、あきないに出たが、一日中、胸のしめつけられる思いを抱いていた。早仕舞いして、七つ半(五時)前に、自宅へ戻ってきた。
弥作は、まだ帰宅していなかった。浅吉は、夕めしの支度をはじめた。米をとぎ、台所で、かまどに薪(まき)をくべているとき、髪結いのおとらが、やってきた。
浅吉は、突然のおとらの来訪をいぶかったが、お銀の行方不明に、関係があるとさとり、家の中へ入れた。
二人は、茶ぶ台の前に向き合って、すわった。
「浅吉さんとこへ、桐屋の番頭、きましたか」
と、おとらが、ひどく真顔になって聞いた。
「きたよ。今日の四つ刻だった」
「何を聞いたんです?」
「おかみさんが、どこかへ消えちまった。だから、俺が、かくまっていると、しつっこく聞いていたよ」
「彼奴は、悪い奴なんだよ。おかみさんを欺して、体の関係をつけ、お金を引っ張り出していたんだよ。桐屋は、金貸し……彼奴は、おかみさんのお金を、よそへまわし、利ざやを稼いでいたんだ」
浅吉は、聞いてぎくりとした。清次だけでなく、大四郎ともお銀が関係していたと知ると、背筋の粟立つ思い

がした。
「大四郎という奴、そんな男だったのかい」
「色と欲の二またかけ、芋仙の身代をねらっていたのさ」
「で、おかみさん、いったいどうしたというんだ」
「それを知りたいから、あんたんとこへ聞きにきたんだよ」
「清次が、知ってるんじゃねえか」
「聞いたけど、知らんというんだよ。あたしの勘ぐりじゃ、清さんが、どこかへ隠したと思ったんで、ずいぶん聞いたんだけど、あの人……しらを切ってるんでね。でも、あんたが知らなけりゃ、清さんに、ちがいないと思うんだけど……」
おとらの顔が、ひくひくけいれんしはじめた。お銀と清次の仲を嫉妬し、気持ちをたかぶらせているのだろう。

三　夜の探索

浅吉は、不安な毎日をすごした。たまりかねて、弥作にうちあけた。
「俺、須賀丁の芋仙のかみさんと、深い仲になっちまった」
「こんなじじいの耳にもへえるくらいだから、あの辺じゃ、寄るとさわると、お銀さんの噂で持ちきりだよ」
「そのお銀さんが、行方をくらましちまったんだ」
「聞いてるぜ。俺にもおぼえがあらあな。他人(ひと)のかみさんとできちまって、すんでのところで、亭主に殺されるとこだった」
弥作の皺をきざんだ顔に、微笑が浮かんだ。若いころを、思い出しているのだろう。
「おやじさん、頼みがある」
「お銀さんの行方を捜してくれと言うんだろう」
「そのとおりだ。俺が、芋仙のまわりをうろついたら、番頭の清次に殺されちまうかもしれないんだ。頼む、このとおりだ」
浅吉は、手を合わせた。弥作が、
「しょうがねえ。ほかならぬおめえのためだ」
と言って、汚れた歯を見せた。
弥作は、商売から戻り、夕食をすませると、ぶらりと出かけた。お銀の消息をさぐるためだ。浅吉は、そんな折り、いたたまれぬ思いで、弥作の帰りを待った。

不吉な予感がした。

〈お銀さんは、誰かに殺されたんじゃないか。もしそうなら、犯人は清次にちがいない。俺との仲を焼いて、血相を変えていたのは、ただごとじゃない〉

浅吉が、清次の剣幕を思い出しているとき、弥作が戻ってきた。

「近所の噂を聞いてきたんだが、誰も知らねえというんだ。でもな、芋仙の金太という小僧が、足をくじいて、近所の叔母さんとこへ宿下がりをしていた。その叔母さんというのが後家さんでな、五、六年めえまで、俺とはわけのある仲だった」

弥作は、煙管にたばこを詰め、火鉢の火をつけ、深々と吸いこんだ。

「その金太という小僧、何か、知ってたのかね」

「お銀さんの姿がみえなくなったのは、今から十日前だ。その晩、初夜の鐘が鳴るころ、奥座敷で、清次とお銀さんが、大喧嘩をやらかしたそうだ。金太は、小便するため、二階から階段をおりかけたとき、でっけえ声でわめいてる声が聞こえたというんだ。金太は、茶目っ気のある奴で、こわごわ奥へ覗きにいきやがった」

「清次とつかみ合いでもしてたのかね」

「二人は、長火鉢の前で怒鳴り合っていたが、お銀さんがいきなり、火鉢の猫板をつかんで、清次の眉間を殴りつけた。清次は、のけぞり倒れ、額が割れて血を吹いていたというんだ」

浅吉は、その光景を瞼にうかべ、身ぶるいした。お銀のすさまじい気性が、手に取るようにわかり、清次の怒りが想像できたからだ。

「金太は、怖くなって、足音を忍ばせ、座敷から離れたんで、あとのことは知らねえ――と言ってたぜ」

「すると、喧嘩のあとで……」

「仲直りをしたか、刃物ざんまいになったか、お銀さんが逃げ出したか――そいつはわからねえな」

「お銀さんは、芋仙の主人だ。清次を追い出すことはあっても、自分で、逃げるわけはないよ」

「そのとおりだ。とすると、刃物ざんまい……縁起でもねえけど」

「それで、清次は、どうしてるんだね」

「清次の奴……二、三日、姿を見せねえと言ってるぜ。金太の話じゃ、どこへ行くとも言わず、突然、姿がみえなくなったと言ってるんだ」

浅吉は、清次がお銀のいるところへ、会いに行ってる

ものと思い、歯を噛んだ。お銀の白い肌が眼先にちらつき、清次の怖い顔が、重なってきた。

「俺、いても立ってもいられねえんだ」

浅吉が、喉の詰まった声を出した。

「察しはつくが、どうすることもできねえんじゃねえか」

「お銀さん、芋仙の家の中にいるんじゃないか。何しろ、でっけえ家だから、小僧の眼のとどかねえところに……」

「そうだとしたら、お銀さん、自分で出てこられるぜ。座敷牢があるわけじゃあるめえしな」

「殺されたんじゃないかね。俺、心配で、おちおち眠れねえんだ」

「無理もねえ。けどな、女というもんは、深追いは禁物だよ。ほどよいところで切れるのが、上手というもんだ。おめえほどの男ぶりなら、いくらでも女ができると思うが……」

そう言うと、弥作は、布団にくるまった。浅吉は、腕を組んで考えこんだ。お銀に会いたい思いがつのってきた。

〈どこにも行くはずがねえ。あの家の中だ。病気にでもなって、寝込んでいるのかもしれねえ〉

浅吉は、弥作の寝息をうかがった。いびきをたてていない。まだ眠りにおちていない証拠だ。

浅吉は、布団にはいり、行灯の芯を細めた。灯芯が、かすかな音を立てている。寝ながら、弥作の気配をうかがった。いびきをたてはじめた。

浅吉は、布団を抜け出した。

流し場まで這って行き、台の上にのせてある出刃包丁をつかみ取り、手拭に包むとふところに入れた。芋仙の家の中で、清次にぶつかったときの護身用にするつもりだった。

浅吉は、麻裏草履をしっかりとはくと、雨戸を開け、外へ出た。戸を閉め、長屋木戸まですすんだ。木戸のかんぬきを外し、道路へ出た。番小屋のない裏道を抜け、須賀丁へ向かった。

風があった。

あらしの前ぶれのような強い風が、木の葉を散らしている。家並の大戸が閉ざされ、町はすでに眠りに落ちている。

須賀丁の角に、芋仙の看板が見えた。二階建の瓦屋根が、夜目にもそれとわかるほど、そそり立っていた。

浅吉は、家の裏側へまわった。建仁寺垣があって、板木戸が閉まっている。彼は、垣根をよじのぼった。身軽な浅吉は、苦もなく垣根を越えた。

あたりは、真っ暗だった。

が、通い慣れた庭先だったので、お銀がいつも使っていた座敷の前へ忍び寄ることができた。雨戸が閉まっている。浅吉は、縁の下へもぐりこんだ。

しめり気のある臭いが、鼻を衝く。座敷のまん中の下と思われるところで、耳を澄ました。が、なんの物音も聞こえなかった。台所の下まで進み、あげ板から、体を出した。人の気配はなく、無気味に静まりかえっている。

暗い。

手さぐりで進む。座敷に踏みこんだ。長火鉢が、手に触れた。行灯があった。浅吉は、火打石と金具をつかみ、行灯に灯をつけた。緋縮緬の座布団、みだれ籠、鏡台。それらは、浅吉の眼になつかしい物ばかりだ。

畳に、点々と黒い染みがあった。

浅吉は、鼻を近づける。血だ。血のしたたった跡が、点々とつづいている。彼は、ごくりと生唾を飲みこみ、行灯を抱えると、血の跡にしたがってすすんだ。

店へ通ずる廊下があった。

血はそこから二間ほど先の芋倉の入口で消えていた。行灯をかしげ、中をのぞいた。生ぐさい臭いがした。下り梯子があった。浅吉は、行灯を抱えたまま一段ずつ、そっとおりて行った。

そこは、芋の貯蔵庫だった。

どのくらいの広さがあるか、わからないが、ぎっしりと芋俵が積んである。灯あかりで血の跡をたどった。俵の山のうしろへ出た。そこに、お銀の死体が、仰向けになってころがっていた。

声を出そうとしたが、声が出ない。へたへたと崩れすわり、お銀のはだけた太腿にさわった。肌は堅くなっていて、ぞっとするような冷たさが、全身に沁みこんだ。

お銀の顔をみた。

薄眼を開け、口を結んでいる。白い喉仏のあたりに、どす黒い血のかたまりが、こびりついていた。〈刃物で喉を刺されたんだ〉浅吉は、静かに死体から遠ざかった。

五、六歩行きすぎてから、振りかえった。お銀の幽霊が、自分を呼んでいるような気がした。

足がすくんだ。

大きく息を吸いこみ、吐きだした。〈清次が殺したんだ。小僧の金太の話によれば、その晩、お銀は清次と大喧嘩をした。清次は、長火鉢の猫板で額を割られた。かあっとなって、お銀を殺したんだろう〉

浅吉は、呼吸をととのえると歩きだした。芋俵の間を通り、右へ曲がりかけたとき、誰か人にさわった。びっくりして、眼をみはった。

清次だ。

芋俵に腰をかけている。浅吉は、抱えていた行灯を落とした。灯が消えた。浅吉は、咄嗟に、ふところの出刃を握ると、暗がりの中を、見当をつけ、清次の腹のあたりを目がけて、突き立てた。

手ごたえがあった。

逃げた。

浅吉は突き立てた出刃をそのままにして、芋俵にぶつかり、梯子に頭をぶつけ、芋倉を出た。廊下、座敷、台所のあげ板、縁の下。どこをどう通ったか記憶がない。

夜道を突っ走っているとき、〈俺は、清次を殺した〉という自覚を持った。体がふるえ、走ろうとするが、思うように走れない。手にありありと残る出刃の手ごたえが、よみがえってきた。

清次が、お銀を殺したんだ。俺は、女敵討ちをしたんだ。あの野郎、お銀を殺してから、あそこで見張りをしていやがった――。

浅吉の眼に、裾のめくれたお銀の白い太腿が浮かんだ。清次は、お銀の死体をなぶっていたんじゃないか。

生きてる間、自由にできなかったお銀の体を、死んでから――と思うと、浅吉は、一歩も走れないくらい胸苦しくなってきた。

そのとき、大店の天水桶のかげから、むっくり浮かび上がった人影があった。〝須賀丁〟と書いた番小屋の大提灯のあかりに、その男の顔が、ちらりと見えた。鼻の低い顔は、目明かし鳴海屋弁蔵の手先、平六にちがいなかった。

浅吉は、細い路地を左へ曲がり、夢中で走った。平六の顔は知っている。平六も、俺の顔を知っている。追手だ。俺を、尾けていたんだ――と考えながら、息が止まるほど走りつづけた。

須賀丁から、千日墓地へ出て、雑木林の中へ走りこみ、浅吉は、ばったり倒れた。呼吸が荒い。全身に、びっしょり汗をかいている。風は冷たく、汗の冷たさに、からだ中が粟立ってきた。

眼をつむり、歯を噛み、死んだように倒れていた。芋倉の中の出来事が、ありありと思い出された。

悔恨が、浅吉の胸をしめつけた。

夜空が白んできた。

一番鶏が鳴いた。

浅吉は、これからどうするか――を考えた。弓兼長屋へ帰れば、追手がくる。捕まれば、獄門だ――と思うと、涙が出てきた。

〈俺は、なんて不運に生まれついたんだ。なまじっか、人さまからいい男だ――と言われる顔立ちだったため、芋仙の後家に惚れられた。初めて女というものを知って、俺は、有頂天になっていたんだ。まさか、番頭の清次とできているとは知らなかった。清次に、殴られたとき、お銀を、あきらめりゃよかった〉

浅吉は、弥作の顔を思い出した。

年寄りの言うことは聞くもんだ――と考え、弓兼長屋へ帰る決心がきまった。

長屋まで戻ったとき、木戸は、浅吉が開けたままだった。中へはいり、木戸をしっかり閉めた。

自分の家へはいると、弥作が起きていた。浅吉は、眼だけで会釈すると、台所へ行き、水を飲んだ。

「浅、こっちへこい」

と、弥作が怒鳴った。

浅吉は、こわごわ、弥作の前に膝をそろえた。弥作のくぼんだ眼が光っている。

「おめえ、出刃を持ち出したな」

「へえ……」

「出刃を出しな」

「置いてきちまった」

「どこだ」

「清次の……か、ら、だに……」

「なんだと……清次を殺っちまったんか」

浅吉は、答えず頷いた。弥作が、腕を組み、眼をみはった。

「お銀さん……どうした」

「芋倉の中で、死んでいた」

「やっぱり、殺されてたのか」

「喉に、どす黒い血がこびりついていた」

「清次は、どこにいたんだ」

「芋俵の上に腰をかけていやがった」

「おめえに何か言ったのか」

「なんにも言わねえ。俺、びくっとして、持っていた行

灯を落としちまった。真っ暗の中で、清次に襲いかかられると思って、出刃で、腹のへんをめがけて突き立てたんだ。出刃は、刺したまま残してきちまった。何しろ、逃げることばかり、考えていたんだ」

弥作は、しばらく考えていたが、

「おめえ、とんでもねえことをやったな。どっちみち、のがれる道はねえ。おそれながらと、左門丁の弁蔵親分のところへ出向いていくか……それとも、思いきってずらかるか……二つに一つだが」

と言って、眼をしばたいた。

浅吉は、弥作の眼に涙が光ったのを見た。胸のしめつけられる思いがした。が、獄門は、なんとしてもいやだと考えた。

四　髪結い女

浅吉は、仕事に出かけず、弥作の家の押入れにもぐっていた。逃げても、すぐ捕まると思ったからだ。

弥作は、相変わらず、たばこ箱を背負って出ていく。

「もし、御用の方がきたら、わるびれず、お縄をちょうだいしろ」

と、出がけに必ず、言い置いて行った。

二日経ち、三日がすぎた。

御用の筋は、誰も姿を見せない。浅吉は、あの晩、平六に見られているはずだ――と、首をひねった。天水桶のかげから、浮かび上がった人間は、まちがいなく平六だった。とすれば、俺のことを知っている。

「浅吉、御用だ」

と言って、踏みこんでくるにちがいない。

が、誰もこない。

浅吉は、あるいは、俺、見られちゃいないんじゃないか。うまくすると、このまま、見過ごされてしまうような気がしてきた。

〈お銀を殺したのは、清次だ。死体の見張りをしていた清次が、腹を誰かに出刃で刺されて死んだ。喉を刺されたお銀が虫の息で、清次に報復するため、出刃を突き立てた――と、見られぬこともない〉

浅吉は、そんな判断を持った。

同時に、ひょっとしたら、俺、助かるかもしれない――と思った。浅吉は、押入れから這い出し、たばこ箱の整理をはじめた。明日あたりから、様子見がてら、商売に出よう――という気持ちがうごいたのだ。

表の入口の前で、誰かの足音がとまった。浅吉は、息を詰め、身構えた。御用の手先だと思ったからだ。障子の穴から、外を覗いた。女が立っている。

女は、髪結いのおとらだった。おとらの横顔が見える。あたりの様子をうかがってから、おとらが格子を開けた。

浅吉は、

「俺だ。へえんな」

と、重い声をかけた。おとらが、はいってきた。浅吉は、おとらを座敷へ上げると、格子をしめ、障子をとざした。

おとらが、崩折れるように腰を落とした。浅吉は、じっと眼を据え、ごくりと生唾を飲みごんだ。おとらの眼が、まばたきもせず受けとめている。その眼に、張りつめたものが感じられる。

「浅さん、あんた、芋倉へ行ったんだね」

おとらが、喉にからみつくような声を出した。浅吉は、迷った。言ったほうがいいのか、嘘をついたらいいのか、本当のことを言ったらいいのか――判断がつかない。

「けさ、弁蔵親分とこの平六が、あたしんとこへきたんだよ。そして、犯人は、あたしだと思ってるんだよ。おめえは、何もかも知ってるはずだとね」

「じゃあ、二人の死体……平六に見つかっちまったのか」

おとらの眼が、燃えたつように光り、

「やっぱり、芋倉へ……」

と、詰まった声を出した。

浅吉は、〈しまった〉と思った。うっかり二人の死体のことを口に出してしまったことが悔まれた。

「そうだ。心配でたまらなかったんだ」

「あんた、清次のお腹へ、出刃を……」

浅吉は、黙って頷いた。

「平六が言うには、お銀を殺したのは、清次だ、そして清次を殺したのは、あたしだ――と、ほのめかすんだよ」

「どうして……おめえだと言えるんだ」

「清次の男の急所を、刃物でえぐり取ってるからだよ」

浅吉は、

「なんだって」

と言ってから声を飲んだ。男の急所をえぐられているとすれば、清次は、死んでいたのか。それとも、俺が、

清次を殺してから、そこを斬り取ったのか。どっちが早いかによって、俺の罪がちがってくる。

浅吉は、芋俵にすわっていた清次を瞼の裏に思いうかべた。死んでいたとすれば、すわっていられるはずがない。生きていたんだ。たしかに、怖い眼で、俺を睨んだ。俺は、怖ろしくなって、出刃を突き立てた。

その後で、急所をえぐった奴がいる。誰だ。おとらか。それとも、桐屋勘兵衛の手代、大四郎だろうか――。

「ね、浅さん、あんたも疑われているよ」

と言って、おとらが、平六に突っこまれたときの話をした。

髪結いおとらの家は、須賀丁の日宗寺(にっしゅうじ)の裏にある。通称〝寺裏〟といわれる地域で、長屋ではあるが、三間ある二戸建で、それが四棟ならんでいる。棟と棟の間に黒松の大木が何本も、枝を茂らせているところから、〝黒松宅地〟と呼ぶ者もある。

住人は、遊芸の師匠、お妾、大道芸人、役者、講釈師、絵師など、日雇い職人や棒手振(ぼてふり)より、やや高級な者ばかりだ。

おとらは、その長屋の出入口に近い家に住み、母親の梅と、髪梳(す)きの若い女二人を置いて、看板を出していた。顔立ちは、まずかったが、髪結いの腕がたしかだったので、なかなか繁盛していた。

おとらの家へ、手先の平六が、ぬうーと顔を出し、

「ちょっくら聞きてえことがある」

と言ったのは、けさの五つ刻（八時）だった。客は、まだなく、梳き子たちが、家の拭き掃除をしていた。

「おや、なんでしょう。朝から」

と、おとらは、さりげなく答えた。

「ちょっくら、番屋まできてもらいてえが」

平六が、そう言って顎をしゃくった。おとらは、歯の根をふるわせ、

「ご、御用の筋で」

と、声を吃らせた。

「なあに、大したこっちゃねえぜ。手間暇(てまひま)取らせねえ。番屋へきてもらうなあ、人に聞こえちゃ、まずいことがあるんでな」

平六が、そう言ってあたりに眼を配った。

おとらは、須賀丁と南丁の三差路にある番屋へ連れていかれた。番屋は、今でいう交番にあたるところで、番太郎と呼ぶ、町が雇っている警察行政の末端を扱う者がいる。

「おめえは、芋仙の清次とできてたそうだな」
「はい、二年ほど前から……」
「その清次が、後家のお銀とくっついていたこと、知ってるな」
「知ってました」
「お銀が、十日ほど前から、行方不明になっとったこと……わかってるな」
「は、はい……」
「お銀が、たばこ売りの浅吉と、深くなったそうだな」
「たぶん、そうだと……」
「清次が、焼きもちやいて、お銀と喧嘩してたこと、知ってるな」
「現場は、見ないけど、あの人の口裏から、察していましたよ」
「で、清次が、お銀を殺したこと、知ってるはずだな」
「さ、それは……」
「しらばっくれるのも、いい加減にしねえか。おめえは、芋倉へおりたろ」
おとらは、眼をまばたかせ、答えなかった。平六が、おとらの襟もとをつかんだ。
「清次の、男の大事なものを、刃物で、えぐり取ったろ」
おとらは、歯を噛み、平六を睨んだ。
「おめえは、清次の腹に、出刃を突き立て、殺しちまうと、あそこをえぐり取ったな」
「し、しりません」
「芋倉へ、はいらなかったとは言わさねえぞ」
「はいることは、はいりました。けど、二人とも死んでたんです。男の急所どころじゃありませんよ。ただ、びっくりして、あわてて逃げ出したんですよ」
平六が、襟をつかんだまま、こづいた。
「なんのために、芋倉へはいったんだ」
「三日も四日も、あの人の姿が見えなかったからですよ。おかみさんもいなくなるし、てっきり、どこかに潜んで、二人であいびきでもしてるんじゃないかと、考えたんですよ」
「芋倉で、あいびきできるわけはねえぜ」
「でも、家ん中にいないんだから、芋倉しかないんですもの」
「芋倉へおりたのは、いつだ」
「おとといの八つ半(午後三時)、お店がたて混んでいるとき、こっそり、たきつけに火をつけ、梯子をおりたんです」

「何を見たんだ」
「二人の死体……あの人のお腹に出刃が……あわてて逃げ出したんです」
平六は、腕組みして考えていたが、
「ま、いいだろ。また聞くかもしれねえ。帰ってろ」
と、横柄に言った。
おとらが、平六に調べられたいきさつを、眉をしかめながら語った。
「いったい、誰が、清次の急所を……」
おとらが、眼を伏せた。
「もし、あたしだったら、どうするつもり」
浅吉は、咄嗟に考えをめぐらせた。おとらが、清次の急所をえぐったのが、俺が、出刃を突き当てたのより先だったら、俺は、死骸を刺したことになる。俺が、先なら、おとらは、なんにもおとがめはない。俺が先か、おとらが先か——。
浅吉は、おとらがにわかに大事な女に思えてきた。
〈俺が、生きながらえることができるか、獄門になるか、その鍵をこの女が握っているんだ〉
「で、お銀さんと清次の死体は、いったいどうなったんだ」
「左門丁の弁蔵親分が、芋倉へ踏んごんだそうだよ。八丁堀の定回り同心が検視をして、二人とも葬ったと聞いてるけど……」
「だったら、俺もあんたもしょっぴかれるにちげえねえ」
浅吉は、じっとおとらの表情をうかがった。おとらが、ここへ訪ねてきたのは、俺の出刃が先だと言わせる魂胆だろう。油断も隙もできねえ——。
「あたしも、そんな気がするんだよ」
「番屋から、伝馬牢行きだ」
「いやなんだよ、そんなこと……」
「俺も、ごめんだ」
「ね、なんとかして……」
「逃げるより手はねえな」
「二人で、逃げてくれるかい。あたしは女、とても一人じゃ……」
おとらの眼が、炎を上げているように燃えたった。
「俺は、あり金ぜんぶで二両二分しかねえ」
「あたしは、ここに五両のお金を用意してきたんだよ」
「合わせて七両二分……当分、暮らしていけるな。ただ、どこへ行くか……目あてはねえ」

「早稲田村に、おっかさんの生まれた在所があるんだけど……小作百姓だけど、当分、二人がころがりこんでいても、さしあたり困ることはないんだけど……」
浅吉は、考えた。
ここに潜んでいても、結局、捕まる羽目になる。おとらも同様だろう。おとらは、俺の出刃を知っている。弥作も、出刃を見せられたら、白状するだろう。そして、おとらは、あたしが清次の急所を、切り取ろうとしたとき、あの人のお腹に、出刃が突き刺さっていた――と、言うにちがいない――。
「俺、決心したぜ」
「一緒に、逃げてくれるんだね」
浅吉は、頷くと、旅支度をはじめた。衣類を、振り分け荷物にし、裾をはしょり、足ごしらえをととのえた。
二人は、弓兼長屋を、別々に出ると、外濠沿いの道を牛込へ向かった。市ケ谷田丁まできたとき、肩をならべた。
加賀丁へ抜け、柳丁、喜久井町を経て、早稲田田圃へはいった。見わたす限りの田圃だ。稲の取り入れのすんだ刈田が、果てもなくひろがり、点在する農家の藁屋根、赤く実る柿の木、空を舞う鳶を眺め、浅吉は、故郷の田圃を思いうかべた。
おとらが、浅吉の横顔に、ときどき、食い入るような視線を向ける。鼻の寸が短く、頰にふくらみがあるおとらの顔が、浅吉の眼の端にはいる。〈お銀とくらべたら、お月さまとすっぽんのちがいだ。おんなじ女でも、なぜ、こうもちがうんだ〉
「あたしね、ふと、道行きの芝居を思い出していたんだよ」
おとらが、はずんだ声をかけた。
その声は、おとらの胸にわだかまる思いとはちがうようだ。〈俺を、たぶらかそうとしていやがる。俺の出刃は、おとらの急所より後だ〉浅吉は、自分の心に言い聞かせた。
「俺も、なんだか変てこな気持ちになってきたぜ。二人が、夫婦になって、久しぶりに里帰りをしてるような思いがするよ」
「まあ、うれしいこと言うじゃないか」
おとらが、寄り添うと、浅吉の手を握った。ぽってりしたてのひらが、油を塗ったような感じだった。浅吉は、その手を握り返した。
「あたしは、清次とくっついたおかげで、苦労をしたけど、あんたとこうして、田舎道を歩いていられるのも、事件のおかげだと思うと、妙な気がするんだよ」
「俺だって、芋仙の後家とできちまい、とどのつまり、殺し事件にまきこまれ、おめえと道行き……芝居の筋書きにしちゃ、出来すぎてるような気がするんだ」
「浅さん、もし、二人が、おとがめをうけずにすんだら、あたしと苦労してみる気はないかね。そりゃ、あたしが、六つも年上だけど、年上女房は、亭主を大事にするというじゃないか」
おとらが、体を寄せてきた。
「そりゃ、俺だって獄門はまっぴらだ。娑婆にいられるなら、一人でいられるもんじゃねえ。おめえとこうして、逃げてきたのも、何かの因縁かもしれねえな」
浅吉は、おとらが奥の手を出してきたな――と思いながら調子を合わせた。
「あたしは、うれしくてしようがないんだよ。たばこ売りの浅さんといえば、女なら誰だって、一度は抱かれてみたいと思う男ぶり……この村で、様子をみてから、知らぬ他国へ、一緒に逃げてしまいたい――と思うんだけど……」
おとらが、足をとめ、胸を合わせてきた。晩秋の陽ざしが、二人を暖かく包んだ。

五　納屋の中

おとらの母の実家は、穴八幡神社の西側、早稲田富士と呼ばれる小高い山の南麓にあった。喜左衛門という母の弟が、百姓をやっていた。小作農で、ひどいあばら家に住んでいた。
おとらは、叔父が貧乏をしているのを承知のせいか、二言、三言、ここまでやってきたわけを、いいかげんに話すと、むき出しのまま、二両の金を渡し、
「しばらく、どこでもいいから、置いてくださいな。このお金は、当座の食いぶちだけど……」
と言った。
骨がらみのように痩せた喜左衛門が、銀貨をみつめ、喉仏をうごかすと、
「そうかい、いいとも、遠慮すっことはねえ。一と月や二た月、めしぐれえ婆さんが、炊いてやっから」
と、汚れた歯をみせながら言った。
が、二人が泊まる部屋がなかった。土間の左手に居間があって、囲炉裏が切ってある。その裏が納戸で、足の

わるい十四になる娘が寝ている。部屋と名のつくものは、それだけしかない。

結局、裏の納屋が、二人の寝泊まりするところとなった。藁が、おびただしく積んである。農具が、あって、足の踏み場もないくらいだ。屋根の梁に板を打ちつけ、中二階を作り、むしろをならべ、茣蓙を敷き、綿のはみ出たせんべい布団を一組貸してもらった。

二人は、いやでも一つ布団に寝るより方法がない。夕食がすんで、風呂にはいり、納屋に戻ったとき、浅吉は、おとらと顔を見合わせた。行灯がないから、縁の欠けた皿に油を入れ、灯芯をひたし、火をつけ、明りとした。

入口の戸を閉めてあるが、荒壁と柱の間に隙間ができているから、月明りが射し込み、冷たい夜風が、流れこんでくる。おとらが、湯上がりのほてった顔で、浅吉に流し目をおくる。

浅吉は、その視線を受けとめ、口元をゆるめた。二人は、どちらが言うでもなく、布団の上で、体を寄せ合った。

おとらが、立膝のまま、体を近づける。裾がめくれ、はちきれるような肌の艶が、浅吉の眼に沁みた。

浅吉は、歯を噛み、息を詰めた。

〈いけねえ。おとらの肌に負けちゃならねえ。どうせ抱き合うことになるだろうが、その前に、聞いておくことがある。急所が出刃より先だ――ということを、おとらの口から言わせるまで、負けちゃいけねえ〉

「二人で、一つ布団……あたしはうれしいんだよ。ほんとのこと言うと、芋仙のおかみさんの部屋で、あんたを一目見たときから、あたしは、首ったけだったのさ」

おとらが、そう言って、ことさら裾をはだけ、膝頭をくっつけてきた。浅吉の体の中に、熱い血が音を立てて流れはじめた。太い溜息を洩らすと、浅吉は、体をずらせた。

〈俺は生まれつき助平にできてるようだ。なぜ、こうも女の肌が気になるんだ。しかも、選りに選った醜女……女にちげえねえが、抱いてやるからには、おとらに白状させなけりゃなんねえ〉

浅吉は、後ずさりをすると、

「ま、待ってくれ」

と、詰まった声を出した。

「おや、あたしがきらいかね。そりゃ、お銀さんとくらべたら、大へんなちがいだよ。けど、あたしには、女の実というもんがある。二十六といっても、このとおり、まだ水々しいんだよ」

おとらが、裾をまくった。浅吉の眼が、輝やき光る肌に吸いついた。眼先が、くらくらしてきた。生唾を飲みこみ、強いて眼をつむった。

「見せちゃいけねえ」

浅吉は、喘ぎながら声を出した。

「あんたは、初心じゃないはずだね。お銀さんの体を、さんざん抱いていながら、何が、見せちゃいけないんだね」

おとらが、浅吉にしがみつき、頬をすり寄せた。

「俺、本当のことというと、おめえと夫婦になる決心をしたんだ。ここまできちまった以上、それがなりゆきというもんだ。けどな、その前に、聞いておきてえことがあるんだ」

おとらが、浅吉の首に腕をまわしながら、

「なんでも言っておくれ。あたしは、あんたにいのちをかけているんだから……」

と、うわずった声でささやいた。

「おめえ、清次の急所、本当にえぐったのかい」

「そうだよ。芋倉へはいるとき、怖いもんだから、お銀さんの部屋から断ちばさみを持ち出したのさ」

「で、どうやって、切り取ったのかね」

「あたしは、あの人が芋俵にすわってるのを見たとき、まさか、死んでるとは思わなかったんだよ。だから、お前さん、何をしてるんだね――と、大声を出したんだよ」

「なるほど……そしたら、j、返事をしたんじゃねえか」

「それが、うんともすんとも言わないんだよ。たきつけの火を近づけてみると、あの人の下腹のあたりに、出刃が突き刺さってるじゃないか」

「そうじゃねえんじゃないのか……」

「嘘じゃないんだよ。あたしは、はじめてあの人が、死んでると気がついたのさ。ぎょっとしたんだけど、同時に、あの人の男のものが見たくなって、裾をめくったんだよ」

浅吉は、聞いているうちに体が堅くなってきた。〈やっぱり俺の出刃が先だ――と言いやがる。出刃はなかったと言わさなけりゃいけねえ。それには、どうする？〉

「なぜ、清次の妙なところを切ったんだね」

浅吉は、ふるえ声で聞いた。

おとらが、うふふ――と喉を鳴らした。

その眼が、あやしい光を放ち、浅吉をじっと見据えた。
「ほんとのこと聞かしてくれ。なぜ、清次のあそこを……」
浅吉は、そう言って生唾を飲みこんだ。
「あたしの体の中にいる女が、清次の急所を睨んだのさ。浅吉さん、女ってものは、男のものをみると、体がふるえてくるんだよ。眼先が、くらくらしてきて、ぼうっとなるのさ。男だって、そうじゃないかしら……」
「そういうもんかね。俺にも、おぼえはあるが、まさか、えぐる気持ちを持ったことはないよ」
「あたしはね、あの人のあそこを眺めているうちに、つい、むらむらと腹が立ってきたのさ。あたしと、さんざんいいことをしていながら、おかみさんと何したと思うと、たまらない気持ちになったのさ」
「だからえぐったというのか。よくわからねえ話だな」
「どうしてだい？」
「死んでる奴のものを切り取ったって仕方がねえじゃねえか」
「あたしは、変わってるのかもしれないわね」
「清次が、生きていて、芋俵に腰をかけ、おめえさんを睨んでいた。おめえさんは、むらむらと嫉妬の気持ちを駆り立て、思わず、持っていた断ちばさみを突き立てた」
浅吉は、そう言っておとらを睨んだ。
「あたしはね、あのとき、清次が生きてるような気がしたんだよ」
「それみろ……やっぱり生きていたんだな」
「出刃が刺さっていたけど、さんざん、おかみさんといいことをやって、あげくの果て、おかみさんを殺し、芋俵にすわって見ているような気がしたんだよ」
「はさみを突き立てたとき、清次は、うなり声をあげたんじゃねえか」
「うんともすんとも言わなかったんだよ。何しろあたしは、夢中だったからね」
「で、結局えぐり取っちまったのか」
「そうなんだよ」
「そいつを、どうしたんだ」
「えぐり取ると、そのまま逃げてきたのさ。今、考えると、なぜ、あんなことをやったのか、よくわかんないんだけど……」
「もういっぺん聞くが、下腹に出刃、たしかに刺さっていたのか」
「たしかに出刃が、突き立ててあったんだよ。あの出

刃、あんたがやったんだね」
おとらが、浅吉の首を抱え、頬をすりよせてきた。
「お、おれじゃねえ」
「ね、ほんとのことを言っておくれな。あんたが、あたしを抱いてくれるなら、出刃はなかったと、言ってもいいんだけど……」
おとらの太腿の肌が、浅吉の膝へ密着してきた。
浅吉は、歯を食いしばって、燃えたぎる思いをこらえていた。
〈おとらは、俺をたぶらかすため、色仕掛けをいどんでいるのじゃないか。俺は、あのとき、清次の急所を見ちゃいなかった。が、よく考えると、清次は、俺に刺されるとき、なんの抵抗もしなかった。おかしい。ことによったら、おとらの急所えぐりのほうが先で、死んでいたのかもしれねえ〉
「おとらさん、俺、あんたに惚れちまった。もう、我慢ができねえ。二人が、できる前に、承知しておいてもらうことがあるんだ」
「なんですね。なんども言うとおり、あたしは、いのちがけなんだから、承知するもしないもないじゃないか」
「そうかい。恩に着るぜ。もしもの話だが、二人が御用になったとき、おめえのえぐったのが、たしかに先だったと言ってもらいてえんだ」
浅吉の声が、息苦しくはずんだ。
「じゃあ、やっぱり、あんたの出刃が先だったんだね」
「そこんとこがはっきりわからねえんだ。けどな、あんたが俺に、ほんとうに惚れたというなら、はさみのほうが先だったと言ってもらいてえんだ」
「そりゃ、あんたの出刃が先なら、そう言ったっていいけど……」
浅吉は、おとらの腰へまわしていた腕に、力をこめながら、
「俺の出刃が、先だったかもしれねえ」
と、呻くような声を出した。
「これで、ほっとしたわ」
「何が、ほっとしたんだ」
「あたしが、後だってことがわかったからさ」
浅吉は、とびのいた。
膝をそろえると、おとらを睨んだ。一杯食わされた——
という悔恨が、はげしく胸を嚙んだ。
「おめえ、欺したな」
「何をだい？……」

おとらの眼が笑っている。
「おめえだけが助かり、俺を獄門にするんじゃねえのか」
「何を言っているんだね。あたしは、あんたに首ったけなんだよ。大事な人を、何を好んで、獄門にするはずがないじゃないか」
「だったら、おめえのえぐりが、先だって言ってくれるか」
「きまってるじゃないか。もちろん、あたしのはさみが、先だったと言ってやるよ。平六は、二人を疑ってるけど、あたしが先だといえば信用するよ」
浅吉は、感動で胸がふるえてきた。おどりかかるように、おとらの体を抱きすくめ、
「すまねえ。ありがてえ、恩に着るよ。おめえと夫婦になるぜ」
と、詰まった声をはり上げた。
二人は、もつれ合って倒れた。
茣蓙の下の板敷をきしませ、肌をぶつけ合った。それは、お銀との行為とは、異質の動作だった。お銀は、しっとりした情感があった。おとらのそれは、飢えた野獣が、獲物をむさぼり喰う仕種に似ていた。

板敷がきしむたびに、下の積み藁の上に、ほこりが舞い落ちる。おとらの悶絶するような呻きが、夜のしじまを引き裂いた。汗を滲ませ、けもののような叫びをあげ、男と女のたたかいが終わった。
事果ててのち、浅吉は、荒い呼吸をととのえながら、混沌におちいっているおとらの寝顔を、見据えていた。おとらをいとおしむ思いはなく、〈俺は、これで生きのびる〉と思った。お銀との情事の後は、後ろ髪を引かれる思いがした。が、今の浅吉は、空き腹にたらふくめしをかきこんだような満腹感があった。
にもかかわらず、おとらは眼をさますと、ふたたび、四肢をからませてきた。それは、人間の心とかかわりのない、本能そのもののようであった。
翌日も、翌々日も喜左衛門の妻がこしらえてくれる食事を食べ、風呂へはいり、ただ、二人は、抱き合って時を過ごした。
浅吉は、ようやく倦んできた。倦むというより、極度の疲労に、なんの意欲も湧かなくなってきたのだ。視力さえおとろえ、ぼんやりと陽の光を眺め、納屋の前の、いくつか実が残っている柿の木を、視線にとらえ、体を横たえていた。

五日目の午さがり——。
母屋のあたりで、喜左衛門と誰かの話し声がした。おとらが聞き耳を立てていたが、
「弁蔵親分とこの平六だよ」
と、浅吉の耳もとでささやいた。
浅吉は、とび起きるといずまいを直した。耳鳴りがして、胸先がはげしく波を打ちはじめた。逃げようと思い、腰を浮かせた。おとらが、浅吉の腕をつかんで押しとどめた。
「逃げたって、だめだよ。観念するんだね」
「おめえ、忘れやしねえだろうな」
二人が、低い声をかわしているとき、平六が、納屋の戸を開け、はいってきた。
「浅吉と、おとら……ずいぶん捜したぜ。とんずらをきめこんでもだめだ。さ、おりてくるんだ」
平六が、上を見上げながら怒鳴った。
まず、おとらが梯子をおりた。浅吉は、ふるえながら、おとらに従った。
「さ、言うんだ。おとらのえぐったのが先か、浅吉の出刃が先か、ありていに言ってみろ。嘘は、言っちゃならねえ」

平六のダミ声が、浅吉の頭上でがなり立てた。おとらが、
「あたしが、清次の急所をえぐろうとしたとき、下腹に、出刃が突き刺さっていたんですよ」
と、高い声で言い切った。

六　後家殺し

四谷左門丁の目明かし弁蔵は、平六が引っ立ててきた浅吉とおとらを、自身番で調べた。弁蔵は、二人の人相をじろりと睨み、男のほうがお人善しで、女髪結いは、したたか者だ——と思った。
「浅吉と言ったな。おめえの調べはついてるんだ。たばこ売りで、芋仙の後家お銀とできてること、清次という番頭が、お銀とくっついていた。お銀と清次が殺された。お銀の死体は、喉をえぐられていた。さ、言ってみろ、清次を殺したのは、浅吉、おとら、どっちだ」
弁蔵は、二人を交互に睨んだ。
浅吉が、眼をまばたかせた。おとらが、膝をのり出した。
「旦那、あたしがえぐったとき、清次の下腹に、出刃が

突き刺っていたんですよ」
おとらが、浅吉をちらりと横目でみながら言った。
「馬鹿野郎、死人の急所をえぐったって仕方がねえじゃねえか」
「でも、あたしは、妙な気持ちを起こしちまったんですよ」
「まあいいや。浅吉、おめえは？」
浅吉は、
「清次の奴が、つかみかかるような気がしたんです。夢中で、出刃を……」
と口ごもりながら答えた。
「おめえが、お銀の死体をみたとき、血の色……喉仏がえぐられ、流れていた血は、どんな色をしていたのか」
「何しろ、行灯のあかりで見たんで、赤黒く、べっとりと……」
「そうかい。二人とも、今日は、家へ帰らしてやる。浅吉の引受人は、弥作だ。おとらの引受人は、おふくろさんだ。当分、外へ出ちゃならねえ。お呼び出しがあるまで、じっとしているんだ」
弁蔵は、二人の身柄を、それぞれ引受人に渡した。
平六が、怪訝な顔つきで弁蔵に聞いた。
「せっかくしょっぴいてきたのに、どういうわけなんで……」
「二人の疑いがはれたわけじゃねえ。身柄を帰したのは、二人を狙う奴がいると見当をつけたからだ」
「じゃあ、二人の家の張込みをやるんで」
「平六、おめえは、おとらを見張れ。弓兼長屋は、俺が、若い奴を連れて見張りをする」
「へえ……張り込んでりゃ、どういうことになるんで……」
「それがわかってりゃ、むだな骨折りはさせねえよ。ひょっとしたら、いい鴨がとびこんでくるかもしれねえ」
「じゃあ、浅吉とおとらは、ホシじゃねえんで……」
「もう一人揃うと、殺しの絵図ができ上がるんだ。その野郎は、踏んごむわけにゃいかねえ相手だ」
弁蔵は、三人の中の一人を、桐屋勘兵衛の番頭大四郎だと見当をつけていた。
お銀の死体の硬直の度合と、清次のそれとは、明らかにちがっていた。大四郎が犯人とすれば、二人を異なった時点で殺したことになるのか、清次がお銀を殺し、清次を大四郎が殺したことになるのか、見当がつかなかった。

お銀の死因は、出刃で喉元をえぐられていることだ。清次の死因に疑問があった。おとらのえぐった急所の傷跡も、浅吉が刺した下腹も、多少の血が出ていた。もし、死体を刺したのなら、出血はあり得ないはずだ。
ところが、清次の喉首に、紫色の跡が六カ所ついていた。その跡は、人の指先を強く押しつけたものである。こころみに鋭い刃物を紫色の跡に当ててみると、どろりとした血が流れた。これで、清次は扼殺されたことは明らかだ。
大四郎が、ホシとすれば、奇妙な殺し方だった。彼は、以前、武士だったはずだ。刀を使わぬ殺しから、犯人は、大四郎ではない——との推定もなり立つ。
とすると、清次は、誰に扼殺されたのか。あるいは、お銀と喧嘩をして、掴み合ったとき、お銀の手で、清次の首を締めたのかもしれない。それが死因とならないまでも、清次は、窒息する寸前の状態になって、お銀を殺したのではないか。
お銀の死体を、芋倉まで運んだことだけはまちがいない。血痕が、点々と、お銀の居間から芋倉までつづいていたからだ。
清次は、死体を運ぶと、半死半生の状態で芋俵の上に腰をかけていたのではないか。仮死状態の清次の急所を、おとらがえぐり、浅吉が刺したことになるのだろうか。
弁蔵が、大四郎と睨んだものの、うっかり手出しができなかったのは、以上のような考えがあったからだ。ことに、桐屋勘兵衛とは、心中さらし事件以来、しこりが残っている。うっかり、大四郎に縄をかけ、見込みちがいだとなったら、弁蔵の言いわけがたたない。
弁蔵が、平六に、浅吉とおとらの行方を探索させたのは、二人がいないことには、どうにも判断をつけかねたからだ。
「親分、おとらも浅吉も、ホシじゃねえんですね」
と、平六が、ふくれっ面をしながら聞いた。
「ホシかもしれねえ。さっきも言ったとおり、もう一人の男、大四郎が、どんな手を使ってくるか、それが見ものだ。野郎が、殺しの犯人なら、おちおちしちゃいられねえはずだ」
「するてえと、おとらか浅吉を、殺しにでもくるんですかね」
「殺すか、逃がすか、銭をつかませるか、三つに一つだ」
弁蔵の顔に、冷たい笑いが浮かんだ。

弁蔵は、弓兼長屋の見張りをつづけていた。もちろん、相手が大四郎だから、素顔をさらすわけにはいかない。家主にわたりをつけ、屑屋に化けていた。
家主の隠居所の台所口にはいりこんで、出入りの者に眼を光らせていたのだ。家主の兼四郎は、弓師だっただけあって、大店の隠居とは、どこかちがうところがある。
「親分さん、うちの長屋から、縄つきは出したくないと思ってますよ。浅吉は、まさか、殺しの犯人じゃ……」
「それがねえ、今んとこはっきりわからねえわけだ。こっちの気分としちゃ、浅吉を縛りたかねえんだ。彼奴は、気っぷのいい奴ですからな」
「弥作じいさんと、親子ほど仲が良く、はたから見ていても、いいもんですよ。もし、浅吉が、引っ張られることになると、弥作じいさん、いのちをちぢめるかもしれませんな」
兼四郎が、暗に、浅吉の寛大な処置を、口裏でにごした。弁蔵も、できればそっと見のがしてやりたかった。
弁蔵はこのごろ、十手を預かる身がこわくなっていた。長年、事件を追い、犯人を捕まえてきたが、見込みちがいをするんじゃないか――の怖れを抱くようになったのだ。
乾物屋の店が繁盛し、暮し向きも不自由がないし、年も取ってくると、犯人捕縛に血を湧き立たせたころが、嘘のように思われてきた。が、弁蔵は、俺が十手を捨てりゃ、この辺一帯は、桐屋勘兵衛の島内となる――と思い、十手を握っていたのだ。
しかも、この事件の有力なホシは、桐屋の番頭である。自分が解決しなけりゃ、お銀と清次の死は、闇に葬られる。大四郎と浅吉と、髪結いの女が、どうからんでいるのか――それを知る手だては、大四郎が、浅吉のところへ現われてからだ――と考えた。
入相の鐘が鳴った。
あたりは暮色に包まれてきた。長屋に住む職人たちが、溝板を踏み鳴らして帰ってくる。ほろ酔い機嫌で戻ってくる棒手振もある。亭主が戻ると、長屋は、ひとしきりかみさんや子どもたちの声でさわがしくなる。
長屋がしずかになった。
背の高い着流し姿の男の影が、弁蔵の眼の前を通りすぎた。雨戸を二寸ほど開けた隙間から、ちらりと見えただけだが、弁蔵の全身に緊張がみなぎった。人影は、ま

ぎれもなく大四郎だったからだ。
弁蔵は、しずかに雨戸を開けた。大四郎の姿が、弥作の家へ吸いこまれた。弁蔵は、家主の台所を出ると、長屋の裏手にまわった。板塀のつづく幅三尺の通路がある。彼は、弥作の家の裏窓の隙間から中を覗いた。
大四郎が、上がりかまちに腰をかけている。浅吉と弥作が、その前にすわり、頭を下げた。大四郎が、紙に包んだ金らしいものを差し出した。
「とっつぁんも、浅吉もよく聞いてくれ。弁蔵親分が、なぜ、おとらと浅吉の身柄を帰したのか、知ってるかい」
大四郎が、上体をのり出させ、低い声をかけた。
「へえ、俺にゃ、なぜだか狐につままれたような気持ちなんで……」
浅吉が、大四郎をみつめながら答えた。
「よく聞けよ。事件の筋はこうだ。お銀と清次が痴話喧嘩のあげく、お銀が、清次の首を締めた。清次は力自慢の奴だが、お銀の太腿が、自分の股に接触していたんで、一瞬、力がひるんだんだ」
弥作が、
「するてえと、清次を殺したのは、お銀さんで」
と、しわがれた声を出した。
「清次は、首を締められ、一時はぐったりとなったが、気を取り直して、お銀を出刃で刺した。清次は、お銀が倒れると、芋俵の上に腰をのせ、半死半生の状態でいたんだ。そこへ、浅吉とおとらが、前後してやってきた」
「俺の出刃は、おとらのえぐりより後だ」
と、浅吉がふるえ声を出した。
「どっちが先か判定がつかないんだ。弁蔵が逃がしたのは、ここんとこだ。先に刺した奴は、必ず相手を殺そうとする。つまり浅吉とおとらは、どっちかが生きていたんじゃ、不安なわけだ。たがいに殺し合いをやるだろう。それを待つために逃がしたのさ」
「俺は、おとらさんを殺そうなんて、思ってもいねえ」
「ところが、おとらは、町のごろん棒を雇った。おめえさんを殺す手はずをととのえた。俺は、この眼でたしかめてきたんだ。おとらは、二人の男に銭をつかませ、浅吉を殺してくれ――と頼んでいたんだ」
「ええッ……俺を……」
浅吉の声がうわずり、弥作が、
「旦那、そんなむごいこと……どうしたらいいんだ」
と、叫んだ。

「逃げるんだ。殺し屋は、おっつけここへ来る。長屋木戸が閉じるのが五つ（八時）。それまでにくる。この銭は三両ある。これを持ってずらかったほうがいい」
　浅吉が、金包みをつかみ、
「ど、どこへ逃げたらいいんです？」
　と、声を途切らせた。
「原宿村がいい。俺の知り人が、熊野神社の神主をしている。そこへいったん落ち着いて、全国いたるところにある熊野の末社を紹介してもらえ。それなら安心だろう」
　浅吉が、旅支度をはじめた。
　弁蔵は、おもしろいことになってきたな――と思い、息を詰めていた。
　浅吉が、弥作に向かい、
「長いこと世話になってすまねえ。達者でいてくれ」
　と、泣き声を絞った。
　大四郎が、
「急ぐんだ」
　と、底力のある声を出した。二人は、五、六歩の間隔を置いて、長屋を出た。
　弁蔵は、二人の後を尾けた。
　汚れた手拭で頰冠りをし、尻をはしょり、つぎはぎだらけの股引に、ひやめし草履をはいている。目の荒い背負籠を担った姿は、屑屋になりきっていた。
　二人は、千日谷の裏から、権田原の櫟林の道に出た。
　あたりは真っ暗だ。
　大四郎が、後ろを振り向いた。弁蔵は、林の中へ体をかくした。大四郎の足がおくれ、浅吉が先に出る。暗いが、闇に慣れてくると星あかりに、二人の姿が浮かぶ。
　弁蔵の頭の中に予感がひらめいた。
　走りかけた。
　そのとき、大四郎の右手に、ぴかりと光るものがひらめいた。弁蔵が、おどりこんだ。大四郎の右手がのびた。弁蔵が、十手をふるって、その右手を打った。
　大四郎の手から、匕首が路上に落ちた。
　弁蔵の手が、大四郎の腕をつかみ、
「御用だッ」
　と、鋭く叫んだ。
　大四郎が、逃げようとした。弁蔵は、十手で向脛を強く払った。大四郎が、前のめりに倒れた。弁蔵は、おどりかかると、馬乗りになって、大四郎の両腕を後ろへまわし、すばやい動作で縄をかけた。

　浅吉が、あっけにとられ、茫然と立ちすくんでいた。
「大四郎、立てッ。おめえの殺しの現場、この眼でたしかめたぞ」
　弁蔵は、縄の端をつかむと、もときた道を引き返した。浅吉が、ふらふらと尾いてきた。
「これで、何もかもわかった」
　と、弁蔵が、大四郎の背中へ、太い声をかけた。
「匕首は、浅吉を殺そうと思ったんじゃない。林の中で、ごそごそ人の気配がしたんで、身を護るため、抜いたんだ」
　大四郎が、前向きのまま怒鳴った。
「俺の眼は、フシ穴じゃねえ。大四郎、おめえは、芋仙のお銀とできていた。お銀は、かわいそうに、嫉妬にくるった清次に殺された。清次は、殺した死体を芋倉へ運んだ。けどな、心配になって、夜になると芋倉へ見にきていた」
「私に、かかわりがないことだ」
「まあ聞け。おめえは、お銀がいなくなると、清次を責めた。知らぬ存ぜぬと清次が突っぱねた。清次が、夜になると芋倉へ行くのをいぶかり、後を尾けた。そこにお銀の死体を見つけた。おめえは、かっとなって清次におそいかかり、彼奴の首を締め殺した」
「知らねえ。私は、なんにも……」
「じゃあなぜ、浅吉を欺して連れ出し、権田原で殺そうとしたんだ。浅吉とおとらを消せば、犯人不明ですむと、計画したことぐらい、わかっているぜ」
　弁蔵は、大四郎の背中へダミ声を叩きつけた。

医師道庵の顔

一 徒歩医者

医師道庵の顔に、無気味な肉塊がついている。右頬の下から口元にかけて、顔の肌色より黒ずんだ艶のない肉のかたまりが、不自然にこびりついているのだ。

顔の輪郭は、いわゆる瓜ざね顔で、目鼻立ちのととのった立派な風貌をしている。年は四十九歳で、もはや初老のはずなのに、髪は黒々としていたし、肌の色も白く、みがき上げたように光っている。

「あの肉のかたまりさえなかったら、道庵先生は、歌舞伎役者だよ。惜しいね」

とは、道庵の病家の女たちの噂だ。

身長は、五尺一寸の小柄ながら、焦げ茶色の羽織を着て、供回りの者に薬箱を持たせ、白足袋の足を急がせているいる姿は、とても五十に手のとどく年ごろとは見えない。

道庵の左側から顔をみる女たちは、鼻筋のとおった横顔をみて、溜息を吐くし、足をとめて振り返るという。

道庵は、身のこなしが敏捷で、見習い医師の新太郎が、いくら急いでも追いつけないほど早い。

道庵の家は、牛込袋町にある。

門扉のない檜の門柱があって、〝医師道庵〟と書いた木看板が下がっている。玄関までおよそ三間半、大きな鞍馬のとび石がまっすぐにつづき、その両側に、つつじの植込みがある。

いつも掃除がゆきとどき、水を打ってあり、木賊が、びっしり植わっている。太い格子戸のはまった玄関は、みるからに格式があり、正面に大きな衝立がある。

右手が、十六畳の待合室、左手が、供回りや下男の部屋、診療室は、庭に南面した十二畳の部屋だ。

その部屋に、初老の男が来ていた。市ケ谷仲ノ町に住む魚屋金造である。顔に皺をきざんだ痩せぎすの男だ。

「どこがわるいんか」

と、道庵が聞いた。

「銭がねえ病気だ」

金造が、伝法な口のきき方をした。道庵の眉のあたりが、ぴくりと動いた。

「銭無し病は、わしの薬じゃ利きそうもないな」

「当代、大はやりの徒歩医者、銭があり余るほど儲かると聞いてるぜ」

金造が、大声を出した。

「ここは医家だ。待合室には、多勢の患者が待っておる。大声を出すな」

道庵の眼が光った。一瞬、鋭い眼つきとなった。

「地声でな。俺の金欠病は治せねえというのか」

「いくらありゃ、病気が治るんだ」

「そいつは、先生のお見立てしだいだ」

「一両でどうだ」

「治りそうもねえ」

道庵はかたわらの手文庫の中から銀をつかみ出した。三両だった。

金造は、銀貨をふところへねじ込むと、立ち上がり、

「先生、また具合がわるくなったら、やってくるぜ。ま、よろしく頼む」

と言って、廊下へ出た。

廊下の外で、二人の話を、新太郎は立ち聞きしていた。金造が出てくる気配を知って、玄関へ歩きかけた。

玄関広間で、金造が追いついた。

「若先生、おかげで、道庵先生の薬は、よく利きますよ。腹ぐあいもだいぶ快くなりました」

と、金造が、打って変わったように丁寧な口をきいた。新太郎は、

「そりゃよかった」

と相槌を打ちながら、金造を門の外まで送って出た。

「新さん、お美代が待ってるぜ。きてやってほしいな。もう七日も、あんた顔を出さねえもんだから、お美代の奴……例の恋わずらいという病いにかかっちまって、まるっきり腑抜けだ」

金造は、人目がないので、ふだんのような口をきいた。

新太郎は、

「今夜……きっと」

と言いかけて、口を噤んだ。道庵の眼が怖かったし、金造と道庵の関係も、なんとなく無気味だったからだ。

「俺と道庵のことは、気にしなさんな。二人だけしか知らねえことがあるんだ」

「道庵先生が、お美代さんを……」

「とんでもねえ、道庵なんかに、お美代をくれるもん

か。指一本ささせやしねえよ。俺だって、ただの魚屋じゃねえ」
「先生は、魚金へ近寄るな——と、きびしく言うんです。私とお美代さんが、結ばれることを、ひどく警戒しているんです」
「お美代は、親の口から言うのもおかしいが、仲ノ町きっての小町娘、道庵の野郎、年がいもなく、お美代に惚れやがって……」
金造の眼つきが鋭くなった。鼻稜のつぶれた、顎のしゃくれたみにくい顔だ。
新太郎は、〈じゃあなぜ、道庵から金をせびるのか〉と聞きたかったが、言い出せなかった。道庵から多額の金をもらうことは、お美代に懸想している道庵の弱味につけこんだ〝たかり〟ではないのか。それとも、何か、特別な理由でもあるのだろうか——。
「新さん、あんた、俺が道庵から三両の銭をまき上げてきたこと、聞いていたな」
「耳にはいっちまったんです」
新太郎は、おびえ声を出した。
「ことわっとくが、道庵から、俺が銭をちょうだいするのは、わけがあるんだ。お美代の一件とは、関係がねえよ。気にするこたあねえよ」
金造が、新太郎の肩を軽く叩いた。
「何か、貸しでもあるんで……」
「いわば、そんなもんさ。三両じゃ、昔の貸しの利息にもつかねえってわけだ」
金造は、笑いとばすと帰って行った。
新太郎の胸に、金造の恐喝がいつまでも、しこりとして残った。道庵にとって、三両や五両は、なんでもない金だろう。が、道庵は、なぜ、易々諾々と、金を与えたのか。
徒歩医者は、金回りがいい。道庵の収入は、いくらぜいたくをしても、使いきれぬほど多い。
医者に、乗物医者と徒歩医者の区別がある。乗物医者というのは、担ぎ棒の長い駕籠にのって往診する医者だ。徒歩医者というのは、薬箱を持った供を連れて、歩いて病家へ行く医者だ。
徒歩医者は、往診のため、どこまでも歩いて行くから、年をとると、疲れがひどく、とてもつとまらなくなる。駕籠を買い、駕籠かきを雇い入れたくなるのは人情だ。

現代の医者も、少し流行すると自家用自動車を持ちたがるのと、よく似ている。江戸時代は、徒歩医者が乗物医者になると、たちまち病家が減ってしまうのだ。というのは、薬礼が高くなるからだ。
この時代の薬礼は、一服が二分と相場がきまっていた。乗物医者となると、これが五分となる。そのほか、盆暮のつけとどけが、やはり高くなる。したがって、〝名医〟のほまれ高い医者でもない限り、駕籠を買ったとたんに、患者が途絶えてしまうのだ。
二分の相場は、五服で一匁、三百服の薬礼が、六十匁で一両という勘定となる。朝、昼、晩一日三服ずつ煎じ薬を飲むと、百日でちょうど一両の薬礼ということになるわけだ。
乗物医者を頼むと、一両払っても、百二十服、四十日分しかないから、だいぶ割高になる。だから、徒歩医者を頼むことになる。
〝学医は匙が回らぬ〟
という言葉があった。
これは、医者は、学問なんかあってもなくてもいい、経験だけが大切だ——という意味である。
「あの医者は、たくさん手がけた人だ」と言うだけで、江戸の町民は、経験の多い医者を信頼した。
「千人殺さなければ一人前の医者になれぬ」
という言葉も、経験を尊重する現われである。
道庵が、医者になったのは、二十八歳のときだという。したがって今、四十九歳だから、二十一年の経験があるわけだ。牛込袋町に、診療所を開いてから、すでに十五年になる。四十九歳という年齢からすれば、とっくに乗物医者にきり変えていいはずなのに、相変わらず、気軽に歩きまわっていた。
「袋町の道庵の見立てと、薬がいい」
こんな噂が、牛込を中心に、小石川、麹町、四谷界隈にひろがり、無気味な肉塊のついた面体にかかわらず、病家が増えていったのである。
その宵——。
暮れ六つ（六時）のころ、急患の知らせがあった。牛込河田丁の酒屋の小僧がとんできて、
「おかみさんが、ひどい熱だ。すぐきてください」
と言ってきた。
道庵も、代診の源三郎も往診に出ていたので、やむなく新太郎が、自分で薬箱をさげて行くことになった。小僧が、新太郎の薬箱を持ってくれた。

河田丁の患家へ着いて診察すると、食あたりらしかった。下剤の薬を二服こしらえ、腹をあたため、頭を冷やしなさい——と指示して外へ出た。
新太郎は、まだ、医者ではない。見習いとして、代診さんと呼ばれる身だった。蘭学医がまだ流行せず、もっぱら漢法医術を学び、代診十年ぐらいで、医師と呼ばれるのだ。
彼は、十五歳のとき、道庵の住込み徒弟となり、六年経った。代診をするようになってから、まだ一年目だった。
彼の足が、河田丁から仲ノ町へ向いた。お美代に会うためだ。風があって、三月になったとはいえ、夜風は冷たかった。
市ケ谷台地から谷町へ抜ける坂がある。坂の下に、びっしり民家がならんでいる。二間幅の道のはずれに魚金の店があった。間口九尺の床店(ゆかみせ)で、金造が出刃をふるって、魚を切っている。
魚は、あまりならんでいない。塩引鮭が二本板台の上にころがり、何やら切身が、大皿の上にならべてあるだけだ。
新太郎は、金造と視線を合わせた。会釈をして手前の三尺幅の路地をはいった。台所口から中を覗いた。お美代が、襷(たすき)がけで炊事をしていた。芋の煮える匂いが鼻をついた。
「まあ、新さん」
と言って、お美代が前掛で手を拭きながら寄ってきた。右頰にえくぼをつくり、白い歯をみせた。新太郎の胸がはずんだ。
二人は、板の間に腰をおろした。
お美代が、新太郎の手を握る。彼は、その手を、両手で包む。
「河田丁の帰りなんだ」
「会いたかったわ」
「私だって……でも、なかなか出られないんだ」
新太郎は、道庵の顔を思い出した。
「先生が、あたしんとこ、きちゃいけないというのね」
「そうなんだ。魚金に足踏みしたら、破門するというのさ」
お美代が、
「まあ」
と言って眼をみはった。二重瞼のつぶらな眼だ。中高の鼻は寸がみじかく、むっちりした唇は、吸いつきたく

なるほど愛らしい。
「私は、このごろ、医者になるのを、あきらめようと思っているんだ」
お美代が、
「な、なぜなの」
と、かん高い声を上げた。
「先生は、なんだか、私を目のかたきにするんだ。原因は、私が、あんたと仲がいいことだけじゃなさそうなんだ」
「ほかに何か……」
新太郎は、金造の金の無心を言いだそうとしたが、声を飲んでしまった。
「なんだか、先生とあんたのおやじさんと深い関係がありそうなんだ。それを知られることを、ひどく怖れているように見えるんだよ。私は、別に、気にしてないんだけど……」
「お父っつぁんと、道庵先生とは昔なじみ。若い時分からの知合いだと聞いてるけど……でも、おかしいわね」
「先生は、私に、魚金に立ち寄っちゃならん——と言うんだ。私は、とても、会わずにはいられないんだ」
「だから、先生のとこを出るというのね」
「そうなんだ。でも、どうやって暮しを立てるか、そのめあてはないし……」
「まさか、新さんに、魚屋はできないわね」
「やろうと思えば、できないことはないと思うんだ」
お美代の眼がうるんできた。新太郎の決意を知って、感情をたかぶらせたのだろう。
「ほんとのことというと、あたし、今縁談が持ち上がっているのよ。大工の留吉、薬王寺の寺大工をしている文五郎さんの二男、家主の徳兵衛さんの世話で、あたしの婿(むこ)に——と言われてるんです」
新太郎は、ぎくりとした。お美代をめぐる競争相手が、道庵だけでなく、もう一人いたと知ったからだ。
「で……なんと返事をしたんだ」
「お父っつぁんが、断わったんですけど……留吉さんが、あきらめないのよ」
「大工をやめて、魚屋になるというのかい」
お美代が、答えず頷いた。
新太郎は、息苦しいほど、動悸が高鳴るのを自覚した。
「お美代さんの考えは、どうなんだ」
「あたしは、決まってるの。新さん以外の人の、お嫁さ

んにはならないわ」
　新太郎は、思わずお美代を抱いた。頰を密着させ、
「うれしいんだ。私だって、どんなことがあったって、あんた以外の女と、夫婦にならないよ」
　と詰まった声を出した。
　お美代の腕が、新太郎の背中に巻きついた。二人は、長い間、抱き合ったままでいた。店にいる金造が、
「お美代、芋が焦げるぞ」
　と怒鳴った。二人は、離れた。
　新太郎は、心を残し、外へ出た。道庵に見とがめられたら、大へんなことになる——と思われたからだ。お美代が、路地口まで送ってきて、手を握った。
　新太郎は、坂をのぼった。雑木林の暗がりから、道庵が出てきて立ちふさがった。

二　恋慕地獄

「おめえ、魚金へ寄ったな」
　道庵が、腹の底からひびくような声を出した。
「は、はい……近所に急患があったもんですから」
　新太郎は、声を吃らせる。
「急患は、どこだ」
「河田丁の酒屋で……」
「だいぶ回り道をしてきたな。魚金へ寄っちゃならねえ——と言ったの忘れたか」
　道庵が、近よると、いきなり平手で、頰を殴ってきた。がぁんと耳鳴りがして頰がひりひりと痛んだ。
「申しわけありません」
「わしが寄るな——と言うのは、それだけの理由があるからだ。金造は、タチのよくない奴だ。おめえは、わしが美代に惚れてると思ってるようだが、断じてさようなことはねえ」
　道庵が、胸を合わすほど近づき、語尾に力をこめた。
　新太郎は、ただ、おびえ切っていた。道庵のすさまじい剣幕が、ひしひしと感じられたからだ。
「よく聞け。お美代は、金造の娘じゃねえ。わしの大恩あるお方の忘れがたみだ。金造の娘として終わらしちゃ申しわけねえわけがある。だから、養女としてもらいうけたい——と、申し入れておるんじゃ」
　新太郎は、
「は、はい……」
　とふるえ声を出し、道庵の肉塊のある顔をみつめた。

「ところが、金造は、わしの申し入れを承知しねえのだ。わしの眼力じゃ、金造の奴こそ、お美代に、みだらな野心を持っているように思える」
「ち、ちっとも知りませんもんですから」
「金造は、五十一。お美代は十七……おめえも見てわかってるとおり、あの親子は、まったく似ちゃおらん。実の親子じゃねえからだ。お美代は、みるから可憐だ。だが、金造は蝮だ。その蝮に、お美代がけがされていいのか」
　道庵の眼から、火花が散ったような気がした。新太郎は、すさまじい迫力に、ぶるっと身ぶるいをした。
「そんなことになったら、大変です」
　新太郎は、今夜にも、金造がお美代を手ごめにするような気がした。
「わしが魚金に近寄るな——と言ったのは、そのためだ。お美代を、奴の手から救い出さねばならねえ。おめえは、今日、金造がわしをゆすっていたのを聞いていたな」
「へえ……ちらりと耳に……」
「わしは、昔、金造に五十両という金を借りた。その金のおかげでわしは医者になれた。元金は、とっくに返してあるのに、ああして利子を取りにくる。わしも、恩があるので、つい、出してやるわけだ」
　道庵の頰に、冷たい笑いが浮かんだ。
　そのとき、坂下の魚金の店のあたりで、いぎたなく怒鳴る声が聞こえてきた。
「出て失せろ。二度と、ここへ寄っちゃならねえ。お美代はな、てめえみてえな叩き大工にくれるわけにゃいかねえんだ」
　金造の声だ。
　人影が、路上に倒れた。金造と思われる痩せた男が、光るものをふり上げた。魚の出刃らしい。犬が何匹も吠えたてている。倒れた男が、起き上がると坂上へ向かい走り出した。五、六匹の犬が、男を追ってきた。男が、道庵と新太郎のそばまで走ってきて、ぱったり倒れた。犬が襲いかかった。
　道庵が、男と犬の間へとび込んだ。道庵の口元から、口笛が鳴った。六匹の野犬は、まるで魔力にでもかかったように、おとなしくなり、道庵の膝のあたりへ、鼻をこすりつけてきた。
　道庵は、六匹の犬の頭を両手で順々に撫でてやった。犬は、尻尾をぶり、くんくんと鼻を鳴らした。

「留吉ッ、おめえもお美代に会いに行ったな。すんでのところで、金造の出刃に刺されるとこだったな。二度と寄りつかねえほうがよさそうだぜ。早く帰んな」
と、道庵が怒鳴った。
大工の留吉は、起き上がると、ぺこりと頭を下げ、ふらふらと坂をのぼって行った。
「新太郎も、帰れ。わしは、まだこれから用足しがある」
道庵は、後ろ向きのまま声を残すと、犬をともない、雑木林の中の道を、左へ曲がった。新太郎は、道庵の姿が林間に没すると、〈先生は、これから妾宅だな〉と思い、留吉の後から坂をのぼりだした。
道庵の妾おたつの家が、林の中にある。新太郎も、何度か訪ねたことがある。小肥りで、からだ中が色気という感じの女だ。新太郎は、道庵とおたつの夜の仕種に思いを馳せ、いやな気分がした。異相の道庵が、おたつを抱きしめている姿が、なんとしても不似合いに思われたからだ。
おたつは、柳橋辺の船宿のお酌女だったという。三年前、道庵の妾になって、林の中の一軒家に囲われている。新太郎が、道庵に用事があって訪ねたとき、おびただしい数の野良犬が、一軒家のまわりにたわむれていた。
袋町の家にも、三匹の猛犬を飼っている。道庵の犬好きは、生来のもののようだった。
「わしは、犬が好きでね。犬は、いちばんわしの心を知ってるんだ。他家を訪ねても、わしだけは、犬に吠えられたことはない。徒歩医者は、病家を訪ねる。そのたびに、吠えつかれるようじゃ、真の仁術を身につけていない証拠だ」
と、道庵が言ったことがある。
新太郎は、道庵と犬の関係を考えながら歩いた。
新太郎が、薬王寺の山門の前を右へ曲がろうとしたとき、
「ちょっと待ってくれ」
と、男の声で呼ばれた。
振り向くと、大工の留吉が、近寄ってきた。新太郎は、咄嗟に、お美代との関係を考え、体を堅くした。
「話してえことがあるんだ」
と言って、留吉が顎をしゃくった。山門へはいれという態度を示したのだ。新太郎は、不安な気もしたが、お美代との縁談が気にかかったし、金造から出刃で追いまわされたいきさつも聞きたかったので、留吉の後にしたがった。

山門の中は、ぼんやり明るかった。左手の墓地に新仏の埋葬があったらしく、大きな白張提灯があかりをつけて立ててあったからだ。
留吉が、大きな銀杏の根元の石の上に腰をおろした。新太郎は、一足ほど間隔をおいて、その脇にすわった。
「新さん、すまねえけど、お美代を俺にゆずってくれ」
留吉が、ぶっきら棒にきりだした。
新太郎は、留吉の顔を知っていた。留吉の父親が、中風で寝ているので、道庵の供をして、なんども往診に出向いたことがあるからだ。
「藪から棒で……返事に困るな」
「俺はな、三年もめえから、お美代に惚れているんだ。このごろじゃあ、寝てもさめても、お美代のことが頭からはなれねえんだ。それで、叔父にあたる家主の徳兵衛を通じ、魚金の婿になる縁談を申しこんだわけだ」
留吉の語気に、いかにも思い詰めたせつなさが感じられる。
「なるほど……」
「ところが、金造ににべもなく断わられた。俺は、仕事を休んで、お美代をつけ狙った。お美代が、買物に出たとき、俺は、自分の気持ちをぶちまけたんだ。新さん、俺は、あんたと同じ年だが、まだ女は知らねえ。また、おか惚れすることはあったが、これほど思い詰めたこともねえんだ」
「お美代さん、なんと返事をしたんだ」
「あたしは、言いかわした人がある――と言われた。その男が新さん、あんたと聞いたとき、俺は、眼の前が真っ暗になったんだ。いっそのこと、お美代を殺し、自分も死のうと考えたんだ」
留吉が、腕をのばすと、新太郎の手をつかんだ。手首がしびれるほど、力がこもっている。新太郎は、留吉のなみなみならぬ決意を感じとり、返答如何によっては、殺されるんではないか――と思った。
「そ、それで、私にお美代をあきらめてくれというんだね」
「頼む、このとおりだ」
留吉が、深々と頭を垂れた。
新太郎は、迷った。
この場で、お美代をあきらめる――と言えば、お美代と留吉の関係が、のっぴきならぬところまで突っ走る怖れがあった。

また、どんなことがあっても、お美代は忘れない——と答えれば、留吉は、狂って何をしでかすかわからなかった。
「私は、お美代さんと、正式に夫婦約束をしたわけじゃないよ。ただ、道庵先生から、魚金へ立ち寄るな——と言われているんで、これからは、会うわけにもいかない。去る者は、日々にうとし——というたとえがある。私が、会わずにいれば、自然と、お美代さんも、考え直すと思うが」
「いつまで待てばいいんだね」
留吉の言葉が、吃った。
「それは、お美代さんの心しだいさ」
「新さん、それじゃ当てのねえ話だ」
「だって、私が、お美代さんの気持ちを、こうしろと、動かせるもんじゃない」
留吉が、新太郎の襟元を、両手でつかむと締め上げた。
「おい、はっきりと言え。お美代に会って、きっぱりと断わるんだ。私は、道庵先生の言いつけで、おめえさんとは夫婦にゃなれねえ——とな」
新太郎は、息が詰まって声が出ない。苦しまぎれに、留吉の腕を払いのけると、とびのいた。留吉が、つかみかかってきた。
「やめろ。なぜ、乱暴をするんだ。私より、金造さんだ。おやじさんが、あんたの婿入りを、うんと言いさえしたら、問題はないんじゃないか」
新太郎は、銀杏の幹をまわって逃げながら、大声を出した。留吉が、
「おめえだ。おめえの心しだいだ」
とわめきながら追ってきた。
そのとき、山門の中へ、駆けこんできた男がある。
「誰だ、そこで喧嘩をしてる奴は」
と、男が怒鳴り、留吉の襟首をつかんだ。
留吉が、
「何をしやがるんだ」
と言って、男の腕を払いのけようとした。
「留、おめえは、俺を忘れたか」
留吉は、声を聞くと、にわかに地面にすわりこんだ。
「親分、かんべんしてくれ。俺、魚金の娘にのぼせ上がってるんだ。道庵とこの新太郎さんに、難題を持ち出したのは、わる気があってのことじゃないんで」
留吉は、地面に額をすりつけた。
「留、よく聞けよ。お美代は、小町といわれる美人だ。

ところが、親父の金造は、やくざな魚屋。おめえの幸せになる縁談かどうか、考えにゃいけねえ。人間というもんは、おのれの体に合った衣装を身につけねえとおかしなことになるぞ」
それだけ言うと、弁蔵が向きをかえた。
新太郎は、弁蔵の後から、山門を出た。
外に、弁蔵が待っていた。新太郎が、会釈して歩きだすと、弁蔵が肩をならべてきた。
「谷町の帰りのようだな」
弁蔵が、やわらかく話しかけた。
「はい。河田丁からまわりました」
「お美代さん、ごきげんどうだった？」
「元気で、働いて……」
「そりゃよかった」
新太郎は、弁蔵がお美代のことを口にするのが気になった。が、いやな気分はしなかった。弁蔵を、物わかりのいい目明かし——と思っていたからだ。
新太郎は、道庵の代診として、小石川、牛込、四谷、麹町辺の病家をまわり歩く。四谷左門丁の弁蔵長屋へも、なんどとなく出かけたことがある。乾物商の傍ら、十手を預かっている弁蔵は、新太郎の眼から見ても、目明かしらしい臭みがなかった。
道庵が、
「俺は、どうも目明かしが好かん。目明かしという奴は、あぶれ者で、江戸の住民にとっちゃ、ありがたい存在じゃない。八丁堀の旦那衆にとっちゃ、この上なく便利だろうが、庶民の毒虫だ」
と言ったことがある。
新太郎も、ときどき、目明かしの家へ、往診に出かけるが、原則として薬礼をもらったことがない。役得と思っているらしかった。
が、弁蔵だけは、必ず薬礼を払ってくれた。ときには、足代だ——と言って包み金をくれたこともあった。
ところが、道庵は、
「左門丁の弁蔵は、もとは盗っ人だ。あんまり近寄らんほうがいい」
と言ったことがあった。
が、新太郎は、弁蔵から、暗い影を感じたことはなかった。道庵と弁蔵と、どっちを取るか——と聞かれれば、たちどころに、弁蔵を取る——と答えたくなるほど、人間らしいあたたか味のある人物だった。
「親分は、どちらまで……」

「道庵先生の近くまで行く用があってな」
「留吉に、乱暴されるところ……ありがとうございました」
「彼奴は、気っぷのいい奴だが、お美代に対する惚れ方は、尋常じゃねえようだ。あんたも、お美代と言いかわした仲のようだが、用心しねえと、自分の首を締めることになるかもしらねえな」
　新太郎は、ぎくりとした。お美代の白い顔が、目先にちらついた。胸血が、音をたてて流れはじめた。
「さきほど、金造さんのこと、やくざな男といわれたが、そんなに悪い人間なんですか」
　弁蔵が、口ごもってから、
「どうってことはないが、気性が荒すぎる。留吉一人だけでも、あきらめさせねえと、ごたごたして捌ききれねえからね。道庵先生は、お美代を、実の親じゃない金造の手から助け出すといってるが、どんなもんかな」
　と、奥歯にものがはさまった言い方をした。

三　道庵の家

　道庵が、袋町の自宅で夕食をするのはめずらしい。ほとんど、谷町の妾宅で夜を過ごすからだ。その夜は、道庵が、太十というお気に入りの中年者を相手に、奥座敷で、酒を飲んでいた。
　新太郎は、敷居際に膝をそろえ、その日の代診の経過を報告していた。
「榎丁の米屋、越後屋の主人吉蔵、ひどい下痢、せんぶりをまじえた下痢止め三服……」
　道庵は、太十から酌をうけながら、
「熱は？」
　と聞く。
「あまり、ありません」
「よろしい」
「麹町飯田町の指物職人辰五郎、左拇指つけね切創、塗りぐすりを塗布……」
「一日に二度、はり替えるんだな」
「四谷左門丁、呉服商叶屋の娘、労咳。ただ見診をしただけです」
　道庵の眉宇のあたりが、ぴくりと動く。
「よろしい。弁蔵のところ、このごろ、病人はないか」
「ありません」
「そうか。こっちへ寄れ」

　新太郎は、ずり膝で近寄った。
　道庵が、杯をよこした。太十が酒を注ぐ。新太郎は、飲み干すと、杯を返した。
「その後、お美代のところ、立ち寄ってないだろうな」
「はい、けっして……」
「この間、俺が、谷町の坂でおめえに会ってから、おめえは、留吉と会ったそうだな」
「薬王寺の山門の中へ呼びこまれ、お美代をあきらめてくれと頼まれました」
「で、なんと答えた？」
「もう会わないから、お美代さんの気持ちもだんだんさめるだろう――と言っておきました。留吉は、私の首を締めつけ、きっぱり愛想づかしをしろ――とわめき、困りました」
「左門丁の弁蔵が、現われたようだな」
　道庵の眼が、きらりと光った。
「はい、親分がひょっこり出てきて、助けてくれました。親分は、留吉に、お美代のことはあきらめろ――と言ってました」
「おめえは、それから、弁蔵とならんで、袋町へ向かったそうだな」
　新太郎は、ぎくりとした。道庵が、見ていたのだろうか。道庵は、なぜ、弁蔵のことを気にするのか――。
「はい、ならんで歩きました」
「どんな話をした？」
「留吉が、お美代をあきらめてくれりゃいいが――ということを、私にも、あきらめろ――というようなことを、言っていました」
　道庵の眼が、閉じた。何かを、考えているように見えた。太十が口をはさんだ。
「新太郎さん、先生がお美代さんをあきらめろというのは、あんたを心配するからだよ」
　太十の脂ぎった顔に薄笑いが浮かんだ。
　太十は、もと番太郎をしていた男だ。
　袋町から北町へ抜ける三差路に、番小屋があって、長い年月、町内からお手当をもらい、駄菓子屋をやりながら、番太郎をつとめていた。
　今から一年前、番太郎をやめると、小石川水道丁の目明かし磯吉の手先となった。年は四十を一つか二つ越していて、住まいは、道庵の持家で、家賃は取っていない。しょっちゅう出入りしていて、道庵の使い走りをやり、毎月一

両二分の手当をもらっている。
二十も年のちがう若い女房を持っているが、その女おきよは、太十と夫婦となるまで、道庵の家の女中をしていた。
　新太郎は、道庵が、太十のような男を寄せつけ、太十もまた幇間のように、道庵につきまとっている関係を、いぶかっていた。
　眉間に、一寸五分ぐらいの刀傷があり、眉毛が太く、眼つきにいやしさがある。鼻はつぶれ、唇がとび出ていて、小肥りでずんぐりしている。新太郎は、太十を好かなかった。
「もう、お美代さんとは、会わないつもりです」
　新太郎は太十に答えた。
「それがいい。金造は、左門丁の親分が狙っているんだ。今に、もんちゃくが起こる。そんときになって、あんたがお美代と、夫婦約束があったとなっちゃ、かかわりあいができる。いずれは、先生と呼ばれるあんたに、傷がつく。ま、あきらめなせえ」
　太十が、顎をつき出した。新太郎は、頷いて応えた。道庵が、眼を開けた。新太郎は、道庵の視線を追い、斜めうしろを振り向いた。庭先に、金造が立っていた。
　金造が、
「ごめんよ」
　と言って、上がりこんできた。
　新太郎は、長居はまずいと考え、座をはずした。入れ代わりに、金造が食卓の前にすわった。新太郎は、隣室へ行き、襖を閉めた。
「金造、何しにきた」
　と、太十が怒鳴った。
「てめえに答える必要はねえ」
　と、金造がダミ声を出した。
「なんだと、貴様のたかりは、ネタが割れてるんだ。番屋まで、きてもらおう」
「馬鹿野郎、水道丁の磯吉親分の指図があるなら、番屋といわず、伝馬牢でもへえってやるぜ。てめえのような三下の出る幕じゃねえ」
　太十が、つかみかかったようだ。皿小鉢の割れる音がした。
「待てッ」
　と、道庵の鋭い声がひびきわたった。
「金造、また銭か」
「銭は、いらねえ」

　金造が、銚子徳利をつかみ、ぐい飲みをしているらしい。
　新太郎は、襖の外で、聞き耳を立てた。緊迫した気配が、感じとれる。
「今夜はな、けじめをつけにきたんだ」
「なんだ、言ってみろ」
「太十に、席をはずしてもらおうじゃねえか」
「太十……はずしてくれ」
　廊下へ、出ていく足音がした。
「耳の穴を、かっぽじいてよく聞け。お美代は、断じててめえにゃくれねえ」
「養女にして、安穏に暮らさせてもか……」
「お美代は、てめえにとっても、俺にとっても、大事なお方の忘れがたみだ。俺は、そのお方のご恩に報いるため、今日まで、しがねえ稼業をやって、お美代を育ててきたんだ。お美代が、いなかったら、昔の商売に戻っていらあな」
「うめえごたくだな。てめえは、もうとっくに、お美代を抱いてるんじゃねえのか」
　徳利を投げたらしい。道庵が、
「あッ」
　と叫んで、倒れる音がした。新太郎は、襖を開けると、とびこんだ。金造が、道庵に、つかみかかろうとしていた。
　新太郎は、金造に抱きつき、
「やめてください」
　と叫んだ。
「おめえさん、聞いてたのか。わるいことを聞かせたな。俺は、お美代をいのちがけで、守らにゃならねえ。年は取っても、まだまだ悪党どもに負けることはねえぜ」
　金造の声が、やわらいだ。
　新太郎は、倒れている道庵を抱き起こした。額のまん中から、血が吹き出ている。新太郎は、床の間の薬箱の中から、塗りぐすりを取り出し、紙に塗りつけ、血をぬぐってから貼りつけた。
　道庵の表情が、苦しげにゆがんだ。
「新さんが現われたんじゃ、手荒なこたあできねえ。道庵、俺は、いのちを張ってるんだ。腹ん中にたたみこんでおけ」
　金造は、立ち上がると、道庵を睨みつけ、庭先へ姿を消した。初老の男と思えぬほどの身軽さだった。

「彼奴は、気ちがいだ」
道庵は、すわり直すと、呻くように言った。新太郎は、
「先生、わけをお聞かせください」
と言った。
「彼奴のいうとおり、お美代は、大事なお方の娘だ。彼奴は、いのちがけでお美代をまもると言いやがったが、言いわけだ。ぐずぐずしてると、お美代は、けがされてしまう。早いとこ、お美代を助け出さにゃならねえ」
「お美代さんは、自分の生まれを知ってるんですか」
「知らねえ。十七年前、お美代を生むと、母親は、まもなく死んだ。父親は、お美代が二つのとき、十五年前、亡くなった。金造は、お美代を連れて、行方をくらましちまった。十年前、谷町の坂下に住むようになり、魚屋をはじめたんだ」
新太郎は、じっと道庵を見守った。塗り薬を貼った額から、一すじの血が、細く流れ出ている。その血が、道庵の高い鼻すじを伝い、道庵の襟もとに滴り落ちた。
「大事なお方とは、どなたで……」
「名前は言えねえ。立派なお方だ。俺にとっちゃ、大恩人だ。けど金造が生きてる限り、お美代の救出は、むずかしいようだ」
道庵が、肩を落とし、声を沈めた。
「人別帳は、どうなってるんです?」
「魚屋金造の娘となっている。困った」
「先生、私とお美代が、夫婦になれば、金造の手から、助け出すことになるんじゃないでしょうか」
新太郎は、思いきって口に出した。
道庵の表情がこわばり、
「ならん。お美代は、俺の娘として一、二年預かり、立派なところへ、嫁がせにゃならねえ。それが、俺のつとめだ」
と、押えつけるように言った。
新太郎は、息を飲み、首を垂れた。
「明日の晩、五つ半(九時)、おめえ、金造の家へ行け。金造は、酒をくらって寝込んでいるはずだ。お美代を連れ出せ。そして、おたつの家へ行くんだ」
道庵が、思いもよらぬことを口にした。新太郎は、答えにとまどい、道庵の顔をみつめた。血の流れは、止まっていた。
「不承知か」
道庵が、大声を出した。
新太郎は、

「いいえ……ただ……とてもできそうもないので」
と、言いわけをした。が、心の中で、〈なんのためだ。私を利用し、お美代をかどわかそうとしている。しかも、夫婦にさせてはくれない。私を、道具にするだけだ〉と考えた。
「おめえのほかに、お美代を連れ出せる者はいない。ほうっておけば、お美代は、金造の餌食になる。急がねばならん。おめえは、お美代に惚れている。惚れた女が、あんな野郎に、手ごめになるのを、指をくわえて、見てるつもりか」
「でも、金造さんが、まさか……」
「太十が、調べてある。金造は、酒をくらうと、お美代を口説いているんだ。太十が、縁の下にもぐりこんで、夜ごとの口説きを聞いてるぞ。俺は、ただ、やきもきしてるんじゃねえ」
新太郎は、返答に詰まった。
信じられないことだ。あの父と娘は、そんな仲じゃない。金造は、口こそ悪いが、お美代を心の底から、かわいがっている。世間並の父親以上に、お美代に気を配っているのがよくわかる。
お美代もまた、金造を慕っている。やさしく父に仕えている姿は、はた目にも美しい。道庵は、変だ。何か、いわくがありそうだ。太十と組んで、お美代をかどわかす考えのようだ――。
新太郎は、考えこんだ。
「おめえは、俺を疑ってるな」
「そ、そんな……」
「家主の徳兵衛が、寺大工文五郎のせがれ留吉を、婿に世話しようとしたのは、お美代の立場に同情したからだ。婿でもはいれば、金造も、お美代をあきらめると思ったからだぜ」
新太郎は、留吉の顔を、ちらりと思いうかべ、目明かし弁蔵の言葉を反芻した。
留吉一人でも、あきらめさせねえと、ごたごたして捌きがつかない――と言った。道庵が、お美代を助け出すと言ってるが、どんなもんかな――と、疑いを持った言い方をした。なぜなんだ。
弁蔵は、何かを見通している。お美代をめぐって、何か事件でも起こると考えているようだ。道庵の、お美代救出の考え方を、なぜ、知ってるのだろう。しかも、その考え方を、明らかに疑っている。
道庵は、なんとなく不審だ。言葉づかいも、医者らし

くない伝法なところがある。弁蔵親分が、疑っている道庵の考え方にしたがって、お美代を連れ出せば、何か起こる事件に、まきこまれることになる――。
「私にゃ、とてもできそうもありません」
新太郎は、ふるえ声で断わった。
「馬鹿者ッ。おめえは、俺を疑って、誰を信用するんだ。金造か。左門丁か。彼奴らが、今まで、おめえにどれだけの世話をしたというんだ。ゆきずりの人間じゃねえか。俺は、おめえの師匠だ」
「わかっております」
「じゃあ、こうしよう。おめえが、お美代を連れ出すことができたら、折りをみて、夫婦にしてやろうじゃねえか」
新太郎は、思わず、拳固を握りしめた。
「そ、それ、ほんとうですか」
「嘘をつけば、すぐばれる。おめえが、林の中のおたつの家へ、お美代を連れてくる。おたつが、お美代を預かる。お美代は、俺が、安全な場所へ匿まう。そして、一年待て」
道庵が、冷えた徳利の酒を、杯に注ぎ、一口で飲んだ。
「その一年間、おめえは、三日にあげず、お美代に会いに来させる。二人きりで、先行きの相談をしたらいいだろう。あるいは、抱き合うのもいい」
道庵の口元に、薄笑いが浮かんだ。
「一年待てというのは、金造の出方を見るためだ。金造が、あきらめるか、俺を脅しにかかるか、二つに一つだ。銭を脅し取れば、太十が、水道丁の磯吉親分に連絡をとる。御用だな」
道庵が、新太郎の肩をつかんだ。
「金造は、馬鹿じゃねえから、あきらめるほうをとるだろう。そうなったら、二人を夫婦にさせようじゃねえか」
道庵が、耳朶に口を寄せ、ささやいた。

四　夜の誘拐

新太郎は、五つ半（九時）になると道庵の家を出た。空に半月が浮かび、早い雲足に、現われたりかくれたりしている。
強い風が吹いていた。
新太郎は、着物の裾を風にとばしながら、夜道を急いだ。お美代を連れ出せるかどうか――ということより、

お美代に会えると思うと、胸がはずんだ。
〈一年後には、お美代と夫婦になれる。どこかで、長屋でも借りて、先生のところへ、通い代診として暮らせばいい。子どもを生んで、末長くしあわせにすごすことができる〉
新太郎は、お美代の美しい顔を瞼の裏にえがきながら、足をとばした。途中、三度も、木戸番でとがめられた。
「牛込袋町の医師道庵の代診、新太郎と申します。急病人があるんで急ぎます」
新太郎は、その都度、そんな口上をのべた。夜道の医者のきまりの文句だ。
谷町の坂に出た。左側が雑木林で、右側は崖になっている。月が雲にかくれた。坂の途中の林の前で、黒い人影がうごいた。犬かな――と思い直したが、人だ――と考え、足をとめた。
人影は消えた。
新太郎は、一気に坂を駆けおりる。右手の魚金の路地へ走りこむと、呼吸をととのえ、路上をふり向いた。
人の気配を窺った。誰か尾けているのか、いないのか――。犬の遠吠えがする。それに呼応し、あちこちの犬が吠えはじめた。林の中で、何匹もの犬が、狂ったように吠えだした。
人がいる。その人を、犬が吠えているんだ。留吉だろうか。太十だろうか。それとも、目明かしの弁蔵だろうか――。
新太郎は、聞き耳を立てる。
犬の吠え声がやんだ。風が、ざわざわと林を鳴らしている。新太郎は、向きを変えると、魚金の家の台所口に足をとめた。
雨戸の隙間から中をのぞいた。
ぼんやりした灯明りが見える。誰もいない。雨戸を、軽く叩く。応答がない。とんとんと二度叩く。人の気配がした。
「私です。新太郎です」
雨戸の隙間に口をよせ、声を沈めた。
お美代が寝間着姿で出てきた。
「新太郎だよ。火急の用事だ」
ふるえ声を出した。膝頭が、わななき、動悸が高くなってきた。雨戸が開く。新太郎は中へすべりこみ、雨戸をしめ、かんぬきをかけた。
お美代が、抱きついてきた。

「おやじさん、寝てるの？」
「寝てるわ」
「支度をしておくれ。二人で逃げるんだ」
お美代が、
「まあ」
と言って、腕をはなし、息を止めた。
新太郎は、お美代の耳朶へ口をよせ、
「二人で、夫婦になるためだよ」
と言った。
「なぜ……逃げなければいけないの」
「わけは、後で……さ、早く、支度を……」
お美代は頷くと、座敷へはいった。新太郎は、板の間に這いつくばり、奥をのぞいた。お美代の布団の向こう側に、金造が寝ている。はだけた胸元に黒々と毛が生えている。鼾がきこえる。雷のような鼾だ。その音が、高く低く、波を打っている。
新太郎は、心の中で、〈おやじさん、ゆるしてくれ。わる気があるわけじゃないんだ。こうするより方法がないんだ〉と、自分に言い聞かせた。
金造が、寝返りを打った。新太郎は、びくりとして後へさがった。お美代が、出てきた。縞柄の着物に赤い帯をしめて、手に風呂敷包みを持っている。新太郎は、お美代の手を取ると、外へ出て、静かに雨戸を閉めた。
しばらく立ち止まる。
また、犬が吠え出した。新太郎は、危険を感じ、坂道へ出ないで、路地を奥へすすんだ。安養寺の土塀の前通りに出た。
月が消えて、真っ暗だ。
お美代が、寄り添い、しっかりと手を握る。その手が、かすかに震えている。
「怖いの、あたし……」
「私が、ついてるよ」
「どこへ行くの？」
「林の中の、おたつの家さ」
お美代が、口を噤み、足を止めた。そして後戻りをはじめようとする。
「おたつさんとこ……いやなのかい」
「あの家は、道庵の妾宅……だから……」
二人の手が、闇の中で引き合った。新太郎は、困った。〈ここで手をはなせば、お美代は、魚金へ帰る。金造と床をならべて寝ていたから……たぶん……〉
「お美代さん、帰らんでくれ。たのむ……私と一緒になりたかないのか」

「そんなら、何も、おたつさんとこへ行かなくたって……」
「本当のこと言おう。あんたは、金造さんの子じゃない。他人なんだ。床をならべて寝てることはあぶない」
「まあ……何を言うの」
「あんたは、知らなかったのか」
「お父っつぁんだわ、あたしの……誰から言われたの、そんなこと……」
新太郎は、咄嗟に嘘をついた。
「四谷左門丁の弁蔵親分から、聞いたんだ。あんたは、立派な人の忘れがたみで、道庵先生も、金造さんも、あんたの父上に、ひどく世話になった――と言っていた」
お美代が、引く手をはなし、寄り添うと、
「まさか……あたしが」
と言って、頰が触れるほど顔を近づけてきた。
「私も、おどろいたんだ。そういえば、金造さんとは、ぜんぜん似てないし……品がちがう。お美代さんは、やさしくてきれいだ」
お美代が、黙っている。荒い呼吸が、新太郎の頰に感じられる。
「おっ母さんは？」
「亡くなったときいたよ。金造さんは、あんたを連れて、行方をくらまし、十年前に、ひょっこり谷町の坂下に、魚屋の店を出した――と言っていたよ」
「でも、お父っつぁんは、とてもかわいがってくれるわ」
「ど、どんなかわいがり方だね」
新太郎は、舌を嚙むほど、声をどぎまぎさせた。
「本当の娘として……でも……」
「何か、あったのかい」
「ときどき、お酒に酔うと、髭面をおっつけ……」
「そして、ど、どうするんだ」
新太郎の声が、せきこんでくる。
「考えると、やっぱり変なことがあったわ」
「あんたの体を……」
お美代が、黙りこくる。
新太郎は、お美代の肩をつかむ。
〈この体を、金造がけがしたんだ。やっぱり、道庵先生の言うとおりだ。金造は、悪い奴だ。なんにも知らないお美代を、自由にしたんだ。どうしたらいいんだ。俺は、それでもお美代が好きだ〉
新太郎は、そんなことを考え、つかんだ手をはなした。

「新太郎さん、あたし、逃げるわ。おたつさんのとこへ行くわ」
　お美代が、詰まった声を出し、手をさしだした。新太郎は、その手を握り、足を急がせた。崖下の道をとおり、仲丁へ出てから、林の中の細い道をのぼった。
　お美代が、足を止めた。
「誰か、いるようよ」
　と言って、新太郎の胸に顔を埋めた。新太郎は、背中へ腕をまわし、あたりに気をくばった。が、真っ暗闇だ。何も見えない。
　犬が、五、六匹、吠えかかってきた。新太郎は、ピーと口笛を吹いた。吠え声がやみ、足もとへまつわりついてきた。犬は、おたつの家で餌を与えている犬のようだった。
　新太郎が、歩こうとするが、お美代が動こうとしない。
「あたしね。お父っつぁんに、けがされていないの。それだけは、信じてくださいね」
　お美代が、泣き声をあげる。
「女と男の……何は、なかったんだね」
「ありません。でも、やっぱりうちにいないほうが……」
　新太郎は、
「それがいいよ。いつどんなことになるかもしれないからね」
　と言って、坂をのぼりはじめた。
　坂をのぼりきると、林の中に、明りのついている家が見えた。
　二人は、その家の裏口へまわり、勝手口に立った。新太郎が、低い声で、
「袋町の新太郎ですが」
　と声をかけた。
　板戸が開いて、肉付きのいい色白の女が出てきて、
「おそかったんで、心配してたんだよ。さ、お上がり」
　と言って、二人を中へ入れた。道庵の妾、おたつである。五十がらみの婆やが出てきて、ていねいにお辞儀をした。
　座敷へ通された。
　お美代が、おたつに頭を下げ、
「よろしくおねがいします」
　と、挨拶した。六畳の座敷のまん中に、お膳が出ていて、食事の支度ができている。
　二人は、おたつにすすめられて、箸を取った。新太郎

は、一杯だけご飯を食べたが、お美代は、焼き魚に箸をつけただけだった。
「あたしは二人の顔を見たとき、ほっとしたんだよ。先生から、五つ半刻をすぎれば、二人がくる——と言われていたんで、やきもきしながら待っていたのさ」
　おたつが、立て膝をつき、煙管のたばこを吹かしながら言った。新太郎は、おたつを見慣れているが、顔をそむけた。
　湯上がりらしい濃い化粧の跡が、いや味だったし、乱れた裾の間から、白肌をちらつかせている姿がきらいだったからだ。
　お美代が、
「あたしが、ぐずぐずしたもんですから」
と、伏し目がちに言った。婆やが、お膳をかたづけた。
「ゆっくりやすんでくださいな」
　と言って、おたつが部屋を出て行った。
　新太郎は、お美代と顔を見合わせた。お美代が、にっこりと笑った。
「後悔はないね」
「あなたと、二人ですもの」
　新太郎は、膝を寄せ、お美代の手を握った。その手が強く握り返された。
　新太郎は、今夜、二人でここに泊まれるかもしれないと思った。道庵先生は、金造の様子をみてから、一緒にさせる——と言ったが、今夜だけは、泊めてくれるのではないか。
　彼は、そんなことを考え、胸のときめく思いを抱いた。
「あたしたち、ここに泊まるの？」
　と、お美代も、同じようなことを考え、口に出したようだ。
「これから、どこへ行くったって、おそいし……たぶんここにいられると思うよ」
　お美代の頰が赤く染まった。
　おたつも、婆やも、物音一つたてない。部屋は、離れふうになっていて、木口もいいし、畳も真新しい。一間の床の間があって、白菊が五本、活けてある。
　新太郎は、両腕の中に、しっかりとお美代を抱えた。激情が、湧き上がり、熱い血が、体の中を音を立てて駆けめぐった。
　そのとき、廊下の襖が開いた。新太郎は、抱いている腕をはなした。

道庵が、笑いながらはいってきた。新太郎は、居ずまいを正し、頭を下げた。お美代が、顔を伏せ、膝の上の手をそろえた。

道庵が、二人の前にあぐらをかいた。

「お美代さん、わけは新太郎から聞いたと思うが、あんたはわしの大恩ある人のお嬢さんだ。金造に、あんたを預けておくのは危ない。だから、新太郎に、言いつけて連れ出させたんだ」

道庵が、そう言って新太郎を、じろりと一瞥した。新太郎は、道庵が、お美代と夫婦にさせる——と言ってくれるものと思い、眼だけで会釈をおくった。

「お美代さんのお父上は、立派なお方だった。わしは、あんたの赤ん坊のときを知っとるぜ。かわいい赤ん坊だった。わしは、恩返しのつもりで、あんたを育てる決心をして、支度をととのえ、出かけた。婆やに抱かれているはずのあんたはいなかった。金造さんが、連れて行った——と言って、婆やが泣いていた」

お美代が、

「あたしの父の名前は？」

と、細い声で聞いた。

「源兵衛という名前だった」

「仕事は、何を……」

道庵が、口ごもり、しばらく考える様子をしてから、

「金銀の地金をあきなう人じゃった」

と、堅い言葉で答えた。

「家は、どこにあったんでしょう？」

「ここから三里ほど北へ行った池袋村だよ。源兵衛という方は、町人ながら手裏剣の使い手、名人だった。つぶてで、とんでいる鳥も落とせたくらいだった。財産がたくさんあって、貧乏人にほどこしもしたよ」

お美代の眼が、輝やいてきた。

新太郎は、お美代の父親が、ひどくえらい人に思え、お美代と夫婦となることが、身分ちがいとさえ考えた。そう思って、お美代の横顔をみると、いかにも分限者の娘のように眼に映るのだった。

「道庵先生も、うちのお父つぁんも、源兵衛という人の厄介になっていたんですか」

お美代の声が明るくなってきた。

「二人とも、十四、五のころから、使われていたんじゃ。わしにとっては、親より大事な恩人、そのお嬢さんだから、あんたを立派に嫁がせるのが、わしの責任だよ」

道庵の視線が、新太郎の眼をとらえた。新太郎は、ぞっとするような冷たい光を感じとった。

「新太郎、ごくろうじゃった。これでおめえの用はすんだ。袋町へ帰ってくれ。夜道はあぶねえから、気をつけてな」

道庵の言葉が、重くのしかかってきた。新太郎は、予期に反した言葉に、眼まいを感じ、かちかちと歯を鳴らした。

五　金造殺し

新太郎は、夜道を力なく歩いていた。

涙が、ぼろぼろとあふれ出る。おたつの家から出るとき、お美代が、勝手口まで走り出てきた。

「あたしも行くわ」

と言って、お美代がまろび寄ったとき、道庵が、

「行っちゃいけねえ」

と、太い声で怒鳴った。お美代の足が止まる。新太郎は、お美代の泣き顔を、眼底に焼きつけると、草履をつっかけ、外へ駆けだしたのだ。

〈一杯食わされた。道庵に欺されたんだ。お美代は、どうなるんだ。養女にする——と言ってたが、嘘じゃないのか。俺は、馬鹿だった〉

悲しい思いが、胸を嚙む。

「お美代、無事でいてくれ」

新太郎は、風のある空間へ、大声をあげる。こだまが、はね返ってくる。足を踏み鳴らす。拳固の手を、ぐるぐるまわす。走る。そして、立ち止まる。

拳固の手で、胸をたたく。

自分の頭を、なぐる。

木の幹に、両手をささえ、首を垂れる。暗がりの中に、二つの顔が浮かぶ。お美代の白い顔に、道庵の無気味な肉塊のついた異相が重なり合う。

新太郎は、後ろを向く。林の黒い影の向こうに、ちらちらと、おたつの家の灯が見える。

道庵を殺してやろう——と考え、ぶるっと身震いをする。

〈道庵め、お美代を手ごめにするつもりだな。養女——は嘘だ。年がいもなく、お美代に惚れているんだ。ちくしょう……俺は、どうすればいいんだ〉

新太郎は、呻き声をあげる。

くるりと向きを変える。ふらふらと、おたつの家の灯

をめがけて歩き出す。
　木の幹にぶつかり、木の根につまずきながら、夢遊病者のように、歩みすすんだ。
　そのとき、
「待ちな」
　と、鋭い声で呼びとめられた。新太郎は、ぎょっとして、我にかえった。その声を、道庵と思い、胸のつぶれるほどの恐怖におそわれ、へたへたと地面に崩れすわった。
　声の主が、しゃがみこんだ。
　男の手が、新太郎の肩にのせられた。
「俺だ。四谷左門丁の弁蔵だよ」
　その声に、はっとして、新太郎は顔を上げた。
「親分ッ」
　と詰まった声を出した。
「おめえさんは、おたつの家に残してきたお美代を心配してるようだが、大丈夫だ」
　弁蔵の声が、耳朶でささやいた。
　新太郎は、思わず、弁蔵にしがみつき、
「な、なぜ、大丈夫なんです」
　と、声を吃らせた。
「見張りをつけてあるんだ」
　新太郎の眼から、うれし涙があふれた。
「びっくりしねえで、俺の聞くことに答えるんだ。金造が、殺されたぞ」
　新太郎は、
「な、なんですって、金造さんが」
　と、喉のちぎれるほどの声を絞った。
「金造は、寝てるところを、首を締められた。両手でな。今、八丁堀の旦那が、お出ましになって、検視をしている。かわいそうに、金造ほどの男でも、酒を飲みすぎたらしいな」
「誰に、殺されたんです？」
「ホシの一人は、おめえさんだ」
「私が……金造さんを……と、とんでもない。金造さんは、私が好きな、お美代のおやじさんです」
「ほんとの親じゃねえな」
　新太郎は、黙った。弁蔵が、何もかも知っている気ぶりが察しられ、無気味な思いがしたからだ。
「おめえさんは、五つ半過ぎ（九時過ぎ）、魚金の勝手口から中へはいった。たぶん、金造は、寝ていたはずだ。どうやって、金造を殺したか、ありていに言ってみ

ろ」
　弁蔵の声が、重く鋭くなった。
「お美代を呼びました。二人で逃げて夫婦になろうと言いました。お美代が支度をしているとき、板の間から、奥をのぞいたんです。金造さんが、胸をはだけ、鼾をたてて寝てました。私は、支度のできたお美代と外へ出たんです」
　新太郎は、生唾をごくりと飲んだ。そのありさまが、まざまざと眼先にちらついてきた。
「ごまかすんじゃねえ」
「嘘じゃありません」
　弁蔵が、新太郎の襟首をつかんだ。
「さ、番屋までくるんだ」
「私が、殺すはずが……」
　新太郎は、息苦しくなり絶句した。
「金造は、人別帳じゃ父親になっている。けどな、あの野郎、夜ごと、お美代の肌を楽しんでいやがった。だから、おめえは、お美代の連れ出しをはかったにちげえねえ」
　新太郎は、地面に体を伏せ、爪を立てて土を掻きむしった。お美代が、金造に犯されていたのは、事実だと思った。お美代は、ちがう――と言ったが、それらしいことも口走っていた。金造が、殺されてよかった――。
「新太郎、おめえは、金造のけだものみてえなやり方を知って、腹の煮えくり返る気持ちになったろう」
「親分、私じゃない。けど、金造が、お美代さんを犯しているらしいことは、道庵先生から聞いてました。半信半疑だったんです」
「ところが、お美代が打ち明けたっていうわけだな」
「お美代さんは、はっきり言ってくれなかったんです。けど、もしや――と、疑いは持ちました」
　弁蔵が、
「ふん」
　と相槌を打った。
「お美代さん、ほんとうに、道庵先生に、手ごめにされてはいないんですか。私は、先生を殺そうと思ったんです」
　新太郎は、地面に額を押しつけた。弁蔵が、抱え起こし、
「乞食みてえに、這いつくばるのをやめろ。おめえさんも、やがては、先生と呼ばれる人だ」
　と言った。

その声が、にわかにやさしくなった。
「おめえさん、薬王寺の山門の中で、寺大工の留吉に喧嘩を吹っかけられてから、あの野郎に会っちゃいねえかい」
「会いません」
「今夜、留の奴も、魚金をねらって坂下をうろついていやがった」
新太郎は、聞いておどろいた。
「留吉が……」
「もう一人、おかしな野郎が、魚金の屋根に乗って、様子をうかがっていたよ」
「ええッ、誰なんです」
「小石川水道丁の磯吉親分とこの手先になってる太十だ」
「太十……が。道庵先生の使い走りをやっていたあの男が……」
「あと一人、林の中から、魚金の家を睨んでいる奴がいたぜ」
「そ、それは……」
「道庵先生だ。林の中の幹のかげから、おめえさんが、お美代と手を取り合って出てくるのを待っていたんじゃねえかな。ところが、おめえさんは、出てこなかった」
「反対の方向……安養寺の土塀のほうへ出たんです」
「まちげえねえな」
「ほんとうです」
弁蔵が、おたつの家の灯あかりを睨み、腕を組んだ。
犬が吠えたてている。何匹もが、いっせいに、すさまじい吠え声をあげている。新太郎は、誰かが、あの家へ近よったものと思った。
「犬か……こまった」
と、弁蔵が、つぶやきを洩らした。
「お美代さん、大丈夫でしょうか」
と、新太郎が、ふるえ声をかけた。
「まず、大丈夫だろう。が、名うての道庵……油断はならねえ」
新太郎は、
「名うて」
と言った言葉に不審を持った。名うて――とは、よくはやる徒歩医者を言うのだろうか。それとも、女くせがわるいことを意味するのだろうか――。
「金造が、道庵をいたぶり、銭をまき上げていたという噂があるが、おめえさん知らねえかい」

弁蔵が、いきなり後ろ向きのまま、問いかけた。
「はい。ときどき、やってきて、二両、三両ともらっていたようです。もらうというより脅しのようでした」
弁蔵は、
「二人は、昔、何かで知り合った。そいつは、よくねえことにつながりがあるようだ」
と、ひとり言を言った。
「親分、道庵先生が言うには、昔、金造に借金があって、その借りは返したはずだが、ああして、銭をせびりにくる――と言ってましたが」
「昔の借り――なるほど、味のあるせりふのようだな」
「先生と金造さんは、昔、池袋村の源兵衛という分限者に、使われていたとも、言ってましたが」
弁蔵が、くるりと向きを変え、
「池袋の源兵衛」
と、びっくりしたような声を出した。
「なんでも、金銀の地金の商人とか――たぶん、かざり物や、細工物の材料の地金の商売をしていたと思いますが」
「その話、誰から聞いた」
「たった今しがた、おたつさんの家で、先生から……」
弁蔵が、
「ことによったら……」
と、自分に言い聞かせるように、声を沈めた。
「お美代さんは、その分限者、源兵衛さんの忘れがたみとか……」
「それも、道庵が言ったのか」
「はい、そうです」
「そうか、だが、顔の肉のかたまりが変だ」
「あの顔の異相……何か、わけがあるんですか」
「何しろ、古いことでな」
「親分は、何か、先生の若いころのことを、知ってるんですか」
「記憶ちがいかな。俺も、年を取って、だいぶぼけたようだ」
「金銀地金の商人、源兵衛という人……どんな方で……」
「聞いた名前だ」
「やっぱり本当なんですね」
「何がだ……」
弁蔵は、考えごとをしていたらしく、気のない返事をした。

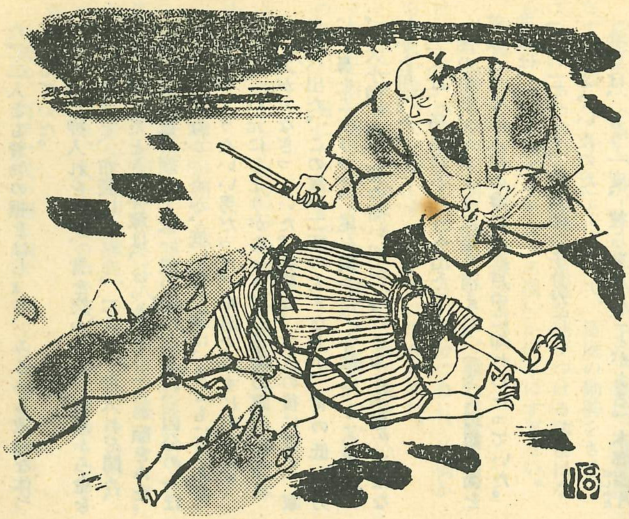
「お美代の父親が、池袋の源兵衛という人だったこと……」
「そうだったのかもしれねえ。けど、ちがうかもしれねえ」
犬の吠え声が、しずまった。
人の足音が、近よってきた。
暗がりの中から、
「親分」
と短く声をかけた男がいた。
弁蔵が、
「いいからこっちへ来い」
と答えた。男が、歩み寄ると、弁蔵の耳に口をよせ、何ごとかをささやいた。弁蔵は、闇の中を走り去った。
男が、
「俺は、弁蔵親分とこにいる平六だ」
と言って、近よってきた。新太郎は、ほっとした思いを抱いた。平六のかみさんが、病気をしたとき、なんども往診に出かけ、顔見知りだったからだ。
平六が、
「代診さん、ちょいと手を握らせてくれ」
と言って、新太郎の手をつかんだ。新太郎は、突然だったので、ぎくりとした。
平六は、新太郎の手を両手でまさぐり、
「わかった」
と言って、手をはなした。
「何が、わかったんだね」
新太郎は、怪訝な思いで聞いた。
「金造の首を締めた手が、その手じゃねえということさ」
「よっぽど、大きな頑丈な手だったんだね」
「指の短けえ、太い手だな。八丁堀の旦那の調べで見当がついた」
「誰なんだろう?」
「そいつは、わからねえ。けど、指をひろげたとき、幅はあんまりねえはずだ。代診さんの手は、指が細くて長い。だから、下手人じゃねえわけだ」
「私が、金造を殺すわけはないよ」
「殺しのわけは、ホシをとっつかまえて見なけりゃ、本当のところはわかるもんじゃねえよ」
また、犬がけたたましく吠えたてた。
新太郎は、おたつの家が気になった。お美代は無事なのか。道庵に手ごめにされているのか——。

「おたつの家のまわりに、捕方が、張り込んでるんですか」
「遠まきに、睨んでるはずだ。犬が吠えたのは、誰かが近よった証拠だ。きっと、親分だろう」
「道庵先生をつかまえるのか」
「そいつはわからねえ。太十か、留吉か、どっちかが、忍び寄るにちげえねえよ」
「私は、どうしたらいいんだね」
「決着がつくまで、ここにいてくれ。俺が、見張りの役目だ」
「じっとしちゃいられないんだ。お美代さんのことが……」
「しんぺえいらねえよ。おたつの家の縁の下に、若い奴をもぐりこましてある。二人もな。だから、お美代に万一のことがあれば、床板を押し上げ、畳をはねのけ、とびこむ仕掛けになってらあ」
平六が、うふふと笑い声を洩らした。
半月が、梢の上に顔をのぞかせた。新太郎は、大きく溜息を吐いた。お美代の体は、まず、安心してよさそうだと思った。
「平六さん、本当のことを聞かしてくれないか。うちの道庵先生と、金造さんとは、どんなつながりがあったんだね」
「そいつがわかりゃ、何もかもわかっちまうぜ。もやもやしてさっぱり見当もつかねえのさ」
そのとき、ばたばたと走る音がした。犬が、狂気のように吠えたてた。
「太十か、留吉か、どっちかが捕まったようだ」
平六が、闇を見すかしながらうわずった声を出した。

六　殺人者の顔

弁蔵は、林の中で、寺大工の留吉を追いつめた。暗がりの中で、留吉が、つまずいて転んだとき、苦もなく取り押え、縄をかけた。留吉は、縄をかけられながら、
「親分、俺じゃねえ。人ちがいだ」
と、喉をふり絞った。
弁蔵は、縄の端を木の幹にくくりつけた。
「本当は、縄なんかかけたかねえ。けどな、おめえ一人にかまっちゃいられねえから、木に縛りつけたわけだ。悪く思うな」
弁蔵は、留吉の顎を手で押し上げた。

「俺は、たしかに魚金の家へはいった。台所の雨戸に鍵はかけちゃいなかった」
「なんのためにへえった？」
「お美代を掻っさらうつもりだった」
「でも、お美代は、子どもじゃねえ。おまけに金造というあばれ者もいるぜ」
「おやじは、夜になると、いつも酒を飲んだ。酔払って寝ているから、その隙に……」
「お美代が、いやだと言ったら、どうするつもりだった？」
「うんもすんもねえ。やみくもに連れ出すつもりだった」
「おい、てめえは、金造に気づかれ、首を締めたな」
弁蔵は、留吉の後ろへまわると、結わかれている両手をつかんだ。握られている指を一本ずつほぐし、てのひらでさわった。
「俺の指に、何かついてるんですかい」
「なんにもついちゃいねえ。おめえが、魚金の中へはいったとき、お美代はいたのか」
「姿がみえなかった。行灯の灯が、消えかかっていた。座敷は、六畳二間だから、いればわかるはずだ。俺は、踏みこんだ」
「布団が二つ、敷いてあったな」
「手前の布団は、お美代のもんだ。もぬけの空だ。向こう側に、おやじが寝ていた。鼾をかいて、よく眠っていやがった。お美代が、かくれているんじゃねえかと思って、押入れを開けたが、いなかったんだ」
「金造が、眼をさまし、おめえにつかみかかってきたな」
「そ、そんなこたあなかった。俺は、やっと気がついたんだ。いつも、勝手口の戸は、内側から、かんぬきがかけてあったのに、開いていたんで、お美代が、逃げたと察しがついたんだ」
「金造の首を、いつ、締めたんだ」
「と、とんでもねえ。俺、そんなこたあしちゃいねえ」
「なんのために、道庵の妾宅へ忍び寄ったんだ」
「俺の勘だ。新太郎にゃ、とても連れ出せねえと思った。お美代を欺して連れ出したのは、妾のおたつにちげえねえと思ったんだ。けど、俺は、犬が苦手だ。近よれなかったんだ」
弁蔵は、黙って頷いた。
弁蔵は、しばらく考えてから、
「声を出すな。おとなしく待ってろ」



と言うと、その場をはなれ、おたつの家を目ざした。
犬が、近よってきた。
六匹が、弁蔵のまわりに集まり、尻尾をふった。弁蔵は、一匹ずつ頭を撫でてやった。弁蔵は、一カ月も前から、道庵の妾宅と、魚屋金造の家とのつながりを調べていた。
今から二十八、九年も前、弁蔵が、泥棒の仲間だったころ、江戸の北郊、池袋村に、〃つぶての銀兵衛〃という怪盗がいた。弁蔵とは、系統がちがうから、つきあいはなかったが、二度ほど、仕事先でかち合ったことがある。
いつも、二人の子分を連れていた。一人は、背が高く、他の一人は背が低かった。三人とも、動作が早く、盗技は巧妙だった。殺傷はいっさいやらず、どんなに厳重に戸締まりがしてあっても、苦もなく忍びこむことができた。
小石川指ケ谷丁の大地主の家へ、弁蔵が、忍びこんで、家人の寝ている座敷を物色しているとき、静かに近づく足音を感じとった。弁蔵は、危険を知り、衣桁にかけてある着物の中へかくれた。
背の高い男と、低い男が、素面のまま忍びこんでき

た。二人とも着物の裾をはしょり、みるから敏捷な体つきをしていた。
　二人が、押入れを開け、首を突っこみ、金箱から金をつかみ取ると、布袋に入れた。二人が、押入れを閉め、向きを変えたとき、弁蔵は、はっきりと二人の顔をみた。
　背の高い奴の顔が、低い奴の髷にかくれ、四分の一ほどしか見えなかったが、低い奴の顔は、まともに見えた。
　役者のようないい男だった。細面で鼻すじがとおり、色白で、口元にしまりがあった。二重瞼の眼が大きく、鋭い力がみなぎっていた。弁蔵は、二人の後に従い、家の外へ出た。この家の二匹の大きな犬が、背の低い男に、鼻をこすりつけ、尾を振った。弁蔵は、この男が、〝お犬小僧〟で、背の高い奴が、〝はやぶさ小僧〟ではないかと思った。
　二人は、通用口から外へ出た。
　闇の中を、とぶように走り消えた。つぶての銀兵衛を首領とする三人組の噂は、江戸中に知れわたっていた。
　弁蔵は、
「あの二人こそ、銀兵衛の子分だ」
　とつぶやいたのだ。
　弁蔵は、もう一度、彼らを見たことがある。本郷西片町で、銀兵衛が捕方に囲まれているのを、弁蔵は、天水桶の水の中に体を沈めながら見ていたのだ。
　銀兵衛は、ふところの手裏剣を、むらがる捕方に投げつけ、何人かが、のけぞる隙に、逃走した。背の高い奴と低い奴とが、銀兵衛を、前後にはさんで、はやぶさのように走りすぎて行った。
　弁蔵は、〈金造がはやぶさ小僧で、道庵がお犬小僧ではないか〉と思ったのである。
　すると、お美代は、つぶての銀兵衛の娘ということになる。
　が、道庵の頬には、みにくい肉塊がついている。お犬小僧は、水もしたたる男振りだった。せっかくの美男を、わざわざ、異相に変えるはずがない。
　しかし、犬が奇妙だ。
　俺の知っている〝お犬小僧〟は、不思議なくらい犬がよくなついた。泥棒仲間でも、犬は、禁物となっている。泥棒になつく犬はいないからだ。
　林の中の妾宅に、おびただしい犬がいる。野良犬らしいが、道庵によくなついているし、袋町にも犬を飼っている。弁蔵は、一カ月ほど前、金造が道庵を脅し、金をまき上げている噂をきいた。

探索してみると、犬――にぶつかった。彼は、犬を手なずけた。そうすることによって、道庵の動勢をさぐっていた。もちろんお犬小僧と道庵を結びつける確信はなかった。弁蔵の頭の中をよぎる黒いかげりにすぎない。
　弁蔵の眼の前に、おたつの家がある。
　どの部屋も雨戸が閉ざされているが、離れ座敷の窓だけは、雨戸が半分ほど開いている。子分に命じ、外側から金具を使って、少しずつこじ開けさせたのだ。
　障子に灯あかりが染まり、二人の人影が映っている。
　その窓に忍び寄った男がいた。縁の下に潜んでいた子分の二人が、男にとびかかった。
　男が、
「俺だ。何をしゃがんだ。水道丁の磯吉親分とこの、太十だ」
　と叫んだ。障子が開いた。
　道庵が、首を突き出し、口笛を吹いて犬を呼んだ。数匹の犬が、太十を押えている二人の子分に、襲いかかった。二人が、ひるんだ。弁蔵は、土を蹴ると、犬の群れの中へとびこみ、太十の首のつけ根を、十手で殴りつけた。
　弁蔵は、両手で犬の頭を撫で、ピーと口笛を鳴らした。犬は、尻尾をふって、吠え声を止めた。子分が、太十を押え、縄をかけた。
　弁蔵は、
「道庵を見張れ」
　と子分に命じ、太十を引き立てた。太十が、
「左門丁の親分、勘ちがいだ。俺は、何もしてやしねえ」
　とわめいた。
　弁蔵は、縛って林の中まで連れていくと、太十を、木の幹にくくりつけた。彼は、留吉にしたように、太十の手を調べた。手のひらの感触を知って、弁蔵の口元から、笑いがとび出した。
「太十よ。おめえ、道庵にいくらもらった。安くても三十両……」
　と言うと、弁蔵は、太十のふところに手を突っこんだ。腹巻きの間から、銀貨を何枚もつかみ取った。およそ二十両ほどの銀貨が出た。
「二十両とは、安かったな」
　弁蔵は、十手で太十の肩を軽く叩いた。
　太十が、ぎりぎりと歯を噛んでいる音が聞こえる。
「おめえは、とんだ悪党にはまりこんだもんだな。二十両もらって、金造の首を締めた。お美代を、道庵が自由

にするためだ」
「知らねえ。俺は、御用の筋があって、魚金を見張っていただけだ」
「馬鹿野郎、左門丁の弁蔵の眼は、夜でも見通しだ。てめえは、魚金の屋根にのって、台所口を見張ってたな。新太郎が、出て行く。留吉がはいり、また、出てくる。てめえは、留吉が、坂下へ出て行くと、竹樋をつたっておりてきたな」
　太十が、
「俺は知らねえ」
　とわめいた。
「おめえは、台所口から中へへえった。しばらくすると出てきて、坂下を突っきり、林の暗がりへ走りこんだ。ぜんぶ、俺が、見ていたのさ」
　弁蔵は、笑い声を立てた。今しゃべったことに自信がなかったので、笑いではぐらかしておいたのだ。
　弁蔵の手先の平六が、安養寺の土塀の上にのって、魚金の路地を見張り、太十が、台所口から中へはいると、崖下で待っていた弁蔵のところへとんできた。
「親分、太十の奴、今、中へへえりやした」
　と、平六が報告した。弁蔵は、平六と一緒に、魚金の路地へ突っ走った。
　中へとびこんだとき、金造は、布団に仰向けに寝たまま、死んでいた。しかも、たった今、殺られたことは、体のぬくみもあり、硬直もきていないのでわかった。
　弁蔵は、平六と一緒に、林の中へ駆けこみ、捜したが、太十の姿はなかった。
　弁蔵は、今、太十の肩を十手で軽く叩きながら、たぶんこうだろう——との推定をしゃべったのだ。
　太十が、がっくりと首を垂れた。
「どうだ、恐れ入ったろ」
「へえ……でも親分、あっしは、道庵先生に頼まれたんで……」
　そのとき、平六が新太郎を連れて、近よってきた。
「親分、代診さんが、どうしてもお美代に会いてえ——と泣くんで……」
　と、平六が言った。
　弁蔵は、
「そうかい、無理もねえ。その辺の暗がりで、待っていなせえ。おめえさんの女房のおやじを殺した片割れがまもなく捕まるから」
　と言った。

　弁蔵は、走った。おたつの家のまわりを、十数人の捕方が、取り囲み、少しずつ間合を詰めている。犬が、右に左に駆けまわり、吠えたてる。
　誰かが、笛を吹いた。
　捕方が、雨戸を蹴破り、中へおどりこんだ。女の叫び声がする。何かがこわれる音、怒号が、闇の静寂を引き裂いた。
　家の中の灯が消えた。
　弁蔵は、暗がりの中を、手さぐりですすんだ。見当をつけておいた離れ座敷へ踏みこんだ。十手を前へ突き出しながら、部屋の中を歩きまわった。
　誰もいない。
「お美代」と呼ぶ。返事はない。弁蔵が廊下へ出たとき、焦げくさい臭いがして、煙が廊下を這っていた。火事だ——と思った。
　燃える音がする。その方向へすすむ。ぱっと明るくなった。火だ。裏座敷のあたりが燃えている。火をめがけて走った。
　火の中に、人影がゆらめいた。捕方がおどりこんだ。
「捕った」
　という声がして、道庵が引きずり出された。道庵の手が、お美代の帯をつかんでいた。
　弁蔵は、お美代を抱き取ると、火の中からとびのき、外へ走り出た。お美代は、意識を失っていた。新太郎が、駆けよってきた。
「新さん、お美代をたのむぜ」
　と声をかけ、弁蔵は、縛されている道庵の縄尻をつかんだ。家は、ごうごうと唸りをあげ燃えさかる。弁蔵は、道庵の横顔を睨んだ。火炎のあかりをうけた端正な顔に、異様な肉塊がついている。
　弁蔵は、てのひらで肉塊を押えた。その顔は、二十数年前、弁蔵が盗っ人をしているころ、小石川指ケ谷丁の地主の家の中で見たお犬小僧の顔にまぎれもなかった。
「道庵、うまく化けたな。つぶての銀兵衛の手下、お犬小僧の捕縛だ。昔の仲間、はやぶさ小僧、後の魚屋の金造を、太十と組んで殺したことは、もはや逃げられねえ。太十が、すっかり吐いちまったぜ」
　弁蔵は、底力のある声をあびせた。
「俺が、お犬小僧なら、左門丁の弁蔵も、盗っ人ということになるぜ」
　道庵は、声をふるわせてわめいた。弁蔵は、一瞬、ぎくりとした。

「ごたくは、奉行所の白洲でわめくんだ。てめえとのこの世の別れに、聞いておきてえことがある。お美代は、無傷か、それとも、手ごめにしたのか」
「馬鹿野郎、俺は、お美代を金造の手から救い出したかっただけだ。昔の大恩人のお嬢さんだ。さもしい根性は持たねえ」
弁蔵は、お美代に眼を向けた。新太郎が、口に水をふくみ、口うつしにお美代に水を飲ませた。お美代の眼があいた。二人は、頬をすり寄せ、抱き合った。
「お犬小僧の正体を見破ったのは、てめえの犬好きだ。俺は、ふっと疑いを持った。金造が、てめえを脅かしてる噂を耳にはさんだときだ。留吉が、金造に出刃で追われ、谷町の坂を逃げるとき犬が追ってきた。てめえの口笛一つで、何匹もの犬が、尻尾をふった。犬は、野良犬だ。そんとき正体を見たぜ」
弁蔵は、道庵を引っ立てて歩き出した。

すりの季節

一　のれん分け

牛込白銀丁の酒屋上州屋の奥座敷で、祝いの宴が開かれた。長年つとめあげた番頭忠兵衛が、のれんを分けてもらい、四谷須賀丁に借家し、店を出すことになったからだ。
主人の太兵衛夫婦が、床の間を背にしてすわり、そのまえに、忠兵衛を中心として、手代、小僧にいたるまで十一人が、すわっている。
一人一人に、お膳が出て、鯛の塩焼がのせてある。太兵衛が三宝にのせた紺染めののれん一張と、白紙に包んだ銀百両を、忠兵衛の前にさし出した。
「わしの店で、のれん分けは、お前さんが初めてだ。よう辛抱してくれた。上州屋ののれんにきずをつけんよう

に、しっかり商売をやってくれ」
と、主人が、重々しく言った。
忠兵衛は、三宝を押しいただき、思わず涙ぐんだ。
「長い間、お世話になりました。ふつつか者の私に、のれん分けをいただき、ありがとうございました。ご主人さまの日ごろの言いつけを守りまして、必ず、立派な店にいたします」
忠兵衛は、ふるえ声で答えた。
宴がはじまった。手代から小僧にいたるまでが、お祝いのあいさつをしてくれた。忠兵衛は、一人一人に別れの言葉をかけた。なつかしい顔ばかりだった。
忠兵衛が、上州屋へ丁稚で住み込んだのは、十六年前、十二歳の春だ。父親は、赤ん坊のころ亡くなり、妾奉公をしていた母の手一つで育てられ、店持ちになるため、上州屋の丁稚となったのだ。
十六年間の奉公は、けっして楽ではなかった。が、こうして、のれん分けの日を迎えてみると、苦しかった思い出は薄れ、明日からはじまる店持ちとしての暮しに、胸がふくらむのだった。
忠兵衛は、主人にすすめられるまま、酒を過ごした。が、大金を持って帰るので、深酔いしないうちがいいと考え、飲みたい気持ちを押えた。
のれん分けの元手銀の相場は、京阪で五十両、江戸では百両と相場がきまっていた。百両あれば、間口二、三間の店を買い、商品を仕入れ、一年ぐらい、客がつくまでの間、気楽に暮らしていける。
が、主人の太兵衛が言ったように、のれん分けまで辛抱できる者は少ない。小僧から手代となり、番頭になって、数年経たなければ、のれん分けをしてもらえない。だから、忠兵衛としては、泣くほどうれしかったのだ。
彼は、ほどよいころをみはからって座を立った。百両の銀を皮袋に入れ、紺染めののれんをふところに入れ、上州屋の店を出た。
外は、ようやく暮れはじめ、安養寺の入相の鐘が、築地塀の中の桜を散らしていた。
忠兵衛の足が、おのずから軽くなった。
北町を抜け、薬王寺の通りへ出た。
花に浮かれた人々が、連れだって通りすぎる。酔って歌を口ずさむ職人もいた。
忠兵衛は、月末に祝言をすることになっている大番丁の八百屋の娘、おみねの顔を思い出した。
忠兵衛は、のれん分けがきまると、目明かし弁蔵の仲

介で、おみねと見合いした。十七歳のおみねは、頬が赤く、ころころした感じのかわいい娘だった。忠兵衛は、一目で気に入り、話は、とんとんとすすみ、祝言の日取りまできまった。

　須賀丁の貸家も、弁蔵の世話で借りることになった。間口二間半、奥行四間半、二階が住まいになっている。

　忠兵衛は、百両の元手銀の使いみちを、あれこれ考えながら歩いた。商品の仕入れ、店の造作、家財道具、当分の間の暮しの金などを計算した。百両の金は、それらの支出をまかなって余るほどだった。

　四谷荒木丁へはいった。

　裏通りから、三味線の音が聞こえ、にぎやかなざわめきが耳にはいった。忠兵衛は、足をとめた。一、二本、飲んで帰ろうか――と迷ったのだ。

　主人の家で飲んだ祝い酒が、多少のこっていた。忠兵衛が、酒を飲むようになったのは、三年前、番頭になってからだ。

　掛取りに出かけた帰り道に、一、二本飲むようになった。上州屋の得意先に、料理屋が何軒かあった。荒木丁は、花街で、芸者もいたし、小粋な町だった。

　笹屋という腰掛け料理屋があった。源造という主人が、板前をつとめ、おしんという若いかみさんが、女中代わりに、愛嬌をふりまき、値段も安く、よく繁盛した。

　忠兵衛は、二、三度、飲みに出かけ、顔なじみとなると、酒類一式を売りこむようになった。月末の払いもかたく、いわば上州屋の上得意となっていた。

　忠兵衛は、裏通りへ足を向けた。幅二間ほどの細い横丁に、軒をならべて飲み屋がならんでいる。笹屋――と、のれんが出ている店へはいった。

　内儀のおしんが、

「まあ、忠兵衛さん、たった今、あなたの噂をしてたとこですよ。のれん分け――おめでとうございます」

　と、愛嬌わらいをしながら言った。

「おかげさんで……須賀丁の店開きは、来月の初めとなりますよ。こちらとは、目と鼻の先、ごひいきに……」

　忠兵衛は、板前に腰をかけた。

　縄のれんをかき分けて、主人の源造がでてきた。頬骨の張った四角い顔に笑いをうかべ、

「おめでとうさんです。こりゃ、ほんのお祝いのおしるしで」

　と言って、のし紙で包んだ鯣（するめ）の束をさし出した。

　忠兵衛は、主人の心づくしがうれしかった。

「こりゃ、すいません」

　忠兵衛は、百両はいった皮袋を台の上に置くと、鯣を受け取った。

「旦那――と言わせてもらいますぜ。旦那、いかがでしょ。来月から、うちの店の酒は、一式、須賀丁のお店から入れてもらうわけにゃいきませんかね」

　源造が、そう言って、酒の燗（かん）をはじめた。

「ありがたいお言葉だが、白銀丁の本店に義理もあるんでね」

「あっしは、忠兵衛さんから買っていたんですぜ。白銀丁の上州屋さんとは、縁もゆかりもありゃしません。忠兵衛さん、いや、旦那が、同じ四谷の須賀丁に店を持ったとなりゃ、旦那のとこの酒だけを仕入れてえんでさぁ……いけませんかね」

　源造が、そう言って、顎をつき出した。忠兵衛は、その言葉が、涙の出るほどうれしかった。源造は、荒木丁ではなかなか顔がきいた。二十数軒ある同業者の間でも、もめごとがあれば、源造のところへ相談を持ちこんできたし、祝儀、無祝儀に際しても、源造の裁断できまるほどだった。

　だから、忠兵衛としても、源造の取りなしで、荒木丁の花街の酒類を、一手で売りこみたい野心があった。

「ありがたい話だ。いずれ、白銀丁のご主人の許しをもらっておきますよ」

「この荒木丁だって、あっしが声をかければ、旦那の店から、仕入れるようになりますぜ。あっしは、どういうもんか、旦那が好きなんでさあ」

　源造が、燗のついた酒をさし出した。おしんが、つまみ菜のおしたしを小皿にのせて持ってきた。

　忠兵衛は、燗のきいた酒を飲みはじめた。主人宅のご馳走酒より、自分の金で飲む酒のほうがうまかった。

　おしんが気をつかって、何かとうまい物をつくってくれた。忠兵衛は、源造とおしんが、だいぶ年のちがいがあるのが、気になっていた。

　源造は、四十七、八歳のはずだが、おしんは、二十一、二歳だった。ぬけるほど肌が白く、二重瞼の大きな眼は、水をたたえたように輝やいている。

「旦那、あんまりご酒をすごしちゃいけませんよ。おみねさんが、心配しますよ」

　と、おしんが言った。源造が、

「旦那は、一生に一度の祝い酒だ。うんと飲んでくだせえ。今夜の勘定はいただきやせんから」

と言った。
忠兵衛は、源造の言葉が気に入った。思わず、六本の酒を飲んだ。おしんが、源造といい争いをして、後の酒を出そうとしなかった。忠兵衛は、あきらめて立ち上がった。
足もとをふらつかせ、皮袋をさげ、鰯の束を、ふところに入れた。

忠兵衛は、大通りへ出た。
須賀丁へ抜ける四辻を渡るとき、米俵を積んだ大八車にぶつかりそうになった。忠兵衛は、足もとをもつれさせながら、車をよけた。
車のかげから、手拭で頬冠りをした男が出てきて、忠兵衛の胸にぶつかった。彼は、よろめきながら横転した。ふところから、鰯の束がとび出した。忠兵衛は、手をのばすと、鰯をつかんで立ち上がった。
須賀丁の通りへはいった。借りたばかりの自分の家が、見えてきた。忠兵衛は、笹屋夫婦の心づかいを思い出し、
「荒木丁の花街をぜんぶ得意先にできれば、たちまち、江戸でも名うての酒屋になれる」
と、つぶやいた。
百両が、二百両になり、千両にもふやすことができる――と思い、皮袋の金を思い出した。なかった。手にさげてきたはずの、皮袋は、影も形もなかったのだ。
忠兵衛は、ぎょっとして立ちすくんだ。背筋へ冷たい水を流しこまれたように、肌が粟立った。酔いが、一気に吹っとんだ。
忠兵衛は、後ろを向いて走った。四辻で、米車をよけようとしたとき、車のかげから出てきた男とぶつかり、転んだことを思い出した。
四辻へ行ってみた。
暗がりを、ときどき、人が通るだけでひっそりしている。忠兵衛は、からだをかがめ、転んだあたりを捜しまわった。皮袋は、ない。
ぼんやりと、路上を眺めていた。笹屋を出るとき、おしんが表までおくってきた。鰯をふところに入れ、皮袋は、たしかに右手でさげていた。
四辻で転んでから、記憶がない。手拭で頬冠りをした男の胸にぶつかった。転んだ。鰯をつかんだ。須賀丁へ向かって歩いた。
〈皮袋は、四辻でなくなった。転んだとき、落としたの

か。頬冠りの男とぶつかったとき、奪われたのか。どっちかだ〉
捜すあてはない。
忠兵衛は、足なえのように路上に崩れすわった。〈店はだめになった。祝言もだめだ。十六年間の奉公も、むだになってしまった。酒だ。酒のせいだ。私は、酒屋だ。その私が、酒のため、一生を台無しにしてしまった。どうする？　どうすることもできない〉
彼は、ふらふらと立ち上がると、自分の家へ向かって歩きだした。
家に着いた。
裏口へまわり、台所口から中へはいる。手さぐりで、居間へ這いすすみ、行灯を見つけ、火をつけた。
家の中が明るくなった。
片隅に、布団が敷きっ放しになっている。寝巻と、細帯が、掛布団の上にほうり投げてある。調度は何もない。のれん分けの銀をもらって帰り、明日から、買いととのえるはずだった。その銀は、なくなってしまった。
忠兵衛は、布団に俯伏せになると、声をあげて泣いた。
彼は、細帯をつかむと、台所へ戻り、流し台に乗って、帯を梁に掛け、首がはいるくらいの輪をつくった。
〈死のう。死ぬよりほかに方法がない。私は、おろか者だった〉
忠兵衛は、帯でつくった輪の中に首を入れた。全身が、こきざみに震え、眼先が真っ暗になってきた。
流し台からとびおりた。
忠兵衛は、舌を噛んだ。正月の鮭のように、体がぶらさがり、ゆれ動いた。意識が、遠くなった。夢うつつの中で、「南無阿弥陀仏」と言ったような気がした。
忠兵衛が、気がついたとき、眼の前に、鳴海屋弁蔵がすわっているのが、眼にはいった。四、五人の顔もならんでいる。
「気がついたか」
と、弁蔵が言った。
「死ななかったんですか……私は」
忠兵衛は、ふるえ声を出した。首のあたりが、痛んだ。
「さ、わけを言うんだ。俺は、祝言の人集めの相談があるんで寄ってみた。裏口から、あかりが洩れていたんで、おめえが、白銀丁から戻ってるとみて、中へはいった。ところが、ぶら下がっていた。びっくりしたぜ。平六も一緒だったんで、二人で、おめえを助けた。医者も呼んだ。幸い、助かってよかった」

弁蔵が、やさしくいきさつを語った。
忠兵衛は、皮袋に入れてきた百両の銀が、なくなった経過を、順序立てて説明した。
「荒木丁の笹屋で、何本飲んだんだ」
「たしか、六本ぐらい……」
「お祝いに錫の束をもらい、今夜の飲み代は、いらねえといわれたんだな」
「源造さんは、前々から知合いで、のれん分けを、ひどくよろこんでくれました」
「おかみさんに、送られて出るときは、皮袋を右手にさげていたんだな」
「さようで……四辻で、車をよけ、頬冠りの男……」
「わかった。で、路上にとび出した錫を拾うとき、皮袋、どうなっていたんだ」
「おぼえがないんで……須賀丁へはいり、我が家が見えはじめ、気がついたんです」
弁蔵が、腕を組んだ。
忠兵衛は、その顔を見上げていたが、むっくり起き上がると、
「やっぱり、死ぬよりほかに、方法が……」
と言った。
「当座の必要な金、十両ばかり、俺が貸そう。祝言は、予定どおりやるよ。その金で、こぢんまりと、あきないの支度をするんだ」
「でも、それじゃ……あんまり……」
「俺は、目明かしだ。盗っ人を捕まえ、百両を取り戻すのが、俺の仕事だ」
弁蔵が、重い声で言った。

二　笹屋(ささや)の内儀(ないぎ)

おしんは、主人源造の眼が、台の上の皮袋に注がれているのが気になってしかたがなかった。
上州屋の忠兵衛が、いい気分で酒を飲んでいる。源造が、歯の浮くようなお世辞を言ったり、調子を合わせているのを見ていると、不吉な予感がした。
おしんは、縄のれんの奥へはいったり出たりしながら、源造の動作を見守った。源造の視線が、皮袋へ注がれるたびに、おしんは、動悸を波うたせていた。
源造が、忠兵衛に、しきりに酒をすすめる。
「今夜の勘定は、いただきませんぜ」
と、源造が言ったとき、おしんは、主人の腹の中を、

はっきりと読みとった。
おしんは、忠兵衛に、酒を飲ませたくなかった。出入りの酒屋の番頭として顔なじみだったし、忠兵衛の実直さが好きだった。
おしんは、源造が昔のクセを出して、忠兵衛の皮袋を、狙うのではないか——と心配した。はらはらしながら、二人のやりとりをみているうちに、忠兵衛は、ひどく酔ってきた。
おしんは、たまりかねて、とび出していくと、酒をやめさせた。源造が、怖い眼でおしんを睨んだ。が、おしんはひるまず、酒の追加を押えた。
忠兵衛が、ふらつく足取りで出ていくのを見送った。皮袋をぶらさげ、右に左によろめきながら、忠兵衛の姿が遠ざかっていく。
そのとき、裏口から源造が出て行った。手拭で頬冠りをしで、忠兵衛の後を追うように走った。おしんは、咄嗟に、皮袋が危ない——と思った。
「茂吉、茂吉……」
と、大声で呼んだ。奥から、十八、九の若い衆が走り出てきた。
「茂吉、うちの旦那の後を追いかけな。たぶん、上州屋の忠兵衛さんの皮袋を狙うんだよ。あの皮袋を盗まれたら、あの人、それこそ首をくくっちまうよ。お前、旦那を尾け、例のクセを出すかどうか……」
おしんは、息が切れるほど、早口で言いつけた。茂吉が、
「わかった。見とどけりゃいいんですね」
と言って、走り出した。
おしんは、茂吉の姿が、曲がり角で消えると、店の中へ戻った。源造が、忠兵衛の皮袋を狙うありさまが、頭の中で明滅した。〈あの人の皮袋、無事であってほしい〉と、祈るようなつぶやきを洩らした。
客が三人あった。
上のそらでお世辞を言い、酒の燗をつけた。忠兵衛、旦那、茂吉……三人がどんな出会いをするか、気持ちがたかぶっていた。
お銚子を出し、おつまみ物をそろえると、表へ出た。往来する人々の肩越しに、遠い夜空があるばかりで、安否はわからない。なんども、出たりはいったりしていた。
おしんが、源造の家内になったのは、次のようないき

さつがあった。

おしんは、神田美土代丁に住む、すりの親分、芸州屋藤吉の娘だった。藤吉は、広島の生まれで、飾り職人だったが、手先が器用だったため、すりの道を覚えた。

おしんが、父から聞いた話によると、江戸市中のすりたちが、盗んだ金銀の飾り物を、つぶしてもらうため、藤吉のところへ持ちこんだ。女のかんざし、煙草入れ、印籠などだった。藤吉は、これをつぶし、金銀だけを取り出し、時の相場より安く、買い入れていたという。

藤吉は、やがて自分で盗みを働くようになった。彼は、財布を結んである紐を切る方法を案出した。右手の中指と薬指に、指輪のようにはめこむ刃物を作った。すり仲間の間で、紐切り藤吉——の異名が知れわたり、飾り職人の傍ら、すりの親分となったのだ。

源造は、藤吉の子飼いの子分だった。十五歳のときから、藤吉の家に住みこみ、すりの道を叩きこまれた。内弟子が十人もいて、通いの者、一家をなしている者を入れると、紐切り一家は、百人を越えるほどとなった。

間口四間の店構えは、堂々としていたし、裏手につづく総二階の家は、大店らしい落着きを示していた。

おしんは、藤吉の妾の子として生まれた。が、正妻に子どもがなかったため、乳ばなれすると、美土代丁の家に引き取られ、真綿でくるまれるように育てられた。ところが、おしんが九歳のとき、藤吉が病没した。

紐切り一家の跡目を誰が継ぐかについて、源造と勘吉が争った。勘吉は、源造より年長者だったが、すりの腕は、源造のほうが上だった。

一家が、二派に分かれ、抗争をつづけているとき、差し口をする者があって、紐切り一家は、手入れをうけた。勘吉以下、多くの者が検挙された。が、源造は、十歳になったばかりのおしんを連れ、逃走した。

彼は、内藤新宿の料理屋、ひさご亭の見習い板前となり、主人の長屋に住まわせてもらい、おしんを育てた。源造は、包丁さばきが上手で、藤吉の家の住みこみ小僧になったころから、見よう見まねで、料理のコツを覚えていた。

源造は、ひさご亭で五年間辛抱した。おしんが、十五歳の春、荒木丁の小料理屋を、居ぬきで買い取り、笹屋と名づけた。

おしんは、源造によって女にさせられた。愛情とは、かかわり合いのない動物的な結合のようであった。おしんは、今まで、その折りのことを、ときどき、思い出す

ことがある。

胸のつぶれるほどのおののきに震え、源造の行為を見ていた。源造が、飢えたけもののように見え、四肢を硬直させ、歯を食いしばっていた。おしんは、そのときのことを思い出すたびに、肌寒い感じを持つのだ。

源造は、四十七歳となり、おしんは二十一歳になった。店は繁盛し、暮し向きは楽だし、商売に興味もあったが、おしんの気持ちは、必ずしも安定していなかった。

おしんは、自分の心の中をかえりみることが多かった。

〈あたしは、やっぱり源造がきらいなんだわ。どこがきらいか——と言われると返答できないけど、性が合わないのね。あの人と向き合ってご飯をたべるのがいやだし、夜の床も、あたしから言い出して、別にしているわ。やっぱり、あの人がいやなのね〉

と、おしんは、自分に言い聞かせることがあった。

ことに、桜が開きはじめるころになると、おしんは、源造をまるで仇敵のようにきらい出す。それは、〃すりのかき入れどき〃につながる心のうごきのようであった。

春は、すりの季節だ。

江戸の市民は、四季のうち春を好む。春の象徴は桜だ。どこの町へ行っても、桜を見ることができる。川の土手、屋敷、神社や寺の境内、それらが花一色で色どられると、市民の心は浮き立ってくる。

すりがもっとも働きやすいのはこの季節だ。

源造も、春がくると、子どものころから体に沁みこんだ〃すりの虫〃がうずくらしい。笹屋の店で、包丁を使っていても、外の人通りが気になり、眼の色が変わってくる。そして、黄昏どきになると、店をほったらかして外へ出ていく。

出ていけば、必ず仕事をしてくるのだ。おしんは、そんな源造をみるたびに、眉をしかめ、〈また、病気がはじまった〉と、つぶやく。源造が戻ってきて、奥の間で、盗んできた金を数え、財布を、畳をあげ、縁の下へほうりこむ。

おしんは、襖のすきまから、中を覗き、体をふるわすのだ。

おしんは、自分の父親が、すりの親分だったことを知っている。父親に死別し、源造に育てられるようになってからも、自分の体の中に、盗賊の血が流れていると思うと、自分がけがらわしいものとさえ思った。

盗っ人につながる自分を嫌悪する思いが、源造を憎む気持ちになったようだ。おしんは、何度も、ここから逃げ出したいと考えながら、ずるずると歳月を重ねてきたのである。

夫婦の絆は、自分でも不思議に思うほど感じなかった。どんなにきらいな男でも、夜ごと、肌を合わせていれば、離れがたい情愛が湧いてくるものらしいが、おしんは、露ほども、そんな思いを抱いたことがなかった。が、源造のほうでは、おしんにおぼれ切っているようだった。

「おめえに情夫ができたら生かしちゃおかねえ」

と言ったことがあるからだ。

源造の後を追いかけて行った茂吉が、息をはずませて戻ってきた。

おしんは、裏口の物音に、それと知って、縄のれんの奥へはいった。茂吉が、額に汗を滲ませ、

「旦那は、須賀丁へはいる四辻で、忠兵衛さんの皮袋を……」

と、喘ぎながら言った。

おしんは、「やっぱり……」と詰まった声をあげ、茂吉の顔をまじまじとみつめた。

茂吉の涼しげな眼が不安げにまばたいた。輪郭の小さな、子どもっぽい顔をしている。年は十八歳になっているが、まだ、母親の肌を恋しがるような感じだ。

目鼻立ちがととのい、どことなくひ弱で、飲み屋の小僧にしておくのは、もったいないくらい品がある。

茂吉は、源造が、内藤新宿の長屋に住んでいるころ、隣家の息子だった。父親は、大道の売卜者で、以前は、佐竹藩の武士だったという。その父親が、流行病いで死んだ。茂吉は、十五歳になっていたが、ほかに頼るところがないので、源造を頼ってきた。

源造は、当初、茂吉を引き取るのを渋ったが、おしんが、かわいそうだから引き取りたい——と強く言ったので、小僧として住み込ませるようになったのである。

「旦那は、どうやって、皮袋をすり取ったんだね」

「米をいっぱい積んだ大八車がきたんです。忠兵衛さんは、車のかじ棒にぶつかりそうになって、よろけたんです。そのとき、うちの旦那が、車の右脇から走り出し、忠兵衛さんにぶつかりました。あの人は、道にころげ、ふところから、鰑をとび出させ、皮袋を手から放しました。そのときはもう、旦那がつかんでいたんです」

茂吉が、そう言って生唾を飲みこんだ。

おしんは、眼の前が真っ暗になるような気がした。

〈源造は、根っからの盗っ人なんだわ。桜の花が咲くころになると、盗っ人根性が頭をもたげてくるんだわ〉

おしんは、太い溜息をついた。

「おかみさん、皮袋には、いくらはいってるんですか」

「銀百両……どうしよう？」

「つかまるんですが」

「百両のすりは、江戸でもめったにない事件だよ。忠兵衛さんは、きっと番所へ訴えて出るにきまってるよ」

「旦那が、捕まったら、この店、どうなるんです？」

茂吉が、おしんの耳朶で、呻きに似た声を出した。

「旦那は、お仕置……困ったわ」

「皮袋を、旦那から取り戻して、忠兵衛さんに返したら……」

茂吉が、低い声で言った。

そのとき、裏口に、足音がした。

おしんは、茂吉からはなれ、店へ出た。

なじみの客に冗談を言いながら、奥の気配に聞き耳を立てていた。

「何か、変わったこたあ、なかったか」

と、源造が茂吉に聞いた。

「へえ、なんにも……」

「外は、花見気分だ。浮かれた連中の姿を見てると、夜桜でも見物に出かけたくなったぜ」

「そんなに、人混みで……」

「春は、いいもんだ。店、客がいるようだから、手伝ってこい」

源造は、奥座敷へ上がり、茂吉が、縄のれんから顔を出した。おしんは、茂吉の耳もとへ口を寄せると、

「旦那が、皮袋をどうするか、気どられないように、見ていておくれ」

と、低い声をかけた。茂吉が、奥へ引っ込んだ。

おしんは、酒の燗をしたり、おつまみ物の支度をしながら、考えこんだ。

〈今夜のうちに、皮袋を取り返し、気づかれないように、忠兵衛さんに戻す方法はないもんだろうか。そうしなけりゃ、御用の手が、きっと踏んごんでくる。皮袋を知っているのは、あたしと源造だけだ——としゃべったら、のがれる手はないわ〉

奥の気配は、物音すらしない。

客が、酒を追加した。煮物の鍋が焦げそうになった。おしんは、われに返り、こまめに手をうごかした。
　客が帰った。おしんは、縄のれんの間から、奥をうかがった。茂吉の後ろ姿が見える。襖にへばりつき、座敷を見ている。茂吉が、襖からはなれ、勝手場へ行き、洗いものをはじめた。
　おしんの眼と、茂吉の視線がぶつかった。茂吉の眼が、まばたいた。おしんは、茂吉から眼をはなすと、入口に眼を向けた。そこから、ぬっと、目明かしがはいってくるような気がしてならなかった。
　皮袋……どうする。源造の眼をかすめ、奪い返すのは、大変なことだ。困った――。
　そんなことを考えていると、源造が、店へ出てきた。
「おしん、一本つけてくれ」
　源造は、おしんの右脇の樽の上に腰をおろした。おしんは、ふるえる手つきで、酒の燗をつけた。
「花見だというのに、今夜は、客がすくねえようだな」
　源造の声は、ひどくはずんでいる。
「花どきは、例年、こうなんですよ。桜の下で飲む人が多いからね」
　おしんは、燗のついた酒を、湯呑茶碗になみなみと注いだ。
　源造は、喉の乾きをいやすように、一気に飲み干した。

三　真昼の情事

　その翌日――。
　朝から、茂吉が籠を背負って買い出しにでかけた。店で使う小料理の材料を、仕入れに行くのだ。
　おしんは、店の前を掃くふりをして、茂吉を送って出ると、
「旦那、皮袋をどこへ仕舞ったんだい」
と聞いた。
「座敷のまん中の畳をあげ、袋ごとほうりこみました」
　茂吉の眼が、不安げにまばたいた。
「やっぱり……誰にも言うんじゃないよ。あたしが、なんとかするから」
「俺、怖くて仕方がないんです」
「仕入れの帰りに、須賀丁の忠兵衛さんとこへまわって、様子を見てきておくれな。首でもくくったら大変だからね」
「やっぱり、皮袋を盗んで、返すんですか」

「そのつもりだよ」
「でも、旦那に気づかれるにきまってるが」
「だから、考えてるんだよ」
　茂吉は、頷くと歩きだした。
　おしんは、その後ろ姿を見送りながら、ふと、いまわしいことを考え、ぶるっと身ぶるいをした。
　十八歳になった茂吉の体が、気になって仕方がなかった。体つきこそ小柄だが、目鼻立ちのととのった顔に、若者らしい張りが出ていたし、おしんと視線が合うと、おどおどして眼をそらした。
　おしんは、そんな茂吉に、ひどく興味があった。材料の仕込みをしながら、さりげなく手を握ったことがあった。茂吉が、びくっとして、手を引っ込めた。
　おしんが何気なく頬をおっつけたことがあった。茂吉は、顔をそむけ、かちかちと歯を鳴らした。初心な動作が、おしんの胸をゆさぶった。
　が、源造の眼をかすめ、茂吉を抱きたいと思うほど、積極的な気持ちにはなっていなかった。茂吉と一つ家で暮らし、朝夕、茂吉の姿を見ているだけで、張りがあったのだ。
　源造は、おそくなって眼ざめると、おしんの支度をした朝めしを食べた。店へ出て、往来へ眼を注いでいる。
　おしんは、縄のれんの奥から、源造の後ろ姿を眺め、〈皮袋が、病みつきになったんだ〉と思った。
　源造の動作に落着きがなくなり、広くもない店の中を、ぶらぶら歩きまわる。すりの仕事に出ようか、出まいか迷っているらしい。
　陽ざしが明るくなり、四つ半刻（午前十一時）となった。
　源造は、板前の内側から、往来を睨んでいたが、
「おしん、ちょっくら出てくるぜ。日暮れめえにゃ、戻ってくるぜ」
と言うと、すばやい動作で、外へ出て行った。
　おしんは、
「気をつけて」
と、声をかけ、暗い気持ちに沈んだ。
　忠兵衛から奪った銀百両が、ねむっている源造の盗みごころに火をつけたようだ。すりは、すり取るときの興奮が、忘れられないらしい。ずしりと重みのある手ごたえ。狙った獲物がまんまと手にはいったときの快感。ことに、奪った金が、思いもよらず大きかったときのよろこび……。

乞食は三日やったらやめられない——というが、すりの興奮とはくらべものにならない。源造もまた、忘れがたかったのだろう。

おしんは、息を詰め、源造の後ろ姿を見送った。大きな不安が、かすめた。源造が、御用になったらどうするか、笹屋の店は、どうなるのか。あたしは、どうやって生きていけばいいのか——。

おしんが、考えこんでいると、茂吉が戻ってきた。肩に紐がめりこむほど、魚や青物を籠に入れていた。茂吉は、台所の土間に、籠をおろすと、迎えに出たおしんに、

「ただいま」

と言って、奥座敷の気配をうかがった。

「旦那は、いつもの病気が出て、でかけたんだよ」

おしんは、そう言って、座敷へはいった。茂吉がはいってきた。

「忠兵衛さんに会ってきました」

「で、百両盗まれ……どうしていたんだね」

「左門丁の弁蔵親分が、十両の金を貸してくれたんで、まがりなりにも、来月店開きをして、大番丁の八百梅のおみねさんと、祝言をする——と言ってました。なんでも、あの晩、百両を奪られたんで、台所で首をくくり、気を失ってたとき、親分に、助けられた——と言ってました」

おしんは、弁蔵——と聞いてぎくりとした。源造が、

「左門丁の目明かし弁蔵は、もとは名の知れた盗っ人だ。ただの目明かしじゃねえ。怖い男よ」

と、何かの話のついでに、口走ったことがあるからだ。

おしんは、九歳まですりの親分の子として育ち、十歳のとき、源造と逃げるまで、すりの家の様子を見ている。すりがいちばん怖いのは、目明かしだった。

目明かしにも、ぴんからきりまである。正業を持たず、たかりばかりをしている目明かしは、鼻薬をきかせれば、見て見ぬ振りをしてくれる。

が、正業のある目明かしは、そうはいかなかった。十手の威力をふりまわしたくなるからだ。まして、前歴が、夜の稼業に足を踏み入れたことのある目明かしは、眼の上の瘤だった。歩いている姿を見ただけで、看破されてしまうからだ。

「やっぱり、弁蔵親分の出番となるんだね」

「まちがいありません」

「すると、旦那は、弁蔵に尾けられてるかもしれないね」

おしんは、思わず茂吉の手を握った。茂吉が、手を引っこめようとした。

おしんは、その手をぐいと引き寄せた。茂吉が、呼吸を荒らげ、唇をわななかせた。

「茂吉、よく聞いておくれな。旦那は、捕まるよ。そのとき、左門丁の親分が、ここへ踏んごんできて、家捜しをするにきまっている。皮袋にはいった百両が出てきて、旦那のお仕置の証拠となるんだよ」

茂吉は、答えず、おしんをみつめている。

「あたしは、ほんとのこと言うと、旦那なんか、大きらいなんだよ。でも、旦那にお縄だけは掛けさせたくない。笹屋のあるじが獄門になったとすると、商売は、できやしないじゃないか」

「そ、そりゃそうです」

「だから、皮袋を、こっそり忠兵衛さんに、返しちまいたいんだよ」

「ど、どうやって……」

「あんたに、それをやってもらいたいのさ」

おしんは、茂吉を抱きすくめた。茂吉の体が、両腕の中で、ふるえている。

「あたしは、お前さんが好きなんだよ。なろうことなら、二人で、ここを逃げ出して、どこか遠いところで、暮らしたいと思っているんだよ」

おしんは、茂吉の頰に頰をすり寄せ、はずんだ声をかけた。茂吉が、

「そ、そんなこと……」

と、吃った声をあげた。が、もはやおしんの腕の中から、逃げようとはしない。

おしんは、狂気のように茂吉の唇を吸い、抱いたまま倒れ伏した。それは、夢をみているような行為だった。源造の手なれた仕種による夜のいとなみとはちがったもので、胸のつぶれるほどの感動のともなうもののようであった。

おしんは、茂吉の童貞を奪った。

「俺、ど、どうしたらいいんだ」

茂吉が、泣き声をあげて、おしんにしがみついた。

「あたしの言うとおりにしておくれ。あたしは、死んでもあんたを放しやしないよ。旦那が、捕まるか、うまく逃げることができるか。どっちに転ぶかわかんないけど……二人が一緒になれる段取りを、きっとつけるから……」

おしんは、真剣な表情で言った。

「皮袋……縁の下にある」
「それを、忠兵衛さんに返したほうがいいと思うんだけど……」
「俺も、そう思う」
二人は、座敷のまん中の畳を上げた。床板が一枚はずれるようになっていた。茂吉が、腹這いになって、首を入れ、皮袋をつかみ出した。もとどおりに床板をはめ、畳を敷いた。
「この金……忠兵衛さんに、知られないように、須賀丁の家へ、ほうりこんでおくれ。忠兵衛さんの様子をうかがい、外へ出たとき、中へはいればいいじゃないか」
おしんが、皮袋を、茂吉の膝の上にのせた。茂吉が、黙って頷いた。
皮袋は、その日のうちに、忠兵衛の家へ戻された。茂吉が、おしんにそのいきさつを語った。
茂吉は、皮袋をふところへ入れると、外へ出た。ずしりとした重さがあり、ふところがひどくふくらんでいた。
須賀丁の忠兵衛の家のまわりをうろついた。店に大工がはいっていて、忠兵衛が造作の指示を与えていた。茂吉は、裏通りへまわり、細い横丁をはいると、忠兵衛の家の勝手の前まできた。
あたりを見まわした。
人影はなかった。茂吉は、台所へ踏みこむと、味噌瓶の蓋の上に、皮袋を置いた。足音を忍ばせ、外へ出ると、裏通りへ走ったのである。
おしんは、ほっとした思いを抱いた。
「よかったわ……これで」
「旦那は、尾けられても、大丈夫ってわけですね」
「何か、どじを踏まなけりゃね」
「でも、弁蔵親分は、皮袋を狙った奴を、うちの旦那と見当つけてるんではないですか」
「だから、皮袋を戻したのよ。旦那はあの道の達人……めったなことじゃ、現場をつかまれないのよ」
「俺、おかみさんが、皮袋を戻した意味を考えたんだが、むしろ、皮袋を縁の下に入れっぱなしにしといたほうがよかったんじゃないか。旦那は、いつか捕まるんじゃないか。だったら、皮袋、あったほうが……」
茂吉が、口重くそんな言い方をした。
おしんは、眼をみはった。皮袋を戻したことは、源造を助けることになる。源造が助かれば、茂吉との関係は、苦しいことになってしまう。源造が、すりの仕事で

外へ出なくなれば、いつもこの家にいる。二人が、抱き合うことなど、とうてい、できるはずがない——。
おしんは、
「そうだったわね」
と言って、茂吉の顔を、まじまじとみつめた。茂吉は、以前のように、眼をそらすことなく、じっと見据えている。
燃えるような眼だ。〈たった一回きりの交わりで、こうも変わるものかしら。茂吉は、男になったんだわ。あたしをさらって、逃げる——と言い出すかもしれない〉
おしんは、生唾を飲みこんだ。
「俺、ちいさいじぶんから、おかみさんが好きだった。源造さんは、きらいだった。ここへきて、なんども逃げようと思ったが、思いとどまった。おかみさんがいたからだよ」
茂吉が、呻くように言った。言葉づかいも、従来とちがっている。おしんを、主人と扱ってはいない。
「でもね、あたしは、忠兵衛さんを一刻も早く安心させたかっただけ……もし、左門丁の親分がきたら、縁の下を見せてやれば」
と言って、語尾を飲んだ。
縁の下には、源造がすり取ってきた空の財布が、いくつもころがっている。弁蔵親分が、それをつかめば、有無をいわさず縄をかけるだろう——。
「でも、俺が、皮袋をつかみ出すとき、財布は、なんにもなかった。きっと、旦那が、始末したんじゃないか」
「まあ……じゃあ、旦那は、縁の下へもぐって、片づけちまったんだね」
「そうだと思うんだ。だから、皮袋、返したのは、惜しかった」
「あんたは、旦那が、お縄になったら……あたしと……」
茂吉は、答えず、首を縦に振った。
おしんは、うれしかった。源造が、御用になる方法は、皮袋をすり取った——と、弁蔵に密告する以外にない。どんな機会に、なんと言って——。
考えあぐねているうちに、夕暮となった。客が五、六人、どっとはいってきた。おしんは、茂吉を手伝わせ、酒の燗をしたり、小料理をつくったりした。
裏口に、人の気配がした。
おしんは、茂吉と視線を合わせ、息を詰めた。縄のれんに、顔を当てがい、様子をうかがった。
源造が、台所の板の間に走りこみ、ばったり倒れ伏し

た。おしんが、とんで行った。
「そ、そこの心張り棒を……」
と、源造が、荒い呼吸を断続させながら言った。おしんは、いわれたとおり裏口の雨戸を閉め、樫の棒をはすかいに当てがった。
「水だ」
と、源造が怒鳴った。
お椀に水を入れて渡した。源造が、それを一気に飲み干し、這うように奥座敷へはいった。おしんは、冷ややかに眺めていた。誰かに追われ、この人、逃げてきたんだ。左門丁の親分だろうか——。
源造は、座敷へはいると、隅のほうで仰向けに寝ころんだ。
「おしん、布団を敷け」
源造の声が、ふるえている。おしんは、布団を敷き、寝巻の着物を出してやる。源造が、すばやく着替える。おしんは、外着をたたむと、押入れの中に入れた。
「もし、鳴海屋弁蔵がきたら、旦那は、ゆんべから、熱を出してやすんでいます——と答えるんだ」
源造は、布団にくるまった。おしんは、
「危いことがあったのね」
と、小声で聞いた。
「俺は、仕事をやっちゃいねえ。現場を見られたわけでもねえ。ただ、ちょっとばかり、怖かっただけだ」
「尾けられてたのね」
源造は、答えなかった。おしんは、座敷を出ると障子をしめ、唇を噛んだ。

四　弁蔵の勘

弁蔵は、忠兵衛から、皮袋を盗られたいきさつを聞いたとき、笹屋源造の顔を思い出した。荒木丁は目明かし桐屋勘兵衛の島内だから、くわしくは知らないが、三度ほど、笹屋の店で飲んだ記憶があった。
包丁さばきが上手で、なかなかうまい料理を食わせた。
「ごくろうさんでござんす。どうか、ごひいきに願います」
と言って、源造が、あいさつしたことがある。言葉つきがていねいで、腰も低かった。
「笹屋は、あんたの包丁と、かみさんがきれいなんで、評判のようだな。繁盛で、何よりのこった」

と、弁蔵が相槌を打った。手下の平六と、三本の銚子をあけ、あじのたたきを食べたのだが、弁蔵は、半刻ほどの間に、ふと、暗いかげりを感じとった。
弁蔵が、若いころ、盗っ人をしていた経験が感じさせる眼に見えない勘だった。すりでも、のび師（忍び込み窃盗）でも、身のこなしが敏捷である。盗む——ことは、攻撃だから、相手の隙をうかがい、行動に移る。盗むことは、逃げることにつながる。逃亡がなければ、盗みは完成しない。逃亡——は、身を守ることだ。だから盗っ人は、攻撃と逃亡を、いつも一緒に考えている。おのずから、常人と異なる身のこなしが生まれてくる。
身のこなしは、眼つきに現われる。盗っ人も駆け出しのころは、いわゆるきょろきょろ眼をしているが、腕っこきとなると、逆に眼光が、すわってくる。落着きのない眼は、性根がすわっていないのだ。
源造の眼は、水のように澄んでいた。一点をじっと見据える眼に、底光りする力があった。弁蔵は、〈笹屋のあるじは、ただ者じゃねえ〉と感じたことがあった。
ことによったら、盗っ人の足を洗った姿かもしれねえ。が、それならそれで結構なことだ——と思った。自分も、昔は、夜の稼業をしていたことがあり、今では、海産物商鳴海屋の主人、しかも、十手を預かる身になっていると考えたからだ。
ところが、忠兵衛が、百両入りの皮袋を取られたと聞いたとき、笹屋源造の顔を思い出し、もしや——との疑念がかすめた。もちろん単なる勘にすぎなかったが、弁蔵は、ただちに行動に移る腹をきめた。
「荒木丁の小料理屋、笹屋源造、ひょっとしたら、すりかもしれねえ」
弁蔵は、手下の平六を呼ぶと、そんな言い方をした。
「べっぴんの若いかみさんのいる笹屋……おやじが盗っ人……」
平六が、眼を丸くした。
「忠兵衛の皮袋、源造かもしれねえ。今は花どき、すりの季節だ。尾けてみよう」
弁蔵の全身に、緊張がみなぎってきた。
目明かしの尾行は、二人でやる。一人で尾けても、まかれる怖れがあったからだ。
弁蔵は、四つ刻（午前十時）になると、平六を連れ、左門丁の店を出た。二人とも、裾をはしょり、股引を出

し、麻裏草履をはいている。弁蔵は、縞柄の羽織を着ているが、平六は、羽織を着ていない。
「源造は、ひょっとしたら大物のすりかもしれねえ。野郎の眼つきはただ者じゃねえ」
弁蔵は、歩みを急がせながら、平六に声をかける。自分でもそれとわかるほど、気持ちがたかぶっていた。
「あっしにゃ、考えられねえこってす。でも、そういやあ、笹屋のおやじは、身のこなしがちがうような気がしやした」
「野郎は、たぶん花見どきの客を狙って、出てくるだろう。出てくりゃ、すりとみていい」
「親分、あっしはまだすりの現場をつかまえたことがねえんで……どんなあんべえなんでがしょう？」
「すりにも、いろいろある。源造がもし、忠兵衛の百両を盗んだ犯人なら、平場といって、人混みの中で仕事をするにちげえねえ」
「するてえと、源造が、通りがかりの人に、どんとぶつかる。さっと身をかわして逃げるとき、御用だ——と言やあいいんで……」
「ま、そんなもんだ。けどな、すりをつかまえるのは、尾行がむずかしいんだ。奴らは、するどい勘を持っている。御用の筋の人間、ぴんと臭ってくるらしい。だから、めったなこっちゃ、仕事をやらねえ」
「じゃあ、野郎が、すり取る現場を押えられなけりゃ、忠兵衛さんの百両のホシ——というわけにゃいかねえわけで……」
「むろん、そうだ。いきなり笹屋へ踏んごんでも、知らねえ——と言われりゃ、それまでの話さ」
弁蔵は、荒木丁へはいると口を噤んだ。平六も、それにならって静かになった。笹屋へはいる路地が見えた。
「ま、一刻だけ、張込みをやってみよう。おめえは、あの路地の入口をぶらついていろ。俺は、そこの三つ又あたりで見張ってる。野郎が出てきたら、まず、おめえが尾けろ。俺は、その後からついていくから」
弁蔵は、口早やにいいつけると、踏みとどまった。三つ又の一方は、北伊賀丁へ抜ける道だ。弁蔵は、その道を出たりはいったりしながら、平六の合図を見守っていた。
花どきなので、人の往来がはげしい。中には、弁蔵の顔を知っている者がいて、
「おや、親分、御用の筋でも」
と、声をかける。

「待ち人、来たらずってとこだ」
と、弁蔵は、さりげない応対をする。
半刻ちかい時間が経った。平六が、右手を上げ、路地口から離れた。
弁蔵の全身に、ぴんとした張りがみなぎった。彼は、路地の角に身をひそめ、眼をみはった。源造が、めくら縞の合わせ着に、角帯を締め、身軽な足取りで出てきた。
源造は、平六の前を通りすぎ、荒木丁の土手へ向かう。弁蔵は、その後を追った。四谷坂町から左へ曲がり、舟町へ向かった。
西仰寺の山門の前で、源造の足が止まる。後ろを振り向く。平六が、通行人の陰にかくれる。
弁蔵は、眼を据えた。
〈鋭い勘をしていやがる。何かを感づいたな。やっぱりただのねずみじゃねえ〉
弁蔵は、そんなことを考え、土手の木の下陰に体を入れた。
源造は、山門をはいる。
平六が追う。弁蔵が走る。山門の中は、桜が満開だった。十数人の人々が、花を見上げたり、庭内を歩きまわっている。原造が、花見客の間を縫うように歩く。財布の重そうな客を物色しているのだろう。
五十がらみの商人ふうの男に、源造がぶつかった。男がよろめき、両手で腹のあたりを押えた。一瞬の出来事だったが、弁蔵は、財布の移動がなかったと思った。男は、源造が行き過ぎると、ふところへ手を入れ、財布をつかみ出し、もう一度、中へ押し込んだ。
源造は、山門の外へ出た。
弁蔵は、平六に目くばせを送った。平六、弁蔵の順で、外へ出た。源造は、牛込へはいった。安養寺の土塀が切れると、谷町となる。両側から、土手の斜面がなだれ、雑木にまじって、桜の木が点々と花を咲かせている。斜面に、むしろを敷いて、酒盛りをやっている組もあった。中には、仮装して踊りはじめているものもある。放歌、談笑、花の下の歓楽がくりひろげられている。
源造が、酔客の間を泳ぐように行く。身長五尺二、三寸、贅肉の取れた引き締まった体は、みるからに敏捷で、一分の隙もない。人々に、接触しながら、すいすいと早い足をとばしていく。
〈野郎は、やっぱりすりだ。あの歩き方は、すりの足だ〉
弁蔵は、呻くようにつぶやいた。
すりの足だ——と思ったのは、弁蔵の経験からだ。足

の膝関節を曲げず、大股でとばすのが、盗っ人の歩き方だ。膝を曲げないから、歩幅が広い。しかも体に動揺がないから隙が生じないのだ。

源造が、年増の内儀らしい女につき当たった。女は、はずみを食らってのけぞり倒れた。源造は、後をも見ずに、歩度を早めていく。弁蔵は、走り寄ると、平六に、

「おめえは追え」

と命じ、女を抱き起こした。

「何か盗られた物はないかね」

と言って、弁蔵が、腰から十手を取り、ちらりと見せた。

女はおどろいて頭を下げ、帯の間を捜した。縞目の財布を取り出し、

「別に何も取られませんが。今の男、すりですか」

と言った。弁蔵は、

「盗られなけりゃ、何よりだった」

と言い置くと走った。

平六が、谷の出はずれで待っていた。

「野郎は、市谷富久丁へとびやした」

と平六が言った。弁蔵は、

「走れ」

と指示した。弁蔵は、平六の後を追った。

平六が、速度を増して走っている。が、まもなく、その足がとまった。弁蔵が駆けよると、

「奴の姿、見失ってしまいやした」

と、呼吸をはずませた。

このあたりは、右側は東大久保村だ。田圃がつづき、れんげの花が咲いている。

「すりの足にゃ、かなわねえ」

弁蔵は、道端の石の上に腰をおろした。息苦しいくらい呼吸がはずんでいる。

「親分、どうしやす」

「野郎は、二回、人にぶつかりやり損っている。このまま、荒木丁へ帰るはずがねえ。出てきた以上、一仕事やりてえのが人情だ」

「追っかけやすか」

「源造の姿は、ここで消えたんだな」

「へえ……たぶん番衆丁へへえったと思いやすが、ここの四辻を右へ曲がったとたん、煙のように消えちまったんで……」

「ここまでくりゃ、野郎の行き先は、おおかた、内藤新宿裏の上水土手だろう。そして日暮れとなりゃ、新宿の

白首のいる女の町。花見帰りの客を狙うかもしれねえ」

二人は、そんなことを話し合うと、歩きだした。番衆丁の町並を抜けると内藤新宿へ出た。弁蔵は、平六をうながし、丁字屋という小料理屋へはいった。

弁蔵は、銚子を二本取り、杯で二、三杯飲むと、めしにした。平六が、残りの酒を一人で飲み、眼のふちを赤く染めた。

腹ごしらえをすませ、ゆっくり休んでから、外へ出た。この付近は、飯盛女のいる町だ。昼間から、店の外へ出て、客を呼んでいる。が、弁蔵と平六には、声をかけない。一目で、御用の筋とわかるからだろう。

「平六、野郎を尾けるにゃ、しくじったな。この姿じゃ、目明かしとわかっちまうぜ。次から、姿を変えなくちゃいけねえな」

「でも、野郎は、感づいたんじゃねえんですか。とすると、当分、出てきやせんぜ」

二人は、町通りから左へ折れ、上水土手の道に出た。ここも桜並木があった。千駄ケ谷村の子安稲荷まで、桜が植わっている。花見客が、浮かれて通るが、源造の姿は、見当たらなかった。

土手道を、引っ返してきた。

時刻は七つ半（五時）ごろだろう。陽が西に傾き、残照が桜の梢を染めている。そのとき、源造らしい男が、一町ほど先を行くのが見えた。

弁蔵は、平六の袖を引いた。

平六の歩度が早くなる。弁蔵は、平六の四、五間後ろから尾いて行く。平六の歩みがせわしくなった。見ると、源造の足も早くなっている。

源造は、内藤新宿へはいった。大通りを、とぶように走る。またたくまに、塩丁にきた。須賀丁との四辻へくると、源造は左へ折れ、あっというまに姿を消してしまった。

平六が、笹屋のある路地へ走りこんだ。弁蔵は、路地の出口で足をとめた。まもなく、平六が戻ってきた。

「源造の奴、店にゃいないんで。裏口へまわってみると、内側から鍵がかかってやした」

弁蔵は、

「今日は、しくじった。出直しだ」

と、吐き捨てると、左門丁の自宅へ戻った。店先から、踏みこむと、上がりかまちに、忠兵衛が、腰をかけていた。

「親分、奇妙なことがあったんです」

忠兵衛が、うわずった声をかけた。弁蔵は、うながして、座敷へ上がらせた。

忠兵衛が、ふところから重たそうに、皮袋を取り出し、

「親分、今日、この皮袋が、私の家の台所、味噌瓶の上に置いてあったんです」

と、こわばった表情で言った。

弁蔵は、ぎくりとした。今日、源造の後を尾けたが、すりの現場をつかまえることはできなかった。だから、皮袋を戻した人物は、源造ではない——ことになる。

「で、何刻ごろだ」

「はい、私が、大工さんたちに造作の指図をしていましたのが、四つ半（十一時）でした。一刻ほど経って台所へ戻りまして、お湯を沸かし、ひょいと見ると、皮袋があったんです。はじめ、狐につままれたみたいで、手にさわるのも、怖しいほどでした」

「なるほど……で、中身は、手つけず百両あったのか」

「はい……そっくりそのまま……」

弁蔵は、皮袋を手に取ってみた。底に、赤黒い泥がついていた。袋のまわりを、注意深くみていった。

弁蔵は、その泥を、懐紙で拭き取ると、折りたたんでふところに入れた。

忠兵衛が、袋の中から、銀貨をつかみ出し、十両かぞえ、さらに一両をのせ、

「おかげで、ありがとうございました。とりあえずお返しいたします」

と言った。

「余分の一両は、もらうわけにゃいかねえ。俺は、金貸しじゃないからな」

弁蔵は、一両の銀を押し戻した。忠兵衛が、困った表情をしながら、

「申しわけありません」

と言って一両を袋に入れた。

弁蔵は、腕組みすると考えこんだ。〈いったい誰が袋を運んできたんだ。ホシはどうやら、源造じゃねえらしい。袋を戻した奴が、盗んだ奴だろう〉

五　皮袋追及

源造の様子が、にわかに変わってきた。

日が暮れて、笹屋の店に客がたて混んできても、店へ顔を出そうとしない。奥の座敷に、ひっそりとこもって、寝たきりでいる。

おしんに、寝床まで、酒を運ばせ、布団の上にあぐらをかいて、酒を飲む。食事も寝床だった。

「あんた、ぐあいがわるかったら、お医者さんにかかったらどう？」

と、おしんが聞いた。

「俺の体は、俺がいちばんよく知ってるんだ。ほっといてくれ」

源造は、そう言っておしんを睨みつけた。ぞっとするような冷たい眼だった。おしんは、口を噤んでしまったが、〈左門丁の親分の眼を怖がってるんだ。店へ顔を出すのもきらうのは、いつなんどき、弁蔵親分がはいってくるか、わからないからだわ〉と思った。

源造の態度が、もう一つ明らかに変わったのは、おしんと同衾を拒んだことだ。

「おしん、今夜から、俺一人で寝かせてくれ。おめえは、すまんが隣の三畳でやすんでくれ」

と言った。

笹屋の座敷は、二つしかない。源造の寝ている部屋は六畳間。六尺の押入れをへだてて三畳間となっている。従来、その部屋は、茂吉が寝ていたところだ。

三畳間の前が板の間になっていて、そこから六畳間につづいている。畳なら二枚敷けるほどの板の間だった。

その夜から、おしんは、三畳間にやすみ、茂吉を板の間に寝かせた。板の間から、六畳へ行くには、襖が境い目になっている。茂吉は、体を横たえているが、暗がりの中で眼をあけていた。

おしんは、板の間まで這いすすむと、茂吉の頬に顔をすり寄せてから、襖の奥の様子をうかがった。

中は、寝息すら聞こえず、しずまり返っていた。茂吉が、おしんの足もとで、腹這いになり、息を殺している。

おしんは、源造が、同衾を拒んだ理由を考えた。〈皮袋だ。あの人、百両の銀の始末をつけようとしているのだ。そのため、私が、同じ部屋に寝ていたのでは都合がわるい。けど、皮袋はない。ないと知ったら、どんな態度を取るかしら〉

長い時間が、過ぎた。

茂吉は、昼間の仕事の疲れが出たのか、寝息を立てはじめた。おしんの眼がしだいに暗がりに慣れてきた。

隣り座敷は、相変わらず静かだ。源造の寝息も聞こえない。外の夜風が、ときどき雨戸を叩いている。おしんは、辛抱づよく待った。皮袋がない——と知ったときの源造の出方が気になって仕方がなかったからだ。

座敷の中で、布団を引きずるような音がした。
おしんは、聞き耳を立てた。
座敷は、ふたたび静かになった。おしんは、源造が、布団をずらせ、まん中の畳をまくり上げる前に、隣室の気配をうかがっているものと察した。
かなり長い時間が経った。
畳を持ち上げる音がした。ことり——と、床板をはがすひびきがする。源造は、縁の下へ首をつっこんだらしい。「ない」という、詰まった声がした。おしんは、音も立てず、ずり膝で、自分の寝床へ戻った。
眼をつむった。胸元が、息苦しくはずんでいる。源造が今にも怒鳴り出すような気がした。耳をすます。茂吉は、しずかに寝息をたてている。
隣室は、なんの気配もしない。おしんは、源造が、どんな出方をするかを考えた。皮袋を縁の下へ入れたことは、あたしも茂吉も知らないことになっている。源造から、問いつめられても、知らぬ存ぜぬ——で、突っぱねればいい。あの人も、自分が罪を犯しているのだから、深くは追及できないはず——。
おしんは、いつのまにか眠りに落ちた。
朝がきた。

茂吉の寝ている板の間へ、裏口の雨戸の隙間から、朝の陽がさしこんでいる。おしんは、陽の色から六つ半（七時）ころだと思い、起き上がった。
おくれ毛をかき上げ、着替えをしているとき、茂吉が眼をさました。眠そうな眼をこすり、起き上がると、茂吉は、台所の土間におり、口をすすぎ、顔を洗う。
そのとき、
「おしん、茂吉と一緒にこい」
と、低いが腹の底からひびく声で、源造が呼んだ。
おしんは、
「はい」
と答え、茂吉を眺めた。茂吉が、わずかに頷いた。おしんは、座敷にはいった。座敷の明り取りの腰掛窓の障子に、朝の陽ざしがあざやかに染まっていた。茂吉が、後からはいってきた。
おしんは、源造の前にすわった。茂吉は、敷居際で、膝をそろえた。源造は、あぐらをかき、掛布団をはねのけた。
「おしん、二人のうち、どっちかが、縁の下へへえったな」
源造が、二人をじろりと睨んだ。

「縁の下——なんのために、はいるんですね。大掃除でもあるまいし」
おしんは、さりげなく言って、源造の眼を見た。今にも、火を吹くかと思えるほど、けわしい眼つきをしている。
「茂吉、こっちへ寄れ」
源造の声に、茂吉が膝を寄せた。おしんは、茂吉の眼に、不安なかげりがかすめるのを見て、心配になってきた。
茂吉が、おしんの左脇まで寄ると、源造の腕がのびて、茂吉の襟元をつかんだ。おしんは、思わず源造の腕を押えた。
「茂吉、おめえ、縁の下へへえったろ」
源造が、そう言って茂吉の襟首を締め上げた。
「知りません。縁の下なんかはいりません」
茂吉が、ふるえ声で答えた。
源造がいきなり、茂吉の頬を、拳固で殴りつけた。茂吉が、のけぞり倒れた。
「何をするんだね」
おしんは、口元をゆがめ、大声でわめいた。源造が、おしんに眼を据えた。
「おめえは、茂吉とぐるだな。はっきり言やあ、くっついてるな。俺には、ちゃんと臭ってるんだ。長年、一緒に暮らしてりゃ、ぴいんとくるもんがある。さ、白状してみろ」
「何を言ってるんだい。女房の焼きもちは世間によくあることだけど、亭主の焼きもちは、あんまり聞こえがよくないよ。何を、証拠に、そんなことを……」
「証拠はある」
「さ、言ってもらいましょ。証拠が動かぬもんなら、あたしは、あんたに殺されたって文句は言わないよ」
「証拠は、縁の下だ」
「まあ、あんたは、気でも狂ったのかね。何を言うかと思ったら、縁の下だなんて。あたしが、茂吉と、縁の下で抱き合ってでもいたと言うんですか」
おしんは、ことさら大声を出した。
「でけえ声、出すな」
「これが黙っていられますか。馬鹿々々しいったらありゃしないよ。犬や猫じゃあるまいし……」
「縁の下にあった物が、ねえんだ」
「なんのことだね。たくあん石でも、あったと言うのかね」

「そんなもんじゃねえ、大事な物だ」

「じゃあ何かね、あんたは、あたしに隠して、縁の下へ隠し金でも入れといたと言うんですか」

源造が、口を噤んだ。口元をけいれんさせ、膝の上の拳固を握りしめ、体をこきざみにふるわせている。

源造が、いきなり布団の下に手を入れ、匕首を取り出し、鞘走らせた。おしんは、後ろへとび退いた。

源造は、

「茂吉ッ」

と詰まった声を上げると、抜き身をふるって、茂吉におどりかかった。茂吉が、立ち上がった。源造の匕首を持つ手が突き出された。茂吉が、逃げようとした。源造が、茂吉の裾をつかんで引きずり寄せた。

おしんは、源造の匕首を持つ腕に、しがみつくと、思いきり噛みついた。抜き身が落ちた。おしんが、それをつかむと立ち上がった。

「何をするんだ。あんた気でも狂ったのかい。それとも、あんたは、忠兵衛さんの百両入りの皮袋を、すり取って、縁の下へ隠していたというのかい」

おしんは、かん高く叫んだ。

その声が終わらぬうちに、源造が、おしんにおどりかかった。おしんは、拳固で胸元を突かれ、のけぞった。

茂吉が、源造にむしゃぶりついた。

源造が、茂吉を押えつけ、馬乗りになり、両手で茂吉の喉を締め上げ、

「こんちくしょう、殺してやる」

と、怒声をあげた。茂吉の顔面が、みるみる蒼白となった。おしんは、咄嗟に、源造の顔を目がけ、匕首を突き出した。手もとが狂って、切先が源造の頬をかすめた。眼の下が二寸ほど切れ、鮮血がほとばしった。

源造の両眼が、血でふさがり、

「痛い」

と叫び、倒れ伏した。おしんは、鏡の引出しから、あり金をつかみ取ると、帯の間にねじ込み、

「茂吉、逃げよう」

と、詰まった声を出した。

二人は、裏口から外へ走り出した。

往来は、職人が仕事に出る時刻で、大工、屋根職、左官、畳職人などが、それぞれ道具を持って歩いていた。二人は、須賀丁の四辻まで走ってから、後ろを振り向いた。源造の追ってくる姿は見あたらなかった。

須賀丁の通りへはいった。

「どこへ行くんです」

と、茂吉が不安な声をかけた。

「さあ、当てはないけど……」

おしんは、答えながら、血まみれになった源造の顔を思い出した。同時に、自分の罪を考えた。夫を殺そうとして、匕首をふるったことはまちがいない。が、源造が、自分を訴え出ることはないような気がした。

「旦那は、いのちに別条ないかね」

「死ぬこと、ないわ」

「だまってるはずないと思うんだけど」

「だって、訴え出たら、自分の悪事を、しゃべることになるんだよ」

「すると、俺とおかみさんを、こっそり殺しにくるんじゃないか」

「怖いんだね」

茂吉は、答えず、足を急がせている。おしんが、歩度を合わせるのに骨が折れるほど、茂吉の足が早い。

忠兵衛の店が見えてきた。

「あたし、忠兵衛さんとこへ、駆けこもうと考えてるんだけど……」

茂吉が、おしんを眺め、眼をみはった。

「そ、そんなことをしたら、皮袋の一件……ばれちまうんじゃないか」

「あたしが、忠兵衛さんとこがいいと思ったのは、源造は、まさか、そこまで追っちゃこられないと思うからだよ」

「自分が盗んだ相手のところへ、顔を出すはずがないというんですね」

「左門丁の親分が怖いからさ。様子をみるまで、忠兵衛さんとこが、一番安全だと思うんだよ。もちろん、皮袋のことは内証でね」

茂吉は、黙って頷いた。二人は、忠兵衛の店の裏手へまわった。

おしんは、忠兵衛の家の勝手口から、中へはいった。

「ごめんなさいまし」

と声をかけた。忠兵衛が、奥から出てきた。

「おや、笹屋のおかみさん……何かご用で」

と、忠兵衛が、親しみをこめた口をきいた。おしんは、茂吉をうながし、板の間へ上がった。

「実はね、うちの亭主と朝っぱらから喧嘩をして、とび出してきましたの。茂吉とあたしが、できてると疑われましてね。すいませんけど、二、三日、かくまってくだ

さいな。ごめいわくはかけませんから……」

おしんは、膝をつくと、やわらかく話を持ちかけた。

忠兵衛の表情が、一瞬、こわばった。おしんは、その表情をみて、自分が、忠兵衛の家なら、安全と考えていたことに反省を持った。

「困りましたな」

「何か、さしさわりでも……」

「言いにくいことなんだが……」

忠兵衛が、口ごもった。おしんは、弁蔵親分から、何か聞いているにちがいない――と思った。たぶん、皮袋のすり犯人を、源造と狙いをつけていることを知っているのだろう。とすると、自分たちをかくまうことが、いいかわるいか、判断に迷っているのかもしれない――。

「お気持ち……おおかた察しがついていますわ。だったら、こうしてくださいません？　左門丁の親分さんに、あたしたちをかくまっていいかわるいか、おたずねになってくれませんか。親分が、いいと言われたら、かくまってくださいな。いけないと言うなら、あたしたち、すぐ出ていきますから」

おしんが、こんなことを言い出したのは、源造の追跡が怖かったからだ。

弁蔵の庇護のもとに、茂吉と二人でいられるなら、身の安全を護れるような気がした。

忠兵衛は、答えず頷いた。

「どうぞ、左門丁までひとっ走り行ってきてくださいな」

おしんにうながされ、忠兵衛が立ち上がり、

「では、行って参ります」

と言って裏口から出て行った。

「忠兵衛さん、あたしたちを疑ってるのね」

と、おしんが、茂吉に低い声をかけた。

「いっそのこと、俺が、皮袋を戻したこと、しゃべったほうがいいんじゃないか」

「あたしね、考えてるんだけど、言っていいかわるいか迷ってるんだよ。もし、しゃべったら、あたしたち、すりの仲間にされちまうかもしれないのよ」

「でも、皮袋は戻した」

「戻しても、源造がすり取ったことを知ってたからだよ。だったら、やっぱり仲間ね」

二人は、それきり黙ってしまった。茂吉の表情は、明らかに不安におびえている。おしんは、ここから逃げ出そうと考えた。

六　縁の下に

「ごめんよ」

と言って、弁蔵が表口からはいってきた。おしんは、茂吉と顔を見合わせた。茂吉が、生唾を飲みこんだ。おしんは、茂吉の耳もとに口を寄せ、

「心配するんじゃないよ」

と早口で言った。

「こりゃ、笹屋のおかみさん、しばらくだった。源造と痴話喧嘩したそうだが、事情によっちゃ、力にならんこともない」

弁蔵が、立ちはだかったまま、やわらかく声をかけた。おしんは、両手をそろえ、頭を下げ、

「つまらないことをお耳に入れ、申しわけありません」

と、丁寧にあいさつした。

弁蔵が、

「奥へ」

とうながした。おしんと茂吉は、奥座敷へはいった。忠兵衛が、三人分の座布団をならべた。弁蔵が、なんにもない床の間を背にしてすわった。

おしんは、座布団をはずし、かいつまんでいきさつを語った。忠兵衛にしゃべった筋書きと同じだった。

「なるほど……それでおかみさんと茂吉は、できてるってわけかね」

弁蔵が、顎を引き、その顎をてのひらで撫でながら、眼を光らせた。

「はい……あたしが、この人を誘ったんです。いけないことなんですけど……」

「するてえと、おかみさんは源造をきらいだったってわけだな」

「あの人を、ただ一度だって、好きだと思ったことはありません。虫酸が走るほど、きらいなんです」

「なぜ、一緒になっていたんだね」

「お父っつぁんが死んだとき、あたしはまだ子ども……弟子だった源造に引き取られたのが、こうなるきっかけだったのです」

「おやじさんの商売は？」

「飾り職……」

弁蔵の眼がうごいた。じろりとおしんを睨み、たちまち眼の光をやわらげた。

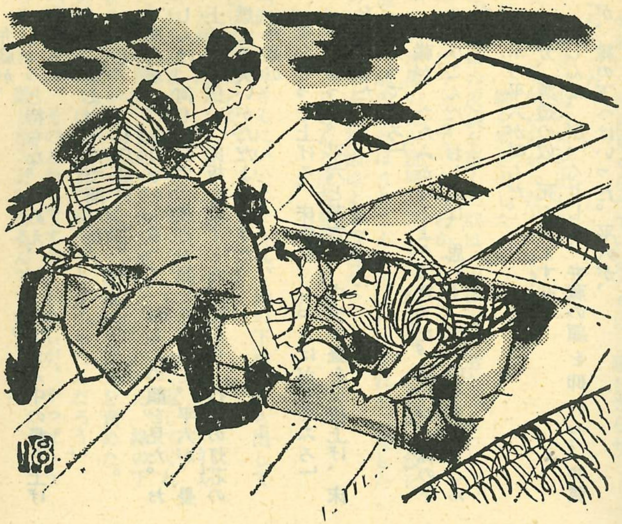
「あんたが、源造をきらうわけは？」

「さあ……ただなんとなく好かないんです。ぞっとするような冷たい人なんです。うまく言えませんけど……」
「二人が、けさ、逃げ出すとき、源造は、どうしていたかね」
「よく眠っている隙をねらって……」
「聞くが……なぜ、忠兵衛さんとこを頼ってきたんだね」
　おしんは、返事に詰まった。忠兵衛は、出入りの酒屋の番頭にすぎない。駆け落ちの身を寄せるほど、深いつながりはないのだ。にもかかわらず、二人して、忠兵衛方へころがりこんできた理由を、納得のいくように、説明することはできなかった。
「ほかに、頼りになる人が、なかったもんですから……」
　おしんは、言いながら、頬のほてる思いがした。弁蔵の眼が笑った。
「忠兵衛さん、二人は、聞いてるようなわけけらしい。あんたも、酒を売りこんでいた縁がある。ま、決着がつくまで、泊めてやったらどうだ」
　弁蔵が、忠兵衛に笑顔をみせた。
「そりゃいいんですが、月が変わると、祝言がありますんで……」
「それまでにゃ、けりがつく。ひょっとしたら、二、三日中に、二人は笹屋へ戻れるかもしれねえ」
　弁蔵が、そう言っておしんを見た。おしんは、黙って頭を下げた。二、三日中に笹屋へ戻れると言うが、なぜなのだろう。どんな決着がつくのだろうか。おしんは、自分が源造を斬っているだけに、不安でたまらなかった。
　弁蔵が、おしんの前へ膝をよせてきた。
「あんたは、俺にかくしていることがある」
　と言うと、いきなりおしんの右袖をつかんだ。
「血だな。さっきから、ぷうんと臭っていたよ。源造を殺したのかい」
　弁蔵が、袖を両手でひろげた。こまかい矢がすりの生地に、拇指大の赤い染みが二ついていた。おしんは、がくがくと歯の根をふるわせ、源造の眼の下を斬ったときの状況を、まざまざと思い出した。
「茂吉、おめえ、見ていたな」
　弁蔵の鋭い視線が、茂吉へ向けられた。
「へえ……旦那が、俺の首を締め殺そうとしたんだ。おかみさんが、旦那の腕に噛みついて、奪い取った匕首をつき出したんです。旦那の 顔から、血が噴き出し……

俺、おかみさんから言われ、二人で逃げ出したんだ」
　茂吉が、吃りながら、答えた。
　弁蔵が、腕を組み、二人を等分に、睨んだ。おしんは、観念すると、
「そのとおりです。親分さま、お縄を……」
　と言って、首を垂れた。
「そうあわてるこたあねえ。白黒の見きわめはまだついちゃいねえよ」
　弁蔵が、ふふふと喉を鳴らした。おしんは源造が死んだら、どうしようか——と、そればかりを考えていた。夫殺しの罪は重い。しかも、雇人の茂吉と密通の果て、夫を殺したとなれば、死罪はまぬがれない。
　自分が、お仕置になれば、茂吉はどうなるのか。ところ払い、遠島くらいの裁きをうけるかもしれない。
　おしんは、畳に体を伏せると、声を忍ばせて泣いた。咄嗟のはずみとはいえ、自分のやったことに反省が湧いた。肩をふるわせ嗚咽をつづけているとき、誰かが、とび込んできた。
「親分、源造の奴は、もぬけのから……笹屋の中にゃ、誰の姿も見当たりやせん。野郎、ずらかりやしたぜ」
　その声は、弁蔵の手下の平六のようだった。おしんは、今にも源造が押しこんでくると思った。
「座敷は、どうなっていた？」
　弁蔵が、口早に聞いた。
「店の奥に、二畳の板の間、その右手が三畳の間。板の間の奥が、襖になっていて、そこを開けると六畳の座敷。座敷の中は、きれいに片づいていやした」
「その座敷に、血の跡は？」
「そんなもんは、ありやせん」
　弁蔵が、口を噤んだ。
　おしんが、顔をあげた。
「ゆんべ、あたしは三畳に寝ました。茂吉が板の間でした。うちの人は、六畳間で、一人でやすんだのです」
　おしんは、問われもしないのに、すすんでしゃべった。源造が、死ななかったと知って、ほっとしたからだ。
「いつも、そうやって寝ていたのか」
　弁蔵の表情が、引き締まった。
「いいえ、前の晩までは、旦那とあたしが六畳。茂吉は、三畳だったんです」
「ゆんべに限って、なぜ、別々に寝たんだね」
「あの人が、そうしろ——と言ったからです」
「なぜだい？」

おしんは、一瞬、ためらいをみせてから、
「たぶん、あたしと茂吉のことを、疑ったからだと思います」
と、答えた。
「三人、別々に寝て、ゆんべ、何かあったのかね」
「何ごともありません。ただ、朝になって、あの人が、あたしたちを呼び入れ、疑って白状しろ……と」
「それで、源造が、匕首を取り出したってわけだね」
「そうです。申しわけありません。あの人が茂吉を殺そうとしたんで、あたしは、みさかいもなく……」
弁蔵は、おしんの言葉をさえぎり、
「みなまで言いなさんな。おおかた見当はついた。ま、忠兵衛さんも納得してくれたから、ここで厄介になったらいいだろう」
と言って立ち上がった。
平六が、
「親分、笹屋はこのままでいいんでがすか」
と、声をかけた。
「平六、おめえ、ここへ泊まって、かみさんと茂吉の見張りをしてやんな。ひょっとすると、源造の奴、忍び寄るかもしれねえからな」
弁蔵は、それだけ言い置くと、外へ出て行った。おしんは、その後ろ姿を、手を合わせるような気持ちで見おくった。
平六が、
「おかみさん、今夜は、おいらの護衛つきだ。けんど、茂吉っつぁんと、いちゃついちゃ、たまんねえ。それだけは、かんべんしてくれ」
と言って、あぐらをかいた。
忠兵衛が、気をきかして、酒肴の支度をととのえはじめた。おしんは、その手伝いをしながら、源造がくるかこないかを考えた。

朝になった。
おしんは、頭の芯がずきずきと痛んだ。昨夜は、まんじりともしなかったからだ。おしんは、みんなが寝ている間に、朝食の支度をととのえた。
食事を終えたとき、弁蔵がやってきた。
「さ、出かけるんだ。おかみさんも茂吉も、平六も、笹屋へ行くんだ」
おしんは、怪訝な思いがした。
平六が、



「親分、笹屋はもぬけのからですぜ」
と、不服そうに言った。
「源造がいてもいなくても、刃物さんまいのあった現場だ。見ておかなくちゃならねえ。おかみさんと茂吉は、立会人ってわけだ」
弁蔵が、声を出して笑った。
おしんは、茂吉と一緒に、弁蔵の後にしたがって外へ出た。通りへ出ると、商店が大戸を開けていた。荒木丁へ着くと、平六が笹屋の裏手へまわり、雨戸を開けた。四人は、中へはいった。おしんが、板の間の襖を開けた。三畳も板の間も、座敷も布団が片づけられていた。
おしんは、押入れを開けてみた。布団はなかった。弁蔵が、中を覗いた。
「行灯がねえが、どうしたんだ」
と、弁蔵が聞いた。言われて、おしんはあたりを見まわした。
「たしかに、ここにあったんですけど」
と言って、おしんが座敷の隅を指さした。
「平六、畳を開けろ。茂吉、おめえも手伝え」
と、弁蔵が、怒鳴るように命じた。
茂吉が、まずまん中の畳を上げた。

弁蔵が、
「ちょっと待ちな。おめえ、どうしてまん中の畳を上げたんだ」
と、詰まった声で聞いた。
「へえ、いつも旦那が、ここを……」
茂吉が口ごもりながら言って、おしんの顔を見た。おしんは、何も言わず、茂吉の顔を見守った。平六が、畳上げを手伝い、床板をはずした。中から、行灯の灯芯の燃える臭いがただよってきた。
弁蔵が、
「畳をもっと上げろ。床板を、もっとはがしてみろ」
と怒鳴った。平六と茂吉が、中央の畳を三枚上げ、床をはがした。
「へえってみろ」
弁蔵が、たたみかけるように言った。平六が、縁の下へとびこんだ。おしんは、思わず、暗い中をのぞきこんだ。
中から平六が叫んだ。
「親分、源造の奴、死んでますぜ」
おしんは、びっくりして、弁蔵の顔を仰いだ。弁蔵が、縁の下へはいった。平六が、
「茂吉っつぁん、手伝ってくれ」
と、中から呼んだ。茂吉が、とび込んだ。
二人が、源造の死体を、抱き上げ、畳に押しあげた。
おしんは、怖る怖る源造の顔を見た。眼の下の傷あとに、油ぐすりを塗った跡が見え、眼を閉じ、呼吸をとめていた。
おしんは、体を堅くし、眼を据えた。たしかに源造は死んでいる——と思い、息を詰めた。夫殺し——の罪の意識に、口元をわななかせ、何か言おうとした。が、喉が乾き、声にならなかった。
弁蔵が、死顔に眼を据えていた。茂吉が行灯を抱いて、上がってきた。平六が、首を出し、
「親分、布団が敷き詰めてありやした。どうします？」
と聞いた。
「布団はいいから、縁の下の泥、ひとつかみ持ってこい」
と弁蔵が命じた。平六が、首を引っこめ、泥をつかんで出てきた。弁蔵は、その泥をてのひらに受け取ると、ふところから、紙に包んだ泥を取り出して見くらべた。紙の中の泥は、忠兵衛が弁蔵のところへ皮袋が戻ったと報告に行ったとき、懐紙に取っておいたものだ。

弁蔵は、泥を見くらべているうちに、眼を光らせ、
「わかった」
と呻きに似た声を出した。
「親分……何がわかったんです？」
平六が、顎を突き出した。
「忠兵衛の皮袋を盗んだ奴は、笹屋の源造だった」
「やっぱり……で、なぜわかったんです？」
「この赤黒い泥が証明している。源造は、忠兵衛の袋を盗むと、縁の下へほうりこんでおいた。それを、戻したのは、おしんの指図による茂吉だ」
弁蔵が、おしんと茂吉をみつめた。
茂吉が、
「俺、かみさんにいいつけられ、縁の下から持ち出して返してきたんだ」
と言った。
「おかみさん、やっぱりそうだったか。よく返してくれた。忠兵衛は、首をくくって死ぬところだった。縁の下から、皮袋がなくなったんで、源造は、二人を責めた。あげくのはてには、匕首で刺そうとさえしたんだろう」
「親分さん、そのとおりですが、あたしが、やっぱりうちの人を、殺したことになるんですか」
おしんは、声をふるわせ、弁蔵を見守った。
弁蔵の眉宇が、ぴくりと動いた。
「源造は、三人で格闘しているとき、眼の下を斬っちまった。はずみだろう。眼に血がはいってうごけなくなったんだな。かみさんと茂吉が、外へとび出していくのを知ると、左門丁へ駆けこんだものと察し、縁の下へかくれたってわけだ」
おしんは、頷いた。縁の下の泥の上に何枚も布団を敷いて、傷口に油ぐすりを塗って寝ていたものと想像した。が、死因がなんであるかわからなかった。
「源造は、縁の下へ行灯を持ちこんだ。狭いところだったんで、空気がよごれて死んだのさ」
と、弁蔵が笑いながら言った。
おしんは、ほっとした思いで、頭を深々と下げた。

さいころ師

一　亀の子長屋

浅草七軒丁に、みすぼらしい長屋があった。このあたりは、盛り場奥山に近く、大商店が軒をつらね、裏小路へはいれば、粋な三味の音もきこえてくる。が、亀の子長屋の一角だけは、まったく環境が変わっていた。一棟八戸の長屋が、四棟ならび、付近の大店の二階建とくらべると、家並がひくく、地面にへばりついている。亀の子長屋――とは、そんな外観から生まれた呼称だろう。

この長屋の西側の棟に、さいころ師の佐七が住んでいた。六畳一間で台所はあるが、厠はない。二棟の間に、共同のものがあって、長屋の囲いの中へ一歩踏みこんだだけで、異臭がただよってくる。

佐七は、以前は、双六の賽ばかりを作っていたが、十年ぐらい前から、丁半博奕のさいころばかりをこしらえている。つげ材を正方形に切って、芯に重りの鉛を入れ、磨きあげて、一から六までの目を入れ、黒く塗りつぶす。

上等の物になると、一個一両もするので、相当な収入があるはずだが、佐七は、相変わらず貧乏だった。さいころ師は、誰でも〝いかさま賽〟をこしらえ、博徒に売っているので、豪勢な暮しをしていた。が、佐七は、いかさま賽は、作ろうとしなかった。博徒が客人を集め、いかさまを使って金をまき上げる例は多い。佐七も、これまで何度となく、

「おめえほどの腕なら、どんないかさまでもできるはずだ。金に糸目はつけねえ」

と言われたことがあった。

が、佐七は、頑として承知しなかった。

「いかさまなら、江戸中、二十人も三十人もこしらえる人がいる。そっちへ頼んでくれ」

と、にべもなく突っぱねてきた。

それでも懲りずに、頼みにやってくる。というのは、さいころ師によって、いかさまの作り方がきまってい

る。芯に入れる鉛の位置によって、必ず同じ目が出るのだ。

これじゃ、客が見破ってしまう。いつも、六の目が出ていれば、誰でも怪しむにちがいないからだ。

いかさま博徒の最高の理想は、ときどき、ちがう目が出て、客の勝ちとなり、結局、胴元の勝ちが多くなって、賭け金をまき上げることである。

彼らは、こんな賽を〝鳴き猫〟と呼んでいる。客は、自分の勝ちでよろこんでいたのもつかのま、たちまち泣きを見るので、この呼称があるらしい。

佐七の隣家に、丁字屋茂兵衛が、娘のお藤と二人きりで住んでいた。茂兵衛は、三年前まで、七軒丁の大通りで丁字屋という菓子屋を経営していた。

茂兵衛は、博奕に憑かれ、身代そっくりを入れあげてしまった。いかさま賭博師、唐傘屋又五郎に、引っかかったのである。

その茂兵衛が、佐七を訪ねてきた。隣り合って住んでから、ずっと、親戚づきあいをしている。茂兵衛が、

「ごめんよ」

と言って、はいってくると、佐七の仕事をしている前に、あぐらをかいた。

佐七は、仕事台につげ材をのせ、のみをふるいながら、

「まだ、お茶うけにゃ早いが、用件はなんだ」

と、声をかけた。

「実はな、いつか頼んだ鳴き猫……こしらえてもらいてえんだ」

茂兵衛が、そう言って眼をそらせた。鳴き猫の注文は、何度となく茂兵衛から聞いている。が、佐七は、いつも、

「俺は、いかさまは作りたかねえ。さいころ師の本領は、姿形がよく、手ざわりがよく、てのひらにのせたときの程よい重さ……そして、盆茣蓙の上に壺をふったときの手ごたえ……それだけに精魂を打ち込んでいるんだ」

と答えてきた。

佐七は、茂兵衛の横顔を睨んだ。五十を一つか二つ越しているが、白毛一本なく、顔色もつやがいい。鼻稜がつぶれ、小鼻が張り、眼つきにぞっとするような鋭さがある。

「鳴き猫は、作らねえといったら作らねえ。そんなもんをこしらえれば、必ず、大損する奴がでる。あんたのように、親の代からつづいた丁字屋の店を、博奕代でなく

す者が出てくる」
　佐七は、表情を堅くして答えた。
「でもな、こんどの博奕を負けると、お藤を又五郎に取られちまうんだ」
　茂兵衛が、しゃくれた顎をつき出した。
「なんだって……お藤さんを賭けた。馬鹿な、そんな博奕ってあるもんか」
　佐七は、思わず拳固を握りしめた。
「ま、聞いてくれ」
　茂兵衛が、又五郎とのいきさつをしゃべりだした。
　唐傘屋又五郎は、根っからの博徒だった。
　傘屋の次男坊に生まれ、行く行くはのれん分けをしてもらうはずのところ、十七、八のころからぐれ出して、二十二、三のころには、いっぱしの兄貴分となっていた。
　体格がよく腕っぷしが強かったので、たちまち頭角を現わし、三十の声を聞くころには、唐傘屋を名のる博徒の親分になったのだ。
　丁字屋茂兵衛は、子どもの時分から、又五郎と遊び友だちだった。年は、茂兵衛のほうが二歳年長だったが、兄弟のように親しんでいた。一時は、唐傘屋の客分となり、羽振りをきかしたこともあった。
　二人が袂を分つときがきた。
　又五郎が、いかさま博奕をはじめるようになったからだ。茂兵衛は、四、五年の間、家業に精を出していたが、博奕好きの虫が頭をもたげ、ふたたび又五郎の賭場へ出入りするようになった。
　賽の目に憑かれ出すと、とうとう身代を棒にふるほど、深みにはまってしまったのだ。
　又五郎のいかさま賽は、どこで作らせる物かわからないが、きまった丁目が出るようだった。一から六まで、さいころによって、出る目が一定していたのだ。
　茂兵衛は、いかさまを見破り、大喧嘩となった。あわや、刃物ざんまいになろうとしたとき、駒形の弥九郎という博徒の頭領が仲にはいり、手打ちを行なった。
　手打ちの条件は、茂兵衛の持ちこんだ賽で、五番勝負をつける――ということだった。賭け金は、茂兵衛が丁字屋の店、又五郎が、小島丁の自分の家とあり金二百両ときまった。
　茂兵衛は、佐七に入念なさいころを作らせた。惚れ惚れするような出来のいい賽だった。二人は、駒形の弥九郎の家で、丁半博奕の五番勝負をやった。
　結果は、三対二で茂兵衛の負けとなった。茂兵衛は、

丁字屋の家とのれんを、又五郎に引き渡し、亀の子長屋の住人となった。三年前の春のことである。
　茂兵衛の妻は、悲運を嘆き病没した。当時、十四歳のお藤は、十七歳に成長し、水々しい娘盛りとなった。父と娘は、丁字屋から菓子を仕入れ、これを大店、お屋敷へ納入し、細々と生計を立てていた。
　佐七が、茂兵衛父子に、とくに親しくつきあうようになったのは、又五郎との五番勝負に使ったさいころを、自分が作った――という自責の念があったからだ。
　茂兵衛が長屋の住人になったとき、〈あのとき、俺が鳴き猫をこしらえてやったら、丁字屋も、身代限りをしないですんだはずだ〉
　と、胸の痛む思いを抱いたのだ。
　茂兵衛の憔悴に引きかえ、お藤は、快活な娘だった。佐七のことを、
「おじさん」
　と呼び、ときどき、煮物などをこしらえて届けてくれる。拭き掃除をしてくれたり、洗濯までやってくれた。
　佐七は、お藤が成長するにつれ、特別な感情を抱くようになった。茂兵衛父子が、長屋住まいをするようになったとき、佐七は、二十九歳だった。五年前、女房をもらったが、佐七の貧乏ぶりにあきれ、逃げ出されて以来、独身をつづけている。
　佐七は、夜鷹の類を抱いたこともなく、夜の酒を飲み歩くこともしない。ただ、六畳の仕事場にすわって、こつこつとのみをふるっているだけだ。長屋の連中は、
「能なし」
　とか、
「変人」
　とかげ口を叩くほど、彼の暮しぶりは、人間ばなれしていた。
　が、なかなか立派な風貌をしている。秀でた眉は太く濃かった。二重瞼の眼は、女形のように切れ長く、中高の鼻と口元には、きりりとした品があった。
　佐七は、お藤と冗談口をきくのがたのしみだった。少女期にありがちなはにかみがなく、あけすけにものを言うのを聞いていると、佐七の胸に、熱い思いがふくれてくるのだった。
　さいころ師佐七は、日本橋矢ノ倉に住んでいた玄妙斎伝八郎の弟子だった。玄妙斎のさいころは、博徒なら誰でも知らぬ者がないほど知られていた。

伝八賽といえば、いかさま博奕に欠かすことのできないものだった。鳴き猫の賽は、彼の得意の作品で、五分五分とか、七三、あるいは六四というように、注文者の好みに応じ、さいころを作った。したがって、値段も高く、一対で十両を下ることはなかったといわれている。

佐七は、十五の年に住込みの弟子となった。父親が、浅草松清丁の博徒で、母が、その二号をしていて、佐七を生んだ。父は、賭場の出入りで殺され、母親は、足手まといの佐七を、玄妙斎にあずけると、行方をくらましてしまった。

佐七は、生まれながらにして、無法の世界で生きていくような運命を、背負っていたといえる。が、彼は、玄妙斎のところで、いかさま賽の作り方を修得しているうちに、暗がりから抜け出そうと考えるようになった。

師匠と博徒との取引きをみていると、ぞっとするような殺気が感じられたからだ。博徒は、金に糸目をつけない代わりに、玄妙斎の最高の作品を買おうとする。

玄妙斎は、秘術をつくしてさいころをこしらえるが、できるだけ高く売りつけようとする。十両が二十両にはね上がり、ときには、百両と吹っかけることもあった。いずれも、暗い金の得失をめぐる息の詰まるような駆け引きだった。

佐七が、生涯、いかさまを作らない――と決意する事件が起きた。玄妙斎が、百両で売ったさいころが、巨利を生み、被害をうけた者が、玄妙斎を刺し殺したのだ。犯人は、今もって不明だが、佐七は、殺人者の声を、押入れの中に隠れて聞いていた。

「てめえの作ったいかさまのおかげで、俺は、島を追われるほど負けこんだ。どうせ、生きちゃいられねえ体だ。あの世へ行く前に、てめえを道連れにしてやる」

と、詰まった声をあげ、匕首で、玄妙斎の胸元を突き刺し、逃走した。佐七は、そのとき二十一歳になっていた。〈俺は、どんなことがあっても、いかさまは作らねえ〉と、このとき、決意したのである。

亀の子長屋へ住みつき、まともなさいころだけをこしらえ、細々と暮らしていた。三年前から、佐七の胸に灯がともった。隣家に住む、お藤と夫婦になれたら――という思いが、色濃く焼きついていたのだ。

三年経ってお藤は十七となり、佐七は三十二になった。十五年のちがいはあるが、佐七は、生まれてはじめて恋を知ったようだ。お藤が、何かの都合で、顔を出さない日はなんとなく物足らなくなり、仕事も手がつかな

かったのである。

佐七は思い悩んだ。

茂兵衛が、お藤を賭けて、唐傘屋又五郎と勝負をする――と言われ、即答ができなかった。

「茂兵衛さん、なぜ、そんな勝負をするんだ。やめてくれ。負けたらどうする。お藤さんは、又五郎の妾にされちまうんだ。考えただけでも、ぞっとする」

佐七は、真剣になって言った。

「だがな、又五郎の奴、年がいもなく、お藤に惚れやがった。半年も前から、月五両の手当を出すから、妾にくれ――と言うんだ。俺は、馬鹿なこと言うな。お藤は、どんなことがあっても、てめえなんかの妾にしてたまるか――と、怒鳴り返してやったよ」

佐七は、生唾をごくりと飲みこみ、汗ばむほど手を握りしめた。

「佐七っつぁん、考え直してくれ。伝八賽といえば、日本一のいかさまだ。その秘術をうけついでるのは、あんたしかいねえ。鳴き猫だ。それをこしらえてくれ。それができ上がるめどがついたら、俺は、又五郎と十番勝負をかけるんだ」

茂兵衛の顔面が、紅潮してきた。五十をすぎてまで、博奕にいのちをかけているのだろう。

「断わる。俺は、いかさまは作らねえ」

佐七は、呻くように答えた。

「十番勝負の約束は、できちまったんだ。おめえさんの承諾はもらっちゃいなかったが、きっと承知してくれる――と思ったんだ」

「俺が、いかさまを作らねえことは、知っていたはずだが……」

「けどな、佐七っつぁんはお藤が好きだ。お藤も、おめえさんさえ承知なら、嫁入りしてえと、言っている。だから、お藤を賭けるといやあ、おめえさんは、断わるはずがねえと、思っていたんだ」

佐七は、頬をほてらせ、首を垂れた。

「よく聞いてくれ。俺は、丁字屋のせがれとして生まれ、亀の子長屋で暮らしているのは、博奕のせいだ。が、なんとしても、丁字屋を取り返してえんだ。方法は、一つしかねえ。博奕で取られたんだから、博奕で取り返すより方法がねえわけだ」

佐七は、顔をあげ、茂兵衛を見守った。その眼が、火でもついたように燃えていた。

「十番勝負、しかも、さいころは俺のものを使っていい

と承諾を取った。又五郎は、江戸中のいかさまさいころ師と渡りがついている。俺が、いかさまを買えば、たちどころに奴のところへ知らせがはいることになっている。だから、たかをくくって、俺の賽を使うことを承知したんだ」

「俺の作った鳴き猫なら、又五郎には気づかれねえってわけだな」

佐七は語尾に力をこめた。茂兵衛が、

「そのとおりだ」

と、声をふるわせた。

二　いかさま賽

「勝負は、いつだ」

「三月三日、桃の節句、丁字屋の二階。勝負は、十番。四六の鳴き猫ならいいあんばいだが」

「又五郎の賭け金は？」

「丁字屋の店と、銀二百両……こっちは、お藤だけだ」

「俺のほうにも条件がある」

佐七は、そう言って息を殺した。

「なんだ。お藤を嫁にくれ――というんだろう」

「そうだ」

「勝てば、おめえさんにのしをつけて、もらってもらうぜ」

「又五郎のほかにお藤を狙っている奴はいないのか」

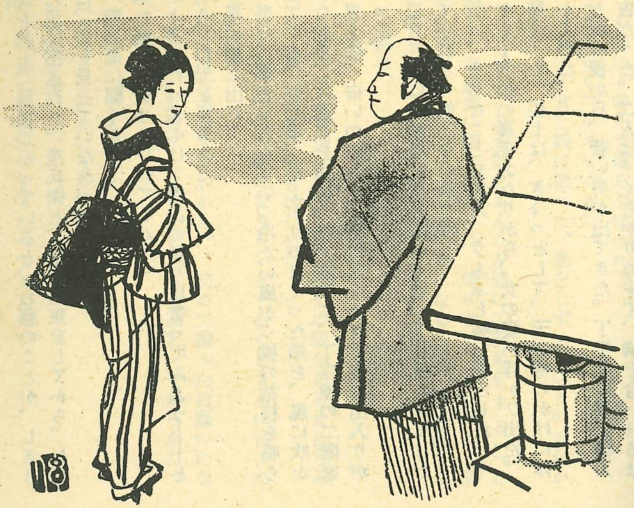
「丁字屋の菓子職人の三吉がいる。けど、別に、いいなずけにしたわけじゃねえ。親の俺が、おめえにくれるといやあ、それまでの話だ」

「わかった。桃の節句まで、あと二十七日……四分六の鳴き猫をこしらえるよ」

茂兵衛が、佐七の手をつかんだ。佐七は、その手を力づよく握り返した。茂兵衛は、晴れやかな表情で、帰って行った。

四分六――というのは、十回のうち六回まで、同じ目が出るさいころをいう。双六に使うさいころは、粘土を固め、白胡粉を塗ってこしらえるが、賭博用のそれは、つげ材を使う。鉛の入れ方に工夫が必要だった。普通のいかさま賽は、鉛の重力を片面に片よらせることでいい。

が、鳴き猫は、鉛は重量をつけるためだけに使い、十回のうち六回以上、胴元の狙う目が出る鳴き猫は、椿油に菜種油をまぜたものを片面の内部へ入れておく。し



かも、油とまざることのない少量の水を注入する。二種の油と水の量によって、目の出方がちがってくる。

さいころを壺の中に入れ、振ったとき、三種類の液体の混合の具合がちがい、重力に差が出てくる。たとえば、水が上方なら、重力は賽の中心に近くなり、仕掛の影響を余りうけない。

が、水が下方にくると、重力が一方の下辺にかかり、同じ目が出てくる。三種の液体を、どんな割合にすれば、七三になり、四分六になるのかは、あくまで勘だった。

玄妙斎は、さいころを作ると、誰もいない作工場で、盆茣蓙を敷き、壺をふって、さいころをころがしていた。何十回、何百回くり返し、気に入った目が出なければ、その賽を、叩き割ってしまった。

鳴き猫は、長い年月の修練の結果、生まれたものなのである。

佐七は、三日間、製作方法を考えた。玄妙斎の手口が、ありありと浮かんでくる。三日目に、製作意欲が湧いてきた。

その三日目の夕方――。

佐七は、表通りの風呂屋へ出かけた。久しぶりで体の

垢(あか)を流し、湯につかっていると、お藤のことが、しきりに思い出された。茂兵衛と、堅い約束をしてから、お藤は、姿を見せていなかった。

茂兵衛に聞くと、

「お藤は、かぜをひいてるんだ」

と答えた。佐七は、風呂の帰りに寄ってみよう——と考え、口元をゆるめた。

風呂屋を出た。

外は、暮色がただよい、冷たい風が、柳の枯枝を鳴らしている。佐七は、湯上がりのほてった頬を、風に吹かれながら、大通りを横切った。右手に、丁字屋の二階家が見える。白いのれんが、風にはためき、客の出入りがあった。

〈三月三日になれば、茂兵衛さんは、丁字屋のあるじとして戻れる。俺はその娘の婿〉

彼は、そんなことを考え、うふふと喉を鳴らした。そのとき丁字屋の裏手あたりから、女の姿が浮かび出た。お藤だった。佐七は、ぎょっとして、天水桶のかげに体をかくした。

お藤の後から、若い男が出てきた。丁字屋の菓子職人三吉だった。二人は、くらがりの中で、胸を合わせるほど近寄り、何やら話をしている。

佐七の胸の動悸が、高くなった。息苦しいくらい呼吸がはずんだ。まもなく、お藤が、小走りに戻ってきた。下駄の音を立てて、佐七の前を通りすぎた。

「お藤さん、待ってくれ」

と、声をかけた。お藤が、足をとめ、

「まあ……お風呂ですか」

と、笑顔で声をかけた。佐七は、駆けよると、

「話があるんだ」

と言って、後を見ないで歩きだした。お藤が尾(つ)いてきた。

家へはいった。

お藤は、今、三吉と会っていたことなど気にもしていないそぶりで、

「かぜをひいたの。今日、やっと起きたところよ。丁字屋に、借りがあったんで、返してきたんです」

と言った。

二人は、細工場の隅で向き合った。

「お藤さん、おやじさんから、何か、聞かなかったかね」

「なんのことでしょ」

「俺と、一緒になる話だ」

お藤は、答えず眼をみはった。

「何も聞いていないのかい」

お藤は、首を縦に振った。息をしずめているのがわかった。

「三月三日、又五郎とあんたを賭けて勝負をすることだ。その勝負に勝つためには、俺のさいころが要(い)る。負けりゃ、あんたは、又五郎の妾になるんだ。茂兵衛さんが勝てば、丁字屋を取り戻すことができる」

お藤は、

「まあ」

と言って、表情を堅くした。佐七の眼をまじまじとみつめ、肩に波を打たせはじめた。

「あんたは、俺の嫁になりたいと、おやじさんに言ったそうだな」

佐七はお藤の手をつかんだ。初めて握ったお藤のたなごころは、溶けてしまうかと思えるほど、やわらかだった。

「お父っつぁんに、そんなこと……」

「言ってないというんだね」

お藤が頷いた。

「丁字屋の三吉と、どうなってるんだ」

「小さいときから、きめてあるんです」

「何をだ」

「夫婦(めおと)になること……」

佐七は、握った手をはなした。お藤が顔をそむけた。

彼は、体がふるえるほど、腹が立ってきた。

〈茂兵衛は、俺に、鳴き猫をつくらせるため、俺を欺しやがった。俺が、お藤に惚れてる心を、うまく利用したんだ。俺は、たしかに噂どおり能なし野郎だ。一途に、いかさまを作らず、今日まできたおかげで、茂兵衛の大事な勝負に、役立たせる鳴き猫を作ることができると思っていた。お藤が三吉といいなずけになっているなら、勝負は、俺にかかわりあいがない〉

佐七は、そんなことを考え、お藤を睨んだ。白い襟足が、眼に沁みこんだ。小柄ながら、抱き肥りのするような姿が、はげしく胸をゆさぶった。

お藤が、何を思ったのか、突然、佐七の膝へしがみついた。

「おねがい、あたしを自由にしてください。あたしの体を、佐七さんにさし上げますから、どうか、鳴き猫を作って……おねがいです」

と、お藤が、泣き声をふるわせた。

佐七は、お藤の背中を抱いた。が、たちまち腕を引っ込めると組んでしまった。お藤を、抱く気になれなかったのだ。

〈俺の欲しいのは、体じゃない。お藤の心だ。うかつにも、お藤が俺を好きだと思っていた。ここ三年間は、お藤を思いつづけ、その日その日を過ごしてきた。が、どうやらお藤の心は、三吉にある。それにもかかわらず、お藤は、体を投げ出してきた。丁字屋を取り戻したい一心からだろう〉

佐七は、歯ぐきが痛くなるほど、歯を噛んでいた。

なんとなく腹が立つ。茂兵衛に欺されていたと思うと、残念だった。が、三月三日の勝負に負ければ、お藤は、又五郎の妾になる。博奕の腕は、又五郎のほうが上だ。まともに勝負すれば、茂兵衛に勝ち目はない。俺は、どうすりゃいいんだ――。

「俺の欲しいのは、あんたの体じゃねえ。気持ちだ。俺をきらっているなら、茂兵衛と又五郎の勝負は、なんの関係もねえわけだ。俺はな、馬鹿なもんだから、あんたを思いつづけてきた。嘘じゃねえ」

佐七は、泣き声を絞った。

お藤は、畳に体を伏せたまま嗚咽をつづけていた。佐七は、着物の裾のみだれに眼をとめ、息をとどめていたが、

「あんたの心が、俺のものになるまで、鳴き猫は作らねえ。帰ったら、おやじさんにそう言っといてくれ」

と、喘ぐように言った。

お藤が立ち上がった。

「二、三日、待ってください。お父っつぁんと相談しますから」

と言って、お藤が帰った。

六畳一間の部屋に、寒い風が吹き抜けるような寂寥がただよいはじめた。分厚い板でできた工作台、のみ、のこぎり、きりなどが雑然とならんでいる。

佐七は、台所へ立つと、だいぶ前に博徒から酒樽をもらったことを思い出し、冷やのままお椀で飲みだした。酒は、あまりいける口じゃないが、飲まずにいられなかった。塩をなめながら、たてつづけに、三杯を飲み干した。眼まいがしてきて、立っていられなくなった。

佐七は、座敷へ戻ると、押入れから布団を取り出し、頭からかぶると、そのまま眠ってしまった。

夢を見ていたようだ。丁字屋が、茂兵衛のものとなり、お藤と三吉が、晴れて夫婦となり、祝いの杯ごとを

している夢のようだった。佐七は、誰かに揺りうごかされ、眼をさました。

行灯の明りがついていた。眼の前に、大きな男が、立ちはだかっているのが、おぼろげに映った。佐七は、とび起きた。

「だ、誰だッ」

彼は、詰まった声を出した。

「俺だ、唐傘屋の又五郎だ」

重く沈んだ声をきいて、佐七は、改めて眼をみはった。四角い顔の六尺ゆたかの大男は、まぎれもなく又五郎だった。

佐七は、又五郎と知って、ほっと胸を撫でおろした。何回となく会ったことがある。玄妙斎が死んでから、まともなさいころを売ったこともあるし、鳴き猫を頼まれたこともあったのだ。

又五郎が、腰をおろし、あぐらをかいた。佐七は、膝をそろえ、両手の拳固をかためた。彼が、深夜、訪ねてきた意図は、おおかた見当がついているからだ。

「佐七っつぁん、茂兵衛から、鳴き猫を頼まれちゃいねえかい」

又五郎が、錆びた声で言いながら、顎を引いた。頬骨のとがった大きな顔が、灯あかりの中に浮かんでいる。

佐七は、答えず呼吸をしずめていた。

「茂兵衛の奴、鳴き猫のさいころ、おめえに注文しなかったかと聞いてるんだ」

又五郎の声が鋭く尖った。

「俺は、何も引き受けちゃいねえ」

佐七は、やっとそれだけを答えた。

「じゃあ、茂兵衛から頼まれたけど、承知しなかったというんだな」

又五郎が、上体をのり出し、佐七を睨みつけた。佐七は、ぶるっと身ぶるいをした。

「な、なんにも頼まれちゃいねえ。俺は、鳴き猫の作り方なんぞ、とっくに忘れちまった。玄妙斎が死んでから十一年になる。まともなさいころしか作っちゃいねえことは、親分も承知でしょう」

「そりゃわかってる。けどな、おめえは、お藤に惚れている。惚れた弱味で、鳴き猫を作る気になるはずだ。嘘をついても、調べはついている。亀の子長屋にゃ、俺の息のかかった奴が、何人も住んでるぜ。みんなつつぬけなんだ」

「だったら、なおさら、俺が作らねえこと、わかってい

なさるわけだ。俺は、どんなことがあったって、鳴き猫は作らねえ」
「わかった。佐七っつぁん、約束してくれ、こんりんざい、鳴き猫は、作らねえとな」
「約束してもいい。その代わり、まともなさいころは、作らせてもらいますぜ。三月三日、茂兵衛さんとの勝負に使うやつだ」
「そんならかまわねえ。賽がまともなら、目は、出たとこ勝負だ。博奕打ちがいのちをかけてやる勝負だ。勝つも負けるも、お天とうさましだい……」
「やっぱり、丁字屋の店と、お藤さんを賭けるんで……」
又五郎の眼が光った。
「俺が勝てば、お藤をもらうぜ。その場合、おめえさん、どうなんだ。お藤欲しさに、鳴き猫をこしらえりゃ、気の毒だが、生かしちゃおけねえ」
又五郎が、ふところから匕首を抜き放ち、佐七の鼻先につきつけた。銀光が、佐七の眼に焼きついた。
「俺も、いのちは惜しい。鳴き猫は、どんなことがあっても作らねえ」
又五郎の表情が、やわらかくなってきた。
「そうとわかれば、こんなうれしいこたあねえ。佐七っつぁん、すくねえが、俺の頼み賃だ。十両ある。受け取ってくれ」
又五郎が、白紙に包んだ金を、佐七の膝の上にのせた。佐七は、包み金を、又五郎の手に押し戻した。
「銭はいらねえ。銭をもらえば、桃の節句の勝負に、俺もかかわりを持つことになるんだ。鳴き猫も作らねえし、銭もいらねえ」
佐七は、その代わり、お藤の体に指も触れねえでくれ——と、喉まで出かかった言葉をのみこんだ。
「そうかい。じゃあ、銭は引っ込めるぜ。ことわっておくが、勝負がついたとき、茂兵衛が持ちこんださいころ、叩き割るぜ。中身を調べるんだ。つげ材の中から、油が出てくりゃ、鳴き猫。そんなときは、あの世行きだ」
又五郎は、ダミ声を出すと立ち上がった。

三　佐七の悩み

佐七は、毎日酒浸りになっていた。
酒に酔い、ぼんやりと体を横たえているだけで、なんの意欲もなくなっていた。
お藤の気持ちはわかった。三吉と一緒になるんだ。俺

には、なんのかかわりあいもねえ女だった。鳴き猫なんか作らねえ。茂兵衛は、三月三日の十番勝負で負けるだろう。お藤は、いやでも又五郎の妾にならなけりゃいけねえ。三吉が泣くだろう。
かりに、俺が、鳴き猫をこしらえ、茂兵衛に勝たしたところで、お藤は、三吉と一緒になる。おまけに俺は、又五郎に見破られて、殺されるだろう。どっちへまわっても、損をするのは俺だ——。
佐七は、そんなことを繰り返し考え、酒を飲んでいた。佐七が、寝ころび、お藤の面影を頭の中で追っているとき、茂兵衛が、はいってきた。
佐七は、酔眼に茂兵衛と知ったが、起き上がろうとはしなかった。茂兵衛が、佐七の枕元に腰をおろした。
「なぜ、仕事をしねえんだね」
「やりたかねえんだ」
「又五郎の奴、ゆんべきたようだな」
茂兵衛が、顎をつきだし、語尾に力をこめた。その眼が、ぎらぎらと光った。
「知ってたのか」
「夜っぴで、見張りをしていたよ。いつなんどき、又五郎が乗り込んでくるかわからねえからな」
佐七は、寝返りを打ち、茂兵衛に背中を向けた。茂兵衛が、佐七の背中をつかんだ。
「おい、又五郎から銭をもらったな」
「十両よこした」
「この野郎、それで酒浸りだな。おい、それでもてめえは、江戸じゃ名の知れたさいころ師か」
茂兵衛が、声をふるわせ、佐七の頭を拳固で殴りつけた。佐七は、とび起きた。
「何をしやがる。又五郎は、銭をよこし、俺に、鳴き猫を作るな——と言いやがった。俺は、銭を叩き返してやったぞ」
茂兵衛が、
「な、なんだって、銭を返した？　そ、そりゃほんとうか」
と、声をわななかせた。
「嘘だと思うなら、又五郎に聞いてこい」
佐七は、あぐらをかき、腕を組んだ。
「それじゃあ、おめえは、俺のために鳴き猫をこしらえてくれるんだな」
茂兵衛が、声を吃らせ、佐七の膝の上をつかんだ。
「鳴き猫は、作らねえ。おめえさんの胸に聞いてみろ。

俺を欺しやがって……馬鹿にされてたまるか」
佐七は、ダミ声を張り上げた。
「俺が、いつおめえさんを欺した。そりゃ、思いちがいだ」
茂兵衛が、佐七の胸元にしがみついた。
佐七は、茂兵衛の腕を払いのけた。
「よく聞け、お藤さんはな、三吉といいかわした仲だ。親のおめえも、これをゆるし、丁字屋が、元どおり戻ったら、三吉と夫婦にさせることになってるというじゃねえか」
茂兵衛が、首を垂れて聞いている。
「鳴き猫を作るのは、いのちがけだ。おめえが勝てば、俺は、又五郎に殺されるんだ。それでもこしらえると言ったのは、お藤さんと夫婦になれると思ったからだ。男は、惚れた女に生命を捨てる——とは、話じゃ聞いていたが、まさか、俺がその立場になるとは思わなかった」
と言った。
茂兵衛が、消え入るような声で、
「すまねえ」
「俺は考えた。死んでもいい、一度、お藤さんと夫婦として抱き合ってみてえと思ったんだ。男と生まれて、好きな女と一緒になれりゃ、これ以上のこたあねえ。おめえさんには、内証だったが、俺は、三年間、お藤さんを思いつづけ、のっぴきならねえところまできちまったんだ」
茂兵衛が、眼をうるませてきた。
「俺という男は、長屋の連中から能なしとか、変人とかいわれているが、ここ三年間、白首を抱いたことがねえ。お藤さんがいたからだ。お藤さんの顔、手、姿を瞼に思いうかべているだけで、たのしかったんだ」
佐七は、言葉を途切らせ、茶碗の酒を飲み干した。
「おめえさんは、俺の心につけこみ、お藤さんを餌にして、俺に、鳴き猫を作らせようとしやがった。見損ったおやじだ。俺は、うっかりその気になった。これほど馬鹿にされ、しかも又五郎に狙われる危ない橋が渡れるはずがねえ」
佐七は、言葉をふるわせ、歯ぎしりした。
茂兵衛が、顔を上げた。その眼に涙が、にじんでいた。茂兵衛は、居ずまいを正すと、畳に両手をつき、額をすりつけた。
「すまねえ。言うとおりだ。けれど、俺は、なんとしても、丁字屋を取り返したかった。お藤を、又五郎の妾にしたかなかった。ただ、その一念で、嘘をついた。かんべんしてくれ」
茂兵衛が、泣き声を絞(しぼ)った。
「おやじさん、三月三日の勝負は、取りやめにするんだな。亀の子長屋に住んでりゃいいじゃねえか。もともと、丁字屋を又五郎に取られたのは、身から出た錆だ。丁字屋を取り戻す考えさえ捨てりゃ、お藤さんは無事だ」
佐七は、そう言いながら〈俺も、無事でいられる〉と思った。
茂兵衛は、しばらく考えていたが、
「わかった。おめえの言うとおりだ。三月三日の十番勝負、取り消しにすると、又五郎に談判してみよう。彼奴(あいつ)も、まさか、勝負しろ——とは言うまい」
と、詰まった声で言った。
佐七は、勝負取りやめに期待を持った。
茂兵衛とお藤は、今までどおり、長屋住まいをつづけるだろう。丁字屋の菓子職人三吉は、お藤と夫婦になるわけにはいくまい。
又五郎は、蝮(まむし)みたいな奴だ。勝負が取りやめになっても、お藤への執念は捨てやしまい。機会を狙って、お藤を口説くだろう。そんな状況で、三吉は、お藤と夫婦になれるはずがない。とすると、俺とお藤が結ばれる折りもあるのじゃないか。
今までどおり、隣りづきあいをつづける。お藤は、毎日遊びにくる。よしんば、一緒になれなくても、お藤が、誰かの持ちものになるよりいい——。
佐七は、茂兵衛に殴られたことも忘れ、仕事に精を出しはじめた。
二日後の夜——。茂兵衛がやってきた。
「勝負取りやめ……承知したか」
佐七は、茂兵衛の顔をみるなり聞いた。
茂兵衛は、膝をそろえてうなだれすわった。
「だめだ。又五郎は、承知しねえ。さいころ勝負がいやなら、匕首で決着をつけろ——と言いやがった」
「なんだって……殺し合いか……」
佐七は、息を飲み、思わず両手を握りしめた。
「そうだ。桃の節句の勝負は、駒形の親分をはじめ、兄弟分に回状をまわしてあると言いやがるんだ。唐傘屋又五郎が一世一代の勝負をするんだ。負けりゃ、博徒から足を洗い、もとの傘屋に戻る。それだけの覚悟をきめた勝負だ。今さら、引っこみがつかねえ——というのが、

彼奴の言い分だった」
　茂兵衛が、そう言ってまじまじと佐七をみつめた。追い詰められた者が、藁でもつかみたい必死の思いが、眼付きにこめられていた。
　佐七は、唇を噛んだ。
　鳴き猫を作るか、作らないか――迷いがかすめた。俺が、精魂こめてさいころを作れば、茂兵衛は、きっと勝つ。が、俺は、又五郎に殺される――。
「佐七っつぁん、思い直してくれ。俺を生かすも殺すも、おめえさんの腕にかかっているんだ。助けてくれ。頼む。お藤が、かわいそうだと思うなら、鳴き猫をこしらえてくれ」
　茂兵衛の声が、かすれた。
「お藤さんは、又五郎の妾にしたかねえ」
　佐七は、呻くように言った。
「だったら……鳴き猫を……」
　佐七は、一文字に口を結んだまま、答えようとしない。自分の生命を賭けることと、お藤の心に、踏んぎりがつかなかったからだ。
　茂兵衛が、
「もしあんたが、作ってくれなかったら、勝負は負けだ。俺は、お藤を刺し殺し、自分も死ぬつもりだ」
　と、細い声をふるわせた。
　佐七は、言葉の真偽を考えた。
「鳴き猫は、こんりんざい作らねえ」
「どうしてもか」
　佐七は、怒鳴るように言った。
「そうだ」
「なぜなんだ」
「おめえは、また、嘘をついた。負けりゃ、お藤さんと無理心中をすると言ったな。けど、そんなこたあできるこっちゃねえ。逃げるつもりだ。三吉を連れ出し、三人で、この土地から、ずらかる考えだろう。俺は、おめえが信用できねえんだ」
　茂兵衛の小鼻の脇が、ひくひくとけいれんした。
「じゃあ、どうやったら、作ってくれるんだ。まさか、お藤の体をくれ――と言うんじゃねえだろうな」
「かんじんなのは、お藤さんの心だ。三吉と夫婦約束をしている以上、俺が、いのちがけで鳴き猫を作る意味がねえんだ。俺はそれほど馬鹿じゃねえよ」
　茂兵衛は、
「わかった」

と短い言葉を残すと、外へ出て行った。佐七は、入口まで出てゆき、あたりを見まわした。又五郎の手下の者の見張りでもあるのではないか――と思ったからだ。
　茂兵衛の姿が、隣家へはいらず、長屋木戸の外へ出て行った。前かがみになった姿が、ひどく老けこんで見えた。
　隣家の入口から、お藤の顔が覗いていた。お藤が、茂兵衛の後を追って、小走りに出て行った。
　佐七は、お藤が木戸口から外へ消えると、雨戸を閉め、座敷へ戻った。茂兵衛の力弱い後ろ姿が、気になって仕方がなかった。
　にべもなく断わったことが、ひどく悔まれた。が、鳴き猫を作る気には、なれなかった。
〈茂兵衛は、丁字屋へ行ったな。三吉に会うためだろう。お藤は、それを察し、後を追ったんだ。三吉を外へ連れ出し、相談をするにちがいない。だからといって、どうともなるはずがない。三吉が、お藤をあきらめることは、ないだろう〉
　佐七は、残り酒を飲むと、布団にくるまった。眼が冴えて眠れなかった。
「どうにもならねえこった」
　佐七は、大声で怒鳴った。むしゃくしゃして、なんとなく腹が立って仕方がない。せんじ詰めると、お藤の心が、三吉にあることの腹立ちだった。
　三吉の顔を思い出した。
　五尺一、二寸の小柄な男で、年は二十一。子どものころから丁字屋に住み込み、一人前の菓子職人になった。男振りはいいとはいえないが、気立てがやさしかった。
　佐七は、お藤のことさえなければ、いい若い衆だ――と思っていたのだ。
　半刻ほど経った。裏側の窓の外で、人の気配がした。
　佐七は、ぎくりとしてはね起きた。
　雨戸を、とんとんと叩く音がした。
　佐七は、足音を忍ばせ、雨戸へ近よった。
「私だ。三吉です。開けてください」
　まさしく三吉の声だ。佐七は、雨戸を開けた。三吉が、まろびこむようにはいってきた。佐七は、雨戸を閉め、かんぬきをかけた。
　三吉が、膝をそろえてすわった。
　佐七は、黙って睨んだ。
「佐七さん、おねがいがあってきたんだ」
　色白の小柄な顔に、真剣なものがあふれている。眼を

大きく見張り、低い鼻の脇を、ひくひくとけいれんさせ、頭を下げた。
「俺はな、鳴き猫は作らねえぜ。おめえが、なんぼ頭を下げても、俺の答えは変わらねえ」
佐七は、三吉の顔を見ているうちに、むらむらと嫉妬の思いが湧き上がってきた。お藤と、手を取り合い、頰をよせ、むつみ合っていると思うと腹が立ってきて、思わず大声を出した。
「声を……沈めてください。誰かが、見張ってるかもしれない」
「じゃあ、なぜ、俺んとこへきたんだ」
「私の決心を、聞いてもらうためです」
「お藤と、添いとげるって決心だろう」
「ちがいます」
「なんだと……なにがちがうんだ」
「お藤さんのことは、あきらめました。桃の節句の勝負が、どっちへころんでも、私は、お藤さんと、夫婦になることはできません」
三吉の声が、かすれてきた。
「な、なぜだ」
「又五郎さんから、はっきり言われたんです。茂兵衛が、まちがって勝つことがあっても、お藤とおまえは夫婦にゃさせねえ――と」
佐七は、又五郎のすさまじい形相を瞼にうかべ、膝の上の拳固を握った。
「やっぱり……そうか」
三吉の眼に、涙が滲んできた。
「ですから、あきらめました。子どものころから、いいなずけだったんです。私は、お藤さんが好きです。でも、だめなんです。私には、お藤さんを連れて逃げる勇気がありません。佐七さんなら、それができます」
「なんだと……」
「鳴き猫をこしらえてください。そうすれば、丁字屋は、ご主人の手に取り返せるんです。私は、今、お藤さんに言いきかせました。佐七さんのおかみさんになってくれ――と」
佐七は、思わず三吉の手をつかんだ。
「で、お藤は……なんと……」
「承知してくれました。佐七さんのおかみさんになると……」
「ほ、ほんとか」
「まちがいありません。だから、おねがいです。鳴き猫

を……」
佐七の胸元が、はげしく波を打ちはじめた。お藤の面影を眼底に浮かべながら、
「よし、わかった」
と、呻き声が佐七の口から洩れた。

四　血だるま賽

佐七の胸に火がついた。
お藤と夫婦になれるのぞみが湧いた。問題は二つあった。一つは、鳴き猫を作れば、茂兵衛は勝つが、佐七が又五郎に殺されることだ。殺されないためには、鳴き猫に代わるさいころを作らねばならないことだ。
しかも、必ず、茂兵衛が勝たねばならぬさいころでなければならない。鳴き猫は、刃物で斬り割れば、必ず油が出てくる。又五郎は、佐七を殺すにちがいない。鳴き猫に代わる別のさいころで、しかも、四分六で茂兵衛の勝ちになる物、それを作ることができれば、佐七の言いわけがたつかもしれない。
「俺は、鳴き猫は作らなかった」
と、佐七が言えるのだ。
が、そんな物が、作れるだろうか。ここに第一の問題があった。
第二は、茂兵衛が勝ったとき、果たして、お藤と夫婦になれるかどうか――だ。又五郎が、黙って見ていてくれるとは限らない。鳴き猫に代わるさいころをこしらえたとしても、それが、いかさま物であることを見破ったとしたら、佐七を殺すだろう。
その場合、お藤を連れて逃げのびることができるかどうか。どこへ逃げても、又五郎の手がのびてくるにちがいない。それをのがれて、二人が夫婦になるのは、容易なことではない。
佐七は、腕を組んで考えこんだ。〈どっちも、大変なこった。やめたほうがよさそうだ〉と考えついたとき、お藤がはいってきた。
お藤が、佐七の前にすわり、黙って首を垂れている。
佐七は、抱きしめたい衝動を耐え、眼を据えた。
「三吉さんのお話、聞いてくれましたか」
お藤が、消え入るような声で言った。
「聞いた。あれ、ほんとうなのか」
「ほんとうです。お父っつぁんと三人で話し合ったんです」

「あんたは、それでいいのか」
お藤が、首を縦に振った。
佐七は、その動作をみつめていたが、夫婦の約束をした女のよろこびを、感じとることは、できなかった。義理にはさまれ、悲しみをこらえている様子が、手に取るようにわかった。
佐七の胸にゆらいでいた灯が、消えた。
〈俺は、思いちがいをしていたようだ。三吉が、お藤をあきらめると言っても、お藤は、よろこんで俺の女房になるとは限らねえ。現に、お藤は、悲しみに沈んでいる。死んだ気で、三吉をあきらめ、俺のかみさんになろうとしている。そんなお藤を、抱くのは無理だ。女房と呼べるもんじゃねえ〉
佐七は、
「お藤さん、俺は、あんたをあきらめるぜ」
と、冷たく言い放った。
お藤が、顔を上げ、
「なぜなんです」
と、声を吃らせた。
「あんたは、死ぬ気で、俺の女房になることを承知した。けど、それじゃ、ほんとの夫婦になれるもんじゃねえ。夫婦ってもんは、惚れ合わにゃ、抱き合えるもんじゃねえよ」
お藤が、まばたきもせず、佐七をみつめている。その眼に異常な光がある。
「人の弱みにつけこみ、無理難題を押しつけるのは、やくざ者のするこった。俺は、今、それに気がついた。すっぱりあきらめよう。あんたは、根っから三吉に惚れている。それなのに、むしり取ったところで、うれしい気持ちはしねえんだ」
「では、鳴き猫、こしらえてはくれないのね」
「お藤さん、三吉と手を取って逃げたらどうだ。もし、逃げるところがないというなら、俺が、手引きしてもいいぜ」
お藤が、
「まあ」
と言って声を飲んだ。
「四谷左門丁に、鳴海屋弁蔵という目明かしの親分がいる。この人は、若いときは、盗っ人だった。俺の師匠の玄妙斎先生と、遠い血のつながりがあって、俺が、子どもの時分、ちょくちょくきていた。今じゃ、足を洗って立派な大店の旦那、しかも十手を預かっている。この方

の長屋へ、かくまってもらえば、又五郎の追手の手も、とどかねえと思うからな」
佐七は、鳴海屋弁蔵の顔を思い出した。
今でも、年に一度か二度ぐらいは、顔出しをしていた。佐七が、いかさま賽を作らないのは、弁蔵から、
「玄妙斎の真似をするんじゃねえ」
と、会うたびに言われていることも、心のおさえになっていたのだ。
「逃げるなんて、そんなことできません。お父っつぁんが、殺されちまいます」
お藤が、喉にからんだ声で言った。
「それより手がねえじゃねえか」
「鳴き猫……こしらえちゃくれないんですか。どうしても……」
「そんな話は、やめにしよう」
お藤は、口元をわななかせ、体を堅くしていたが、突然、細工台の上の小刀をつかむと、喉を突いた。血が噴きとんだ。
佐七は、おどろいて、小刀をもぎ取り、手拭で、傷口を押えた。傷は、喉の中央をはずれ、右脇を斬っただけだった。佐七は、細工用の木箱の引出しから、貝殻にはいった塗りぐすりを取りだすと、和紙にべっとりと塗りつけ、傷口に貼った。
お藤の顔面から、血の気が失せ、佐七の腕の中の体が、力を抜いていった。佐七は、傷口を睨んだ。油ぐすりを貼った紙片の下から、どくどくと血があふれている。
佐七が、平手で傷口を押えた。
「お藤さん、大丈夫だ。傷は浅い。しっかりするんだ」
佐七は、お藤の耳朶に口をよせて叫んだ。
そのとき、声を聞きつけて、茂兵衛が、入口から走りこんできた。
佐七は、お藤を茂兵衛に任せると、外へとび出し、医者を呼んできた。小島丁に住む松庵という医者だった。
医者が、傷口をみた。長さ一寸ほどの切創が、右顎のつけ根から、斜め下に走っていた。血は、止まっていた。医者は、塗りぐすりを塗り、白い布で巻いた。
「よかった。もう一寸、中へ寄っとったら生命はなかった。このぶんなら、歩いてわしのところへ、通えるだろう。くすりを貼り替えによこしておくれ」
医者が言うのを聞いて、佐七は、ほっとした思いを抱いた。彼は、とりあえず一朱の薬代を医者へつかませた。医者が帰った。

お藤が、眼をあけた。
襟元に、べっとり血がついている。その血を眺めているうちに、佐七の頭の中に、鳴き猫に代わるさいころの作り方がひらめいた。
〈血だ。鳴き猫には油を使う。油の代わりに血を使ってみよう。お藤は、俺と三吉の板ばさみになって、死のうとした。いじらしい心根だ。お藤が、いのちをかけたなら、俺だって、いのちをかけてみよう〉
お藤が、
「軽はずみなことをして、すみません」
と、茂兵衛と佐七を見くらべながら言った。茂兵衛が、
「お藤」
と、かすれ声をあげ、お藤の手を取った。
「茂兵衛さん、俺、決心したぜ。鳴き猫よりもっとすばらしいさいころを作ってみせる。俺は、又五郎と鳴き猫は作らねえ——と約束した。けどもそれ以外のものを作らねえ——と約束しちゃいねえ」
佐七は、低いが力のこもった声で言った。
茂兵衛が、
「鳴き猫以上のものが、できるのか」
と言った。
お藤が、
「きっと、できるわ」
と、声をふるわせた。
「たぶん、できると思う。どんな物になるか、やってみねえとわからねえ」
佐七の眼が、生き生きと輝やいた。
「お父っつぁんが、勝負に勝ったら、あたし、きっと、佐七さんのいいお嫁さんになるわ」
お藤が、詰まった声を出した。
佐七は、黙ったまま、頭を下げた。大きな感動が、体の中にふくれ上がり、お藤を抱きしめたい衝動にかられた。彼は、その思いを噛みしめていた。
が、しばらくすると佐七の口から、
「血だるま賽だ。こいつは、まだ誰もこしらえたことがねえ。俺は、このさいころにいのちをかけるぜ。血だ。血が教えてくれたんだ。お藤さんの血が、俺の迷いをさましてくれたんだ。人間は、どうせ一度は死ぬ。いのちをかけりゃ、なんだってできるんだ」
と、つぶやきが洩れた。その声は、佐七が自分に言いきかせているようなひびきがあった。お藤の眼がうるみ、光るものが溢れてきた。茂兵衛が、拳固で自分の眼

をぬぐった。
佐七は、血だるま賽の考案に没頭した。
鳴き猫は、さいころの中心より片寄った部分に油を入れる。油に替えて自分の血を使ってみようと思ったのは、血もまた油に似た性質があるからだ。
が、血は、やがて凝固する。とすると末長く、使うわけにはいかない。勝負の直前に、完成し、勝負がすめば、普通のいかさまさいころになるだろう。中の空洞で固まってしまえば、振ったとき、重心が移動しなくなるからだ。
佐七は、つげ材を切り、ある片側に近づけて穴をこしらえ、二の腕を小刀で傷をつけ、受け皿に血を取り、これを穴へ注入した。一から六までの目をつくり、白く塗り、目を黒くした。
佐七は、たぶん、四の数が十回のうち六、七回の割合で出ると思い、盆茣蓙の上で、壺に入れて振ってみた。が、十回とも四の目が出た。佐七は、大きな失望を味わった。
「これじゃ、世間にざらにあるいかさまだ。こんなものじゃ、三月三日の勝負なんかできるはずがねえ」
佐七は、つぶやきを洩らすと、そのさいころを刃物で叩き割ってしまった。
中心の空洞の位置を変えたり、穴の大きさ、中に入れる血の量を変えたり、八個も試作してみた。が、目は、いつも同じものが出てくる。十番勝負だから、十回に六回、同じ目が出るのが理想だ。それには、どうしたらいいんだ——。
佐七は、考えあぐねた。
お藤が、足音も立てずはいってきて、脇にすわり、じっと眼をそそいでいる。佐七は、お藤の姿を、眼の端に入れたが、声もかけず、黙りこくっていた。お藤は、四半刻（三十分）も、すわっていたが、黙って頭を下げて出て行った。
しばらくすると茂兵衛がはいってきた。同じように腰をおろし、細工場の様子を眺めてから出て行く。佐七は、入口の雨戸に心張り棒をかってしまった。
気持ちが動揺し、考えが乱れるからだ。佐七は、鳴き猫をこしらえようかと思った。が、又五郎の顔を思い出し、断念した。
〈油なら、なぜ、量の加減によって、思いどおりの目が出るんだ。油の上に少量の水を入れる。水と油は、重さ

がちがう。その比重はいつも変わることがない。血だけじゃだめだ。が、水を入れても、血と水はまざり合ってしまう。まざり合わない物はなんだ》

佐七は、食事もとらず、考えこんだ。

が、いい考えは浮かんでこなかった。お藤が、食事を持ってきた。にぎりめしと、香の物と、塩焼の魚だった。佐七は、空腹を覚え、声もかけず、がつがつと食べた。

「三月三日まで、あと五日しかないけど」

と、お藤が、憂いげに声をかけた。

佐七は、

「わかっている」

と短く答えた。が、胸血がはげしく波を打つのを自覚した。あと五日――と思うと、それまでにできるかできないか、自信がなかった。

「大丈夫ですの」

「たぶん……できる」

「できないことも、あるのね」

佐七は、口を結んだ。

お藤の眼が、きらきらと輝やいてきた。その光に、不安な色がかすめた。

「ひょっとしたら、できないこともある。なんともわからねえ」

お藤が、

「できなかったら、どうなるの」

と、おろおろした声を出した。

「むずかしいんだ。俺は、真剣だ。できなけりゃ、茂兵衛さんの負けだ」

「負ければ、あたし……生きちゃいないわ」

「死ぬというんだな」

お藤は、頷くと、ふらふらと立ち上がり、帰って行った。佐七は、その後ろ姿へ、鋭い視線を当てた。胸元に、はげしい波が打ちだした。又五郎の顔が浮かぶ。茂兵衛、三吉の顔。お藤の喉元から噴き出た血の色が、あざやかに浮かんできた。

細工台の上に、お藤が、喉を突いた小刀がある。冷たい銀光を放ち、その光が佐七の眼に泌みた。ふと、佐七の頭に、ひらめきが走った。銀光が、鉛を連想させたのだ。

彼は、九つ目のさいころを作った。中心の下辺に空洞を作り、腕に傷をつけて血を絞り、その血をそそぎ入れてから、鉛の玉を一つ入れた。米粒大の鉛の玉だ。普通

のさいころでも、重さをつけるため、入れることのあるごく小さな玉だった。

玉は、血の上に浮いた。どろりと濃い血の表面張力が、玉をささえているらしい。彼は、同じつげ材で蓋をすると、白い胡粉を塗りつけ、六つの目を黒く書いた。

壺に入れ、振ってみた。目は、四が出た。何回もやってみた。三が出ることもあった。が、十回やって、四が六回出た。

「できた」

佐七は、大声を出した。もう一つ同じさいころを作り、試し振りをやってみた。四分六の割合で四ぞろが出た。

彼は、入念な仕上げをやった。見事な賽が二つでき上がった。彼は、これを〝血だるま賽〟と名づけた。

いかさま賽の中でも、佐七の考案した血だるまは、茂兵衛と又五郎の勝負に使われただけで、その後は作られていない。血を挿入することなど、誰も気がつかなかったからだろう。

三月三日がきた。

茂兵衛が、早朝七つ半（五時）に顔を出した。

「自分の得心のいく物ができた。今、渡す。が、お藤と交換じゃなけりゃ渡せねえ」

佐七は、語尾に力をこめた。

五　節句の勝負

佐七は、血だるま賽二個をお藤と交換した。お藤が、晴着を着て、やってきたとき、佐七の胸がうずいた。

佐七は、茂兵衛と、次のような約束をした。

「俺とお藤が、この長屋にいたんじゃ危ねえ。勝負は、あんたの勝ちだ。だが、俺のいのちもあぶねえし、お藤がさらわれる心配もある。だから、俺は、お藤を連れて、左門丁の弁蔵親分のところへ、頼っていく。ことわっとくが、あんたと又五郎の勝負がきまるまで、俺は、お藤に、指一本さわらねえぜ」

「勝負の場所は、丁字屋の二階座敷だ。結果は、三吉を、左門丁の弁蔵長屋まで走らせて知らせることにしよう」

「わかった。だが、茂兵衛さん、あんたもいのちを大事にしてくれ。負けたと知ったとき、又五郎が、何をやらかすかわからねえから」

「大丈夫だ。親分衆立会いの大勝負……負けたからとい

って、野郎も、刃物ざんまいに出るわけにゃいかねえよ」
　茂兵衛は、口元をゆるめた。自信に満ちた微笑だった。
「十番勝負は、今夜五つ（八時）だな」
「そうだ。五つ半までに、三吉を使いに出す。ここにいねえほうがいいかもしれねえ」
　茂兵衛が、両手で、佐七の右手を握った。血だるま賽をこしらえてもらった感激にふるえているらしかった。
　佐七は、お藤を連れ、長屋を出た。あたりは、まだ真っ暗だった。又五郎の身内の見張りがいるかいないか、あたりに気を配りながら、竹丁へ出た。
　神田川につき当たり、土手道を急いだ。
　お藤は、一言も発しない。ひたすら、足を急がせている。
「なんだか、道行きのようだな」
　佐七は、冗談のつもりで言った。
「あたしは、勝負のことで、いっぱいです」
と、お藤が、堅い言葉で答えた。佐七は、はっと思った。亀の子長屋を出るときから、佐七の心は、浮き立っていた。お藤と夫婦になれると思うと、鼻唄でもうたいたくなるほどだった。だから、つい、道行きなどと言ってしまったのだ。
「勝負は、勝つにきまっている」
「それ、本当ですの」
「あんたは、俺の腕を信用しないのか」
「信じているわ。でも……」
「血だるま賽はな、俺の血がはいっているんだ。あんたに思いをかけた俺の真心が、仕掛けてある。あんたを又五郎に取られたくない一心が、血だるまとなったんだ」
　お藤が、答えず、足もとをみつめながら歩いている。風があった。川面にさざ波が立ち、お藤のおくれ毛をなびかせている。
　四谷橋を渡るとき、空がいくらか明るくなってきた。
　橋の途中で、お藤が足をとめ、川面を眺めた。水鳥が、何羽もかたまって浮かんでいる。水面は、まだほの暗く、鳥は眠りからさめていないらしい。
　お藤は、欄干にもたれ、じっと水をみつめている。佐七は、ふと、投身を考え、お藤の袂をつかんだ。お藤が、振り向いた。青白い顔に血の気が失せていた。
「あんたは、まさか死ぬ気じゃねえだろうな。ふっと、そんな気がしたぜ」
「勝負の結果を聞いてから……」

「負けたら死ぬ気だな」
　お藤が答えず、眼をみはっている。
「万が一、負けても死んじゃならねえ」
「お父っつぁんが負ければ、あたしは、又五郎の持ちものになるのよ。それなら、死んだほうがいいと……」
　佐七は、お藤を睨んだ。〈お藤は、勝っても、死ぬんじゃねえか。一緒に歩いていても、お藤の気持ちが伝わってこない。話もぎごちないし、二、三尺、間をあけて歩いている。普通なら、手ぐらい握ってもよさそうだ。俺は、女のぬけがらと一緒にいるんだ〉
　佐七は、お藤と肩を寄せて歩きだした。甲州街道へ通ずる大通りを進んだ。佐七は、右の手の甲を、ときおりお藤の手にくっつけた。猫が、ちょっかいを出す仕種に似ていた。が、お藤は、その都度、びくっとして手を引っ込めた。
　佐七は、大きな失望を味わった。やっぱり、俺はきらわれているんだ。勝ち負けにかかわりなく、お藤の心は三吉にある。さもなけりゃ、手を握ってもいいはずだ。俺は、血だるまをいのちがけでこしらえた。
　又五郎に殺される危険を犯して、作ったのだ。だったら、お藤は、もっとよろこんでいいんじゃないか。それとも、勝負がすむまで、指一本さわらねえ――と、茂兵衛と約束した俺の言葉を、まもるつもりなんだろうか。勝つにきまってるようなものの、やってみなけりゃわからねえのが勝負だから……。
　須賀丁の四辻から左へ曲がるころ、あたりはすっかり明るくなってきた。左門丁の木戸を通りすぎ、鳴海屋と看板の出ている店先に立った。大戸が閉まっていた。
　佐七は、裏口へまわった。勝手口を開け、中へ踏みこんだ。
「浅草七軒丁、亀の子長屋に住む、さいころ師佐七です。親分さん、おりましたら、お目にかかりたく、早朝からうかがいました」
　佐七の声が終わらぬうちに、弁蔵が出てきた。どてらを着て、絞りの帯をゆるく締めていた。
「おう、佐七っつぁん、めずらしいじゃないか、ま、上がんな」
と、弁蔵が言いながら、後ろにいるお藤の顔を見ている。佐七は、弁蔵を仰ぎ、
「わけは後で……」
と言った。
　二人は、奥座敷へ通された。

佐七は、今までのいきさつをかいつまんで説明した。
「するてえと、勝負は今夜五つ（八時）、七軒丁の丁字屋の二階、賭けは、丁字屋の店と二百両。茂兵衛さんは、娘のお藤さんを賭けるってわけだな」
弁蔵の眼が、燃えたってきた。
「さいです。したがって、勝負がどっちへころんでも、身が持てねえんで……」
「あんたの師匠の玄妙斎は、いかさま賽をこしらえて、殺された。佐七っつぁんは、生涯、いかさまはこしらえねえ――と、心に誓ったはずだな」
弁蔵の眼が、お藤に向いた。
「申しわけねえ。このとおりだ。親分、二人をかくまってくだせえ。今夜一晩だけでもいい。勝負がついて、又五郎がどう出てくるか。それを見定めるまでだ」
佐七は、両手をそろえ、頭を下げた。
「頼まれちゃ、いやと言えねえよ。博奕は、ご法度。いかさまさいころを作るのも、罪になる。けど、そいつぁ眼をつぶるとします。が、今夜五つ刻の丁字屋の二階座敷……何か始まらなけりゃいいが……」
「というと……捕物でも……」
「博奕の手入れじゃねえよ。又五郎の出方が気になるんだ」
「茂兵衛さんに、危害でも……」
「そうだ。勝負は、茂兵衛の勝ちだろう。が、勝ったあとが危ねえ」
お藤が、膝をのり出させ、
「親分さん、あたしも、そのことが……」
と、声をふるわせた。
「大丈夫だ。まかしときな。手先の者を、張りこませておこう。問題は、現場へ踏んごめねえことだよ。もし、十手の風が、丁字屋の二階まで吹きこんだら、勝負は、お流れになっちまうぜ。それじゃ、店を又五郎から取り戻すことができなくなる」
佐七は、聞いてなるほど――と思った。同時に、弁蔵のあたたかい思いやりと、血だるま賽が勝つと信じこんでいてくれる気持ちが、涙の出るほどうれしかった。
弁蔵は、お藤と佐七の顔を、等分に見ながら、言葉をつづけた。
「俺はな、どうしても、茂兵衛さんに勝たせてえんだ。博奕で取られた店は、博奕で取り戻すのが筋だ。だから、勝負だけはやらせなけりゃならねえ。しかも、茂兵衛を、又五郎の手から救い出さなけりゃいけねえ。こいつは、ちっとばかり、むずかしい仕事だ」
弁蔵が、太い腕を組んだ。
佐七は、眉の太い顔をしげしげとみつめながら、〈この親分は、前身が盗っ人だけあって、考え方がちがう。見上げたもんだ〉と思った。
お藤が、畳に両手をつくと、
「お父っつぁんを、どうか助けてください」
と泣き声を絞った。
佐七は、弁蔵の家の奥まった離れふうの小部屋に通された。六畳間で、茶室らしくできていた。
お藤が、佐七から離れ、部屋の隅にすわっている。膝をそろえ、首を垂れ、何かを考えているようだ。
弁蔵の家内が、食事の支度をしてくれた。
「さ、お藤さんとやら、おあがんなさいな」
と言って、部屋を出た。佐七が、お藤をうながした。
お藤は、ずり膝でお膳に近よった。
二人は、黙って箸を取った。
佐七は、気の重い食事をすませた。お藤は、食事の真似ごとをしただけだった。うなだれるお藤の白い襟足が、佐七の眼に沁みた。抱きしめたい衝動にかられた。が、佐七は、生唾を飲んで、思いとどまった。
「何か言ってくれ。気が滅入って仕方がねえんだ」
佐七は、吐き出すように言った。
お藤は、
「すいません」
と、消え入るような声を出した。
「何が、すまねえんだね」
「あたし……ただ、心配なんです」
「勝負なら、気にしないほうがいい。お父っつぁんのことなら、弁蔵親分が守ってくれる。心配すること、ないじゃないか」
お藤が、また、黙りこくった。息の詰まるような、だんまりだった。佐七は、体を堅くし、ときどき、お藤に視線を向ける。お藤は、まるで仏像のように、体をちぢめ、動こうともしない。
「あんたは、三吉のことを思っているな。俺には、その気持ちが、ぴんぴんひびいてくるんだ。たまらねえ思いがするぜ。けどな、茂兵衛さんが勝ったら、三吉をあきらめてくれ。約束だからな」
佐七は、壁に向かって、つぶやくように言った。
「わかっています」
と、お藤が短く答えた。

「それなら、機嫌を直してくれ。さいころ師佐七は、一世一代の勝負をあんたに賭けた。その気持ちを汲んで、笑顔をみせてくれ」
　お藤が、顔を上げた。口元をゆるめ、白い歯をちらりとみせた。が、その顔は、苦しみを耐え忍んでいるような表情としか、受け取れなかった。
　佐七は、思い切って膝を寄せた。お藤が、上体をのけぞらせた。佐七は、むらむらと腹立たしい思いがこみ上げた。手をのばして、お藤の小さな手をつかんだ。
　佐七のたなごころの中で、やわらかい手が、ふるえていた。その手を引き寄せた。お藤が、手をふりほどき、とびのいた。
　佐七は、いきなり脳天を殴られたような気がした。お藤が、
「勝負は、まだすんじゃいません」
　と、声をふるわせた。
　佐七は、はっと思い、ゆれ動く気持ちを、歯を食いしばって耐えた。彼は、いたたまれぬ思いで、廊下に出た。狭い中庭に、白梅があって、あたたかい陽ざしをうけていた。
　彼は、そこにたたずみ、眺めつづけた。〈お藤は、俺にとって、花なのか。美しく咲いているだけで、心を通わせちゃくれない。俺は、思っちゃならねえ女を好きになったんだ。勝負が、どうなろうと、お藤は、俺のかみさんに、なる女じゃねえ〉
　佐七は、部屋に戻ると、ごろりと横になった。座布団を枕にして、眼をつむった。昼めしどきになって、お藤に起こされた。味のない軽い食事をすませた。
　佐七は、ふたたび体を横にして、眠った。夢を見ていたようだ。夕食のとき、酒が出た。一合の酒で、ほんのり酔いがまわってきたようだ。
　横になっていると、お藤がそばへ寄ってきて肩をもんでくれた。父親の肩もみをしていたらしく、素人とは思えぬほどの腕前だった。
　佐七は、いい気分になった。なんにも言わないが、お藤の気持ちが、伝わってくるような気がした。うとうとと眠りに落ちた。
　三吉が、部屋へはいってきた。あわただしい物音で眼がさめた。佐七は、とび起きた。
「勝負は、どうした」
　と、聞いた。
「勝ちました。旦那の勝ちです」
　三吉が、そう言って膝を落とした。お藤が、走り寄

り、三吉に抱きついた。
「よかった。よかった」
　と、泣き声をあげ、三吉の胸元に顔を埋めた。
　三吉が、お藤の背中を、しっかりと抱きしめ、
「勝負は、四分六で旦那が、勝ったんだ。店の雇人たちは、みんな、大声を出してよろこんだ。こんなうれしいことはない」
　と、詰まった声で叫んだ。
「目は、何が出たんだ」
　佐七は、怒鳴った。
「よくわかりませんけど、四ぞろが六回出たと、立会いの親分衆が言ってました。私は、階段の途中で、それを聞くと、とんできたんです」
「で、茂兵衛さん、無事だったか」
「多勢の人がいますから、大丈夫だと思います」
「そりゃ、よかった」
　佐七は、そう言いながら、抱き合う二人の姿を、凝然と見据えた。佐七の眼の前もはばからず、体を寄せ合っている。佐七の胸に、嫉妬の炎が、むらむらと燃えたってきた。
　彼は、腕をのばすと、お藤の帯をつかみ、力まかせに引き寄せた。お藤の体がのけぞった。佐七は、その体を抱きとめ、
「お藤さん、まちがっちゃ困る。あんたは俺の女房だ」
　と、頬をすり寄せながら怒鳴った。

六　弁蔵の捕物

　鳴海屋弁蔵は、佐七の師匠玄妙斎が好きだった。いかさま賽作りに打ち込み、それが原因で殺されたが、蛇の執念にも似た名人気質に、惚れこんでいた。
　したがって愛弟子の佐七とは、親戚づきあいをつづけてきた。
〈あの男も変わっていやがる。三十過ぎの分別ざかりの男が、小娘に惚れ、血だるま賽を作った。ほめたこっちゃねえが、じいんとくるもんがあった。ここは、どうやら、俺の出番だ〉と思ったのは、玄妙斎とのつながりだけでなく、生命を賭けたさいころ師の心に打たれるものがあったのだ。
　弁蔵は、佐七の頼みを受け入れると、子分を走らせ、
「今夜六つ半（七時）、浅草七軒丁観日院（かんにちいん）の裏、溝土手に集まれ。身支度厳重」

と知らせた。
弁蔵の手下は、いざというとき、九人まで集められる。自分の長屋にいる者もあれば、他の町に住む者もいた。それぞれ正業があって、大工、左官、屋根職、棒手振などをやっていた。
弁蔵は、暮れ六つ入相の鐘が鳴ると子分の平六を連れ、左門丁を出た。彼は、まず鳥越の目明かし、片目の重兵衛を訪ねた。重兵衛とは、兄弟分の間柄だったので、あいさつを通すつもりだった。
「実は、今夜五つ（八時）、あんたの島内、七軒丁、観日院裏の丁字屋を見張らにゃならねえことになった。丁字屋の二階座敷で、丁半開帳があるこたあ、わかってるだろうな」
重兵衛が渾名どおり、片目に黒い眼帯をかけた顔を引きしめ、
「あいさつがあった。それで、何か、捕物でも」
と、堅い言葉で答えた。博徒が、開帳をやるときは、土地の目明かしへ、包み金を持ってくる。重兵衛が、表情をこわばらせたのは、兄弟分とはいえ、弁蔵が出てきたことが、不服だったのだろう。
弁蔵は、勝負にいたるまでのいきさつを語った。
「つまり、ひょっとしたら、殺しにでもなるかもしれねえ。勝負はいいとしても、茂兵衛を殺しちゃかわいそうだ。俺の縁につながる佐七の女房のおやじ……黙って見てるわけにゃいかねえのだ」
「わかった。俺のほうでも人数を繰り出そうじゃねえか。十二、三人は集まるだろう。俺のほうは、丁字屋の裏手、おめえさんのほうは、表方を見張ってもらおう」
弁蔵は、よほど裏へまわしてくれ——と言おうと思ったが、七軒丁は、重兵衛の島内なので、いうとおり承知した。
弁蔵は、平六をうながして外へ出た。小島丁を過ぎ、七軒丁へはいった。あたりはすでに暗く、なまめいた春風の中に、町家の灯が息づいている。
観日院の裏へ出た。築地塀の前に、手下が七人待っていた。尻をからげ、紺足袋の足もとに、白い麻裏の鼻緒が太く白く見えた。
弁蔵は、土塀に背をつけ、溝の向こう側の丁字屋の店を睨んだ。二階にあかあかと灯がともり、すでに人が集まっている気配がみえる。
丁字屋の店ののれんが、ぱたぱたと風に鳴っている。ときたま、客がきて、菓子を買っていく。間口四間、奥

行きが深く、木口もしっかりした建物である。
土塀の前に、幅二間ほどの溝川が流れ、小さな板の橋ができている。道幅は、ざっと二間半、異変があれば、すぐとび出して行ける。弁蔵たちのいる土塀の上に、松の大木が枝をのばしているので、木下闇をつくり、通りの人から隠れることができた。
弁蔵は、二階へ目を注いだ。
人影は、十人ぐらいらしい。全員の影がすわった。初夜の鐘が鳴った。鐘の音が、暗がりの中を、いつまでも尾を曳いた。
勝負が、はじまったらしい。障子の影に壺振りの腕がうごく。弁蔵は、息をしずめた。勝負は、四半刻（三十分）もつづいた。手をしめる音がした。
障子の影に、長刀の抜き身が影をひいた。そばにいる平六が、
「親分」
と詰まった声を出し、弁蔵の袖を引いた。
弁蔵は、勝負に負けた又五郎が、佐七の作ったいかさま賽を、長刀を抜いて切り割ったものと判断した。
影が、立ち上がり、入り乱れた。
「俺が、合図するまで動くな」
弁蔵は、言い置くと橋を渡り、店先へとびこんだ。二階で、太い声がした。
「勝負はあった。茂兵衛の勝ちだ」
「いかさまだ。さいころの中にこのとおり、血がへえっていたぞ」
「鳴き猫なら油と水だ。血のへえったさいころは見たことがねえ」
「いかさまにちげえねえ」
「又五郎さん、おめえさんは、博奕打ちだ。茂兵衛さんは素人。よしんば、血のへえったさいころが、いかさまだったとしても、それを見破って勝負を賭けるのが、くろうとっていうもんだ。まして、血がへえっていたからといって、いかさまかどうか、わからねえ。さいころ師が、いのちを賭けるとき、てめえの生血をそそぐって話もある。勝負あったな」
太い声の男が、そう言って笑った。
茂兵衛らしい男の声がした。
「おかげで、ありがとう存じます。駒形の親分さん、又五郎からもらった二百両、みなさんで、お酒でも召し上がってください」
茂兵衛は、裏口へ通ずる階段をおりたらしい。弁蔵

は、店を出ると裏口へまわった。片目の重兵衛に、老人があいさつをしていた。
「父っつぁん、よかったな」
と、重兵衛が言った。
老人は、重兵衛の手下が立ちはだかる間を抜け、暗がりへ消えて行った。弁蔵は、その後ろ姿を眼で追いかけた。
重兵衛が、弁蔵のそばへ寄ってきた。
「左門丁の……勝負はすんだ。張込みの子分衆に、一杯、出してもらうことになっている。すまねえが、みんなと一緒に、丁字屋の下の座敷を借りようじゃねえか」
弁蔵は、言われたとき、丁字屋の店が茂兵衛の手に戻ったとはいえ、又五郎が、約束どおり戻すかどうか見とどけてやろう——と思った。
弁蔵は、溝土手に待機する子分たちに、合図をおくった。平六が、七人を連れてきた。重兵衛の子分十二人と一緒に、裏口から中へはいりこんだ。八畳と六畳の座敷を使い、冷や酒の酒盛りがはじまった。
しばらくすると、着流しに長刀をさした男が、二階からおりてきて、重兵衛にあいさつをした。
「鳥越の親分……お聞きのとおり、勝負は俺の負け……でも、野郎は、生血のへえったいかさま賽を使いやがった。丁字屋の店は、返すが、このけりだけは、つけさせてもらいやすぜ」
重兵衛が、
「まあ、すわんなせえ」
と言って、又五郎に杯をさした。子分が、酒を注いだ。弁蔵は、そのありさまを眼の端に入れ、二人の関係が、のっぴきならぬほど深い——と感じとった。
又五郎は、大きな茶碗に、酒をなみなみと注がせ、一気に飲み干すと、重兵衛に会釈を残し、表口から出て行った。弁蔵は、右脇にすわる平六に、眼くばせをおくった。平六がそれと察し、さりげなく又五郎の後を追って外へ出た。
二階でも、博徒の親分衆が、大金二百両をもらった祝いの酒を飲んでいる。声高に談笑する声が聞こえてくる。
「唐傘屋が負けてよかった」
「又五郎が勝てば、二百両はへえらねえ」
「血のへえったさいころ……ありゃまちがいなくいかさまだ」
そんな声を聞いて、弁蔵は、ふと、又五郎の「けりを

つける」といった言葉を思い出した。弁蔵は、重兵衛に、
「何ごともなくてよかった。帰らせてもらうよ」
とあいさつすると外へ出た。
子分たちがついてきた。
「亀の子長屋をかこめ」
弁蔵は、早口に命じると走った。
長屋木戸の前に、平六が立っていた。
「又五郎は、佐七の家へへえりやした」
と平六が言った。
弁蔵は、木戸の中へはいると、佐七の家へ踏みこんだ。又五郎の姿はなかった。窓が開いていた。窓から裏へ出た。隣の窓が開いて、明りが洩れている。中腰になって、中をうかがった。
血の臭いが、ぷうんと鼻を衝いた。
弁蔵は、中へとび込んだ。
茂兵衛が、喉をえぐられ、死んでいた。
平六が、駆けこみ、子分が死体のまわりに集まった。
「一足、おくれた。おそかった」
と、弁蔵の口から、がっくりした言葉が洩れた。
「唐傘屋又五郎、しょっぴきやすか」
平六が、声をふるわせた。
弁蔵が、
「よし、行け」
と怒鳴ったとき、押入れの中から、血刀をさげた又五郎がとび出してきた。
弁蔵は、一歩踏みこむと、又五郎の手から血刀をもぎ取った。又五郎が、へたへたと崩れすわった。
「なぜ、殺した。わけを言ってみろ」
弁蔵は、又五郎の頭上へ、ダミ声をあびせかけた。
「俺も、唐傘屋又五郎といわれる博奕打ちだ。逃げもかくれもしねえ。今夜の勝負、たしかに俺の負けだ。いかさまを見破れなかったのがいけなかった」
又五郎は、首を垂れ、大きく溜息を吐いてから、言葉をつづけた。
「俺は、さいころ師佐七に、いかさまを作らねえように談判した。もし、こしれえたら生かしちゃおかねえと、約束ができた。佐七が、鳴き猫をこしらえると思ったからだ」
「今夜のさいころは、鳴き猫じゃなかったそうだな」
「佐七は、たしかに鳴き猫を作らなかった。けど、血のへえったさいころをこしらえやがった。勝負で負けたと

き、俺は、いかさまを見破るしきたりどおり、長刀(どす)を抜いて、真っ二つに割った。中から、どろりとした血が流れてきた」
「やっぱり、いかさまだったのか」
「それにちげえねえ。俺は、丁字屋の店を戻すことも、二百両も惜しいとは思わなかった。口惜しいのは、佐七の野郎に、まんまと一杯食わされたこった。俺は、佐七をばらすつもりで、野郎の家へ踏んごんだ」
「佐七がいねえと知って、なぜ、茂兵衛を殺したんだ」
「茂兵衛が、佐七のめくら縞の着物を着て、手拭で頰冠りをして、ここにすわっていた。行灯のあかりが暗く、背中を向けていたんで、てっきり佐七だと思い、いきなり後ろの襟首をつかんで引きずり倒し、喉を刺したんだ」
又五郎は、ごくりと生唾を飲みこみ、言葉をつづけた。
「殺してから、茂兵衛と気がついた。相手が佐七だったら、ずらかるつもりだった。けど、茂兵衛とわかった以上、もういけねえ。勝負に負けた腹いせに、相手を殺したとなっちゃ、唐傘屋又五郎の男もおしまいさ。お縄をちょうでえしてえ」
又五郎が、両手をさしだした。弁蔵は、眼頭を熱くしながら、縄をかけた。
又五郎の身柄は、いったん番屋へ引っ立て、定回り同心に渡した。弁蔵は、〈すっきりしねえ捕物だった〉と、つぶやいた。
「親分、又五郎の奴は、お仕置でがしょう」
と平六が聞いた。
「まちげえねえな。けど、彼奴は、根っからの博徒だった。いかさまを作られたら、やっぱり殺す気になるだろう。茂兵衛と知って、お縄をちょうだいした態度は、ほろりとさせやがった」
弁蔵は、左門丁へ戻ると、佐七とお藤の部屋へはいった。三吉をまじえ、三人が、だんまりで首を垂れていた。茂兵衛の死を、先に帰った手下から、聞いているので、三人三様の思いにふけっていたのだろう。
「みんな聞きな。又五郎は、御用となった。茂兵衛さんのなきがらは、長屋の者がみとりをしている。かわいそうなことをした」
弁蔵は、声を詰まらせた。
お藤が、
「親分さま、私は、どうしたらいいんですか」

と、泣き声をあげた。
「三人の話は、決着ついたのか」
弁蔵は、そう言って佐七を眺めた。佐七が、顔を上げた。その表情は、くしゃくしゃにゆがんでいる。
「親分、俺、どうしていいかわからねえ。お藤の心は、三吉のもんだ。でも、お藤は、約束どおり俺のかみさんになると言ってくれた。けど……」
佐七が、口ごもった。
三吉が、
「旦那が亡くなったんで、丁字屋は、お藤さんが後を継ぐことになりました。佐七さんと夫婦になって、お店をやってください」
と、唇をわななかせながら言った。
「みんな聞いてくれ。又五郎は、佐七のいかさまさいころを見破った。その仕返しに、佐七を殺そうとした。茂兵衛さんは、佐七の着物を着て手拭で頰冠りをして、殺されるのを待っていた。佐七に血だるまをこしらえてもらった恩返しに、殺され役を買って出たわけだ。茂兵衛さんの胸のうちを、みんなどう思うんだ」
お藤が、すすり泣いた。三吉が、嗚咽を嚙みこらえ、佐七は、滂沱(ぼうだ)たる涙を流しはじめた。
「佐七、よく聞け。おめえは、ほんとうは又五郎に殺されていたんだ。いわば茂兵衛さんは、いのちの恩人ていうわけだ。茂兵衛さんに恩返しをしなけりゃいけねえ」
佐七が拳固の手で涙をぬぐった。
「恩返しは一つしかねえ。お藤と三吉を夫婦にさせて、丁字屋を継がせるこった」
弁蔵の語尾に力がこもった。
「わかりやした。お藤さん、俺、あきらめるぜ。三吉さん、二人で仲良く、店をやってくれ。俺、眼がさめたような気がするんだ」
佐七が、声をふるわせた。弁蔵は、三人を順々に眺めながら頷いた。

私娼窟の女

一　観音長屋

赤坂氷川丁に、夜鷹の住む長屋があった。長屋は、普通、両側八軒ずつときまっていたが、ここは両側六軒ずつしかなかった。

氷川神社の森の裏手で、昼間でも、陽の光がささず、長屋の女たちは、朝から行灯をつけていた。じめじめした薄ぐらい中から、白粉をぬった夜鷹が、ぬっと出てくる姿を眺め、嫖客が、

「観音のお出ましだ」

と冷やかした。

誰言うとなく観音長屋と呼ぶようになったという。

長屋木戸をはいると、右手に、三軒の長屋があって、これを〝おらん組〟と呼んでいた。そのほかの長屋は、いわゆる切見世といい、一軒一室で一人の夜鷹が住んでいたが、右手の三軒だけは、おらんという二十八歳の女が支配していて、お絹とお峯の二人の夜鷹を抱えていた。

切見世というのは、岡場所より下等な私娼窟を言う。岡場所となると、公娼を抱えている吉原より多少劣るが、店構えなど、かなり立派だったらしい。

切見世より、さらに下等になると、露天で売色する夜鷹となる。このころの江戸では、両国、柳原、呉服橋外、護持院原（鎌倉河岸）、愛宕下などに、夜鷹が出ていた。中でも柳原土手は有名だった。

白いお化けが土手の上に出てきて、柳の陰から往来の人を引っぱって、土手下へおり、積んである材木の間へ連れこんだ。用がすめば、ふたたび、土手の上まで、送り出す。

切見世は、だいぶおもむきがちがってくる。客が、長屋まで足を運んでくる。夜鷹は、客がはいってくると、表戸を閉め、客が帰れば戸を開けておく。一切ずつの売色で、泊まっていく客がないから、切見世というのだ。

おらん組は、少々、様子がちがう。

三軒の長屋が、下壁に、人の通れるくらいの穴があいていて、黒い布で穴を覆っている。三軒のうちの誰かの家へ客がはいっていくと、おらんとお峯とお絹の三人が、穴を伝って出てきて、客に愛想をいい、お茶を淹れる。

客は、三人の女を見ながら、品定めをする。お峯が名ざしされれば、おらんとお絹は、穴を伝い、隣室へさがるわけだ。

お峯は、表戸を閉めてしまう。

次の客は、おらんかお絹のいる家へはいっていく。おらん組が、人気があったのは、三人とも、垢ぬけした美人だったのと、品定めをする楽しみがあったからだ。

おらんは、二十八の年増だが、色白で肉付きがよく、こぼれるような愛嬌があった。鼻は、高くはないが、くびれた顎と、脂ののった襟元から胸にかけて、むせ返るほどの色香があった。

お峯は、十八歳だった。痩せ形で、着物を着た立姿は、絵に書いたような美しさだった。目鼻立ちがととのい、観音小町の渾名があった。

お絹は十七歳だった。

肌の色は、小麦色で、鼻の寸がみじかく、小さい口元をしていた。顔の輪郭が小さく、眼が極端なほど大きかった。何が、おかしいのか、些細なことでもよく笑う。

客たちは、お絹のことを、観音えびす――と渾名していた。

おらんは、根っからの夜鷹だが、うらぶれたところも、すさんだところも見えない。十五歳の春から、この道にはいり、結構、金を貯めている。

「あたしは、せめて岡場所の店を買いたいよ。麻布の市兵衛丁か三田あたりで、こぎれいな家を買って、板前を使ってね、おかみさんと言われる身分になりたいね」

おらんは、口ぐせのように、そんなことを二人に聞かせていた。

「あたしは、役者のようないい男に惚れられたいの。二人で、世帯が持てたら、どんな苦労でもするわ」

と、お峯が、真顔で言った。

「そうね、あんたくらいの器量なら、きっといい人がみつかるよ。氷川さまに、願かけするんだね」

おらんが、手を叩いて笑った。

「あたしは、商売がしたいの。おそばや……えびすそばって、屋号を考えたんだけど……」

お絹が、くっくっと喉を鳴らした。

三人三様の思惑があって、こつこつ金を貯めているが

いざこざはまったくなかった。お峯は、麻布材木町の大工の娘だが、二年前、父親が脳卒中で死亡すると、三両の支度金をおらんからもらい、この道へはいった。
お絹は、牛込弁天丁の夜鷹の子として生まれた。もちろん父親は、誰だかわからなかった。二年前、十五歳のとき、おらんにもらわれてきた。二人とも、人別帳では、おらんの養女になっている。
おらん組の相場は、一切八十文だった。これを、おらんと折半(せっぱん)するしきたりになっていた。食費は、おらん持ちだが、衣類は、当人の負担だった。
「おらんさんのところはいいね。楽しそうで、笑い声が絶えないじゃないか」
と、隣り近所の夜鷹たちが、うらやむほど、三人は、仲がよかった。
仲がいいから、自然、客たちはいい気分になる。八十文のところ、百文を置いていく客が多い。収入がふえるから、笑い声が出る。
そんなおらん組に、笑い声が、ぴたりと止まる問題が起きた。
若い、男振りのいい男が、客としてではなく、とび込んできたからだ。

春にはめずらしい大雨の晩だった。
おらん組に、客はなかった。五つ刻（八時）をまわったとき、おらんが、
「この降りじゃ、今夜はあぶれだよ。閉めたらどう？」
と言った。お峯が、表口まで行ったとき、濡れねずみの男が駆けこんできた。
おらんは、男を一目みたとき、臭(くさ)いと思った。長年、夜の男たちを見なれてきた六感だが、暗いかげりを感じとったのだ。
「ここは、切見世と聞いた。おらん組ということも知ってるぜ。俺は、はっきり言うと客じゃねえ。けど、三人買い切りの銭は出す」
男は、ふところから銀貨をつかむと、畳の上に置いた。二分銀が、六、七枚あった。その手に、べっとりと血がついていた。
おらんは、息を飲んだ。声が出ない。お峯とお絹と顔を見合わせた。二人とも、眼をみはり、呼吸をとどめている。
男が、頬冠りしている手拭を取った。絵にかいたような男振りだった。色こそ白くはないが、身の丈五尺三、四寸、体に締まりがあって、めくら縞の着物に角帯をし

めている。
「お前さん、何かやばいことでもしてきたのかい」
おらんが、声をふるわせ、やっとそれだけのことを言った。
「喧嘩だ。やくざに追われてるんだ。すまねえが、しばらくかくまってくれ。あんた、おらんさんと言ったな。なんでもいいが、着替えるものはねえか。寒くってしようがねえ」
男が、そう言って笑った。ならびのいい歯がちらりと見えた。二重瞼の大きな眼はやわらかく、鼻筋がとおり、口元もいやしくなかった。
お峯が、壁穴から隣へはいると、男物のどてらを持ってきた。客用の物で、寒いころは、客の好みによって着せることがある。おらんは、お峯の様子を、眼の端に入れた。男をみつめる眼に、異常な光があった。
おらんは、
「さ、お着替えなさいな。よごれちゃいないから」
と言って、どてらを男の前に置いた。
男が、濡れた着物をぬいだ。さらし布を腹に巻いた裸が現われた。筋肉質で、肩や二の腕のあたりに、鍛えられた筋肉が盛り上がっていた。お峯の口から、溜息が洩れた。お絹が、立ち上がり、男の着替えを手伝い、濡れた着物を台所へ持って行った。
男が、上がりこんだ。
茶ぶ台の前に、膝をそろえ、おらんに向かって深々と頭を下げた。お峯が、男の手の傷へ塗り薬をつけ、白い布を、ぐるぐると巻いた。
「あんた、うちはどこ？」
「あっしは、四谷伊賀丁の花床(はなどこ)の職人、中床(なかどこ)をやってるんだ」
床屋は、普通、三人立ち——といって、親方と中床と、小僧の三人がいる。おらんは、花床の名前は、聞いていた。
「年は、いくつ……」
「二十一だ」
「おかみさんは？」
「一人もんだ」
おらんは、ふと、男を抱いたことがあるような気がした。
「名前は、なんていうの」
「清三っていうんだ」
おらんは、清三の面上に眼を据えた。清三の眼がまば

き、視線をそらせた。おらんの眼を怖れ、なぜか、おののきふるえている気配が見えた。
　おらんの記憶が、よみがえってきた。
　清三の眼の下に、大きなほくろがあって、おらんは、清三とはじめ会ったとき、
「泣きぼくろだね」
　と言ったことを思い出したのだ。三年ほど前のことである。
　床屋の職人に連れられ、十七、八の若い衆が、おどおどしながら、おらん組の長屋へはいってきた。おらんは、ひと目で、その男が、まだ女の体を知らないことを感じとった。
　男は、がくがくふるえながら、おらんの肌にしがみついた。女体を知らぬ少年が、はじめて触れるときのおののきを知って、おらんも気持ちをたかぶらせた。やさしく教えみちびき、男と女の交わりを覚えさせた。その若い衆は、それきり姿を見せなかった。
　おらんの警戒心がほぐれた。
「あんた、たしか三年前、あたしに抱かれたことがあるね。泣きぼくろ……やっと思い出したよ」
「そのとおりだ。よく覚えていてくれたな」
「そうだったのかい。忘れずに、あたしを頼ってきてくれたんだね」
「おらんさん、あっしは、今、人を殺してきたんだ。かくまってくれ――とは言わねえ。でも、どうしても会いてえ人がいるんだ。お縄をちょうだいする前に……」
　清三が、声を沈め、首を垂れた。お峯とお絹が、深い事情を察したのか、隣の家へさがった。
　おらんは、ぎくりとした。人殺しをかくまってはいけないと思ったからだ。
「あんた、いったい誰を殺したんだね」
「花床の親方だ」
「まあ……親方を……な、なぜなんだい」
「おかみさんを助けるためだ」
「親方が、おかみさんを殺そうとでもしたのかい」
「そうだ。おかみさんを荒縄でしばって、見ちゃいられねえ拷問をかける……すんでのところで、かみさんが殺されるところだった。あっしは、思い余って、剃刀で、親方の喉を斬ったんだ」
「すると、お前さんは、おかみさんとできてたんだね」
　清三は、答えず、首を縦に振った。
「そりゃ、いけないね。雇人が主人のかみさんと不義密

通……旦那に見とがめられ、殺したとなるんだね」
　清三は、石のように黙りこくった。
「出て行っておくれ。おらんは、人でなしをかくまうわけにゃ、いかないんだよ」
　おらんは、はげしい声で怒鳴った。
　清三が、畳に両手をついた。
「おらんさん、このとおりだ。そんな大声を出さねえでくれ。自首しろ――と言うなら、きっと番所へ出ていく。けど、おかみさんに一目、会うまでここに置いてくれ」
　清三が、泣き声を絞った。
「あたしゃ、いやだよ。お前さんが、親の敵でも討ったっていうなら、どんなことをしたって、かくまってやるよ。こともあろうに、主人のかみさんと不義密通、あげくのはて、親方を殺すなんて、とんでもない人だよ。観音のおらんは、人でなしの味方はできないんだよ」
　おらんは立ち上がると、清三の肩をつかみ、
「さ、お立ち、出てっておくれ」
　と怒鳴った。
　清三が、首を垂れ、すすり泣いている。畳に、涙がしたたり落ちた。
　そのとき、隣室の壁穴から、お峯がとび出してきた。
「おかみさん、おねがいします。この人、せめて今晩だけでも、置いてあげてくださいな。聞けば、親方のおかみさんと、できてたらしいけど、それにはそれだけのわけがあったと思うの、おねがい」
　お峯が、おらんの裾をつかみ、声をふるわせた。
「いやだね。あんたまで、なんていう言い草なんだね。人殺しをかくまえば、後で、おとがめを受けるからね」
「でも、この雨じゃ……」
「雨だから、いいあんばいじゃないのかい。傘ぐらいなら、貸してやるよ」
　すると、お絹が出てきた。
「この人、かわいそうじゃない？　おいてやってくださいな」
　お絹が、おらんの胸にすがりついた。
　おらんは、口を噤んだ。かくまってやってもいいんだ。けど、不義がたまらなかった。おらんは、ふと、自分の心をかえりみた。むしゃくしゃと、腹が立ってきたのは、不義と聞いてからだ。あたしは、どうやら焼きもちごころを持ったようだ。なんてことだろう――。
　おらんは、へたへたと崩れすわった。清三の横顔をみ

つめた。秀でた鼻稜をつたい、涙がしたたり流れている。おらんの胸が、痛みをともなって引き締まった。
「そうだね。二人がそれほど言うなら、置いてやろうか。この雨じゃしようがないしね」
　おらんは、つぶやくように言った。
　清三が顔を上げた。
「置いてくれるんですか」
「気のすむまでいたらいいよ。あたしは、あんたが、おかみさんとくっついていたと聞いて、かあっとなっちまったんだよ」
「ありがてえ……この恩はけっして、忘れることはしねえ」
　清三が、拳固で涙をぬぐった。

二　四谷の花床

　清三が、四谷伊賀丁の花床へ小僧として住みこんだのは、七年前だ。清三は、四谷舟町の養国寺の住職慈光と、二号のお末との間に生まれた子だ。顔立ちがいいのは、慈光の血をうけたからだといわれている。
　清三が、十三のとき母親が死んだ。慈光は、清三を、出入りの植木職人のところへ預けたが、植木職をきらって、なんども家出をしたので、花床の親方花吉に託した。清三は、床屋が性に合ったのか、ここにいついた。
　花吉は、五十の坂を越していて、たしかな腕を持っていた。が、わるい癖があった。女房を、次から次へ取りかえるのだ。
　清三が、十四歳から二十一歳まで七年間、住み込んで働いている間に、三人もかみさんが変わった。
　清三が、思春期になってから、親方夫婦の部屋を覗いたことがある。中床をやっていた藤八に誘われたからだ。清三は、障子の穴から、中をみたとき、息が詰まるほどおどろいた。
　内儀が、両手を縛られ、猿ぐつわをはめられ、親方に殴られていたのだ。裾を乱し、太腿をむき出しにして、右に左にころげまわり、親方がふり上げる竹の棒をよけている。
　清三は、なんのために、かみさんが殴られているのかと思った。自分の部屋へ戻ると、
「親方は、ああしていじめぬいてから、かみさんを抱くんだ」
　と、藤八が薄笑いを浮かべながら言った。

　清三が、親方のやっていることの意味をさとったのは、ずっと後のことだ。
〈親方は、ああやって気持をたかぶらせているんだ。ふだんはいい人なんだけど、妙な癖があったもんだ〉
　清三は、そんな判断を持った。
　花吉は、根っからの職人で、剃刀を持たしたら、江戸でも一、二を争う名人だといわれている。髷の形がよく、遠方からわざわざやってくる客もある。花吉は、仮元結をやらず、ぶっつけで元結を掛けて、ぱちりと元結の端をはさみで切る。それでいて元結の両端の寸法が、まったくくちがわなかった。
　髪結は、職人の手癖によって、格好がちがってくる。したがって、自然に、行きつけの床屋がきまってしまう。
　清三は、十九歳のとき中床となった。中床は、一人前の職人のことだ。が、清三が結い上げた髷は、客の気に入らないことが多く、元結を引っ張ってはじいてしまい、突っ込みにして、ものも言わず帰ってしまうことがある。
　そんなときでも、花吉は、
「だんだんうまくならあ。気にするこたあねえ。かんじんなのは、おめえの精神だ。おめえは、見どころがある。しっかりやんな」
　と、清三をさとした。
　清三は、そんな親方が好きだった。
　花吉に三人目のかみさんがきたのは、清三が、十九歳になったときだ。三人目——とは、清三が、花床へ住み込んでから、三人目という意味だから、それ以前を加えれば、おそらく十人目ぐらいになるはずだ。
　三人目のかみさんは、おかねといい、十九歳だった。生まれは、角筈村の水呑み百姓の娘——という触れこみだった。祝言のまねごとを内輪でやった。家主の吉兵衛が仲人で、親戚の者が、十人ほど集まったが、おかねの側からは、誰も出席しなかった。
　清三は、おかねを一目見たときから、その面影を胸に抱くようになった。小柄で、身長は五尺そこそこしかなく、体つきも、なんとなくきゃしゃに見えた。着物を着た姿がきれいで、「花床のかみさん」といえば、男たちの噂になったほどだ。
　顔の輪郭が小さく、色白で、切れ長い眼に特徴があった。いくぶん釣り上がっていて、女形のような感じがした。

清三の日常に、なんともいえない張りが出てきた。おかねが、ちらちらと眼の前を通り、食事の支度をしてくれるだけで、胸元が、息苦しいくらいうずいた。

花床は、店が土間になっている。客は、穴のあいた腰かけ板にかけ、清三は、うしろへまわって仕事をする。そばに、鬢盥があって、水が汲んである。壁に板が打ちつけてあって、鬢つけ油の堅いものと、軟らかいものとが、板にくっつけてある。客は、毛受けという小板を胸のところへ掲げ、月代を剃ると、それを下で受けるのだ。

客は、必ず通りのほうを向いて腰をかけている。夜になると、土間に立てた木製の明り台に、灯芯に火が点けられる。床屋賃は、大人が三十二文、子どもが二十四文だった。

店は、花吉と清三と小僧の善太の三人がやっている。善太は十五歳で、主として親方の手伝いをする。

おかねが、ときどき、店へ出てきて、待っている客にお茶を持ってくる。

「お一つどうぞ」

と言って、お盆をさし出すと、客は、誰でも、冗談口を叩く。

「俺はね、親方にゃすまねえが、かみさんの顔をおがみに花床へくるのさ」

「このあいだきたときゃ、あいにく店に客がいねえで、お茶をもらいそこなった。今日は、運がいい」

「こりゃ、すんません。花床のお茶は、特別うめえんでね」

などと、軽口を叩く。

その都度、花吉の眼が鋭く光った。清三は、横目で、親方とおかねの姿を等分に眺め、〈また、今夜も、いじめられるな。かわいそうに〉と思った。おかねが、客にお茶を出し、愛想を言うと、その夜、必ず花吉がおかねを縛り上げ、竹の棒で殴りつける習慣があった。

花床の家は、店が六坪、間口が二間、奥行きが三間あった。店の奥が、四畳半と台所になっていて、横の通路に面している。便所の前が廊下、その奥が六畳間で、親方夫婦の部屋。清三は、店を閉めると、小僧の善太と二人で、四畳半に寝るのだ。

店は、五つ刻（八時）になると大戸を閉める。晩めしを食べるのはそれからだ。おかねが支度をととのえ、二人にめしをよそって、

「さあおあがりなさい」

と言う。おかねの眼が、清三の眼とかち合った。親方は、表通りの風呂屋へ出かけて留守だった。

二人の眼に火花が散ったようだ。善太がめしをかきこんでいる。おかねの手がのびて、茶ぶ台の下からさしのべられた。清三は、その手を握りしめた。やわらかい感触が、たなごころにしみこんだ。

「あたしも、お風呂へ行ってくるわ」

そう言って、おかねが出て行った。

花吉の眼をかすめる時間は、このときだけだった。おかねが嫁入りしてきてから、一カ月もすると、夕めしのとき、手を握り合うようになった。

どちらが誘うでもなく自然にそうなったようだ。清三は、おかねの後ろ姿を眼で追いかけ、その姿が消えると、めしを食べはじめる。まず、親方が戻ってくる。清三は、善太を連れて風呂へゆく。

風呂へはいると、岡湯の隙間から、何回となく女湯をのぞく。男湯と女湯の間に、板の仕切りがあって、その端に、いわゆる上がり湯が汲み入れてある。男湯と女湯の両側から汲み取れるようになっている。

清三は、おかねが洗い終わって、岡湯をあびるのを待つため、なんべんとなく岡湯を汲み出し、向こう側を覗いていた。

おかねが、

「あたし」

と詰まった声をかける。清三は、上体をのばして向こう側を見た。瞬間、おかねが覆っている手拭をはずす。清三も、むき出しのままにする。おたがいに、見せてはならぬものを、見せ合い、

「行くわ」

と言って、おかねが洗い場から出ていく。

この習慣も、いつのまにか、自然についてしまった。したがって、二人は、肌こそ合わせていないが、心の中では、姦通をしていたことになる。

清三は、十八歳のとき、先輩の藤八に連れられ、観音長屋へ出かけ、おらんによって童貞を失った。女を知っている清三の眼が燃え、おかねの肌を瞼の裏に浮かべ、悶々の夜を過ごすことが多くなった。

風呂を出て、帰宅した。

善太が、二人分の布団を敷いた。清三は、布団にくるまったが、寝つかれなかった。親方とおかねは、夕食をたべているころだ。親方は、酒を飲んでいる。それがす

むと、たぶん、おかねを裸にして縛り上げ、いじめがはじまるだろう——。

夕食がすんだらしい。

おかねが、お膳を片づける音がしている。清三は、暗がりの中で、大きな眼をあけていた。片づけがすんだようだ。善太は、いびきをたてて眠ってしまった。

清三は、おかねの肌を、頭の中で追いかけた。艶のいい陶器のようななだらかな線が、眼底に映り消える。

奥の部屋は、物音一つしない。

親方が、舌をなめずり、おかねの体を眺めているのだろう。清三は、ことさら空いびきをたてた。

奥で、物音がした。

おかねの呻き声だ。清三は、布団から這い出すと、便所の前の廊下を伝い、奥へすすんだ。引き戸になっている障子がある。下から三段目に、指先で突いたほどの穴があいている。清三が、だいぶ前にあけておいたものだ。

清三は、中腰になったまま、穴を覗いた。息を殺し、眼を穴に近づけた。親方が、おかねに手拭で、猿ぐつわをはめている。おかねが身もだえを繰り返す。おかねの帯を解く。着物をぬがせ、素っ裸にすると、まず、手を縛った。

竹の棒で、ぴしりと尻を叩く。あまり力ははいっていない。おかねがうなり声を上げる。

「てめえは、今日、客に色目をつかいやがった。お茶を出すのはいい。けんど、色目を使っちゃならねえ——と言ってあるはずだ。俺は、てめえが、色目を使うのをみてると、ぶるっと身ぶるいがしてくるんだ。俺は、年を取ってるから、ひけ目があるのかもしれねえ。けど、俺のいやがることだけはやめてくれ。おめえは、ただ者の娘じゃねえはずだ。普通なら、嫁入りなどできねえ身だ。俺が、おめえをもらったのは、よくよく惚れぬいたからだ」

親方が、低い声で、念仏でもとなえるように言った。嫁入りできない身——とはなんだろう。子どもでも生んだというのか。それとも非人の娘なんだろうか——。

親方の手が、何回もふり上げられ、竹の棒を打ちおろす。おかねの体が、ころげまわる。清三は、地獄の絵を見ているような気がした。

生唾を飲みこみ、拳固を握り、体を堅くしていた。

行灯の明りがゆらめき、おかねの肌が光る。おかねが、まろび逃げる。親方が追う。が、不思議なことに、

おかねの肌に、殴られたアザができない。ということは、殴っているように見せかけ、打ちおろした瞬間、竹の棒を止めているようにも見える。

親方が、おかねの手の紐を解き、猿ぐつわをはずした。おかねが、あわてて、長襦袢を着た。親方が、とび込み、おかねの体を抱きしめた。

清三の体が、ふるえた。

眼をつぶる。後ずさりで、自室へ戻った。胸の動悸が、高鳴っている。喉が乾く。太い溜息を吐く。

奥の部屋へ耳を傾ける。

低い呻きが聞こえる。おかねの、絶叫に似た声がする。清三は、とび起きた。また、布団にくるまった。

花床は、三の日が休みだった。三日、十三日、二十三日の三日間は、店の戸を閉め〝休み日〟と書いた木札を下げておく。

清三は、そんな日は、必ず、善太を連れて盛り場へ遊びにいく。ほとんど、内藤新宿が多かった。が、その日、掛茶屋でだんごを食べているとき、清三は吐き気を催し、善太一人をのこして、店へ帰った。

店は、閉まっていた。

裏口から中へはいり、布団にくるまっていた。半刻

（一時間）ほどすると、吐き気もおさまり、いくらか気分がよくなってきた。
　すると、ひょっこりおかねが戻ってきた。
「おや、清さん、いたのかい。どうしたの」
　と言って、おかねが枕元にすわった。
「内藤新宿まで行ったが、気持ちがわるくなって戻ってきたんだ」
「で、どうなの加減は？」
　おかねが、清三の額に手を当てた。清三は、胸のつぶれる思いがした。
　おかねは、
「熱はないようだね」
　と言って、上体をかがめ、清三の顔に頬をすりよせた。鬢つけ油の匂いが、鼻を衝いた。
　おかねが、そのまま足をのばし、清三の布団の中へはいってきた。
「お、親方が……」
　と、清三が、声をおののかせた。
「親方は、組合の寄合いがあって、浅草奥山、夜にならなけりゃ戻ってこないよ」
　おかねが、耳元でささやいた。肌を寄せてきたとき、清三の体は、石のように堅くなっていた。
「清さん、あたしは、ここの家へ嫁にきたときから、あんたが好きだったんだよ。わかっているだろうね。ほんとのこと言うと、旦那はきらいさ。なんども逃げ出したいと思ったんだけど……あんたがいたから、辛抱したんだよ」
　その声が、甘いひびきをもって、清三の胸元をゆさぶった。
「俺だって……おかみさんを……」
　あとの言葉がつづかぬほど、呼吸が乱れた。おかねが、布団の中で、自分の衣類を脱ぎだした。
　それは、夢をみているようなひとときだった。清三は、女の体を知っていたとはいえ、あれから三年近い歳月が経っている。おかねの体のすばらしさに、身も心もとろけるような陶酔に浸った。
　二人の関係は、このときからはじまった。

三　夜の殺傷

　清三の眼つきが変わってきた。
　剃刀を使っているときでも、眼だけは、おかねの動き

を追っていた。おかねも、お茶を運びながら、ちらりと眼を合わせる。その眼を、花吉が追いかけている。したがって、おかね、花吉、清三の三人が一緒にいる店の中は、三人三様の、見えない火花が散っていたのだ。
　が、花吉に、醜い関係を気取られることはなかった。おかねが、用心深く考え、あいびきの機会を作っていたからだ。
　二人が、肌を合わせる機会は、朝が多かった。花吉は、朝のめざめが早かった。七つ半（午前五時）になると起き出し、裏井戸端で顔を洗う。
　花吉は、着替えると、必ず外へ出る。健康保持のため、伊賀丁の通りを四谷橋まで歩く。江戸城の堀割の土手を塩丁まですすみ、左折して、坂町、市ケ谷七軒丁、箪笥町を経て、伊賀丁へ戻ってくる。いわゆる散歩だ。雨でも、大雨でない限り、これを欠かしたことがない。
　この所要時間が、ざっと半刻（一時間）かかった。その間に、小僧の善太は、店の掃除をする。おかねは、朝飯の支度をする。清三は、仕事の道具を手入れすることになっていた。
　花吉が、外へ出ていくと、おかねが、「行ってらっしゃい」と言って見送りに出る。花吉の姿が、大通りへ曲がるまで見ていて、見えなくなると、おかねは、奥の座敷へ戻ってくる。
　清三が待っていて、二人は抱き合い、肌をぶつけ合うのだ。半刻は、ひどく短い時間だった。唇を重ね、たがいの肌をまさぐり、呼吸を荒らげ、重なり合う。
　慣れてくるにしたがい、行動が早くなり、呻き声も嚙み殺すようになった。行為が終わると、二人は、部屋を出て、それぞれの仕事をする。おかねは、めしを炊き、汁を作る。そんな折りでも、清三は、砥石と剃刀を台所へ持ちこみ、とぎはじめる。
「ね、いつかは旦那に見つかるから、二人で逃げだしたら――と思うんだけど」
　おかねが、かまどへ薪をくべながら、声を沈めた。
「俺も、それを考えていたんだ」
　清三は、剃刀を砥石の上で、うごかしながら、聞き取れぬほどの声で答える。
「あたしね、夜が、いやなんだよ」
「そりゃわかってる」
「あんただって、剃刀一挺あれば、職人でなんとか、食べていけるじゃないの」
「そりゃ、食うくらいのことなら」

「だったら逃げておくれな」
「でも、銭がねえ」
「それもそうね」
おかねが、溜息を吐いた。
清三にとって、息詰まるような日々がつづいた。が、生きている張りがあった。恋は、いつの時代でも、若者に、勇気を湧き立たせる。
その恋が、許されないものであるとき、若者の決意は、異常なものとなってくる。清三は、なんども駆け落ちを考えた。花吉は、銭を貯めている。おかねの話によれば、
「旦那は儲けた銭を銀にして、押入れの中の天井裏にかくしているんだよ」
と言う。
「銀は、どのくらいあるんだろう」
「二十両は、まちがいないよ」
「それを盗んで、二人で逃げることを考えたんだ」
「二十両あれば、二、三年は、ひっそりどこかに潜っていられるね」
「でも、取逃げは、死罪だ。それを考えると……」
清三の胸の中で、二十両の銀がゆらめいた。が、決行できなかった。清三が、自分の心をいましめたように、奉公人が主家の娘か内儀と駆け落ちするとき、主人の金を十両以上、盗んでいくと、死罪になるのだ。
逃げた二人が捕まって、盗んだ金が戻れば、主人の助命願いによって、死罪だけは免れる。ところが、単なる密通の駆け落ちは、取逃げさえなければ、罰せられなかった。ただし、七両二分の賠償金を払わねばいけない。金がなければ、ときには、五両、三両にまけてくれることもあるし、極度に貧しい者なら、酒一升でもすんだ。
この時代の駆け落ちの例がある。
湯島の大商人、茂右衛門娘まんは、召使いの庄兵衛と駆け落ちしたが、追手に捕えられた。二人は、十二日間伝馬牢に入れられたが、まんの兄の願いにより赦免となっている。若干の取逃げがあったのだろう。
清三が、もやもやと考えていると、裏口から、四十四、五の人相のわるい男が、頬冠りをしたままはいってきた。
「おかね、いるかい、俺だ」
という声が聞こえた。おかねは、客にお茶を淹れていたが、声を聞くと、表情をこわばらせ、花吉と眼を合わせた。清三は、親方の眼が、ぎらぎらと光るのをみた。

花吉が、おかねに顎をしゃくった。出てみろ――というような合図だった。おかねが、裏へ出て行った。
清三は、裏口へ聞き耳をたてながら、剃刀を磨いていた。
「けさ、島から戻った」
「ご赦免になったんだね」
「そうだ。おめえが、ここへ嫁入りしてると仲間から聞いた」
「あんまり、こないでおくれな」
「だって、親子だ。困ってるときくれえ、助けてくれ」
清三は、おかねの父親だと思った。
おかねは、いくらか金をつかませたらしい。父親が、
「花吉に会わせてくれ。娘の婿じゃねえか」
と、大声を立てた。
おかねが、
「今、客がいるから」
と、言った。花吉は、客の髪の仕上げがすむと、裏へ出て行った。清三は、花吉が帰ると、裏へ通ずるのれんの陰に体をよせ、隙間からのぞいた。男が、頬冠りを取った。
「あっしは、おかねのおやじの左平次というんで……島送りの間に、おかねが嫁入りしたと聞いて、何はともあれ、あいさつにきたというわけでござんす」
「左平次さん、よく早くご赦免になんなすったね。おめでとうさんです。お留守中、世話する人があって、家内にちょうだいしやした。よろしくおねがいしやす」
「さっそくだが、今、おかねから二分銀一枚をもらった。申しわけねえが、三両ほど貸してもらいてえんだが」
「とんでもねえこった。床屋は、一人三十二文のしがねえ稼ぎ……とても、三両とまとまった銭はねえ」
「冗談はやめてくれ、花床じゃ、百両の銭を貯めてるって、もっぱらの評判……たった三両だ。ねえわけはねえだろ」
左平次の声が、にわかに凄味を帯びてきた。
「どっから聞いたか知らねえが、とんだ言いがかりだ。嘘だと思うなら、おかねに聞いてくれ」
花吉が錆びのある太い声を出した。
「おい、誰にことわって、おかねを女房にしたんだ。俺は、不承知だ。今から連れて帰るからそう思え」
左平次が、おかねの手をつかんだ。花吉の右手に光るものがひらめいた。銀光が弧をえがいたと思ったとき、左平次の右腕から、血しぶきがとび散った。

左平次は、
「痛え」
と叫び声をあげると、身をひるがえし、風のように走り逃げた。
花吉が、おかねの手首をつかんだ。おかねの顔がゆがんだ。花吉が、片方の手で剃刀を、おかねの喉元に突きつけた。
「さあ言え、左平次に、俺が銭を貯めてることをしゃべったな」
花吉が、底力のある声をふるわせた。
「知らない。赦免になったことだって、今、知ったばかりだよ」
おかねが、泣き声をあげた。
花吉が、剃刀をふり上げた。清三は、いたたまれず、親方の体を後ろから抱えた。
「やめてください。おねがいだ」
清三は、花吉を後へ抱き戻しながら、大声をあげた。
花吉は、剃刀を落とし、よろめいた。
「清三、ちょうどいいところだ。おめえは、おかねとくせえようだな。現場を見たわけじゃねえが、臭いがするんだ」
清三は、ぎくりとしたが歯を噛んでこらえた。
花吉の表情が、ゆがんだ。
「おかね、おめえもよく聞け。俺の眼をごまかすことはできねえ。おめえの体が、何よりの証拠だ。しらを切ったってだめだ。俺は、三年間、おめえを抱いてきたんだ。女房の浮気がわからねえほど、俺は馬鹿じゃねえ」
花吉は、おかねを睨んだ。
「なにを言うんだね。あたしがいつどこで清三と寝たというんだね」
おかねは、負けていず、強い語気ではね返した。
「おめえの体が、俺に教えてくれたんだ」
「おや、あたしの体が、何を言ったというんだね。あたしは、夜ごと、あんたに責めさいなまれ、それこそ死ぬ思いだよ。それでも、色気を出せというんですか」
花吉の口元が、ひくひくとけいれんした。
「清三、さ、白状しろ。おかねとできてることをありていに言うんだ」
清三は、首を垂れたまま、
「親方、そ、そりゃ言いがかりです。そんなこと、できるこっちゃありません」
と、声をふるわせた。

「一応、聞いておこう。いずれは、はっきりするときがくる」
花吉が、一人言のように言った。
清三は、不安な時間を過ごした。親方が、おかねを責めさいなむことを考えていたからだ。
夜になった。清三が案じていたとおり、奥の部屋で、おかねの泣き叫ぶ声がした。清三は、いつなんどき、花吉に踏みこまれ、剃刀で斬られるかもしれないとの心配があったので、自分でも、寝床の中へ剃刀を忍ばせておいた。
おかねの声が、一段と高くなった。清三は、起き出すと、廊下を這いすすんだ。障子の穴から、中を覗いた。そのとき、屋根の上で雨の音にまじって人の気配がした。が、穴からおかねの拷問される姿をみると、屋根の音を忘れてしまった。
おかねは、全裸のまま荒縄で縛られていた。両手と両足を結わかれ、叫びながらころげまわっている。尻や腿から血が流れ、畳を染め、肌の粟立つ光景である。
花吉が、竹の棒をふるって、尻を叩く。悲鳴をあげる。声を聞きつけ、小僧の善太が起き出し、清三の後ろでふるえていた。
花吉の折檻は、いつもとはちがう。本当に殴っているのだ。
おかねの額が割れた。どっと血が噴き出した。清三は、夢中で中へとびこんだ。
「親方、待ってくれ」
と、喉のちぎれる声で叫んだ。
花吉が、
「この野郎」
と言って、ふところから剃刀を取り出し、清三めがけて、斬りつけてきた。おかねが、ころげながら、二人の間へ、体をぶつけてきた。
清三は、体をかわすと、とっさに、ふところの剃刀をつかんでいた。おかねが、花吉の足もとへ体をぶつけた。花吉が、仰向けに倒れた。その隙に、清三は、おかねの荒縄を剃刀で切った。
おかねが、急いで着物を羽織った。
花吉が、起き上がると、おかねを目がけて斬りつけてきた。清三は、剃刀をふるって、花吉に斬りつけた。手ごたえがあった。花吉の眼から口元にかけて、真っ赤な線が見えて、その場に倒れ伏した。
「た、たいへん……逃げておくれ。早く」

と、おかねが叫んだ。
清三は、倒れている花吉を眺め、凝然と立ちすくんだ。
〈えらいことしちまった。親方を殺したんだ。どうしよう?〉
と、考えた。
おかねが、清三の胸元へしがみつき、
「あんた一人で、逃げておくれ」
と、声をわなかせた。
「おかみさんは、どうする?」
「あたしは、おまえさんが、親方を殺した証人になるため、番所へお届けするんだよ。このまま、二人で逃げたんじゃ、二人が、不義を働き、親方に見つかって、殺したことになるじゃないか」
「ど、どこへ逃げるんだ」
「どこでもいい。ここにあたしが、三年間にくすねたお金がある。これを持っていっておくれ」
おかねが、木綿袋にはいった金を、清三のふところにねじこんだ。
「俺が、逃げて、後のれんらくはどうするんだ」
「誰か、人を頼んで、様子を見にきておくれ。旦那の死んだ事件の始末がついたら、あたしが、おまえさんとこへ、とんでいくから」
そのとき、天井裏でガタンと音がした。清三は、何か言おうとしたが、びくっとするとあわてて部屋を出た。
駒下駄をつっかけたが、傘が見あたらなかった。善太が、泣きわめいているのを眼の端に入れると、清三は、雨の中へとび出して行った。
外は、どしゃぶりだった。戻ろうかと思ったが、天井裏の音が、無気味で、戻れなかった。清三は、店屋の軒を伝いながら、足を急がせた。
悔恨が、胸を噛んだ。
俺は、親方を殺した。親方が、おかみさんを殺そうとした。俺は、それを助けようとして、剃刀をふり上げたんだ。親方を、斬っちまった。
清三は、自分が獄門になった光景を、瞼の裏にえがいた。おかねの顔が、獄門の首と重なった。雨の中を夢中で走った。
天井裏に誰かいた。御用の筋かもしれねえ——と思うと、自然に、足が早くなってきた。気がついたとき、赤坂の氷川神社裏へきていた。観音長屋のおらんを思い出した。

四　三人の女

清三は、長々と、花吉を斬るまでのいきさつを語った。いつのまにか、お峯もお絹も、おらんの後ろへすわり、聞き耳をたてていた。
おらんの口元が引きつれ、眼に涙をためている。お峯の眼が釣り上がり、歯を食いしばり、お絹の口元から、溜息が洩れた。
「あんたって、いい人なんだね。かわいそうに、こんなことで、伝馬牢おくりじゃ、気の毒だね」
おらんが、声をわなかせた。
「憎たらしいおやじ……胸がすっとしたわ。あたしは、清三さんを、守ってあげたいわ」
と、お峯がかん高い声で言った。
「おかみさん、どうしてるんだろうね。あたしだったら、清さんといっしょに逃げたんだけど……」
お絹が、ほうっと溜息を吐いた。
「さ、今夜から客はおことわりだよ。表の戸を閉めておくんだよ。三人とも、清三さんに買い切りになったんだからね」
おらんが、そう言ってお峯とお絹の顔を順々に見た。
二人ともうなずいた。
お峯が、
「花床……後は、どうなったんだろうね」
と、沈んだ声で、一人言のように声を出した。
「あたしゃ、これから四谷伊賀丁まで行ってくるよ。花床が、どうなってるか、見届けてくるからね。二人とも、よく清三さんの見張りをしていておくれ」
おらんが、いきなり立ち上がると言った。
「この雨、夜のことだし」
とお峯が、不安げな表情をした。
「雨で、夜だから行ってくるのさ。いいかい、誰がきても、表戸を開けるんじゃないよ。もし、はいってくる奴がいたら、清三さんを、壁穴から、次の部屋へ……わかったね。清三さんも、安心してここにいなさるがいい」
おらんが、そう言って尻をはしょった。桃色の蹴出しの裾を、帯の間へはさむと、外へ出て行った。蛇の目をさし、高下駄をはき、雨の夜道を四谷へ向かった。
ひどい吹き降りだった。
が、おらんは、真剣だった。おらんは、今まで、こんなにまで、思いつめたことはなかった。清三を、伝馬牢

へだけは、なんとしてもおくりたくなかった。
堀割の土手道を通り、四谷仲丁へ出た。
花床の店は、行ったことはないが、客たちの話で、見当だけはついていた。
ときどき、風雨に傘を取られそうになる。伊賀丁へはいった。大通りからはいりこんだ路地に、傘をさした人が群がっている。おらんは、人混みの中へ分け入った。
「花吉のかみさんが、旦那を殺しちまったんだとよ」
「清三との仲を疑ぐられ、かあっとなって、殺っちまったらしい」
そんな話が、おらんの耳にはいった。
「清三さん、どうしたんだね」
と、おらんは、そばにいる男に、話しかけた。
「薄情なもんだ。ずらかったんだとよ。俺は、近所に住む魚屋だが、清三さんは、いい職人だった。気っぷがよくって、男前でね。それが、なぜ、かみさん一人を置いてけぼりにしたんだ。俺にゃ、わからねえ」
「それで、親方を殺したのは、おかみさんなんですかね」
「まちげえねえ。隣の八百屋へ、善太という小僧がとび込んできて、事件を知らせたわけだ。八百梅の大将が、てえへんだてえへんだと、とんで行った。そしたら、おかみさんが、あたしゃ、うちの人を剃刀で殺しちまった。番屋へとどけてくださいな——と言ったとよ」
おらんは、怪訝な思いにかられた。
清三は、たしかに自分が、剃刀で斬った——と言った。それなのに、なぜ、おかみさんは、自分が殺したと言うのだろう。
「それで、町方の旦那衆は、お出ましなんですかね」
「左門丁の鳴海屋弁蔵が、子分を連れておでましだ。しかも、八丁堀の旦那まで出役になったとよ」
おらんは、それだけ聞くと、人の群れをかき分け、前へ出た。
そのとき、〝御用〟の提灯に先導され、若い女が出てきた。髪を乱し、両手を後ろ手に縛され、十五、六の小僧に、傘をさしかけられながら、おぼつかない足取りで、人の群れの前を通りすぎた。
暗くて、顔は、よくわからなかったが、顔形の小さな色白で、いい女だ——と思った。鳴海屋弁蔵が、女の後ろからゆっくり歩いてくる。御用提灯のあかりが動いたとき、おらんは、弁蔵と眼を合わせた。
弁蔵の口から、
「おらん」

という詰まった声が洩れた。おらんは、
「ごくろうさんです」
と、会釈した。弁蔵は、それきり振り向こうともせず、暗がりの中へ姿を消してしまった。
おらんは、帰路についた。
雨は、だいぶ小降りになっていた。おらんの気持ちは、来るときより、軽くなった。〈よかったわ。殺したのが、おかみさんだったんで。それにしても、清三さんは、なぜ、自分が殺ったと言ったんだろう〉
おらんは、そんなことを考えながら歩いた。弁蔵親分の顔が浮かんできた。
今から二年前、おらん組へ、盗っ人が逃げこんだことがある。弁蔵と、子分の平六が、その男を追ってきた。観音長屋へ逃げたものと見当をつけ、切見世の家を、一軒一軒覗いてまわった。
おらんの家へもきて、いないのを確かめると出て行った。盗っ人らしい男は、壁穴から、隣へ、逃げたのだ。おらんは、弁蔵の後を追いかけ、差し口をした。盗っ人は捕まった。
そのとき以来、おらんは弁蔵と懇意になった。おらんは、いわゆる十手風を吹かせない弁蔵に好感を持ったし、弁蔵も、夜鷹をしているとはいえ、おらんのあけっぴろげな性格に、好意を抱いたのだろう。
おらんは、左門丁の親分のお出ましでよかった。花床のおかねさんが、旦那殺しは、私です——と名のって出たのは、何かわけがあるんだろう。罪を自分でかぶるつもりなのか、それとも清三さんが、斬りつけるとき、おかねさんも、何か、傷を与えたのだろうか。どっちにしても、弁蔵親分なら、話をつけやすい——と思った。
四つ刻(十時)、そろそろ町木戸を閉める刻限前に、おらんは長屋へ戻ってきた。
清三をまん中にして、お峯とお絹が、親しげに話しこんでいた。おらんは、ふと、嫉妬めいた気持ちを抱いた。
三人が、お帰りなさい——と言って頭を下げた。おらんは、三人の間に流れている空気を感じとった。あたしが、雨の中を伊賀丁まで行ってきたのに——と思うと、腹立たしくなった。
「おかねさんは、定回り同心と、四谷左門丁の目明かし、弁蔵親分に、しょっぴかれて行ったよ」
おらんは、足を拭きながら、つっけんどんな言い方をした。お峯とお絹が、おらんの剣幕に怖れをなして、壁穴から引っ込んだ。

清三が、
「なんだって、おかみさんが」
と言って、おらんの手を取った。清三の眼に、涙が光った。
「そうなんだよ。あたしゃ、花床の前の人だかりの中へはいって、人の話を聞いたのさ。おかみさんが、旦那を殺したと、言ったんだとさ」
おらんは、清三の手を握りながら、声をやわらげた。
「殺したのは俺だ。俺が、たしかに親方を斬ったんだ」
「おかみさんは、小僧の善太を走らせ、隣の八百梅の旦那に、自身番へとどけておくれと言ったそうだよ。あたしが、花吉を殺したとね」
「そ、そりゃ嘘だ」
清三の声がふるえた。
「近所の人の話だと、おかねさんは、あんたと不義密通……それを旦那に見とがめられ、あべこべに、旦那を殺したと言ってたけど」
「そうじゃねえ、親方が、剃刀をふるって、おかみさんを……」
「どっちだかね。それにしてもうらやましい話だよ。あたしも、生きるの死ぬのまで、思い詰めるほど、惚れてみたいし、惚れられてみたいよ」
おらんは、そう言って清三の肩を抱き寄せた。泣きぼくろのある顔が、三年前の夜のことを、まざまざとよみがえらせた。
清三は、頭を垂れて聞いていた。
おらんは、その横顔へ食い入るような視線をあてた。雨の中を、連れていかれた花床のおかみさんの白い顔が浮かんだ。
あの女と、この男は、親方の眼を盗んで抱き合っていたんだ――と、思うと体がふるえてきた。おらんが、ときたま、客に惚れるときの、動悸の高鳴りと似ていた。
おらんは、清三の手をつかんだ。
「顔をおあげな。何を考えているんだね」
「おかみさんが、親方を殺したというのは嘘だ」
清三が、呻くように言った。
「だって近所の人が、そう言って自身番へとどけたんだよ。かみさんが、嘘をついてるというのかい」
「おらんさん、聞いてくれ。奇妙なことがあるんだ。俺が、親方の部屋をのぞいているとき、屋根で、誰か人がいるような気配がしたんだ。そして、中へ踏んごんだとき、天井裏で、みしりと音がした。そのとき、俺は、た

しかに、剃刀で親方の顔をめがけて、斬りつけた。この剃刀がそれだ」
清三が、ふところから、手拭に包んだ剃刀を出し、ひろげてみせた。べっとりと血糊がついている刃が、無気味に光った。
おらんは、刃物と清三を、等分に眺め、息を詰めた。
「親方も、剃刀を持っていたんだね」
「そうだ。それをふり上げ、おかみさんを斬ろうとしたんだ」
「だから、あんたは、親方を斬ったんだね」
「そうだ。おかみさんが、早く逃げろと言った。あんたが親方を斬った様子を、あたしが、証人になって役方にしゃべる――と言った。だから俺、逃げたんだ」
「天井裏が、おかしいね」
「ひどい吹き降りだったが、雨風の音じゃなかった」
おらんは、一瞬、考えたがわからなかった。
「誰かが、天井裏にいたというんだね」
「親方、俺、善太以外の誰かが、天井裏にいたと思うんだ」
「だからといって、お前さんが、親方を斬ったことは、消えやしないよ」
「そのとおりだ。だのに、なぜ、おかみさんは、自分が殺した――と言い張るんだ」
「あんたに、惚れているからさ。好きな男を獄門首にゃしたかないからね。もし、あたしが、おかみさんだったら、やっぱり、あんたを助けるため、自分で、罪をかぶったかもしれないね」
清三が、びくっとして、おらんを見つめた。顔面から血の気が失せ、薄い唇を、わななかせている。
おらんの胸の中に、清三を誰にも渡したくない思いが、どろどろと渦を巻きだした。おらんは、ぐいと、清三の手を引き寄せた。
清三の体が、前かがみに傾いた。おらんは、その上体を、しっかりと抱きとめた。
「ここにいるがいいよ。外へ出るんじゃない。あたしが、様子をみて、弁蔵親分に掛け合ってくるから」
おらんは、清三の顔に頬を擦りよせた。
「さ、あたしを抱いておくれ。あたしは、いのちがけで、あんたをまもる決心をしたんだから、あんたも、この気持ちを汲んでおくれ」
清三は、荒い呼吸をしながら、「おらんさん、待ってくれ」と、声をはずませた。おらんは、かまわず、裾を

はだけ、清三の太腿にやわ肌をすりよせた。
　清三が、おらんの胸を突きはなすと、とび退き、両手を畳について、頭を下げた。
「おらんさん、申しわけねえ。このとおりだ。あんたが、きらいだからというわけじゃねえ。けど、俺は、今、それどころじゃないんだ。頭の中を、ぐるぐると血がさわぎまわっている。俺は左門丁の弁蔵親分のところへ、自首して出ようと思ってるんだ」
　清三は、声を吃らせながら、必死になって言った。
「自首だって、とんでもないことだよ。弁蔵親分といえば、目明かしは星の数ほどあるけど、心持ちのあったかい人だよ。その人が、おかみさんを、しょっぴくのは、よくよくのことさ」
　おらんは、なんとしても、自首させたくなかった。ひょっとしたら、おかみさんが清三さんの身代わりを買って出たのかもしれない。それならそれで、事件のおさまりがつく。清三さんは、おとがめなし――となる。そうなったら、この男と、夫婦になってもいい。いや、是が非でも、一緒になってみたい――と考えていたのだ。
「おかみさんは無実だ。それを黙ってるわけにゃいかねえんだ」
「あたしは、自首させないよ」
　おらんは、とびこむと、清三の体を、力まかせに抱きしめた。
　そのとき、壁穴から、お峯が出てきた。
「自首は、早いんじゃないかしら。朝になったら、あたしが、左門丁まで行ってくる。あたしも、泥棒の一件以来、弁蔵親分とは、顔なじみだし……なんとか、聞き出してくる。それまで、待っててくださいな」
　お峯が、早口にまくしたてた。おらんは、抱いている腕を離した。
　すると、壁穴から、お絹が出てきた。
「そうだよ。おかみさんが、嘘をついてるなら、弁蔵親分さん、すぐ見破っちまうよ。お峯さんが、親分とこへ行く前に、あたしが、花床の様子を見てくるよ。いろいろなことが、わかってから、身の振り方をきめたって、おそくはないと思うけど……」
　お絹が、分別くさい口をきいた。おらんは、出てきた二人に一時は腹を立てたが、納得して頷いた。

五　女の知恵

　お絹が、出て行った。
　お峯が、食事の支度をするため台所へ立った。清三は、おらんの眼を見つめていた。おらんは、俺に思いをよせている。俺には、それがよくわかる。ここにいたら、どうなるんだ――と思った。
　お峯が、台所で、
「痛い」
と声を出した。おらんが、台所へとんで行った。
「包丁で切ったの」
と、お峯の声がした。
「さ、あたしが朝ご飯の支度をするから」
　おらんが、そう言って、食事の用意をはじめたらしい。お峯が、出てきて、清三の前へすわった。
「どうしたんだ」
　清三が聞くと、お峯が、左手をつきだした。人さし指の先から、血が流れていた。その血を、てのひらで拭った。薄く切れていた。
　お峯が、ずり膝で寄ってくると、清三の手をつかみ、自分の襟の中へ押しこんだ。あっというまの出来事だったが、清三の指先が、乳房に触れた。細い体のわりに、乳房は、丸い弾みを持っていた。
　清三は、花床のかみさんの乳房より小さいと思った。
　お峯は、上体を傾け、頰をすりよせると、
「あたし、あんたが好きよ。もし、左門丁の親分さんが、捕まえにくるようなら、いつでも、一緒に逃げてあげるから」
と、耳元で低くささやいた。
　清三は黙って頷いた。
「あとで、左門丁の様子を見てくる。今、行ってもいいんだけど、あんたが、おらんねえさんと二人きりになるのが、心配なの」
「わかった。俺は、今、それどこじゃねえ」
「あたし、わざと包丁で指を切ったんだよ。あんたの側にいたくて」
　台所の足音がした。お峯が、とびのいた。
　おらんが出てきた。二人の様子をじろりと眺め、唇を嚙むと、
「お峯さん、支度はできたよ。運んでおくれ」
と、尖った声をかけた。
　お峯は、台所へ立った。
　おらんが、茶ぶ台を置いた。食事の支度ができた。三人が、箸を取りはじめたとき、お絹が、息をはずませ、

駆け戻った。
「花床は、善太という小僧さん一人が留守番しているよ。弁蔵親分とこの平六という子分が、花床の奥の部屋を調べていたよ。隣の八百屋のおやじが言うには、平六は、朝早くからやってきて、屋根へのぼり、瓦を調べ、屋根から、天井裏へおりて、座敷へとびおりた――と言っていたよ」
お絹が、清三の顔をまじまじとみながら言った。
清三は、おかみさんが、屋根の音を親分にしゃべったんだ、それで、屋根、天井裏を調べているんだ――と思った。
食事がすむと、お峯が出かけた。お峯は、出しなに、清三へ流し眼をおくっていった。
そのとき、表戸の外で、
「切見世は、まだ、おめざめじゃねえのか」
と、怒鳴る声が聞こえた。おらんの眼付きが、けわしくなった。
「役方の筋だよ。あっちで隠れていておくれ。早く」
と、おらんがせきたてた。
お絹は、清三の腕をつかむと、壁穴へ連れていき、くぐらせた。お絹も後から、穴をくぐり抜けた。そこは、お峯の部屋だった。お絹は、もう一つの穴をくぐり、清三をうながした。
「ここが、あたしの部屋よ」
と言って、お絹が、うふふと喉を鳴らした。
隣の隣、おらんの部屋へ、誰かが上がりこんでくる気配がした。
お絹が、押入れの襖を開け、中へはいれ――と、しぐさで示した。清三は、ためらうことなく中へはいった。お絹がはいってきて、襖をしめた。
中に、布団が積んであった。清三は、布団の後ろ側へもぐりこんだ。お絹が、体をすり寄せ、背中へ腕をまわしてきた。清三は、息を詰め、おらんの部屋の声に耳を傾けた。が、人声が、かすかに断続するだけで、意味は、聞き取れなかった。
お絹が、身動きもできない狭い中で、胸をはだけ、体を密着させてきた。清三は、息苦しくなって、喘いだ。
「あたし、あんたが好きなんだよ。抱いておくれ」
お絹が、呼吸をはずませ、太腿をあらわにした。清三の思考が混濁してきた。自分が、主殺しの容疑で追われているのも忘れ、体の芯を燃えたたせた。
清三は、暗がりの中で、お絹の肌をまさぐった。お絹

もまた、清三の肌をなぶりはじめた。
そのとき、おらんの大きな声がした。
「二十一、二の男っぷりのいい若い衆……さあ、見かけませんよ」
その声は、お峯の部屋から聞こえてきた。清三は、おらんが、ことさら大声をたてているものと判断し、身のちぢむ思いがした。
おらんと、男が、お絹の部屋へはいってきたようだ。
「おらんが、ゆんべ、わざわざ四谷の花床まで、雨の中を見にきたのは、なぜなんだ――と弁蔵親分が、言ってった。たぶん、おらん組の三人の女の子のうち、誰かと、清三がなじんでいたんじゃねえか――というのが狙いだよ。いねえようだな」
「あたしは、これでも弁蔵親分さんにゃ、信用があるんですよ。清三とかいう男がいりゃ、番所へ突き出しますよ。ところで、花床のかみさん、旦那を刺し殺したんですか」
おらんが、聞いた。平六は、腰を落としたようだ。
「花床のおかねは、あたしが、旦那を刺し殺したというんだ。ところが、なんで刺した――と聞くと、旦那の剃刀だと言いやがる。わけを聞いてみると、旦那が、清三との仲を疑って、おかねを素っ裸にして、荒縄で縛り上げ、竹の棒で殴ったらしいんだ」
「かわいそうに……」
「その証拠にゃ、おかねの裸に、あっちこっち、紫色に腫れ上がった跡があった。俺も、ずいぶんひでえことをするもんだと思ったぜ。すると、清三の奴がとびこんできて、おかねをかばった。花吉が、いきり立って剃刀をふり上げた。清三が、ふところから剃刀を出して、親方に斬りつけたってわけだ」
「まあ……それじゃ、やっぱり清三って若い衆が、親方を殺したのかね」
「そうじゃねえらしい。花吉は、清三に顔を斬られ、ぶっ倒れた。清三は逃げた。おかねが逃げろと言ったらしい。すると、しばらくして花吉が、血だらけになって、むくむくと起き上がってきたというんだ」
「怖い話だね」
「花吉はふらふらと立ち上がると、おかねに剃刀で斬りかかった。おかねは、花吉から剃刀をもぎ取ると、あべこべに、花吉の喉をめがけて、斬りつけたというんだ」
「それで、親方は死んだというんだね」
「というわけさ。けどな、弁蔵親分が言うにゃ、花吉の

喉の傷は、剃刀の傷じゃねえというんだ」
「じゃあ、なんの傷?」
「まあ……それじゃ、清三とかいう弟子が匕首で斬ったのかね」
「そうとしか思えねえ。ところが、小僧の善太が言うにゃ、天井裏でごそごそ音がしてたというんだ。おかねに聞くと、知らねえというわけだ」
「屋根から、誰か、はいってきたのかね」
「俺は、屋根へ上がって調べた。瓦がはずされていやがった。盗っ人の手口だ。誰か知らねえが、屋根から天井裏へへえりこんだ奴がいるんだ」
「だって、あの大雨の中を……」
「そうだ。おかねが知らねえという以上、清三なら知ってるんじゃねえか」
「天井裏の奴と、花吉が殺されたことと、どうなるんだね」
「わからねえ。清三を、捕えねえことにゃ、かいもく見当もつかねえわけだ」
「清三さんは、やっぱり罪になるんだね」
「なんとも言えねえな」
「さ、あっちで、お茶代わりに、お酒でも召し上がってくださいね」
二人は、壁穴から出て行ったようだ。
清三は、襖の中で、お絹と抱き合い、聞いていた。
〈俺、親方を殺しちゃいねえようだ〉と思った。
お絹が、呼吸を荒くし、清三にしがみついている。が、清三は、興奮からさめていた。雨の夜の出来事が、まざまざとよみがえり、おかねの顔と、その白い肌が眼底に明滅した。
「ね、もっと強く抱いて」
と、お絹が、声をはずませた。
「お絹さん、かんべんしてくれ。今の話、聞いたろ。花床のおかみさんは、俺をかばっているんだ。ひょっとしたら、天井裏から、もう一人、誰かがおりてきて、親方を刺し殺したのかもしれねえ」
「そうかもしれないわね。どっちにしたって、あんたが殺したんじゃないわね」
「俺は、たしかに親方を斬った」
「とどめを刺したのは、おかみさんじゃないかしら」
「おかみさんに、そんなことができるわけねえよ」
「あんた、おかみさんに惚れてんのね」

「死ぬほど好きだ」
お絹が、清三の胸を突き離すと、襖をあけて外へとび出した。
「あきれたよ、この人は……さあ、おらんさんの部屋へ行っておくれ。清三ですって、自首したらどうなの」
お絹が、大声を出した。
清三は、とび出すと、お絹の口元をてのひらで押えた。
「たのむ、声を出すな」
清三が、詰まった声を出した。息を殺し、おらんの部屋に聞き耳を立てた。
人が、出て行く気配がした。お絹が、壁穴から出て行った。清三は、腕を組むと考えこんだ。
〈どうする? なんとしても、おかねを助けたい。それには、弁蔵親分に、頼みこむより手はない。俺も助かりたい。そして、おかねも助けにゃならない。さっきの捕方の話じゃ、おらんさんは、弁蔵親分と、顔見知りらしい。おらんさんに、頼んでもらう方法はないだろうか〉
清三は、壁穴から這い出した。
おらんと、お絹の話し声が聞こえた。
「あんた、清三さんと押入れの中にいたんだね。あたしゃ、ぴんとくるものがあったんだよ。暗い中で、何をしてたんだね」
おらんの声が、尖っている。
「なんにもしてないわ。ただ、布団が積んであるうしろで……」
「体をくっつけていたんだろうね」
「そんなことしないわ」
「さ、言いな。本当のことを言うんだよ」
「あの人、花床のおかみさんのことばかり、考えてたんだもの」
「そんなことないよ。あんたの体から、清三さんの臭いがするじゃないか」
おらんの声が、かん高くなった。
清三は、女の嫉妬を感じとり、体を堅くしていた。女とは、なぜこうなんだ。俺は、ただ、おかねさんのことでいっぱいだ。けど、三人とも悪い女じゃねえ。女のなさけにすがるより助かる道はない——。
そのとき、お峯が戻ってきた。清三は、隣室へ、耳を澄ました。
「左門丁へ行って、弁蔵親分に会ってきたよ」
と、お峯の声がした。
「で、どうだったんだい。親分の意向は」

おらんの声が、はずんだ。
「親分は、やっぱり清三さんをくさいと睨んでいたよ」
「花床の親方殺しは、おかみさんじゃないのかい」
「おかみさんは、清三さんをかばってると見ていなすったよ。でも、親分は、どうも清三さんが、おらん組にかくまわれていると考えていたようなんだ」
「なんだって……今しがた子分の平六さんが、三軒の家の中を調べて帰りなすった。どこにもいないことがわかって、お酒を一杯飲んで帰ったばかりだけど……」
「でも、妙なことを言うんだよ。帰ったらおらんねえさんに言っといてくれ、清三を、大事にしてくれ――だって」
「知ってるのかね、親分は……」
「大事にしてくれっていうわけ――なんだろうね」
「なんだか、怖くなってきたね」
「あたしが、清三なんかいませんよと言ったら、おめえは知らねえかもしれねえが、おらんはちゃんと知ってるはずだ――と言うんだよ」
「すると、やっぱり清三さんを逃がしちゃいけないんだね」
「知ってるとすれば、しっかりつかまえておかなくちゃいけないわね」
「平六さんの話じゃ、殺しの下手人は、どうも清三さんじゃなさそうだけど……」
「どうするの……あたし、道々、考えてきたんだけど、あの人……逃がしてやったほうがいいと思うんだけど」
清三は、いたたまれず、壁穴から、中へはいって行った。三人の前で、膝をそろえ、
「おらんさん、おねげえだ。あんた、弁蔵親分に頼んでくれ。平六の話だと、俺が斬りつけた傷は、いのち取りにゃなっちゃいねえようだ。おかねさんは、きっと、自分の身を守るために、親方を斬ったようだ。すると、おかねさんを罪におとすのは酷だ。なんとか助かるもんなら、おなさけにすがりてえ――と頼んでもらいてえ」
清三は、畳に両手をついて頼んだ。
おらんとお峯が顔を見合わせた。お絹が口をきいた。
「親分に頼んでくださいな。あたしも、襖の中で聞いていたけど、清三さんが殺したんじゃないわ。やっぱりおかみさんだわ」

六　犯人は誰か

雨の中を、番太郎の茂吉が、弁蔵方の裏口の雨戸を叩いた。
「伊賀丁の花床で、親方の花吉が、かみさんに殺され、八百梅を通じ、自首して出ました」
と、わめいた。
弁蔵は、平六を呼ぶと、伊賀丁へ突っ走った。花吉の死骸を見た。傷は、右眼から口元へかけ、斜めの切傷と、咽喉部を匕首で刺し貫いた傷口があった。
「あたしが、うちの人を剃刀で斬ったんです。清三との仲を疑われ、あたしを素っ裸にして、荒縄でしばり、竹の棒で殴りつけ、あげくのはて、剃刀であたしを殺そうとしたんです。そんとき、清三がとびこんできて、助けてくれました。親方が、清三に斬ってかかり、清三は……」
おかねが、そこまでしゃべって、呼吸をはずませ、大きく溜息を吐いた。
「それで、どうした」
と、弁蔵は、底力のある声をかけた。
「清三は、自分でも剃刀を出して、親方の顔を斬ったんです。親方は倒れ、動かなくなりました。あたしは、清三に逃げろ――と言ったんです。すると親方が、ふらふらと起き上がり、あたしに斬りかかりました。あたしは、身をかわし、親方ともつれあい、親方が落とした剃刀で、斬りつけたんです」
おかねは、まばたきもせず言いつづけた。
弁蔵は、あたりを見まわした。六尺の床の間に、一両小判が一枚落ちていた。弁蔵は、それを拾い上げ、
「こりゃ、どうしたんだ」
と聞いた。
「さあ……それは、たぶん親方が落としたんじゃ……」
おかねが口ごもった。
弁蔵の眼が光った。床の間の上の天井板を見上げた。五寸ほどずれている。弁蔵は、平六の耳へ口をよせ、
「雨の中、ごくろうだが、屋根へのぼってみてくれ。どうやら天井裏がくさい」
とささやいた。
平六が、外へとび出して行った。
弁蔵は、小僧の善太を呼んだ。
「はじめ、清三兄いが、寝床から這い出し、奥座敷を障子の穴からのぞいていたんだ。俺、おかみさんの叫び声で眼がさめていたんで、清三さんの後から、床を這い出したんだ。厠の前まできたとき、天井裏でがさごそと人が

いる気配がしたんだ。おかみさんのきゃあという声がしたとき、兄いが中へとびこんだんだ。すると、旦那の呻き声がして、どすんと倒れる音がした。俺、怖くなって厠の中へ逃げこんでいたんだ。兄いは、台所から外へ出ていったようだった」
善太は、言い終わると生唾をごくりと飲みこんだ。平六が、天井板をずらせて、首を出した。
「誰か、人がはいりこんでいやしたぜ」
と言った。
平六が、天井裏からとびおりると、弁蔵のてのひらに、二分銀一枚を握らせ、
「こいつが落ちてやした」
と、声を沈めた。
弁蔵は、一応、清三が、天井裏にかくしてあった親方の隠し金を盗んで、逃走したものと判断した。
「おかねさん、あんたは、清三とできていたね」
「申しわけありません」
「いつごろからだね」
「一年ほど前からです」
「いつ、どこであいびきしてたんだね」
「朝、旦那が散歩にでかけた留守に……」
「花吉は、感づいていたのか」
「今夜になって、いきなり……あたしをひどい目に会わせ、わかっていたんだ――と言い出したんです」
「あんたは、親方の剃刀をもぎ取って、花吉の喉を斬ったというが、傷あとは、剃刀じゃねえ。匕首だな。そいつは、清三が、持っていったのか」
「ちがいます。剃刀です」
おかねが、かん高い声を出した。
「しらをきるのも、いいかげんにしねえか。俺は、だてやすいきょうで十手を預かってるんじゃねえ。この傷口を見ろ」
弁蔵は、花吉の死骸の喉を、おかねに指し示した。おかねは、眼をそむけた。
「あんたは、清三をかばってるようだが、嘘をついちゃ、ためにならねえ」
「嘘などつきません」
おかねが、ふるえ声で答えた
「まあいい、すぐ尻尾が出る。ところで、天井裏に銭をかくしてあったようだが、いくらあったのか」
「知りません」
「その銭を、清三が、屋根からはいって、持ち逃げした

ようだな」
「そんなことありません」
弁蔵は、一応、おかねの身柄を番屋へ引き立てることにした。平六が、おかねの手を後ろ手に縛り、立て――と命じた。
外へ出るとき、人だかりの最前列に、夜鷹のおらんがいるのに気がついた。弁蔵は、おらんが、眼で会釈するのを眺め、〈おや、この女、わざわざ雨の中を赤坂氷川神社裏から、何をしにきたんだ〉と思った。
おかねを引き立てながら、弁蔵は、おらんとの出会いを思い出した。二年ほど前、盗っ人の熊吉を追いかけ、観音長屋で見失ったとき、おらんの協力で、捕縛することができた。そのとき、夜鷹にしとくのは、もったいないくらい、気っぷのいい女だと思った。
そのおらんが、花床の殺しを見にきたのは、何かわけがあるにちがいない。ことによったら、清三は男っぷりがいいので、おらんがかくまっているのではないか――と見当をつけたのだ。
弁蔵は、おかねの身柄を番屋へ預けると、左門丁へ引きあげた。帰り道、氷川神社裏へまわって、おらんの部屋を覗いてみようと思ったが、清三が、おらん組にいれば逃げることはない――と思い、そのままにした。
弁蔵の頭に、床の間の一両と天井裏の二分銀が、こびりついてはなれなかった。屋根瓦をはがして忍びこむのは、盗っ人でも、相当の奴だ。〃ねずみ〃は、駆け出しの泥棒にゃ、使えねえ手口だ――と考えた。
翌朝、平六が、指示を求めにきた。
「おめえ、氷川裏のおらん組へ行ってくれ。たぶん清三がいるはずだ。いたら、番屋まで連れてこい」
弁蔵が命じると、平六は、とび出して行った。するとまもなく、十八、九の一見して夜鷹とわかる女が、裏口からひょっこりはいってきた。弁蔵は、一瞬、怪訝な思いがしたが、その女を、おらん組のお峯と知ると、〈女たち、何か、策をめぐらせているな〉と見当をつけた。
弁蔵は、お峯を中に入れ、女房にお茶を出させた。お峯が、いんぎんなあいさつをした。
「おめえさん方は、それほど、花床の清三が気になるのかい」
と、いきなり、やわらかい語気をあびせかけた。お峯の切れ長い眼が、きらきらと光った。
「清三さんは、あたしのお客だったんですよ。だから、おらんさんから聞くと心配でね」

「清三は、よっぽど金づかいがよかったとみえるな」
弁蔵の頭の中に、天井裏のかくし金がちらついた。
「そうじゃないんですよ。あの人、男っぷりがよく、気立てがやさしく……だからですよ」
「それで、俺んとこへ様子を聞きにきたってわけだな」
「親分さん、やっぱり親方を殺したのは？」
「今んとこ清三のようだな……でもな、ちっとばかり考えなきゃならねえこともある。おらんさんに、言ってくれ、清三を大事にしといてくれ――と俺が言ったとな」
お峯が帰った。
殺し……おかねと清三の密通……天井裏の隠し金……三人の夜鷹。これをどう判断するかを考えていると、平六が戻ってきた。
「清三の奴、おらん組にゃおりやせん」
「おめえは、まず、どっからへえった？」
「おらんの部屋、それからお峯の部屋……次はお絹……」
「三つの部屋を、壁穴をつたい、順々に見て行ったが、いねえというんだな」
「へえ……野郎、ずらかりやがったようで」
「わかった。おめえ、早いとこ、花床のかみさんの素性を洗ってくれ。三年前、何番目かの後妻にきたようだが」
弁蔵は、口元に薄笑いを浮かべながら言った。
その日の午後になって、平六が戻ってきた。駆けずりまわったとみえ、汗をかいた顔に、ほこりがついていた。
「親分、花床のおかねは、ねずみの佐平次の娘でげした」
弁蔵は、ぎくりとした。
ねずみの佐平次は、いわゆる大盗ではないが、以前、屋根職だったため、屋根瓦をはがして忍び込む小泥棒だ。今まで、殺傷をやったことがなく、盗み金も、小金ばかりだった。二、三両の金を盗むと、それで食いつなぎをやり、金がなくなると、また盗みをやった。
三年前、内藤新宿の掛茶屋へはいり、三両の銭を盗んだが、張込み中の目明かしにつかまり、遠島処分をうけた。盗み金が少なかったので、ご赦免になったと聞いている。
「ねずみの佐平次の娘が、なぜ、花床の後妻になったんだ」
「佐平次のねぐらは、千駄ケ谷村、天竜寺裏の掘立小屋、表向きは屋根職となっていやす。三年前、佐平次が島送りとなると、おかねは、中宿の呉服屋の下女に住み

込んだんでさあ。花吉が、おかねを見染めたいきさつはわかりやせんが……」
「わかった。すぐ捕物だ。手下を集めろ。めざすは、千駄ケ谷村、天竜寺裏だ」
弁蔵は、声をはずませた。
「なんでまた、佐平次を……」
「野郎を、ふん縛りゃ、何もかもわかるんだ。手下は、おめえを含め、五、六人いりゃいいだろう」
平六がとび出すと、弁蔵は、支度をはじめた。久しぶりの捕物のせいか、体の引き締まる思いがした。
小半刻ほどすると、平六以下の子分が六人集まった。弁蔵は、着物の裾をはしょり、白い股引をむき出しにして、十手を腰にはさむと、左門丁から内藤新宿へ向かった。
この時代の内藤新宿は、飯盛女（めしもりおんな）のいる旅籠屋（はたごや）が五十軒、茶屋が八十軒もあって、繁盛していた。が、時刻が朝の五つ半（九時）のせいか、人通りも少なく、大戸を閉めている店が多い。
内藤新宿を出はずれると甲州街道となる。左手に、子安稲荷があった。弁蔵は、平六に三人の手下をつけ、自分は二人を連れていくことにした。
「平六の組は、表。俺は、裏手へまわる。ぬかるな」
と、底力のある声をかけた。平六が三人を連れ、先行した。稲荷神社の裏手に、天竜寺の森がみえ、山門が朝の陽をうけている。弁蔵の組は、一足おくれて平六の組に従った。
森の裏側に出た。風が吹けば、倒れそうな草葺（くさぶき）の小屋があった。雨戸が閉まっている。弁蔵は、裏口へまわった。戸口が一尺ほど開いていて、味噌汁を煮ている匂いがした。
弁蔵は、戸口から中を覗いた。
四十五、六の小柄な男が、茶碗にめしをよそっていた。弁蔵は、雨戸を開けると、中へとびこみ、いきなり男を組み伏せた。子分が、おどりこんだ。たちまち、男に縄をかけてしまった。
「左門丁の弁蔵だ、ねずみの佐平次、おめえは、ゆんべ大雨の中、四谷伊賀丁の花床へ、例の手で、屋根から忍びこんだな」
弁蔵が、ダミ声をあびせかけた。
「俺じゃねえ。人ちがいだ」
佐平次がわめいた。弁蔵が平六に眼くばせした。平六が、六畳二間しかない部屋の中を捜した。台所の水瓶の

中に、金貨と銀貨が沈んでいた。平六が、それをつかみ出して数えた。

「十八両と二分、ありやす」

と言った。

「佐平次、とうとうてめえは、大きな山を踏んだな。一人娘のおかねの嫁入り先へ、無心に行き、おかねから、天井裏の隠し金を聞くと、花吉に三両よこせと無心した。ところが、あべこべに花吉に剃刀で腕を斬られた。おめえは、その恨みと、銭欲しさに、大雨の中を、夜になって屋根から忍びこんだ」

佐平次は、がっくりと首を垂れた。

「天井裏の銭をふところへねじ込んだとき、座敷で、おかねの悲鳴を聞いた。すると清三がとびこんできて、花吉を斬った。清三は、おかねに言われて逃げた。すると、花吉が、血だらけになって起き上がった」

佐平次が、顔を上げた。眼の窪んだ痩せた顔だ。

「親分、申しわけねえ。花吉の奴が、素っ裸のおかねを、剃刀で斬ろうとしたんだ。俺は、びっくりして天井裏からとびおり、匕首で花吉の喉を刺したんだ。俺は、おかねをむざむざ殺させたくなかったんだ」

佐平次が、泣き声を絞った。

「かわいそうに、おかねはおめえをかばって、自分で罪を着るつもりで、あたしが花吉を殺したと言ってるぜ」

佐平次が、

「おかね、おかね」

と、喉の詰まった声をあげた。弁蔵は、佐平次を引っ立て、外へ出た。

平六が、そばへ寄ってきて、

「親分、観音長屋の捕物、どうするんで」

と聞いた。

「殺しの犯人はあがったんだ。今さら、清三をしょっぴくこたあねえよ」

「でも、野郎は、花吉を斬ってますぜ」

「清三が斬らなかったら、おかねは殺されていたんだ。眼をつむってやるのが、本当じゃねえか」

縄つきのまま歩く佐平次が、

「親分、すまねえ。俺は、今度こそ獄門。覚悟はできた。おかねと清三を一緒にしてやってくだせえ」

と、声をふるわせた。

「やっぱり親だな。二人の仲人、引き受けた」

弁蔵は、そう言って晴々と笑った。

悪の人別帳

一　放火犯人

江戸の東郊、代々木村に、非人小屋があった。四谷の大番丁から東へ向かい、千駄ケ谷村を過ぎると原宿へ出る。

道は、そこで行き止まりになり、鬱蒼とした森につきあたる。この森が、現在の明治神宮である。

森の中に、細い道が二方に別れている。右へ行けば、角筈村となり、左へ行けば、代々木村となる。代々木田圃をぬけると、櫟や欅の林の丘が見える。丘の土手下に、風が吹けばとぶような掘立小屋がならんでいる。非人頭久兵衛が支配する非人小屋である。

屋根は草葺だが、壁はない。各戸は、二坪か三坪ぐらいで、床にむしろを敷き、畳二枚ほどの土間ができている。こんな小屋が、三十五、六戸ならび、晩春の陽ざしを受けていた。

そこから、三十間ほどはなれたところに、瓦葺の平家がある。ここが非人頭久兵衛の家だ。太い格子戸の玄関をはいると、十畳敷ぐらいの土間になっていて、若い女が、両手を後ろ手に縛され、膝をくずしてうなだれている。

非人頭の久兵衛が、上がり框に腰をかけ、女を見据えた。

「名前は、なんというんだ」

「おちかというんだよ」

女の答え方は、かなり蓮っ葉で、伝法なひびきがある。

「家は、ねえそうだな」

「そんなもん、ありゃしないよ」

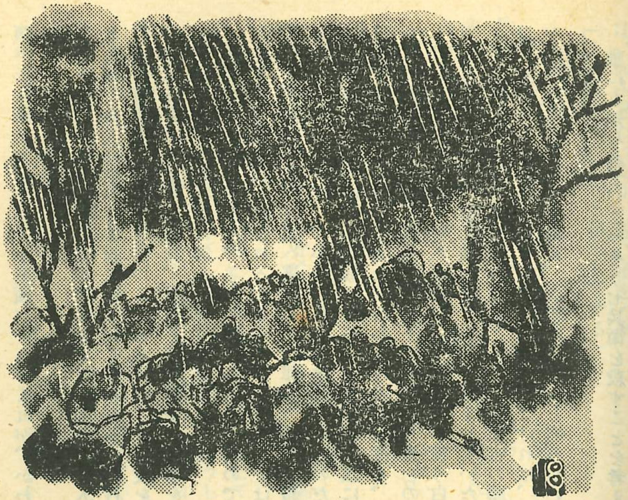
「おめえの身柄は、火付盗賊改めの中根の旦那から、当分の間、預かったんだ」

「あたしが、火をつけて、若旦那を焼き殺そうとしたって言うんだろうが、おかどちがいさ。あたしゃ、千駄ケ谷仲丁の種問屋武蔵屋の若旦那、栄三郎を殺すわけはないじゃないか」

「惚れ合った仲だというのか」
「そうだよ。あたしは、内藤新宿の飯盛女だけど、江戸女の気っぷだけは、持ってるつもりさ」
「けどな、囚徒預かりは、久兵衛の役目でな。ま、大事にお預かりすることになった。わるく思わんでくれ」
久兵衛は、そう言って女をまじまじとみつめた。そっとするようないい女だった。久兵衛は、このとき六十三歳、頭髪は胡麻塩色で、深い皺をきざみ、小鼻の張った顔は、年輪と、非人頭としての貫録が滲んでいた。
「おめえの年は？」
「二十一だよ」
「いずれ、つけ火の一件は白い黒いがつくだろう。それまでの辛抱だ」
久兵衛は、そばにいるかわらけの七兵衛を見て、顎をしゃくった。七兵衛は、会釈を返すと、立ち上がり、おちかの縄尻をつかみ、
「立て」
と、錆びた声をかけた。
七兵衛は、外へ出ると、山裾の溜のほうへ連れて行った。
「俺は、小屋頭の七兵衛というんだ。おぼえといてくれ」
七兵衛は、おちかの側へ体をよせた。
「番頭さんだね。たまには、内藤新宿へ、女を買いにきたこと、あんのかい」
おちかが、白い歯をみせた。七兵衛は、歩みをのろくしながら、おちかを眺めた。体つきは小柄だが、着物を着た姿が、なんともいえぬなまめかしさがある。目鼻立ちがととのい、切れ長い眼と、口元に、身ぶるいのするほど愛嬌があった。
「たまには、飯盛女を抱いたこともあったよ。けどな、おめえのようないい女は、はじめて見たぜ」
七兵衛が、溜息を吐いた。
「番頭さん、いくつになるんだね」
「番頭じゃねえ、小屋頭と呼んでくれ。これでも非人頭久兵衛の三人の小屋頭の一人だ。年は二十九、生まれは深川の木場だ。親なし子で、他人さまの手をめぐり歩いて育ち、もの心のつくころ、久兵衛さんに拾われたんだ」
「じゃあ、無宿もんだね」
「生まれ在所の人別帳にゃねえが、非人の人別帳にゃ、ちゃんと、かわらけの七兵衛でのっているぜ」
おちかが、喉を鳴らして笑った。七兵衛が、真顔になって、非人の人別帳を言ったのが、おかしかったのだろ

う。
この時代に、非人――という制度があった。家出少年が、親兄弟から見放され、乞食となり、賤民の仲間入りをする。これらの者が集まって小屋掛けするようになる。これが非人である。
彼らは、親兄弟から見放されて、勘当されているので、生まれ在所の人別帳からはずされ、良民としての戸籍はない。しかし、非人人別帳にはのっているのだ。
非人たちは、おおむね二つの名前を持っている。源蔵といっただけでは、同名が多くわからなくなるから、とんびの源蔵とか、ほとけの源蔵というように異名をつけておく。
非人にも、抱非人、野非人、無宿、宿あり、門回り――などいろいろあるが、一括していえば、乞食ということになる。
非人は、髪を結うことができなかった。誰でも、ざんぎり坊主にしている。こうしておけば、非人ということがすぐわかるからだ。
非人の中に、町抱えというのがある。町の掃除や、水汲み、路地の番などを頼まれるのだ。横目非人――というのがあった。探索方の下働きをするのだ。大名たちが、非人頭に、捜し物を頼む例はあった。
溜――という制度も、非人が、囚徒を一時預かるやり方で、いわば現在の留置場のようなものだ。その溜が、山裾に見えてきた。
山裾に雑木林がある。そこを切り開いて、溜ができている。浅草や品川には、いくつも溜ができていて、五十坪の建物となっているが、代々木村のそれは、小さなものだった。
間口が三間、奥行きが五間、十五坪の平家で、まん中に土を踏み固めた通路があって、両側に、三畳のひろさの仮監部屋が三つずつならんでいる。
手前の右側に、見張りの部屋があり、その向かい側に便所がある。どこの溜でも、本来なら女の溜が、別に建っているのだが、代々木の久兵衛のところは、女溜がなかった。
七兵衛は、溜の前までくると、
「俺だ。新入りだ」
と、中へ声をかけた。分厚い板戸が開いた。見張り番の、おやまの次郎吉が顔を出した。
七兵衛は、次郎吉の顔をみると、いやな気分がした。次郎吉の名前が、〃おやま〃と名づけられているとおり、

役者の女形のようないい男だったからだ。
「おめえは、いつまで見張りをやるんだ」
「今日から三日間で……」
「あさってまでだな」
「さようで……」
「溜は、今、すりのじいさんが一人へえってるだけだな」
「へえ、原宿の喜八で……」
「じいさんを、いちばん手前に入れ替えろ。新入りは女だ。内藤新宿の飯盛女、おちかというんだ。女は、奥へ入れるんだ」
次郎吉は、まん中の房の鍵をあけ、喜八を見張りの部屋のすぐ前に入れた。
「じいさん、場所がえだ」
「おら、どこでもいい」
喜八が、皺だらけの顔をほころばせた。子どものような小男で、背中を丸めている。七兵衛は、〈じいさん、まるで化物だ〉と思った。同時に、次郎吉が、どんなにいい男でも、この喜八がここにいる限り、おちかと次郎吉が、おかしなことになる気づかいはない——と考えた。
次郎吉が、奥の房の鍵を開けた。太い格子戸で柵ができていて、中は板の間、むしろが敷いてある。
七兵衛は、おちかの縄を解くと、
「おめえが、火つけをしたんでなけりゃ、中根の旦那も、すぐお調べでわかってくれるだろう。俺から、それとなく話をしといてやっから」
と、やさ声をかけ、おちかを中へ入れた。
が、おちかは答えず、次郎吉の顔をまじまじと眺めている。七兵衛は、格子戸を蹴って閉めると、
「鍵だ」
と次郎吉に命じた。次郎吉が、鍵を閉めた。
すりの喜八が、
「これで溜の中も、にぎやかになった」
と、喉にからんだ声を出した。
おやまの次郎吉は、四谷忍町の大道売卜者の子として生まれた。母親は、誰だかわからなかった。鹿半長屋に住み、ものごころのつくころ、父と二人きりの生活に気がつき、
「おれの、おっ母あはどこにいるんだ」
と聞いた。
「おっ母あは、死んだ」



「名前は、なんていうんだい」
「お花といってな、きれいな女だった」
「いつ死んだんだ」
「おめえが、生まれると三日目だ」
「おっ母あの年は、いくつだった」
「十九だったよ」
次郎吉の瞼の裏に、永久に見ることのできない母のおもかげが焼きついた。父親は、次郎吉が、十三歳の冬、内藤新宿の路上で、卒中で死んだ。
次郎吉の放浪生活がはじまった。鹿半長屋の家主は、人別帳から次郎吉を外した。無宿者になったのである。
次郎吉は、内藤新宿で乞食をはじめた。旅籠や、引手茶屋の台所口から顔を出し、残飯をもらい飢をしのいだ。夜は、太宗寺の山門の下で眠り、昼間は、町中をほっつき歩いた。
次郎吉は、十五になったとき、代々木の久兵衛に拾われた。乞食といっても、縄張りがあるから、みだりに物乞いはできなかったからである。
次郎吉は、二十一になったとき小頭となった。非人の階級に三つの段階がある。無役の非人、十人ほどを一組にして、その上に小頭がいて、これを掌握している。小

頭が三人集まった上に、小屋頭がいた。これが、かわらけの七兵衛の役だ。

非人の仕事は、物乞いだけではない。引回しの罪人があれば、非人の中から警固に出ていくこともある。村や町内の道路の掃除を受け持つこともあれば、探偵役をつとめることもある。幕府は、目付を使い隠密の仕事をさせていたが、その手下に非人を使うこともあった。

次郎吉は、読み書きもできたし、頭もよかったので、ときどき、探偵役も頼まれることがあった。あるいは、町の目明かしから、村落へ逃げこんだ罪人の探索を頼まれたり、非人の中では、かなり高級な地位にいたのだ。

次郎吉のねがいは、小屋頭になることだ。小屋頭になれば、髷を結うことができた。かわらけの七兵衛も、つい二カ月前、小屋頭に昇格し、目下、ざんぎり髪をのばしはじめている。が、非人の髷は、一般の人が使う白い元結はゆるされず、黒元結を使うことにきまっていた。

それでも、〈髷を結ってみたい〉という次郎吉の願いは、真剣なものがあった。〈七兵衛さえいなければ、俺が小屋頭になれる〉と考え、次郎吉は、ふと怖ろしいことを思いついた。

誰にも知られず、こっそり七兵衛を殺すことを考えたのだ。七兵衛は、代々木の非人小屋の中では、誰にもきらわれていた。

代々木には、三十六戸の小屋があったが、その中に九組の夫婦者がいた。女房も、非人で、よその小屋からもらってくることもあれば、同じ村で、一緒になる者もいた。

非人夫婦でも、一般の夫婦と変わることなく、一夫一婦を堅く守っていた。七兵衛には、女房がいなかった。顔が馬面で、極端なくらい顎がしゃくれている。頭髪をのばしはじめているが、元来薄毛のタチで、風が吹けば、ぶよぶよゆれるような細い毛が、まばらに生えている。

〃かわらけ〃という異名は、そんな頭髪からつけられたのだろう。七兵衛が、きらわれるのは、女に目がないからだ。七兵衛の被害にかかった者は、次郎吉が知っているだけで、三人もいた。

とんびの伝七の女房おさんは、亭主が、門回りに出かけている留守に、七兵衛に手ごめにされた。帰ってきた伝七に、おさんが、泣いて訴えた。伝七は、いきりたち、出刃を持って、七兵衛を殺しに出かけた。

これを小頭の次郎吉がみつけ、なだめて帰した。伝七

は、四十男だったが、眼に涙をため、

「この恨みは、きっと晴らしてやる」

と言った。

じぞうの又三の女房、にゅうどうの源太の女房も、七兵衛に犯された。このことがあってから、次郎吉は、亭主が不在のときは、女房たちを、一つの小屋に集めておき、七兵衛の手がのびないような方策を立てた。

「次郎吉さんが、小屋頭になってくれりゃ、こんないいこたあねえ」

とは、誰もの願いとなった。

「折りがあったら、あの野郎、眠らしちまおうぜ」

とは、被害をうけない者でさえ、ささやき合う言葉だった。

次郎吉は、そうした仲間たちの気持ちを、かきたてるように、彼らに親切をつくしていた。計画的にそうしたわけではないが、次郎吉の七兵衛を憎む気持ちが、おのずからそうさせたようだ。

次郎吉が、ぼんやりと七兵衛を消す方法を考えていると、原宿の喜八が、筋向かいの房にいるおちかに声をかけた。

「おちかさんと言ったな。おら、原宿の喜八というすりだ。十日ほどめえに、内藤新宿の盛り場で、大店の大旦那の財布を盗んだ。けど、こんどつかまったのは、千駄ケ谷仲丁、種問屋武蔵屋の若旦那の十両入りの皮袋をすり取ったと疑われ、しょっぴかれた。けどな、おら、ほんとうは、知らねえんだ」

おちかが、格子の柵に顔をよせ、

「なんだって」

と、かん高い声を出した。

二　溜場の中

「おら、種屋の若旦那をやった覚えがねえ」

「そうかい。その若旦那の栄三郎さんはね、あたしのいい人だったんだよ」

「ええッ。で、あんたは、なぜ、ここへ」

「五日前の晩、種屋の店から、火が出て燃えちまったんだよ。大旦那が亡くなってるんで、本当なら栄さんが、後をつぐわけだけど、道楽がすぎて、親族一同の相談で、当分の間番頭の清兵衛が、店を見ることになったんだよ」

「ありそうな話だ」

「ところが、店のお金が、十両なくなり、番頭が、お上にとどけた。お上じゃ、栄三郎さんを調べたんだよ。あの人は、ほんとうは知らないんだけど、十両持ち出したと嘘をついたのさ。そのお金の隠し場所を聞かれ、苦しまぎれに、内藤新宿で、すりにやられたと言っちまったのさ」
「盗み出しがウソ、そのウソの上塗りをさせられるため、おら、捕まったというわけだな。馬鹿にしていやがる」
「だいたい、お上のやることはこんなもんさ。あたしをしょっぴいたのは、そのまた上のりのウソ……栄さんに愛想づかしをされ、のぼせ上がったあたしが、あの人を焼き殺すため、種屋に火をつけたというんだよ」
「なんで、おめえさん疑われたんだ」
「火事の晩、あたしはこっそり旅籠をぬけ出して、栄さんに会いに行ったのさ。あの人、十両盗み出したと疑われて以来、あたしんとこへ来られなくなっちまったのさ。惚れた男に会いに行ったところが、種屋は燃えていたんだよ」
「若旦那は、どうした？」
「かわいそうに、顔中大やけど、ここの代々木村の叔父さんとこで、お医者の手当をうけて、寝てるんだよ。できるなら、ここを蹴破って、見舞に行ってやりたいよ」
「おら、久しぶりでいい話をきいた。ねえさんありがとうよ。江戸女の意気を知って、うれしくなったぜ」
喜八が、鼻をすすった。
次郎吉は、黙ってきいていたが、喜八にもおちかにも好感を持った。〈二人とも、助からにゃいけねえ〉と思った。が、非人の小頭には、その方法は考えつかなかった。
次郎吉は、おちかの房の前まで、歩み寄った。
「聞いたよ。あんたは、なんの罪もねえよ。けどな、どうやら、種屋の番頭の清兵衛が臭いな。十両の盗み、こいつは、誰だかわからねえが、火つけは、清兵衛じゃねえのか」
次郎吉は、格子の隙間から中を覗いた。おちかが、答えず、次郎吉をみつめている。ぞっとするようないい女だった。
「あんた、次郎吉さんていうんだろ。代々木の久兵衛さんの小頭って、あんたなのね」
おちかが、溜息まじりに声を出した。
「そうだ。俺、次郎吉だ」

「溜へぶちこまれたかいがあったよ。よかったわ」
おちかが、格子の柵に顔を押しつけ、まじまじとみつめた。
「おちかといったな。大きな声じゃ言えねえが、七兵衛という小屋頭……気をつけてくれ。さっき、ここへあんたを連れてくるとき、彼奴の眼付きは、ただごとじゃなかった」
「すると何かい。あの禿ちょろの奴、あたしの体でも、ただでもらいにくるというのかい」
「でっけえ声を出すな。風に耳あり、壁に眼ありって言うじゃねえか」
「わかったよ。あんな奴に、指一本さ させやしないよ」
「でもな、野郎のこったから、手荒なことをするかもしれねえ」
「だって、次郎吉さんが、見張り番をしてるんだろう」
「あさってまでだ。その三日間は七兵衛も、のこのこ出てくることはねえだろう。けど、四日目から、びっこの熊吉が見張りだ。そのときが危ねえ」
「まさか、手ごめにはしないだろうね」
「するかもしれねえぜ、七兵衛は、この非人小屋の中でも、つい最近、人の女房を三人まで手ごめにしやがった」
「あたし、どうしよう」
おちかが、大げさに泣き声を出した。
喜八が、向こうから声をかけた。
「おちかさん、しんぺえすんな。俺がここにいる。年は取ってるが、原宿村の喜八の腕は、筋金入りだぜ」
「だって、おやじさんがいくら力んだって、鍵のかかった格子の中じゃ、檻にはいった狼、吠えるだけじゃないのかい」
「ちげえねえ。次郎吉さん、なんとかならねえもんかね。たとえば、俺に、鍵を持たせておくことはできねえのかい」
次郎吉は、聞いて考えこんだ。鍵は、次の見張りの熊吉に申しおくることになっている。余分の合鍵は、小屋頭の七兵衛が持っている。七兵衛は、たぶんその鍵を使って、おちかの房をあけにくるだろう。そして、自分の小屋へ連れていく。
次郎吉は、そこまで考え、七兵衛を殺す方法に思い当たった。
〈七兵衛は、きっと忍んでくる。おちかを奪いにくる。そのときが機会だ。問題は、俺が下手人とわからねえように、七兵衛を殺す方法がありゃ、いちばんいい〉

「わかったぜ。なんとかする。けどな、鍵の一件は、誰にもしゃべるんじゃねえぜ」
「おら、しゃべるこっちゃねえ」
次郎吉は、おちかの格子戸に顔を押しつけ、
「というわけだ。しんぺえしなさんな」
と声をかけた。格子の隙間から、おちかの舌がのび、次郎吉の唇をなめた。
次郎吉は、思わず顔を引っ込めた。
おちかが、くっくっと喉を鳴らして笑った。
「あんたって、まだ、初心なんだね。あたしゃ、そんな次郎吉さんに、ぞっこん惚れたよ」
「冗談はよせ。俺は、見張りだ」
おちかが、格子の隙間から手を出した。次郎吉は、その手を引っ込めさせようとした。が、おちかに握られてしまった。その手が引き寄せられた。
「もう一度、顔をおっつけておくれな」
次郎吉は、そのとおりにした。二人の唇が、わずかに触れた。
「じれったいね。こんないい男を眼の前にして、もったいない話だよ」
「ここは、溜場だぜ」
「わかってるんだよ。でもね、次郎吉さん、あたしを忘れないでくださいね」
次郎吉は、答えずおちかの前をはなれた。
見張りの部屋へきて、眼をつむった。おちかの唇の感触が、しびれるような感じで残っている。たなごころに沁みこんだ、とろけるような手のやわらかさが、よみがえってくる。
次郎吉は、ふうっと大きな溜息を吐いた。眼の前の房から、喜八が、しわがれた声をかけてきた。
「小頭は、だいぶおちかさんに、いかれてるようだな」
「男と女だ。奇妙なもんだよ」
「おら、妙な噂をきいてきたぜ。代々木村の非人小屋じゃ、小屋頭の七兵衛を眠らせるって計画があるというじゃねえか」
「噂のとおりかもしれねえ」
「場合によっちゃ、おら、助っ人するぜ」
「そんときになっての話だな」
「よしきた。おもしれえことになったもんだ。小頭、おらがいつも、房の中にいることだけは、忘れねえでくれ」
そのとき、とんびの伝七が、三人前のめしを持ってきた。ほとんど黒い麦めしで、縁のかけたどんぶりに盛っ

てあり、鰯の塩焼と漬物がのっている。煮だした番茶が、かけ茶碗にはいっていた。
次郎吉は、伝七といっしょに、二人にめしをさし入れた。それがすむと、次郎吉は、伝七を溜の裏へ連れて行った。
次郎吉は、溜に、おちかという飯盛女がはいっていることを説明し、
「俺の見張りは、明日、あさってだ。次の番はびっこの熊吉だ。事件は、びっこの番のときに起こる。七兵衛が、おちかを連れ出しにくる。そのとき、野郎を眠らせる計画だ。又三、源太にもそう言っておけ。みんな交代で、七兵衛を見張れ――とな」
「わかりやした」
伝七が、拳固をかため、戻って行った。次郎吉は、その後ろ姿を見送りながら薄笑いを浮かべた。
その夜――。
七兵衛の持っている溜の鍵は、次のような方法で奪うことになった。
とんびの伝七が、何回となく、溜と小屋の間を往復し、計画を練った。
「小頭、野郎の鍵を盗んで、別のちがう鍵を持たせておく。野郎が、おちかの体を取りにくる。鍵を開けようとするが開かない。もたもたしてる隙に、野郎のどてっ腹に風穴をあけ、眠らしちまうという寸法だ」
次郎吉は、うまい考えだと思ったが、七兵衛の鍵を盗むのは、容易なことではない――と思った。
「鍵を、どうして盗むんだ」
「おれの女房、おさんに七兵衛を誘惑させる。つまり、おさんが、野郎を家の外へ呼び出すんだ。その隙に……」
「わかった。俺が盗む。が、代わりの似たような鍵は？」
「ここにある。又三が、町で拾ったやつだ」
伝七が、鍵を次郎吉の手に握らせた。
夜になった。遠くで暮れ六つの鐘が鳴った。山裾一帯が、夜のとばりに包まれた。喜八が、軽いいびきを立てて眠っている。おちかは、腹這いになって、小声で鼻唄をうたっている。
次郎吉は、溜の外へ出た。
溜の斜め向かい、三十尺ほどはなれたところに、七兵衛の家がみえる。屋根に瓦をのせ、小屋とはまったくちがったたたずまいを示している。
そこから、少しはなれて小屋がびっしりならび、ところどころから、灯あかりがちらほら見える。白い炊煙

が立ちのぼっている小屋もあった。その小屋の中ほどから、女の影が浮かび上がった。
　伝七の女房おさんだ。
　乞食のことだから、ろくな着物をきていないが、町家の葬式を手伝い、もらってきたらしい大柄な着物をきている。灯あかりに浮かんだ姿が、妙になまめいて見えた。
　次郎吉は、七兵衛の家の後ろの暗がりに、体を潜めた。おさんが、前を通りすぎ、軽く会釈した。次郎吉は、息を殺した。
　おさんが、裏口から中を覗き、
「小屋頭……あたしだよ。おさんだよ」
　と、低い声をかけた。
「なんだ、おめえか」
「このあいだ、あんたに抱かれたことが、忘れられないんだよ」
「伝七は、どうした」
「まだ門回りから戻ってこないんだよ」
「だったら、抱いてやるから、はいれ」
「小屋頭の家の中はいけないよ。伝七は、あの一件以来、帰ってくると必ず、ここの家の中を覗くからね」
「そりゃ、まずい。外へ出るか」
　七兵衛が、出てきて、おさんの手を握った。
　二人の影がもつれながら、山裾へ向かう。
　次郎吉は、足音を忍ばせながら、家の中へはいった。破れ行灯に灯がついている。壁もできているし、畳も四枚ほど敷いてある。
　道具らしいものは、何もない。あたりをみまわした。棚があってごちゃごちゃと、剃刀、はさみ、糸、ちり紙、火打石などが置いてある。その中に、鍵があった。次郎吉は、つかみ取ると、別の鍵を残し、外へ出た。おさんと七兵衛が、気になったので、溜の裏へまわってみた。
　そのとき、伝七、又三、源太の三人が、山裾めがけて走り込む姿が見えた。次郎吉も走った。
　櫟林の中へはいった。
　七兵衛が、おさんを抱き倒し、帯を解いていた。伝七が、おどり込み、七兵衛の後ろ襟をつかんで、引き倒した。
「だ、誰だ」
　七兵衛が叫んだ。
「俺だ。小屋頭は、小屋もんの女房を、自由にしてもいいと、掟（おきて）でもあるんですかい」

と、伝七が怒鳴った。
「お頭に言って、さばきをつけてもらおうじゃねえか」
　と、又三がわめいた。
「小屋頭、この決着、どう始末してくれるんだ」
　と、源太が叫んだ。
「すまねえ。けど、出来心だ。わる気があったわけじゃねえ。このとおりだ」
　七兵衛が、三人に頭を下げた。
　次郎吉は、三人の後ろから顔をつき出した。
「あんまりさわがしいんで、とんできた。事情はわかった。伝七、かんべんしてやってくんな。小屋頭も、出来心だと言っている。その代わり、二度と、他人の女房に手出しをしたら、ただじゃすまされねえ。そこんところを、小屋頭も、承知してくだせえ」
　次郎吉は、鍵を盗んだことを、疑われないために、ことさら七兵衛に、面をさらし、口をきいたのだ。
「承知だ。次郎吉、すまなかったな」
　七兵衛は、衣類の泥を払って立ち上がり、おさんに一瞥を残すと、帰って行った。
　その姿が、見えなくなると、おさんが、うふうふと、喉を鳴らした。三十歳は、とっくに過ぎているうばざくらだが、笑顔に気味のわるいほど、色香が滲んでいた。
　伝七が、おさんの手を取って、歩きだした。おさんが、伝七に寄り添った。
　次郎吉は、四人の姿が見えなくなると、
「俺も、女房を持ってみてえ。できることなら、溜にいるおちかのような、いい女と夫婦になってみてえ」
　と、つぶやいた。
　おぼろ月が、山の端から顔を出した。

三　恋ごころ

　小屋頭七兵衛は、溜へ姿を見せなかった。
　次郎吉に、伝七の女房おさんに対する無法を見られたからだろう。
　従来の慣例からすると、七兵衛は、朝夕二回は、必ず溜を覗きにきた。次郎吉は、ほくそ笑んだ。そのせいか、溜の中がなごやかになってきた。
　次郎吉、喜八、おちかの三人の間に、あたたかな人情が、交流してきた。小屋の者たちは、次郎吉が見張りをしているので、気を使って、めずらしい食い物が手にはいると、差し入れにきてくれた。

塩引鮭の頭を、町でもらってくると、糟汁(かすじる)を作ってくれたし、甘味こそうすいが、しるこを持ってきてくれた。

　次郎吉は、一日のうち、何回となくおちかの房の前へいく。おちかは、次郎吉の足音を聞いただけで、格子の柵へ体を近づける。

　はたから見ていたら、ひどくなごやかな光景に映るだろう。男は、非人の小頭、女は飯盛女、その二人が、子どものようにむつみ合っているからだ。

「俺の見張りは、あしたで終わりだ」

「あんたが見えなくなったら、あたしゃ、舌を噛んで死ぬかもしれないよ」

「おめえにゃ、種屋の栄三郎といういい人がいるんじゃねえのか」

「皮肉かい……そりゃね、会いたいさ。会って見舞の一言もいってやりたいよ」

「だったら、俺に対する惚れ言葉……ありゃ嘘ってわけだね」

「女ってもんは、遠くはなれている男より、眼の前にいる男に、惚れるもんさ」

「現金なもんだな」

「だって、男の匂いがむんむんするんだもの。あたしは、生きてるんだからね」

「そういうもんかな」

「見張りさん、ちょっと耳を貸しておくれな」

　おちかが、急に声を沈めた。次郎吉は、柵へ近よると、耳を隙間に押しつけた。

「今夜は、お風呂へはいれるんだろう。そしたら……」

　おちかの生あたたかい息が、耳朶をくすぐった。次郎吉は、ぶるっと体をふるわせた。

「そうだ。湯にはいれる」

「そしたら、林の中へ連れてって、おくれな。あたしは、罪もないのに、溜に入れられたけど、あんたに抱かれたら、幾日だって、おとなしく、はいってるから……」

「そ、そんなこたあ、いけねえ」

「だって、七兵衛さんは、小屋もんのおかみさんを抱こうとしたじゃないか」

「それとこれとは、話がちがう」

　おちかが、隙間から手をのばすと、次郎吉の手をつかんだ。びっくりするような力で、柵の内側へ手を引き入れると、手の甲に歯を当て、軽く噛んだ。

　次郎吉の全身に、稲妻が走った。

　代々木村の久兵衛の溜では、三日に一度の割合で、湯に入れてやることになっている。溜の中に、風呂があるわけではないから、小屋に住む者が、五戸で一つの割合で使っている風呂へ入れるしきたりがあった。

　次郎吉は、おちかをどこの湯に入れるか、頭をなやましていた。おそらく、小屋中の男たちが、おちかの裸を見にくると思われた。

　まず、こうした連中を追い払わねばならない。第二の難問は、七兵衛の眼だった。女の科人(とがにん)が、溜にいると、七兵衛は、必ず、役目をかさに着て、見張りにくる。過去になんどか、そうした例があった。

　次郎吉は、おちかに手を噛まれながら、七兵衛の眼を考えていた。

「次郎吉さん、おねがい。なんとか仲間の者を手なずけ、あたしを人目につかないところへ、連れていっておくれな」

「そいつは、できるこっちゃねえよ」

「冷たいんだね」

「掟があるんだ。俺が、冷てえんじゃねえ」

　そのとき、喜八が、声をかけた。

「小屋もんの男と女の、くっつきはっつきは、よくある話だ。娑婆(しゃば)の人間を相手にできないから、自然にそうなる。だったら、湯にへえったら、着替えるとき、非人のかみさんの着物をきせ、こっそり暗がりへへえりこんだら、どんなもんだ」

　おちかが、

「そりゃいい考えだね。あたしゃ、次郎吉さんと抱き合えるなら、どんな臭(くさ)い着物でもきるよ」

と、はずんだ声で答えた。

「おめえ、そんなに俺に抱かれてえのか」

「いのちがけなんだよ」

「まさか、逃げるつもりじゃねえだろうな」

　おちかが、急にわめき声をあげた。

「あたしは、あんたに惚れたんだよ。あたしがずらかれば、見張り番の次郎吉さんが、どんなおとがめを受けるか……それくらいのことはわかってますよ。あたしを信用しないなんて、口惜しいったらありゃしないよ」

「よし、信用する」

「じゃあ、抱いてくれるね」

「そんとき勝負だ」

「みんなの眼をごまかせたら、抱いてくれるんだね」

「そう、なるかもしれねえ」
次郎吉は、柵の前を離れた。
入口の扉を開け、外の様子をうかがった。又三らしい男が、走り寄ってきた。
「小頭、溜の連中の風呂……どこにしやす」
又三が、大声で聞いた。次郎吉は、又三の口元に手を当て、大声を制した。
「今夜の風呂、小屋頭がのぞきにくる。この眼をふさがにゃならねえ。うめえ手だてを考えろ。けどな、野郎を眠らせるのは今夜じゃねえ。びっこの熊吉が見張りの夜だ」
次郎吉は、又三の耳に口をあてがい、声を沈めた。

夜になった。
又三が、風呂が沸いた――と言って迎えにきた。次郎吉は、房の鍵をあけ、喜八とおちかを出した。おちかが、次郎吉の胸にしがみついた。
「いけねえ。まだ早い。よさねえか」
次郎吉は、おちかの体を離した。が、次郎吉は、着物をとおして、女のやわ肌を感じとり、体の芯にうずきが走るのを自覚した。
おちかは、外へ出ると次郎吉の手を握った。次郎吉は、あたりに眼を配った。七兵衛の眼を怖れたからだ。二人の前を、又三と喜八が歩いた。とっぷり昏れた山麓は、星一つなく、真っ暗だった。
「なんとか、二人っきりになれるようにしておくれな」
と、おちかが声を沈めた。
「わかった。俺もそのつもりだ」
次郎吉は、おちかの耳もとへ、ふるえ声で答えた。
小屋のうしろへ来た。
風呂は、伝七の小屋の横にできていた。まわりに茣蓙で囲いができている。溜の中の科人が男ばかりのときは、野天風呂で湯に入れる。が、女がいるので囲いをこしらえたのである。
次郎吉は、おちかと喜八を、いったん伝七の小屋に入れた。女房のおさんが、次郎吉に破れ座布団をすすめた。
次郎吉は、それにすわると、喜八に向かい、
「じいさん、先にへえろ」
と声をかけた。喜八が、おちかに向かい、
「すまねえ。なるべくよごさねえようにへえるからな」
と、おちかに言うと、着物を脱ぎ捨て、囲いの中へは

いった。伝七の女房が、お茶を淹れてくれた。
「すまねえが、科人にも淹れてやってくれ」
次郎吉が言った。
おさんが、心得顔で、二、三回、まばたきをした。そして、
「気のつかんことしました」
と言って、おちかにお茶を出した。
「小頭、小屋のまわりにゃ、又三をはじめ、七、八人の者が、見張りをしていやす。小屋頭の姿が見えたら、誰かが、口笛を吹くことになってやす」
と、伝七が低い声で言った。
次郎吉は、体を堅くしながら、お茶を飲んだ。おちかが、両手で欠け茶碗をささげ、口を当てた。
「なんだか、あたしも小屋に住みたくなったよ。人情が、じいんとひびいてくるからね」
おちかが、声を落とした。
「ありがてえことだ」
次郎吉は、おちかを眼の端に入れた。
喜八が、素っ裸で風呂から上がってきた。次郎吉は、眼でおちかをうながした。おちかが、着物を脱ぎ捨てた。
おちかが手拭で前を押え、次郎吉を眺め、ちらりと歯を見せた。雪肌が、にぶい行灯の光に、陶器のような光沢を放った。次郎吉は、思わず眼をそむけた。
おちかが、囲いの中にはいった。
そのとき、外の暗がりで、口笛が鳴った。次郎吉は、拳固を握ると立ち上がった。
「小屋頭いけねえ」
「科人が湯を使うときは、まちがいがある。見聞だ」
七兵衛の声だ。
「だって、女が湯にへえってるところだ」
「だから、見まわらなきゃなんねえ」
「次郎吉小頭が、見張ってますぜ」
「彼奴は若い。まちげえがあっちゃいけねえからな」
足音が近よった。
次郎吉は、外へとび出した。七兵衛が歩みよってきた。次郎吉は、その前に立ちはだかった。
「小屋頭の見聞だ」
「なんのためだ」
「相手は、若い女だ」
「ごらんのとおり、厳重に見張りをしている」
「俺は、役目だ」

七兵衛が、次郎吉を押しのけた。次郎吉は、不意をつかれてよろめいた。そのとき、七、八人の者が、二人の間へ走りこみ、人垣をつくった。
人垣が、前へすすむ。七兵衛が、後ずさりをはじめる。彼らは、無言で、歩をすすめる。七兵衛は、小屋の表側へ後退する。
「邪魔する気か」
七兵衛がわめいた。
人垣は二列横隊となって、七兵衛を追い払った。
「てめえたちは、なんてことをしやがる。俺は、小屋頭だ」
と、七兵衛のダミ声が、夜のしじまにこだました。
「人の女房を手ごめにするような奴は、小屋頭じゃねえ」
「お頭に願い出るぜ」
「お頭のおとがめは怖いよ」
と、人垣が怒鳴った。
七兵衛は、向きを変えると、闇の中に姿を没した。喚声が上がった。
次郎吉は、七兵衛の姿が、見えなくなるまで、眼で追いかけていた。囲いの中で、湯を使う音がしている。彼は、おちかの裸を、眼底に思い浮かべ、ぶるっと身ぶるいをした。
おちかが、風呂から出てきた。
次郎吉は、自分の体で、かばうようにしながら、小屋の中へ入れた。伝七の女房が、自分の着物を、おちかの肩にかけた。
「さ、これを着ておくれ。これなら、小屋頭の眼をごまかせるからね。あんたの着物は、後で、溜の中へ入れとくから」
女房が、そう言って、おちかに着物をきせた。おちかの眼が、うなずいた。
次郎吉が、先に立って歩いた。
すぐ後から、おちかが尾いてきた。その後ろから、伝七が喜八を中にして、五、六人が人垣をこしらえ、遠巻きにしてついて行った。
空は、重く垂れこめ、おぼろの月も、森陰にかくれた。微風が、次郎吉の頬をなぶる。溜の前まできた。次郎吉は、七兵衛の家を睨んだ。明りがほのかに洩れている。喜八を中に入れ、鍵をかけた。おちかが寄り添ってきた。次郎吉は、溜の横手へまわった。人垣が、七兵衛をふさぐように、二人を中へ包んだ。

溜の裏へ出た。
山裾へ歩度をのばした。人垣は、向きを変えた。次郎吉は、雑木林の中へ体を入れた。おちかが、次郎吉の胴へ腕をまわしながら、
「さ、早く」
と、詰まった声をだした。
二人は、萌えだしたばかりの草の上に倒れた。
静かないとなみがはじまった。たがいに息を詰め、たかぶりをしずめながら、しかも、体の芯に、火のような気持ちを燃えあがらせた。次郎吉にとって、初めての女ではなかったが、おちかとの行為は、忘れがたい刻印をきざみこんだ。
二人は、林の外へ出た。
人垣は、消えていて、おぼろ月が中天にかすんでいた。次郎吉は、おちかと手をからませながら、溜へ向かった。
溜の陰から、人影が浮かび上がった。姿形から、七兵衛とすぐわかった。次郎吉の胸がふるえた。
〈あそこで見ていやがった。ずるい奴だ。どうする？〉
七兵衛が、次郎吉の前に立ちはだかった。
「どこへ行っていた」
七兵衛の鋭い声が、闇の中を突っ走った。
「小便たれに林の中に寄ったんだ」
次郎吉は、尖った答え方をした。
「小便たれるのに、科人の女を連れていく必要があるんか」
「俺の役目だ。風呂がすんだんで、溜へ戻さにゃいけねえ役目だ」
「小便は、どこでもできるぜ」
「俺は、どこでもいいってわけにゃいかねえ」
「女を抱くにゃ、人目があるからな」
七兵衛が、うふふと喉を鳴らした。
「ご免なすって……さ、行くぞ」
次郎吉は、おちかをうながした。
七兵衛が、歩き出そうとするおちかの手をつかんだ。
おちかが、
「あッ」
と、短い叫び声を上げた。
次郎吉は、いきなり、手刀で七兵衛の手首を叩いた。
七兵衛が、
「何をしやがる」
と言って、次郎吉の頬を、拳固で殴りつけた。

次郎吉は、火の出るような痛みを感じながら、七兵衛の向こう脛を蹴った。七兵衛が、のけぞり倒れた。

四　消えた男

次郎吉の見張り番があけ、びっこの熊吉と交代した。が、次郎吉は、夜の見張りを怠るわけにはいかなかった。いつなんどき、七兵衛がおちかの体を盗みにくるか、わからなかったからだ。

彼は、ひそかに喜八に、房の鍵を渡し、

「おやじ、万一のときは頼むぜ」

と頼んでおいた。

熊吉が、

「小頭、俺は片輪もんだ。いつ小屋頭が、やってくるかわからねえ。心配なもんだから、喜八のじいさんに、匕首をあずけておきやしたよ」

と言った。

次郎吉は、とっさに、その是非に迷った。溜の中へ入れるとき、身体検査をやって、刃物はいっさい持たせないことになっていた。喜八は、鍵を持っているから、いつでも出られるし、匕首を持っていれば、いつでも殺傷ができる。それがいいのか、わるいのか――。

「俺は、聞かなかったことにするぜ――」

と言って、溜をはなれた。

が、五、六歩行きすぎてから、溜の横手へまわり、おちかの房と思われる羽目板へ体を寄せた。羽目板は分厚くできているので、中の気配は、何もひびいてこない。

彼は、とんとんと板を叩いた。

おちかが、近寄ってきたようだ。

「俺だ、次郎吉だ」

「音だけで、お前さんてことがわかったよ」

「おめえが、忘れられなくなった」

「あたしも、おんなじ思いさ」

「会いてえと思うが、しばらくの辛抱だ」

「辛抱していれば、どうなるんだね」

「七兵衛がやってくる。そんときが勝負だ」

「あたしゃ、手ごめになるのはいやだよ」

「あたりまえだ。そんなこたあさせねえ」

「じゃあ、どうなるんだね」

「俺にも、よくわからねえ。けど、うまくゆくかもしれねえ」

「彼奴を、眠らせるんだね」

「それができるかできねえか。そんときの運だ」

「危ない橋をわたるのは、慣れてるけど、まちがいなく、勝つようにしておくれな」

「俺もそのつもりだ。勝たにゃ、おめえと一緒になるわけにゃいかねえ」

「まあ、あたしと、一緒に……そうなの。こんなうれしいことはないよ」

おちかが、はげしく羽目板を叩いた。

次郎吉は、そのひびきを頬を押しつけて、感じとった。林の中の、わずかな時間の接合だったが、その思い出が、よみがえってきた。大きく溜息を吐き、身ぶるいをした。

「俺は、おちかさんと一緒になれるなら、人殺しでもなんでもやるぜ」

「あたしは、あんたと夫婦になれるなら、非人小屋のかみさんになってもかまやしないよ」

おちかの体温が、羽目板を通して伝わってくるような気がした。

次郎吉は、その夜から、溜の役目外の見張りをはじめた。小屋の者も、次郎吉の気持ちを知って、交代で、見張りを買って出てくれた。

次郎吉は、二人ずつ組をつくり、一刻（二時間）ずつ、三交代制にし、二人が溜の外側を見張っている間、他の二組は、仮眠をとるようにした。

びっこの熊吉が、見張り番になった最初の夜は、なんの異変もなかった。

翌朝、次郎吉は、非人頭の久兵衛の家へ呼び出された。溜から、一町ほど東へ寄った山裾に、久兵衛の家があった。

広い土間の奥に、囲炉裏のある部屋があって、久兵衛が、分厚い座布団にあぐらをかいていた。

次郎吉は、その前にすわると頭を下げた。

「七兵衛から差し口があった。おめえは、溜の女と、体の関係を結んだというが、本当かい」

久兵衛の声が重く沈んだ。

「そんなこたあ、できません」

「まちげえねえ話だな」

「掟を破ることはできません」

「そうか……それならそれでいい。次郎吉、わしは、このごろ、七兵衛を小屋頭にしたこと、まちがっておったと思うようになった。どうも、小屋内がさわがしくていけねえ」

「私が、いたらぬからで……」
「七兵衛が、伝七、又三たち三人の女房を、手ごめにしたって話、本当かい」
「何か、差し口でもあったんですか」
「女房三人がそろって、訴えてきたんだ」
「まちがいありません。小屋の者は、七兵衛を殺すといきりたっています」
「そうか……」
久兵衛が、腕を組んだ。
次郎吉は、顔を上げ、その顔を仰いだ。鬢にちらほらと白毛が見え、深く皺をきざんだ顔は、おのずから上の御用をうけたまわる品格がそなわっている。次郎吉は、その顔を実の父親のように思い、見守っていた。
「彼奴は、眠ってもらったほうが、小屋の平穏のためになるかもしれねえ」
久兵衛が、聞きとれぬくらいの細い声で、ひとり言をつぶやいた。
次郎吉は、
「お頭、できるだけ、小屋内に波風の立たねえように、気をつけます」
と言って、外へ出た。
お頭のひとり言を、なんと解釈したらいいんだ。七兵衛を殺せ——という意味にもとれる。それとも、単なるつぶやきだったのだろうか。いずれにしても、お頭が、七兵衛をきらっていることだけは、まちがいない——。
次郎吉の胸に、勇気がふくらんできた。
小屋へ帰ると、伝七以下の連中に、お頭の考えを、耳打ちした。この耳打ちが、たちまち、三十六人の非人たちに伝わった。
夜になった。小雨がふり出してきた。
煙のような雨が、山裾を襲い闇の中に包んだ。その暗がりの中に、ぼうっと灯がともっている。
非人小屋の集団からはなれた溜の灯である。その灯を遠巻きに、多くの者の眼が光っていた。
三十六人の者が、地を這いながら、溜をめがけてすすみ、三十間ほどの距離まで近づいたとき、彼らの動きが止まった。地のくぼみ、樹木の陰、石塊のかげに体がかくれ、ぼうぼうと細雨のけむるただ中に、溜の灯が、明滅している。
次郎吉は、七兵衛の家の羽目板に、体を守宮のように寄せ、家の中を窺っていた。〈七兵衛が出てくる。きっと出てくる。出てきたら、奴は、二度とこの家へ戻れな

い。あとは、おちかの放免を待てばいい〉
次郎吉の眼が、溜の灯を睨んだ。
おちかのやわ肌が、思い出された。雑木林の中の、息詰まるような一瞬が、眼底に浮かんできた。次郎吉は、
「おちか」
と小さな声で、名を呼んだ。
そのとき、七兵衛の家の暗い裏口から、黒々と人影が浮かび上がった。影が、音もたてず、次郎吉の背後に忍び寄った。
次郎吉は、いきなり堅い棒で後頭部を殴られた。頭蓋骨が割れたような感じがして、眼から火が出た。次郎吉は、それきり気を失ってしまった。
気がついたときは、伝七の小屋の中だった。むしろの上に寝かされ、頭に白い布を巻きつけられ、多勢の顔が、覗きこんでいた。
「俺は、いったいどうしたんだ」
次郎吉が、喉にからんだ声で聞いた。
「七兵衛に、樫の心張り棒で殴られたんだ」
と、伝七が言った。
次郎吉は、七兵衛の家の羽目板にへばりついていたときから、どのくらいの時間が経っているか、わからなかった。が、外にきらきらと朝の陽ざしが当たっているので、夜が明けていることがわかった。
「おちかは、どうした? 七兵衛は、どうなったんだ」
次郎吉は、うわずった聞き方をした。
「おちかは逃げた」
と、伝七が言った。
次郎吉は、
「なんだと……」
と声を詰まらせ、上体を起こした。女たちが、次郎吉の体をささえた。
「七兵衛は、どうした」
「あの世へ、行っちまった」
「眠らしたのか」
「自然に、眠りやがった」
「おちかが、殺ったのか」
「そいつがわからねえんで……とにかく野郎は、死んじまったんだ」
伝七の声が、かすれてきた。次郎吉は、まわりにいる七、八人の顔を順々に眺めた。
伝七が語った経過は、次のとおりだ。

　伝七と次郎吉は、十分な打合わせをとげた。暮れ六つ（午後六時）の鐘を合図に、全員が警戒体制にはいる。三十六人の眼が、いっせいに七兵衛の家を見守る。
　初夜の鐘（八時）が鳴ると、全員が、溜をめがけて、暗がりの中を這いすすむ。扇形に、横の列を組み、闇の底を、一寸きざみに、溜へ近づく。次郎吉は、七兵衛の家の羽目板に体をつけ、出てくるのを待つ。出てきたら、隊列の前方をめがけて、小石を投げる。
　彼らは、その合図によって、七兵衛の姿を待つ。七兵衛が、溜に近づくと、見張りの熊吉が扉を開ける。三十六人が、溜を取りまき、七兵衛の退路を断つ。
　七兵衛が、中へはいる。合鍵で房を開けようとする。鍵がちがうから、房の柵が開かない。もたもたしているとき、五、六人が中へおどりこみ。七兵衛を殺す――というのが、計画だった。
　ところが、まず、次郎吉が不意を襲われ、気を失った。伝七たちは、小石の合図がないので、じっと地に這いつくばっていた。しばらくすると、溜の扉が開いた。
　熊吉が、
「小屋頭ッ」
　と、短く叫んだ。まもなく扉が閉まった。が、その声を、伝七は、
「小頭ッ」
　と、聞きちがえた。つまり、次郎吉が、溜へはいったものと、思ったのだ。
　仲間の何人かが、首を上げた。伝七が、上体を起こし、右手を上げ、伏せろ――と合図した。しばらくすると、溜の中の灯が消え、一人の影が外へ出てきた。
　まもなく、溜の中から、異様な叫び声が聞こえ、もう一人の黒影が、走り出て、山裾へ走った。伝七は、三人の者に命じ、山裾へ走った影を追わした。
　伝七は、溜へすすんだ。熊吉が、暗がりの中でしゃがみこんでいた。
「七兵衛が中にいる」
　と、ふるえ声を出した。
　伝七は、五、六人と一緒に中へ走りこんだ。房の前の通路に、人が倒れていた。おちかの房の扉が開いていて、血の臭いがした。熊吉を呼び入れ、行灯に灯をつけさせた。
　手前の房の中に、喜八が、鼾を立てて寝ていた。七兵衛は、心臓のあたりを匕首で刺され、死んでいた。
　伝七が、以上の経過を、かいつまんで説明した。

　次郎吉は、草履をつっかけると、外へ走った。頭が、ふらふらして、眼まいがした。伝七ら四、五人が後を追ってきた。
「おちか、おちか」
　と、次郎吉は、なんども名前を口にした。喉が乾き、息が切れてきた。
　溜へ着いた。
　熊吉が扉を開けた。中へとびこんだ。中廊下を見た。七兵衛の死体はなかった。
「七兵衛の死骸は、どうした」
　と、次郎吉が、怒鳴った。
「たしかに、ここにあったはずだ」
　伝七が、うわずった声で答えた。次郎吉は、おちかのいた房の中を覗いた。柵の扉が開いていて、その人の姿はなかった。
　彼は、喜八の房の前に立った。喜八が、薄目をあけ、
「お早ようさん」
　と、あいさつした。
「じいさん、ほんとのこと聞かしてくれ」
「人払い、ねがいてえな」
　と言って、喜八が破れ布団から這い出し、格子戸の前で、あぐらをかいた。次郎吉は、びっこの熊吉や、伝七たちに、顎をしゃくり、外へ出ろ――と合図した。数人の者が、黙って外へ出た。扉が閉まった。
「七兵衛は、俺が殺った。ゆんべ、予想どおり、おちかのところへやってきやがった。見張りの熊吉に、外を見張ってろ――といいつけた。熊吉が外へ出ると、野郎は、おちかの房の鍵を開けようとしやがった。おちかが、助けておくれ――と大声で叫んだ」
　次郎吉は、しゃがみこむと、格子の隙間から、喜八の顔をみつめた。
「俺は、そっと合鍵で開け、外へ出ると、足音を忍んで、七兵衛に近づいた。野郎は、がちゃがちゃと、鍵を合わせていやがった。俺は、匕首を抜き、野郎の背中から、有無をいわさず突き刺した。七兵衛が、のけぞって倒れた。俺は、野郎の胸板めがけて、思いきりとどめを刺した」
　喜八が、他人ごとのように、静かに語った。次郎吉は、息を詰め、生唾を飲みこんだ。
「おちかは、どうした」
「俺は、房の扉を開けてやった。後は、俺が引き受けるから、逃げろ――と言ってやった。おちかは、次郎吉さ

んに会いたいと言ったが、おめえさんの逃げるところだけを聞かしてくれ、俺が、きっと次郎吉さんに知らせると言ってやった」
「おちかの行き先は？」
「四谷左門丁の弁蔵親分を、頼って行く――と言って、出て行ったよ」
「なぜ、逃がしたんだ」
「七兵衛が、おちかを盗んで、姿をくらましたことにすりゃ、おちかに罪はねえ――と思ったからだ」
「七兵衛の死体は？」
「俺が、裏山へ引きずって行った。びっこの熊吉に、手伝わせ、雑木林の中に、溜の心張り棒で穴を掘って、埋めてある。その上に、でっけえ石をのせておいた。熊吉が、しゃべらなけりゃ、七兵衛は、おちかを盗んで、姿をくらましたことになる」
次郎吉は、
「じいさん、ごくろうだった。が、今の話、誰にも言うんじゃねえぞ」
と、念を押した。
「しゃべったら、俺の首がとぶよ」
喜八が、しわがれた声で笑った。

五　女の行方

次郎吉は、お頭久兵衛に、事の次第を報告した。
「どうやら、七兵衛が、おちかをさらってずらかったようです。溜の房の中で、喜八が見ていました。いやがるおちかを、小屋頭は、むりやりに抱え、雨の暗がりの中へ消えちまった――と申しております」
久兵衛の眼が光った。
次郎吉の表情を、じっと見据えていたが、
「どうやら、筋書どおり運んだようだな」
と、重い声を沈ませた。
「筋書――と申しますと」
「七兵衛を消す段取りだ」
次郎吉は、久兵衛の顔を正視できず、眼を伏せた。
「申しわけありません」
次郎吉は、口元をわななかせた。久兵衛が、真相を見抜いていると思われたからだ。
「次郎吉、七兵衛は、永久に現われることあねえのだな」
「へえ……」
「あとは、おちかだ。俺の眼力じゃ、あの女には、罪は

ねえようだ」
「なんの罪です」
「七兵衛殺しだ」
次郎吉は、いきなり脳天を鉄槌で殴られたような気がした。
「小屋頭は、ずらかりましたんで……」
「俺の眼は、フシ穴じゃねえ。さ、言ってみろ。誰が、七兵衛を眠らしたんだ」
「へえ、申しわけありません」
次郎吉は、額を畳にすりつけた。
「おめえが、下手人だと言うのか」
「へえ、あっしが……」
「次郎吉、嘘をついちゃいけねえ。真実は、こうだと、なぜ言えねえんだ。代々木村の久兵衛は、何もかも見通しだ。さ、言ってみろ。下手人は誰だ」
その声が、重くのしかかってきた。
「溜の中にいる喜八なんで……小屋頭が、おちかの体を盗みにきたんで、喜八が……」
「見張りは誰だ」
「びっこの熊吉でした」
「七兵衛の死体は？」
「裏山へ、喜八と熊吉が、葬りました」
「おちかは……」
「喜八に、左門丁の弁蔵親分を頼っていく――と言い置いていきましたんで……」
久兵衛が、腕を組んで考えこんだ。
「次郎吉、種問屋武蔵屋のつけ火の一件……この下手人が、飯盛女のおちかということになると、もう一度、溜へ戻ってもらわにゃならねえ。それでねえと、火付盗賊改めの中根の旦那に顔向けができねえことになる。おめえ、ごくろうだが、つけ火の一件を探ってくれ」
久兵衛が、語尾に力を入れた。次郎吉は、
「承知しました」
と、詰まった声で答えた。
「おちかの一件が、片づいたら、おめえを小屋頭に昇格させるぜ」
久兵衛が、さりげなく言った。
次郎吉は、何か言おうとしたが、声にはならなかった。〈小屋頭になりゃ、髷が結える。そして、おちかと一緒になったら、これ以上の幸せはない〉と、自分の心に言い聞かせた。
次郎吉は、千駄ケ谷仲丁の種屋のつけ火を調べはじめ

た。調べるといっても、非人は、権力を持っていない。十手を預かっているわけではないから、非人の門回りをやり、あるいは、小屋内の者を使って、情報を集めるくらいが関の山だ。

　千駄ケ谷仲丁は、四谷左門丁から大番丁をぬけ、田圃道を、四、五町すすんだ一帯の部落を言う。この時代、千駄ケ谷は村で、仲丁は字の呼称だったようだ。

　それでも、部落の中央、十字路の付近には、農鍛冶、雑貨屋、酒屋などが、十軒余りならんでいる。そのはずれに、種問屋の大きな店構えが、ひときわ目立っていた。

　平家建で、間口が六間もあり、店は平土間になっていて、畳敷の上がり框ができている。土間の左手には、引出しのある棚があり、各種の種が入れてある。

　店員が、五、六人いて、客に応対し、帳場には、番頭清兵衛がすわっていた。

　次郎吉は、半刻（一時間）も前から、武蔵屋の前通りを、竹箒を持って掃いていた。この付近は、代々木の久兵衛の縄張りで、非人の門づけ、道路掃除などを担当している。

　次郎吉は、頭から手拭で頰冠りをして、汚れた棒縞の着物の尻をはしょり、脛をむき出しにして、藁草履をはき、箒の手を休めながら、ときどき、店の中をのぞく。

　十五、六の小僧が出てきた。

「ごくろうさん」

　と言って、次郎吉に波銭五枚を握らせた。

　次郎吉は、小僧と顔見知りだった。

「ありがとうさんです。若旦那の怪我は、いかがです」

「今日、明日が山だよ」

「いのちが危ねえんで」

「そうだよ」

「死んだら、お店は、どうなるんで」

「大番頭さんがやんのさ」

　小僧が、店の中へ引っ込んだ。

　次郎吉は、店の裏手へまわった。店から、裏の母家へ、渡り廊下がつづいている。が、母屋は、丸焼けで、焼けた残骸が、朝の陽光をうけていた。

　次郎吉は、焼跡に眼を注ぎ、おちかの面影を、思い出していた。

「栄三郎は、やけどのため、今日、明日のいのち」

　と、ひとり言を洩らした。

　そのとき、焼跡の中ほどから、むっくり起き上がった

男がいた。

　小柄で、鼻梁のつぶれた顔を見たとき、次郎吉は、ほっとした思いを抱いた。四谷左門丁の弁蔵親分の手先、平六とわかったからだ。

　次郎吉は、頰冠りを取ると、頭を下げ、

「ごくろうさんです。あっしは、掃除を頼まれまして……」

　と、あいさつをした。

　平六が、口元をゆるめ、そばへ寄ってくると、

「尾いてこい」

　と短く声をかけ、歩き出した。焼跡から一町ほど離れたところに、八幡神社の森があった。鳩森八幡である。

　平六が、松の木の下の石に腰をおろした。

　次郎吉は、その前の草の上に、膝をついて腰をおろした。

「ちょうどいいとこで、おめえに会った。内藤新宿の飯盛女おちか……弁蔵親分とこへ駆けこんできたんだ」

「へえ……」

「おちかのおふくろと、親分のおかみさんとは幼なじみだ。武蔵屋の火つけは、おちかじゃねえ――と、親分に泣きついた。けどな、火付盗賊改めの中根の旦那が、代々木の久兵衛さんに、おちかの身柄を預けた。火つけをしたと、疑いがあるからだ」

「で、おちかは、今、親分の家に……」

「内証の話だが、かくまってある。早えとこ調べをつけねえと、溜の科人を逃がした罪を、久兵衛さんが、かぶらにゃなんねえ」

「それで、あっしも……」

「そうだろうと見当をつけたぜ。俺が今、調べていたのは、武蔵屋の銭箱だ。分厚い樫の木でできている高さ二尺、横一尺のもんだ。金貨と銀がへえってたはずだと、栄三郎から聞いたんで、焼けた銭箱の中身を調べていたんだが……」

「で、金と銀は……」

「それが、一枚も見あたらねえんだ。栄三郎が、苦しい息の下から言うにゃ、まちげえなく三百両はへえっていたというんだ」

「それがないということは、誰かが……」

「そうだ。焼けてから、焼跡から持ち出したのか、焼ける前に、盗み出していたのか――弁蔵親分が言うにゃ、それで、つけ火の犯人がわかる――と言った」

「すると、原宿の喜八がすり取ったという十両……栄三

郎さんが、内藤新宿で、被害に会ったという話……これは、どうなるんで」
「十両の一件は、どうやら眉唾もんらしい。栄三郎は、番頭が、十両の金銀がなくなったとわめいたので、すりにやられたと出まかせをしゃべった——というんだ。ところが、本当は、すりに会っちゃいねえ」
「すると、十両も誰かが盗んだとなるんで」
「そうなるな。おめえ、すまねえが、夜になったら、武蔵屋の店へ忍びこんで、母屋から消えた金貨と銀貨を盗み出してもらいてえ」
平六が、顎を突き出し、声を沈めた。
次郎吉は、息を詰め、体を堅くした。
「つまり、三百両の金が、焼けているか、焼けない前に、運び出されているか……それを調べるためだ」
次郎吉は、
「あっしが泥棒をするんで」
と声をふるわせた。
「おやまの次郎吉……何も怖がるこたあねえよ。盗っ人といっても、鳴海屋の手下が、武蔵屋の店を取りまいて見張りをしてるんだ。万一のことがありゃ、俺たちがすぐとびこんでいく」
「わかりやした」
「まさか、弁蔵親分の手下が、盗っ人の真似はできねえ。聞けば、おめえは、おちかと深けえ仲のようだな。おちかは、親分に、次郎吉さんと会わしてくれ——と、せがんでいるぜ。武蔵屋のつけ火が、おちかじゃねえってことになりゃ、晴れて夫婦になることもできるってわけだ」
平六が、喉を鳴らした。
「武蔵屋の店の、どこに三百両がしまい込んであるんで……」
「そいつはわからねえ。けど、店の間取りだけは、調べてある。これだ」
平六が、ふところから、墨で書いた絵図をとり出し、ひろげてみせた。
店は、間口六間で奥行十間で、平土間の左の奥へ、のれんのかかっている通路がある。その奥が、台所と板の間。板の間の右手が、十畳の店員の居間。その裏が、壁をへだてて番頭清兵衛の部屋、左隣が六畳の女中部屋、廊下をはさんで、厠と風呂場となっていた。
「三百両は、この家の中の、どこかにあるってわけですね」

「そうだ。おめえは、非人だが、足洗いになる見込みがある。久兵衛さんが、そう言っていたぜ。もし、つけ火の一件で、手柄をたてりゃ、それも早えんじゃねえか」
次郎吉は〝足洗い〟と聞いて、ぎくりとした。非人は、もともと窮民だが、資力さえできれば、いつまでも非人にしておくわけにはいかないので、良民に立ち戻らせる制度となっていた。
心中の仕損いとか、不義密通というような事の末に、非人に落ちた者が、親戚知人から入用金を出してもらい、良民に復帰させるのが足洗いなのだ。
代々木の非人小屋でも、二年に一度ぐらいは、足洗いをする者があった。新しい着物をこしらえ、あたりに塩を撒いて清め、大だらいに湯を入れ、総身を清め、髷を結ってもらい、小屋者が土下座する間を通って、出ていくのだ。
非人なら、誰でも持っている夢だ。その夢が、実現できると思うと、次郎吉の全身に、血がたぎりたってきた。
「今夜から、仕事にかかりやす」
と、彼は、声をふるわせた。
次郎吉は、いったん小屋へ戻ると、久兵衛に、すべてを報告した。
「そうか。だがな、武蔵屋栄三郎は、一刻ほど前に死んだ。かわいそうなことをした。今、小屋の者が、五人ばかり、栄三郎の叔父にあたる家へ、手伝いに出かけた。大やけどがもとだった」
久兵衛の表情が、暗然としてきた。
「さいですか……」
次郎吉は、一瞬、胸を詰まらせたが、反面、おちかのことを考え、〈俺と夫婦になる状況になってきた〉と思った。
「左門丁の親分は、ものわかりのいい人で、情けもある。しっかりやるんだな。非人にとって、お上の御用の助けをするってことは、晴れがましいこった」
「あっしは、まだ、盗っ人だけは、やったことがねえんで……」
「盗っ人といったところで、ほんまの泥棒じゃねえ。いずれ、わしのほうから、鳴海屋さんにあいさつに出向いておくよ」
久兵衛が、そう言って微笑を浮かべた。
次郎吉は、ていねいにあいさつすると、外へ出た。足は、おのずから溜へ向いた。扉の隙間から、びっこの熊吉が覗いていて、すばやく次郎吉を中へ入れてくれた。

喜八は房の前にしゃがみこんだ。
「じいさん……なんともねえか」
七兵衛を殺した後の、心境をたずねたのだ。喜八が、皺だらけの顔をゆるめた。
「俺は、この年になるまで、他人さまのためになることあ、なんにもしなかったが、こんどばかりは、さっぱりしたよ」
「そうかい。七兵衛の面が、小屋内から消えたんで、誰も彼も、のびのびとおのれのなりわいに精を出すことができた。恩に着ているぜ」
「そこで、俺の放免は、どうなるんだね」
「二、三日でらちがあきそうだ」
次郎吉は、格子の隙間へ顔を寄せ、武蔵屋へ忍び込む手はずをしゃべった。
「なるほど……さすがは、弁蔵親分だけのことはある。ところで、その三百両、どこにあるか見当はついてるのかね」
「皆目、わからねえよ」
喜八が、腕を組んで考えこんだ。すりも盗っ人のうちだ。泥棒の勘で、どこにしまいこんであるか――を考えているようだ。
「まず第一に頭に浮かぶのは、縁の下だな。それも、清兵衛の部屋の畳の下だ。縁の下になかったら、天井裏だな」
「それでも、なかったら……」
次郎吉は、思わず格子をつかんだ。
「それでもなかったら、台所の水瓶の中だ」
「そこにもないときは……」
「最後は、厠だ。たれこみ穴から、手を入れてさぐってみる。皮袋がぶら下がってるぜ」
喜八が、眼を光らせながら言った。

六　代々木の春

初夜の鐘が鳴った。
次郎吉は、八幡神社の森の中で、鐘の音を聞いた。木下闇の中で、木株に腰をおろし、耳をとぎすませた。足音が近づいた。
背の低い黒影が、
「次郎吉か」
と声をかけた。
「へえ、次郎吉で……」

平六が、そばへ寄ってきた。次郎吉の耳もとに口を寄せ、
「あと半刻したら、ここを出ろ。五つ半（九時）に、見張りがそろうぜ。武蔵屋の焼跡に潜んでいろ。俺が、口笛を吹く。そしたら、忍びこめ」
と言った。
次郎吉は、答えず頷いた。平六が、足早に去って行った。その姿が、見えなくなると、彼は、また腰をおろした。闇が、色濃くあたりを包んでいる。高い木の梢で、夜鳥が鳴いた。
〈縁の下、天井裏、水瓶の中、糞溜の中〉
次郎吉は、なんども、低い声でつぶやいた。乞食をしていても、他人の物を盗んだことはなかった。お上の言いつけとはいえ、泥棒することはいやだった。
次郎吉は、盗みの場面を、あれこれ考え、動悸の高鳴りをおぼえた。半刻ほどの時間がすぎた。
彼は森から出て行った。幅二間ほどの道が、まっすぐつづいている。風が出てきた。武蔵屋の焼跡へ着いた。崩れかかった壁のかげに、腰をおろした。
夜空は、重く垂れこめ、星も月も見えない。次郎吉は、心の中で、
「おちか、おちか」
と呼んだ。眼をつむれば、おちかのやわ肌が、まざまざと思い出された。
口笛が鳴った。夜鳥の鳴き声に似た音が、細く長く鳴りひびいた。次郎吉は、焼跡を出ると、武蔵屋の裏口へ忍び寄った。
裏木戸は、閉まっていた。
羽目板を伝いながら、侵入口を押した。図面で知っている清兵衛の部屋の前にきた。雨戸の中から、人の呻き声が聞こえてくる。耳を澄ました。女の声らしい。次郎吉は、夜の房事の場面を想像した。
彼は、清兵衛の部屋を一まわりして、雇人たちの部屋の横手に出た。しゃがみこんで、縁の下の高さをはかった。もぐれる見通しをつけると、四つん這いになって、中へはいった。
なんども、頭をぶつけた。蜘蛛の巣が顔にかかり、かび臭いしめった空気に、息が詰まりそうだ。清兵衛の部屋の下あたりへきた。
息を殺した。
「ああ」とか、「もうだめ」などと、女の声が聞こえる。畳が、みしみしとひびき、清兵衛が、女を抱いているこ

とが想像された。
〈清兵衛は、一人身のはずだ。女は、誰だろう〉と思った。
次郎吉は、部屋の中の乱れを幸いだと考え、縁の下を這いまわり、三百両の金を捜した。が、金らしいものは、何もなかった。
彼は、女中部屋の下を抜け、台所へ出た。
台所の上げ板を押して、顔を出した。人の気配はない。女中部屋の障子に、明りが映っている。彼は、足音をしのばせ、障子に近づいた。
破れ目から中を覗く。布団が敷いてあるが、人の姿は見えない。枕元に、女物の着物がぬぎ捨ててある。〈清兵衛に抱かれていた女は、女中だな〉と思った。
そう考えたとたんに、気持ちが落ち着いてきた。動悸の高鳴りもしずまり、足もとが、しっかりしてきた。
次郎吉は、台所へ戻り、土間へおりた。大きな水瓶が手にふれた。水の中に手を突っこんだ。が、小判らしいものは、手にふれなかった。
〈縁の下と、水瓶を調べた。ない。あとは、天井裏と厠の中だ〉
次郎吉は、女中部屋の前まで戻った。奥座敷の気配を、うかがった。しいんと静まりかえり、物音一つしない。〈番頭と女中の、夜の仕事はすんだとみえる。くたびれて眠ってるんだろう〉と考え、薄笑いを浮かべた。
次郎吉は、大胆になっていた。
厠の戸を開け、中へはいった。異臭が鼻を衝いた。戸をしめた。ゆっくり腰を落とした。たれこみ穴から、腕をさし入れた。踏み板の裏側を、手さぐりした。
同じことを何度も、くり返した。ない。〈喜八じいさん、でたらめを教えやがった〉と思った。
そのとき、厠の扉の前に、かすかな足音がして止まった。ぎくりとして、息をのんだ。扉が、いきなり開いた。ついていたはずの女中部屋の灯が消えていて、いきなり、背中を太い棒で殴られた。
次郎吉は、糞溜の中へ転落した。
が、頭を溜の土手に打ちつけ、腕を突っ張っていたために、糞の中に落ち込むことは、まぬがれた。
「泥棒ッ」
と、誰かが怒鳴り、棒を突きおろした。次郎吉は、腰のつけ根を突かれ、唸り声をあげた。ばたばたと人の駆け寄る足音がした。次郎吉の突っ張った手が、何かをつ

かんだ。ずしりとした重さが、手先に伝わった。
彼は、汲取口に、頭をぶつけた。蓋が開いた。
「助けてくれッ」
と、わめいた。弁蔵の手下の者が、三、四人走り寄り、次郎吉の首をつかみ、力をこめて引き出した。
次郎吉の右手は、ずしりと重い皮袋を、つかんだままだった。
平六が、駆けより、次郎吉を抱き起こした。
「どうした。あったか」
と、聞いた。
次郎吉は、腰の痛さをこらえ、
「なんだかわからねえ。とてつもなく重い袋を、つかんできた」
と言って、差し出した。
平六が、皮袋の中へ手を入れ、数枚の小判をつかみ出した。誰かが、御用提灯をかかげた。平六のてのひらで、山吹色の小判が、きらきらと光った。
平六が、小判へ鼻を近づけた。
「焼けた臭いはしねえ。まばゆいばかりの光だ」
平六が、声をふるわせた。
次郎吉は、へたへたと崩れすわった。背中から、尻にかけて痛みが走り、立っていられなかったからだ。
そのとき、台所口から、男がとび出してきた。平六の前へ歩み寄ると、
「泥棒だ。お前さん方は、まさか盗っ人に加勢するんじゃないんだろうね」
と、ダミ声をはり上げた。
すると、人垣の後ろの暗がりから、どっしりと落着きのある五十がらみの男が出てきた。手下の者たちが、道を開けた。
「平六、小判は、焼けちゃいねえようだな」
と、男が、聞いた。
「へえ、まちがいなく、火をかぶっちゃいやせん」
と平六が答えた。
「清兵衛さん。俺は、四谷左門丁の鳴海屋弁蔵だ。うまく仕組んだな。かわいそうに、栄三郎さんは、お前さんのつけ火の火事で、大やけどをして、とうとう死んじまったぜ」
弁蔵が、そう言って、清兵衛の手首をつかんだ。清兵衛が、振りはなそうとした。
「何を言うんだ。私は、知らない。火事は、飯盛女のおちかがつけたと聞いてるが」

清兵衛の声が、わなないた。

平六が、素早い動作で、清兵衛の両手をうしろへまわし、縄をかけた。

「私は、知らない。知らない」

と、清兵衛がわめいた。平六が、清兵衛の縄尻を握り、臀部を蹴った。清兵衛は、わめきながら、連行されて行った。

弁蔵が、手下の者に向かって、

「さ、次郎吉さんを、代々木の非人小屋まで担いでいけ」

と、錆びた声をかけた。

次郎吉は、三人の者に担がれた。

弁蔵が、「俺も、代々木村まで、あいさつに出向く」

と言って、ならんで歩きだした。

「痛むか」

「俺、死ぬかと思ったんだ」

「非人のおめえに、こんな働きをしてもらって、なんともすまねえ」

弁蔵の声が、やさしく、次郎吉をいたわった。次郎吉は、御用提灯の明りに浮かぶ弁蔵の顔を眺め、〈立派な親分だ〉と思った。

「俺は、おちかさんを助けてえ心で、生まれてはじめて、泥棒をやったんだ。盗っ人の仕事は、つくづく怖いもんだとわかった」

「せっちん詰めに合って、くせえ思いまでさせて……ありがとうよ」

次郎吉は、

「おちか」

と出かかった声を飲んだ。

「次郎吉さん、おちかは、これで無実ときまった」

弁蔵は、次郎吉の気持ちを察して、おちか——を口にしたのだろう。

「おちかは、まちがいなく、親分のとこにいるんで……」

「いるとも、あの女も、かわいそうな女だ。せめて母親でも生きてりゃ、飯盛女にならずにすんだはずだ」

「おちかの好きだった栄三郎が死んで、さだめし、力を落としてるでしょうね」

「なあに、そうでもねえ。おちかは、もともと、栄三郎をなじみの客として扱っていただけだ。おちかが、心底から惚れたのは、おめえだけだと言ってるぜ」

次郎吉は、危うく地上へ転げ落ちるほど、おどろいた。雑木林の中で、おちかと抱き合ったとき、

「夫婦になりたい」

と、言われたが、弁蔵親分の口から聞くと、おちかの心情が、本物だったと改めて実感されたのだ。

「ほんとなんで……」

「こんな話、嘘をついても仕方がねえ。俺は、おちかに聞いてやった。次郎吉は、いい男かもしれねえが、非人だ。それでも、彼奴と夫婦になるのかってね」

次郎吉は、答えず、歯を嚙んだ。非人の女房になるには、非人に落ちねばならない。いくら飯盛女でも、良民にちがいない。おちかが、俺の女房になる——と言っても、俺のほうからことわるのが筋じゃないか——。

次郎吉の眼に涙が滲んできた。

〈足洗いをしてえ。土方でも人足でもいい。世間に通用する人別帳に、次郎吉の名をのせてみてえ〉

次郎吉は、思わず声をあげて泣き出した。長い年月、忘れていた涙が、堰を切ったようにあふれてきた。

弁蔵が、寄り添うと、次郎吉の手をつかんだ。節くれだったごつい手だった。そのてのひらから、弁蔵のあたたかい思いが、沁みこんできた。

「おめえ、泣いているな」

「へえ……申しわけありません」

「足洗いがしてえんだな」

「でも、できることじゃないんです」

「俺は、おめえを探索の助っ人に頼むについて、久兵衛さんに会ったよ。聞けば、小屋頭の、かわらけの七兵衛は、消えちまったようだな」

「へえ」

「いつまで経っても、戻ってこねえ消え方をしたようだな。久兵衛さんは、おめえを七兵衛の後釜に、小屋頭にすると言っとったよ」

次郎吉は、声を出さず、ただ、弁蔵の横顔を見守っていた。

「七兵衛は、いいあんばいに非人だ。どこへ消えたか、久兵衛さんの胸三寸できまるぜ」

代々木の森が、黒々と見えてきた。

次郎吉は、心の中で弁蔵に手を合わせた。

「おめえも、小屋頭となりゃ、髷が結える。足洗いも、できねえ相談じゃなさそうだ」

「と言いますと……」

次郎吉は、せきこんできいた。

「代々木に、もう一度、春がめぐってくるころにゃ、次郎吉、おちかの夫婦が、四谷辺に住めるようになるかもしれねえよ」

「じゃあ……足洗いが……」
「ま、当てにしねえで、待ってるんだな」
田圃の中の道を、曲がりくねってすすむうちに、雲間から、月がのぞいてきた。代々木の森が、くっきりと浮かび、びっしりならんだ小屋が見えてきた。
次郎吉の胸に、明るい灯がともった。
溜へ、すりの喜八がはいり、おちかがはいってきた。
七兵衛が、おちかの体を狙った。そのことが小屋内の反感をあおり、七兵衛を殺す段取りができた。予想どおり、七兵衛が、おちかを盗みにきて、喜八に刺され死んだ。おちかを喜八が逃がした。お頭からいわれ、武蔵屋の探索をはじめ、小判三百両を、糞溜からつかみ出した――。
次郎吉は、めまぐるしいほどの出来事を回想し、夢をみているような思いに浸った。
一行は、久兵衛の家に着いた。
次郎吉は、風呂へ入れられ、小屋内の者に体を洗ってもらい、さっぱりした着物を着せられた。医者がきて、手当をうけ、奥まった座敷へ通った。
弁蔵が、床の間を背にして、あぐらをかき、久兵衛が、その前にすわっていた。お膳の上に、酒や肴が出ていた。
次郎吉は、久兵衛の下座に膝をそろえ、深々と頭を下げた。
「鳴海屋の親分、原宿の喜八の処分は、どうなりましょうか」
と、久兵衛がきいた。
「清兵衛が、つかまった以上、中根の旦那もご用がありますまい。あたしから、申し上げておきますよ」
「喜八とおちかが溜にきてから、いいことずくめで、わしもほっとしました」
「七兵衛は、町方でも評判のよくない男だった。ところで、一つたのみがあるんだが……おちかと次郎吉さんを、夫婦にしてやっちゃくれまいか」
「おちかさんさえ、小屋へきてくれるというなら……」
「わたしが仲人をつとめましょう。次郎吉さんの小屋頭昇格……いいんだろうね」
「そのつもりでおります」
「来年の春……つまり一年経ったら、わたしが胆入れして、足洗いをさせてやりたいと思ってるが……」
「そりゃ願ってもないことですな」
二人は、声をそろえて笑った。次郎吉は、しだいに頭を垂れ、鳴咽をこらえていた。

逃亡者源次

一　湯屋の貸衣装

四谷から内藤新宿へはいる四辻に、有名な大木戸があった。太い木の柵ができていて、左手に番小屋があり、高張提灯に、〝大木戸〟の三文字が、筆太く書かれてある。
初夜の鐘が鳴って半刻（一時間）ほど経ったころ、小柄な若者が、大木戸目がけて走りこんできた。彼の名を源次といい、二十一歳になる。
風が、強く吹いていた。
柵の手前の柳の枝が、はげしくゆれている。源次は、柳の木下闇へ走りこむと、四谷通りをみすかした。町家の大戸はほとんどおりていて、二階の窓から、ちらほらと明りが見えている。
道は暗く、まっすぐにのびている。源次は、大きく息を吐くと、呼吸をととのえた。彼は、柳の陰を利用し、二、三歩後へ退がると、横丁を左へ曲がった。左手に、桜湯――と軒灯の出ている湯屋があった。広い土間に、たくさんの下駄が脱いである。男物もあれば、女物もあった。
源次は、右手の階段を駆け上がった。
そこは、貸衣装屋となっている。坊主の衣、番頭ふうの棒縞もあれば、俳人ふうの十徳もある。各種の職業に適した衣装が、何十着となく、ぶら下がっている。
年増の女が出てきて、
「いらっしゃい。なんにします？」
と、よごれた歯を見せながら言った。
源次は、五十文出すと、大工職人が着るどんぶり腹掛けと、〝大清〟の染抜きのある印半纏、黒の股引を借りた。彼は、衣装部屋の奥へはいりこみ、手ばやく着替えた。
「まあまあ、なんていい男振りなんだろ。これじゃ、いなせな大工の棟梁、さぞもてるだろうね」
と、女がお世辞を言った。
この時代、大木戸には、左と右に二軒の湯屋があっ

て、二階で衣装を貸してくれた。坊主が、湯へはいり、さっぱりした体になると、二階で町医者の衣装に着替える。若侍が、町家の若旦那ふうになることもあれば、番頭が職人ふうに身なりを変えることもある。

大木戸から鳴子坂にかけて、旅籠屋があり、多勢の飯盛女がいた。いわゆる女郎である。女を買いに行くとき、湯にはいり、変装して行くわけだ。

貸衣装屋の風習は、新宿に限られていた。品川、吉原に公娼と名のつく女郎がいたが、そこには貸衣装屋はなかった。

内藤新宿は、甲州街道に当たり、客の種類も雑多で、品川、吉原にくらべると安く遊ぶことができた。自然、人が多く集まり、世を忍ぶ仮りの姿で、遊びにいく者もあった。

中には、源次のように犯罪者が、変装して、遊客にまぎれ込んで行く者もある。

源次は、湯屋を出ると手拭で頬冠りをした。彼の足が早くなった。

彼は、大木戸へ向かわず、番衆丁へはいった。鼻をつままれてもわからぬくらい、暗い道だった。それでも、ときどき、足を止め、後ろを振り向いた。

人通りはまったくなかった。

源次は、ほっとすると歩度をゆるめた。そのとき、自分の前方、二十間ほど先を、まるで風に吹かれていくように、ゆらゆらと歩いていく女の姿が見えた。髪は洗い髪で、ふさふさした毛が、風にゆれている。

源次の背中が、粟立ってきた。

後もどりをしようか、どうか――迷った。足を止めた。そのとき、はるか後方四、五十間ぐらいの地点に、黒い人影がうごくのが見えた。

〈追っ手だ。大曲がり一家の奴らだ。どうする。走るか。それとも、どこかへもぐるか〉

源次は、あたりを見まわした。寺の築地塀が長々と両側につづき、かくれ場所はない。源次は、走った。女の裾を乱した姿を横目に見て、行き過ぎようとした。

「ちょいと、お待ち」

と声をかけられた。

源次は、ぎょっとして立ちすくんだ。女が、そばへ寄ってきた。匂袋、梅花香がぷんと匂った。

源次は、あせった。後から追っ手がくる。逃げなければ――と思うのだが、足が動かない。女は夜鷹かもしれない――と思った。

「俺、追われてるんだ」

源次が、詰まった声をあげた。

「わかってるから呼んだのさ。さ、あたしに尾いておいでな」

女が、走った。おどろくほど早い足だ。源次は、女の後を追いかけた。

寺の築地塀がきれたところに、太い松の木があった。女は、枝をのばした松の下をくぐりぬけた。門柱があった。夜目にぼんやりと、座頭定市――の看板の字が読めた。女は、中へはいると、右手の垣根の木戸を開けた。源次は、引きずられるように吸いこまれた。

女は、木戸のかんぬきを掛けると、息をはずませた。女は、植込みの暗がりにしゃがみこんだ。源次の手が握られ、引き寄せられた。源次は腰を沈めた。

「しばらく様子をみるんだよ」

と、女が耳元でささやいた。あたたかい息が感じられ、源次は、ぶるっと体をふるわせた。女が、源次の肩を抱いた。

「あたしは、おろくというんだよ。この家の、ご新造さんさ。心配は要らないから……」

「俺、四谷塩丁の水茶屋つる屋の板前で源次というんだ」

「あたしは二十一、あんたは……」

「俺も二十一だ」

そのとき、門のあたりで、ばたばたと数人の足音がした。

源次は、思わずおろくの手を握りしめた。

足音が止まった。

「ごめんよ。俺は、大曲がり一家の代貸し、鬼政というもんだ。ちょっくら、用があるから、開けてくれ」

と、ダミ声が聞こえた。

誰かが、格子戸を開ける音がした。灯あかりが、闇を明るく染めた。

「なんぞ、ご用で……」

と幼い声がした。

「今、この家へ、大工風体の若い男と、洗い髪の女がへえったはずだ」

「誰も、きませんが」

「馬鹿こけ……たしかにこの眼で見たんだ。亭主を出せ」

まもなく、奥から誰かが出てきたらしい。おろくが、源次の耳もとで、

「旦那の定市だよ」
　と言った。源次は、とんだことになった――と思い、かちかちと歯を噛み鳴らした。
「こりゃ大曲がり一家のお身内で……私は、この家のあるじ定市ですが、聞けば、洗い髪の女と、大工職人ふうの若い奴が、はいってきたとのおたずねですが、誰もきた気配は、ござんせんが」
　定市の声はやさしいが、語尾に押えつけるようなひびきがあった。
「なんだと……シラを切るのもいいかげんにしねえか」
「嘘をついても仕方がない。もし、お疑いでしたら、中を捜していただきましょうか」
　誰かが、土足のまま、踏みこもうとしたらしい。定市が、
「おっと待ちねえ。あっしは、眼が見えなくても、その心眼というやつがある。土足は、ひでえでしょう」
　と、にわかに伝法な口のきき方をした。
「しゃらくせえ。何を言ってやがる」
　鬼政と名のる男が、定市を突きとばそうとした。鬼政は、利き腕を定市にとられ、もんどりうって倒れた。
「野郎ども、殺っちまえ」
　と鬼政が、わめいた。四、五人が、定市に襲いかかった。源次は、垣根の上辺から怖る怖る眼を出した。定市の持っていた杖が、抜き放たれ、銀光が横に弧をえがいた。
　二人が、呻きをあげて倒れた。源次は、思わず眼をつむった。鬼政が、匕首を抜いて、定市に斬ってかかった。その右手首が、仕込杖の峰打ちを喰ったらしい。鬼政は、匕首を落とすと、
「おぼえていやがれ」
　と怒鳴り、走り去った。
　定市は、抜き身を杖におさめると、それを杖にしながら、外へ出てきた。見えない眼を、逃げていく闇へ向けながら、
「馬鹿め」
　と、腹の底からひびく錆びた声を出した。
　源次は、その後ろ姿を眺めながら、〈番衆丁の座頭は、噂にたがわず、大した奴だ〉と思った。
　定市が、垣根へ向きを変えた。
「おろく、出ておいで。無法者は、けえった。大工さんも、遠慮することはねえぜ」
　と、定市が声をかけた。

　おろくが、木戸を開け、
「さ、源次さんとやら、威張って出ておいでな」
　と、やさしく言った。
　源次は、木戸の外へ出ると、地面に膝をつき、
「なんとも申しわけありません。ご恩は、忘れることじゃござんせん。実は」
　と言いかけた。
「おっと待ちな。話はあとだ。まず、中へへえんなせえ。湯にでもへえってから、ゆっくり聞くとしよう」
　定市は、伝法だが、あたたか味のある声で言うと、おろくに手を取られながら、家の中へはいった。
　家の中は、思ったより立派だった。玄関の広間に虎の絵を書いた衝立があり、磨かれた廊下が、幅ひろく通っていた。
　おろくが、先に立って源次を風呂場へ案内した。
「さ、ゆっくりおはいり」
　と声をかけ、源次の肩をぽんと叩いた。
　源次は、湯舟に浸りながら、定市とおろくの夫婦としての姿を、瞼にえがいた。〈奇妙な夫婦だ〉と思った。
　風呂から出ると、そこに黒地の無地の着物と角帯が出ていた。十六、七の少女がはいってきて、
「旦那さまが、お召し替えがすんだら、座敷でお会いになるそうです」
　と言った。
　源次は、黒無地の着物を着た。
〈これで、頭を丸めりゃ、見習い座頭になれる〉と思った。少女に案内されて、座敷へとおった。
　床の間を背にして定市がすわり、食卓をはさんで、おろくが、酒の酌をしていた。源次は、膝をすすめ、畳に額をすりつけた。定市の全身から、重々しい威圧が感じられ、おのずから、頭を下げたのだ。
「こっちへ、寄んなせえ。遠くにいたんじゃ、顔が見えねえ。もっとも俺は、めくらだから、正眼者のように見えるわけじゃねえが」
　源次は、顔をあげた。定市は、ねずみ色の無地の着物の上に、薄茶色の十徳を重ねている。肩が盛り上がり、首がなく、いきなり顔をのせたような感じがする。
　眉が太く、眼はふさがっているが、その眼をときどきうごかしながら、源次を感じとろうとしている。鼻の寸が短く、小鼻が張っていて、分厚い唇を結んでいる顔は、座頭らしく見えない。年のころは、四十前後らしい。
「おめえさんは、塩丁の水茶屋つる屋の板前だってな」

「へえ、さようで……」
「この辺じゃ、毛虫のようにきらわれているやくざ者、大曲がり一家の四天王の一人、からすの勘吉を殺したそうだな」
源次は、答えず声を飲んだ。
〈なぜ、知っているんだ。牛込谷町の暗がり谷で、誰にも知られねえように殺したのに〉
「源次さん、俺は、前々から大曲がり一家と、そりが合わねえ。俺の商売の邪魔をしやがるんだ。市ケ谷仲ノ町の米屋武蔵屋六兵衛に、三十両の銭を貸した。その取立てを、大曲がりの奴らが、間にはいり、妨害をしていたんだ」
源次は、座頭定市と、自分が思わぬ因縁につながっている——と思った。定市が、大金を持っていて、大店の旦那や、旗本たちに、金を貸していることは、聞いていた。
「今夜あたり、武蔵屋へ催促に行こうと思い、おろくをやって、様子をさぐらせた。案の定、大曲がりの奴らが、店先にとぐろを巻き、酒をくらっていやがった。おろくは、その帰り道に、おめえを拾ったというわけだ」
「おかげで、助かりました」
源次は、定市夫婦が、有力な味方に思え、にわかに親しみを覚えた。
座頭の金貸しは、官許されている。盲人保護の政策の現われである。しかも、その資金を、学問所から、貸し与えたこともある。座頭の中には、富有な町家から、出資してもらい、これを貸して、大きな利益をむさぼる者もいた。
この時代より後に、烏山検校という座頭が、高利の金を貸しつけて、その催促の仕方が、無法にすぎるとして、処刑された事件が起こっている。
座頭は、好んで大商人や、旗本に金を貸した。期限に払わぬと、店先に立って、
「銭を返せ」
とわめき散らす。大身の旗本が、登城の途次、座頭につきまとわれ、駕籠の中で進退きわまる光景が、しばしば現出された。
座頭は本来、人の全身のもみ療治をするのが本職だが、いつしか金融専門となり、人々からきらわれる存在となったのだ。
中でも番衆丁の座頭定市は、数百両の自己資金を持ち、大口貸付けで名を知られていた。御家人の子として

生まれ、子どものころから、剣術が好きで、柔術にも長じていたが、生来の暴れん坊で、喧嘩相手の敵が多く、十九歳のとき、闇討ちに会い、人事不省におちいっているとき、針で両眼を刺され、生まれもつかぬ盲目となったのだ。
座頭の住込み弟子となり、一本立ちすると、金利貸しの道を覚え、十年前、この土地に住みつくようになったのである。
「源次さん、あんた、外へ出たら危ないよ。彼奴らは、きっとからすの勘吉の仇討ちをやるからね。大曲がり一家が、手を引っ込めるまで、この家にいなさるがいいよ」
と、おろくが声をかけた。
定市の眉宇が、ぴくりと動いた。おろくの心の中を、心眼でつかみとろうとしているらしく、わずかに顔を向けた。
「どうだ、ここにいるかい？」
と定市が、聞いた。源次が考えていると、
「ただし、頭を丸めねえといられねえが」
と言って、顎を引いた。

二　板前の殺人

源次は、考えこんだ。
頭を丸めることが、なんといってもつらかった。女たちから、溜息まじりに、
「いい男だね」
と言われると、やはりうれしかった。
四谷塩丁の水茶屋つる屋の板前をしていれば、用もない女たちが、台所口から顔をのぞかせる。ことに、つる屋の一人娘お葉とは、体の関係こそないが、末は夫婦となり、つる屋の跡目を継ぐつもりがあった。つる屋の主人は、五年前に亡くなり、未亡人おしのが、女将として店を取り仕切っている。そのおしのが、源次に想いを寄せ、源次は、お葉にわるいとは思ったが、つい、体の関係を結んでしまった。
おしのは、三十八歳になり、女の終わりが眼に見えてくると、強引にも、源次と肌を合わせてしまったのだ。
お葉は、十七歳になる。
四谷小町——といわれるほど美貌で、笑うと右頰のえくぼがへこみ、糸切歯がきらりと光った。色白で、飛白

の着物がよく似合い、お葉が、そこにいるだけで、花が咲いたようにあたりが明るくなった。
源次は、お葉が好きだった。
そのお葉に、いつか頭を丸めた姿を見られるのがいやだったのだ。
「源次さん、頭を丸めるのがいやかい」
と、おろくが聞いた。
「いやなら、かわいそうだが、おめえさんをここから出さねばならん。大曲がり一家が、手ぐすねひいて待っているぜ。おめえさんが、板前として、出刃を使うのがいくらうまくても、あの暴れん坊たちにゃ歯が立つめえ」
定市が、瞼をひくひく動かしながら言った。源次は、首を垂れて聞いていた。
「おめえは、からすの勘吉を出刃で刺し殺した。どんなに、おめえに歩があっても、奴らは、おめえを生かしちゃおくめえ」
「へえ、そのとおりだと思いやす」
源次は、大曲がり一家に取りかこまれているありさまを想像し、ぶるっと身ぶるいした。
「だったら、頭を丸めろ。座頭の姿になって、眼をつむって歩けば、奴らも気がつくめえ」
「いつまで、頭を丸めてりゃいいんで……」
「別に期限はねえよ。奴らがあきらめるか、奴らを一人残らずにたたっ斬っちまうか、二つに一つだ。それがくるまで、月代をのばすわけにゃいかねえぜ」
おろくが、側から、
「そうしなさいな。死んじゃお葉さんにも、つる屋のかみさんにも、会えないじゃないか。うちの旦那が、ああ言ってくれるのは、それ相応の目算があるからだよ」
と、言いふくめるように声をかけた。
源次は、
「おねげえします。どうぞ、頭を丸めておくんなさい」
と言って頭を下げた。
定市が笑い声をたてた。
その夜、源次は、頭を丸めた。
おろくが、剃刀で、もとどりを切り落とし、きれいに剃ってくれた。源次は、おろくの手鏡を借りて、にわか座頭姿になった自分の顔を眺め、思わず涙を滲ませた。
「そんなに悲しいのかい」
「でも、いのちには、変えられねえ」
「つる屋じゃ、女将さんと四谷小町、二人に思われ、よくまあ、さばきができたもんだね。あたしも、あやかり

たいよ」
おろくが、剃刀を置くと、頬をすり寄せた。源次は、ぎくりとした。女が怖かったのではない。亭主の定市がこわかったのだ。
彼は、顔をそむけ、
「やめてくだせえ。とんでもねえこった。危ないところを、助けてもらったご恩があるのに……」
と、声をふるわせた。
「あたしが、きらいかい」
源次は、答えず首を横に振った。源次の頭の中に、つる屋における出来事が掠めた。彼は、ぶるっと体をわななかせた。
大曲がり一家の四天王の一人、からすの勘吉は、つる屋の女将おしのと、三年前からできていた。勘吉は、眉間に刀傷の跡があるが、にがみ走ったいい男だった。年は三十三だが、小肥りで、貫録もあった。
が、勘吉は、金銭にきたなかった。つる屋の女将の紐となり、五両、十両という金を要求した。
おしのは、その請求が、たび重なると厭気がさしてきた。
「あたしだって、金のなる木があるわけじゃなし……いいかげんにしておくれな」
と、はねつけた。
勘吉が怒り出した。
「俺が、銭をねだるのは、それ相当の理由があるからだぜ。俺という情夫がありながら、おめえさんは、板前の源次とできてるっていうじゃないか」
勘吉が、語尾に力をこめ、怒鳴り返した。源次は、襖のかげで聞いていたが、びっくりした。誰にも知られず、女将の誘いに乗って、体の関係ができている。
夜ごとのあいびきは、店の者が、寝しずまってから、二人でしめし合わせた納戸の暗がりで行なわれた。源次は、〈店の誰かが、勘吉に告げ口したんだ〉と思った。
「何を言ってるんだい。源次は、娘の婿にきめているんだよ。とんだ言いがかりだね」
「よし、いいがかりか、まことのことか、今夜、源次と白黒をきめてやるぜ。もしものことがあると、つる屋の看板に傷がつく。牛込谷町、安養寺の土塀の前。五つ刻(八時)になったら、源次をよこしてくれ」
勘吉は、それだけ言うと、帰って行った。
源次は、勘吉に殺されると思った。〈逃げるか、それとも、あべこべに殺すか〉と、考えこんだ。

勘吉が帰ると、おしのが源次を呼び入れた。おしのは、源次が、襖のかげにいることを知っていたのだ。
「聞いてたようなしだいになってしまったよ。どんなことをしても、勘吉を殺しておくれ」
「だって、俺には……」
「からすの勘吉には、歯が立たないって、言うんだね」
「俺は、死にたかねえ」
おしのは、しばらく考えていたが、
「わかった。いい考えがある。これなら、大丈夫、お前が勝つから」
と言った。
「なんだろう。それ……」
「唐辛子の眼つぶしをこしらえるんだよ。薄紙に包んだやつを、ぱっと勘吉の顔を目がけて投げつけるのさ。あの男が、ひるんだ隙に、お前は、出刃で……」
源次は、うなずくと、店の調理場へ行き、唐辛子の粉末を、どんぶり一杯持ってきた。おしのが、それを薄紙に包み、糊づけした。
源次は、出刃と眼つぶしをふところに入れ、初夜の鐘が鳴る前、店を出た。おしのが、台所口の外まで見送ってきた。
「神や仏に、お祈りしてるよ」
と言って、源次の手をしびれるほど握った。源次は、会釈もせず突っ走った。舟町から、荒木丁の坂を駆けおりた。
谷町の暗がりへ出た。
彼は、いったん足をとめ、呼吸をととのえた。雑木林の崖が見える。源次は、林の中を這いのぼった。
木の幹につかまり、崖下を眺めた。安養寺の土塀が、えんえんとつづいている。暗がりの中に、白っぽい塀が、帯のように見える。
人影はまったくない。
〈勝つか、負けるか。二つに一つだ。この暗がりの中だから、どっちが勝っても、殺しのホシは、わからずじまいで終わるんじゃないか。野郎に勝ちたい。負けりゃ元も子もなくなる。勝つ以外に、俺の生きる道はない〉
源次は、そんなことを考えた。
何かの気配がした。
犬が二匹、征矢のように走りぬけた。源次は、ほっとした。勘吉らしい姿は、見えない。彼の気持ちが、いら立ってきた。
闇の中に、女二人の顔が、交互に映り消えた。おしの

とお葉の顔だった。彼は、太い溜息を吐いた。
「俺は、生きていてえ」
と、思わず、つぶやきが洩れた。〈勘吉を殺すことができたら、俺は、おかみさんと手を切らしてもらおう。そして、お葉と、夫婦にさしてもらおう〉
そのとき、荒木丁の方向から、二つの人影が、もつれ合いながらやってきた。源次は、息を飲んだ。
「二人だ。困った」
源次は、そう言うと、両足を踏んばった。
二人の男の影がはなれた。
痩せた背の高い男が、歩度をのばし、二十間ほど先へ進んだ。肥った背の低い男は、勘吉だ。その影が、足をとめた。
ちょうど、源次のいる真下だ。
源次は、足音をたてぬように、崖をおりた。ときどき、土がぱらぱらとこぼれ落ちる。崖の下まできた。勘吉が、荒木丁のほうを眺めている。三間ほど眼の前に、その姿がある。
源次は、今だ——と思い、とび出した。
ふところから出刃を出し、眼つぶしの紙包みを、左手でつかみ、勘吉へ突っ込むと、眼つぶしを投げつけた。
「あッ」という、叫び声が出た。
その瞬間、源次の出刃が、勘吉の胸板をえぐっていた。生あたたかい血が、源次の右手をぬらした。
勘吉は、うめき声をあげ、のけぞり倒れた。源次は、出刃を勘吉の体に残したまま、走った。どこをどう走ったのか、覚えていない。風のように闇の中を、突っ走った。
気がついたとき、四谷の荒木丁へはいっていた。源次は、路地を曲がり、溝の流れで、手を洗い、乱れた着物を直した。
大木戸の湯屋へはいり、貸衣装を借りてきたのである。
源次は、おろくに頭を丸めてもらうと、定市の部屋へ連れていかれた。
「こっちへ寄んな」
と、定市に声をかけられた。源次は、定市の膝の前まで、にじり寄った。定市が、手をのばすと、源次の頭を平手で撫でまわし、顔の形を知るためか、眼、鼻、口元をさわった。
「よしよし、これで俄か座頭ができた。何も、おろくに糊を煮てもらい、くっつけるんだ。眼は、ぜんぜん見え

なくしなくってもいい。けど、正眼者のように開いていたんじゃ、おめえが、源次だということを見破られちまうぜ」
「へえ、おかげで……」
「ところで、大曲がり一家をみな殺しにしちまうまで、おめえさん、ここにいるより仕方がねえわけだ。ただでめしを食ってるのも、気づまりだろうから、仕事をしてもらいてえ」
源次は、
「座頭の仕事をやるんで」
と聞いた。
「板前のおめえに、座頭ができるわけはねえじゃねえか。殺しの仕事だ」
定市が、語尾に力をこめた。
源次は、危うく舌を嚙むほどびっくりして、定市の肉付きのいい顔をみつめた。
「大曲がり一家は、どうせおめえを生かしちゃおくめえ。だったら、こっちから奴らを一人ずつ消したほうがいい。俺としても、奴らは、仕事の邪魔になってしようがねえ。貸し金の取立てを妨害しやがるからだ」
源次は、思わず体をふるわせた。
定市が言葉をつづけた。
「奴らは、からすの勘吉の死んだことを、内証にしちまうだろう。世間に知られちゃ、大曲がり一家のこけんにかかわるからな。これから先、奴らを一人ずつ、殺したとしても、やはり、御用の筋へとどけるようなことはしねえよ」
「みな殺しにするといっても、多勢いるんでしょう」
「そうだ。子分の三下まで入れりゃ、ざっと六十人ほどいる。けどな、何も三下まで殺す必要はねえ。四天王といわれる代貸しが、鬼政を筆頭に、死んだからすの勘吉、小桜の吉三、嵐(あらし)の清太、こいつは渾名が、〝あら清〟といって、無類の暴れん坊だ」
源次は、四天王の顔だけは知っていた。定市が言うとおり、嵐の清太は、殺しの名人で、噂では十七人のいのちを奪っているということだ。
「四天王のほかに、兄にい株が六人いる。樋屋の熊蔵、辰五郎、惟之助(いのすけ)、新八、藤吉、もう一人……おろく、誰だったかね」
おろくが、
「宇之吉ですよ」
と声をかけた。定市の顔に、無気味な笑いが浮かんだ。

「この十人……勘吉だけはすんじまったから、残り九人、それと親分の大曲がりの助十を殺しちまえば、一家は、雲散霧消するよ」
「どうやって、殺すんで……」
「おめえの手の内……例の唐辛子の眼つぶし、こいつを大いに使うんだ。俺は、大曲がり一家の中に、二人ばかり若い衆を手なずけてある。治作と、金平という若い奴だ。二人が、いちはやく、からすの勘吉が殺されたいきさつを、知らせてくれた」
源次は、思わず生唾を飲みこんだ。
「あっしが、一人で、大曲がりの助十以下九人を殺すんで……」
「おめえ一人じゃ、とてもできるこっちゃねえ。俺とおろくと、おめえの三人でやるわけだ」
「奴らを、殺したら、あっしは、つる屋へ戻れるってわけですか」
「もちろん、そうなる。けどな、よほどうまくやらんと、御用の筋が嗅ぎつける。一人ずつ、日数をおいて消していくのが、うめえ方法だ」
源次は、できるかできないか――考えこんだ。おろくが、言葉をはさんだ。
「眼が見えるのは、あたしとあんただけ。四つ目を使って、うちの旦那の仕込杖が、働きやすいように段取りをつけるのさ。万が一にも、やり損うなんて、ありゃしないよ」
「おろくの言うとおりだ。俺の仕込杖は、抜いたときは、必ず、人を斬っている。おめえの眼つぶしを使うのは、相手を俺と同じ、めくらにする必要があるからだ。めくらとめくら……対等なら、俺が勝つんだ」
定市が、錆びた笑い声をたてた。

三　俄(にわか)座頭

源次は、台所の奥の暗い一間をあてがわれた。下女が、二人いて、襖をへだてた隣室をあてがわれている。家は広かった。
玄関の格子戸を開けると、土間になって、上がると右手に、弟子の部屋があった。十八歳の政市、十六歳の幸(こう)市(いち)、十五歳の春市の三人が、寝ている。
左手が台所と風呂場と厠。次が女中部屋、源次はその奥の部屋。
当主定市とおろくは、源次の部屋の前から廊下を突き

当たった八畳の離れを使っている。まん中の廊下のついた十畳の部屋が、治療室兼客間となっていて、植込みの多い庭に面していた。

源次は、おろくが煮てくれた糊で、眼をふさいだ。定市のいいつけで、薄眼をあけて、自由自在に歩け、走れるようになるまで、十日か、半月、ぶらぶらしていることになった。

初めのうちは、糊づけの眼が、ひどく不自由だった。盲目座頭らしく、真正面を向き、手さぐりで歩く仕種を、弟子の政市から習った。

政市は、いわゆる半正眼で、三分は見えるという。それでいて、庭掃き、拭き掃除もよくやった。

庭は、百坪ほどあった。鉤の手に曲がっていて、隣は、正覚寺の土塀に接している。寺の境内に樹木が多いので、さながら深山の林間にいるような気がする。

源次と政市が、庭を掃いていた。

「源次さん、このうちは、妙な家だよ。わかってるかい」

と政市が聞いた。

「座頭の金貸しだろ」

「そうだけど……旦那は、いっさい人の体にさわらないんだ」

「金貸し専門なんだ」

「おめえさんたちは、何をやるんだ」

「揉み療治は、俺だけ、幸市も春市も、まだ仕事はできねえんだ」

「そりゃ、そうだろ」

「源次さん、あんたがここにいると、おろくさんの言うことを聞かにゃならん羽目になるぜ。俺も、おろくさんによって、女というものを、教えてもらった。けどな、本当のことをいうと、怖くてしようがなかった」

「俺が、おめえの身代わりをするってわけか」

「たぶん、そうなる。俺には、うすぼんやりと、あんたの男振りのいいのがわかる。でも、誘われても、気をつけてくれよ。旦那は、腹を立てると、仕込杖を抜くクセがあるんだ」

源次は、箒を持つ手を休め、考えこんだ。

おろくの姿が、まざまざと眼の前に浮かんできた。

〈俺は、どんなことがあっても、おろくの誘いには、乗らねえ。うっかりすると、殺される〉と、自分の心に言いきかせた。

源次は、不安と好奇心の入りまじった複雑な気持ちを抱いた。つる屋の女将と、道ならぬ関係をつづけていた

経験が、源次の胸に、怪しい灯をつけたようだ。

源次の眼に映るおろくは、眺めているだけで、体の芯が燃えたってくる。つる屋のおしのと、お葉を見るときと、ちがった感じがする。

おろくは、めったに髪を結ったことがなく、洗い髪姿をしていて、素足の白さが、源次の眼に沁みこんだ。髪をかき上げるときの二の腕が、彼の胸を掻きたてる。

どうやら、おろくは、必要以上に、源次に肌を見せているようだ。源次が、庭掃きをしていると、庭下駄をつっかけ、庭へおりてくる。そのとき、ことさら赤いゆもじをはね上げ、雪肌の太腿をあらわにする。

源次は、眼をそらし、大きく溜息を吐く。

「源さん、少しは慣れたかい」

と、おろくが、親しげに声をかける。

「へえ、おかげさんで……」

「こっちへおいでな。まぶたの糊が、溶けてるようだから、くっつけてあげる」

おろくは、そう言って、源次を茶の間へ上がらせた。鍋に煮てある糊を、指先につけ、源次のそばへにじり寄ると、瞼を開け、指の糊をなすりつける。

おろくの髪の毛が、源次の頰にふれる。匂袋を抱いているせいか、源次は、息苦しいほど、むせ返る。

おろくが、糊をつけ終わると頰をすり寄せる。源次は、ぎくりとして、体を堅くした。おろくの裾がめくれ、すべすべした膝頭が、源次のすわった膝の間へ割り込んでくる。

源次は、歯を食いしばった。

おろくが、耳元に口を寄せ、

「あたしは、あんたが好きなんだよ」

と、低い声でささやいた。

「と、とんでもねえこってす」

源次は、やっとそれだけのことを答えた。

「旦那の仕込杖が、こわいんだろう。でも、心配しないで。旦那は、朝から、四谷まで、貸し金の取立てに行ったんだよ。幸市が、ついて行ったからね」

おろくの手が、のびて、源次の肌へすべりこんできた。

源次は、とびのいた。畳に額をすりつけ、「かんべんしてくれ」と、ふるえ声を出した。

「なんて、かわいいんだろう。言っておくけど、あたしは、旦那に惚れちゃいないんだよ。あたしは、四谷舟町の大工の娘……定市から、お父っつぁんが、二十両の金を借り、金が返せないんで、証文と取り替えっこで、あ

たしは、ここのうちにきたのさ。あれから、三年経つんだよ」

源次は、

「へえ」

と詰まった声をあげ、聞いていた。おろくが、

「あたしは、あんたにいのちをかけるから」

と、語尾に力をこめた。

おろくが、源次の手をつかんだ。

「俺だって、男だ。縁あって、助けてもらったんだが、はっきり言うと好きだ。けど、妙なことになったら、俺たちは、どうなるんだ。俺は、現に大曲がり一家から狙われている。おまけに、ここの旦那に狙われちゃ、俺のいるところがなくなるんだ」

源次は、本当にそう思っていた。

「だったら、旦那が死んだとしたら、どうなるんだね」

おろくが、聞きとれぬぐらい声を沈めた。

「な、なんだって……そんな……」

「これから、まもなく、あたしと旦那と、あんたが組んで、大曲がり一家と、生きるか死ぬかのしのぎを削るわけだけど……旦那が、あいつらに殺されることだって、あるはずだね。そうなったら、あんたは、つる屋へ戻るのかい……それとも……」

源次は、答えずおろくの顔をみつめた。おろくは、どうやら、定市の死ぬことをのぞんでいる。こりゃいったいどういうことなんだ。三人が、力を合わせたって、大曲がり一家に勝てる見込みは薄い。

それなのに、おろくが、定市の足を引っ張るような真似をしたら、どうなるんだ。うっかりすると、俺が、殺される。おろくのために、俺まで死ぬのはいやだ——。

「俺の見当じゃ、とても、大曲がり一家の頭株を、みな殺しにすることなど、とてもできっこねえと思ってるんだ」

「あたしも、そう思ってるよ。とすると、あんたは、江戸にいる限り、大曲がりの奴らに、つけ狙われるってわけさ」

「ど、どうしたらいいんだ」

「旦那が死ねば、この家の財産は、あたしのもんさ。あたしは、座頭定市の女房として、人別帳にのっているからだよ」

おろくが、うふふと、喉を鳴らした。

「財産が、いくらあったって、奴らは、どこまでも追いかけてくるぜ」

「逃げるのさ。あり金、ぜんぶを持って、あんたと二人で、信州の小諸へ逃げるのさ。小諸は、死んだおっ母さんの生まれ在所、叔父さんが、造り酒屋をやってるんだよ。大曲がり一家も、そこまでは追いかけちゃこないだろうからね」

「でも、できることなら、大曲がり一家をみな殺しにしてえ」

「馬鹿だよ、そんなことを考えるのは。ものごとには、できることと、できないことがあるんだよ。できないことにのぞみをかけるなんて、愚の骨頂さ。旦那が、奴らにぐさりと刺されるほうが、やさしいことだし、誰が考えたって、そうなると思うんだけど……」

おろくが、胸を合わせ、源次を抱きしめた。

源次は、頬をすり寄せ、息苦しく喘いだ。〈俺はいったいどうすりゃいいんだ。困った〉と思いながら……。

そのとき、玄関先に、

「お帰りッ」

という小僧の声がした。おろくが、はじかれたようにとんで行った。

源次は、耳を傾けた。おろくの態度を、めくらの勘で、どう察するか——と思うと、気が気ではなかった。

定市は、座敷へはいってくると、
「源次と政を呼べ」
と、怒鳴った。源次は、座敷へ急いだ。政市もきた。おろくが、定市の後ろへまわり、肩を揉んでいる。源次と政市が、その前にすわった。
　定市の眉間(みけん)が、ぴくりとうごいた。
「今夜から、大曲がりの奴らと、勝負をはじめるぜ。おろくと政が組んで、俺と源次の組より、一町先を歩け。勝負の場所は、四谷荒木丁から、牛込谷町……くらがり坂あたりと見当をつけてきた。大曲がり一家は、牛込東五軒丁、奴らは、俺の得意先である四谷を荒しにくる」
　定市が、早口にまくしたて一息入れた。源次は、定市の無気味な表情を、息を殺して、見守った。
「くらがり坂の上に、地蔵さんがある。俺は、毎晩、源次を連れて、地蔵のかげにしゃがみこんでいる。おろくと政市が、坂を下る。奴らは、二人ずつ、ときには三人ずつやってくる。おろくは、誰がきたかを政に言う。政は、坂を駆け上がり、地蔵まで戻ってきて、小桜の吉三と、藤吉がきたというあんばいで知らせる」
　政市が、膝の上の拳固を握り、生唾を飲みこんだ。
「源次、おめえは、例の唐辛子のつぶてを用意する。万が一の用意に、出刃を一挺、ふところへ呑んでいけ。奴らがきたら、さっととび出して行き、つぶてを投げろ。そのとき、俺が出て行く。あとは、俺の仕込杖が、ものを言う」
　定市の声に、力がこもってきた。源次は、背筋が粟立つのを覚えた。定市の言うとおり、うまくゆくとは限らない。あべこべに奴らの匕首(どす)か長刀で、ばっさり殺られるかもしれない——と思った。
「死骸は……ど、どうするんです？」
　源次は、わななきながら聞いた。
「くらがり坂の左側に、流れの早い溝川がある。たしか、幅四尺足らずだ。そこへ蹴り込んでおけ」
「いつもくらがり坂で待つんで……」
「当分は、そこだ。二回殺ったら場所を変える。奴らが感づいて、人数を増やしてくるにちがいない。そんときは、しばらくここに引っ込んでいる。戸締まりを厳重にして、奴らの出てくるのを待つんだ」
　おろくが、揉んでいる手をやすめ、
「旦那、勝つ見込みはあるんですか」
と、甘え声を出し、定市に頬を寄せ、ちらりと源次を眺めた。定市は、

「俺は、喧嘩じゃおくれを取ったことがねえ」
と、口元に薄笑いを浮かべた。
　その夜——。
　六つ半（七時）になると、おろく、政市、源次、定市の順に外へ出た。先行の二人と二、三十間の距離があいた。星空が、降るほど光をちりばめ、夜道は、案外明るかった。
　源次は、定市の左に寄り添っていた。
「おめえの足音を聞いてると、まだ、座頭の歩き方じゃねえ。第一、おめえの杖のつき方がいけねえ。杖というもんは、腕をのばしてつくもんだ」
　源次は、音で仕種(しぐさ)を見分ける勘に、おどろいた。彼は、言われたとおり、腕をのばした。そうすると、自分ながら、めくらのような気がしてきた。
「怖いか」
「へえ……」
「俺が、怖いか——と聞いているんだ」
「怖いとは、思いやせん」
「そうか。そんならおめえは、おろくに惚れちゃいねえ証拠だ。政市の奴は、おろくによって、男になりやがった。けどな、政は、まだ子どもだ。むりやりに、そうさせられたんだろう。だから、不問にしてある」
　源次は、息苦しくなってきた。
　定市が、言葉をつづけた。
「源次、まちがってもおろくに手を出しちゃいけねえ。俺の留守中、どんなにわからねえようにやっても、俺には必ずわかる。そうなったら、あの世に行ってもらうぜ」
「へえ……俺にゃ、好きな女が……」
「つる屋のおしのと、お葉、二人ともいい女だそうだな」
「世間じゃ、そう言います」
「俺は、おろくに惚れている。あの女の体に惚れたわけだ。おろくは、根っからの男好きだ。俺は、おめえがとびこんできたとき、つる屋の板前と聞いて、ほんとうは、迷ったんだ。おろくと、もしものことがあるかもしれねえと思ったからだ」
　風が出てきた。定市の着物の裾がめくれとんだ。定市は、何を思ったのか、踏みとどまると、いきなり仕込杖を抜いた。銀光が、闇の中に走った。が、刀身は白鞘(さや)の中におさまっていた。
　定市が、うふふと笑い声をたてた。
　源次はぎくりとして、二、三歩とびのいた。

「馬鹿野郎、今ごろ、逃げたって、まにあうはずがねえ。俺が斬るつもりなら、おめえは、とっくにほとけになってらあ」
「わかりやした。どんなことがあっても、おろくさんと、おかしな真似は、いたしやせん」
「そうかい。その代わり、大曲がり一家をみな殺しにしたら、おめえとお葉の祝言の銭は、俺が出してやるぜ」
源次は、聞きながら、先を行くおろくと政市が、手をからませているのを眼にとめた。
道は、くらがり坂にさしかかっていた。

四　くらがり坂

道幅は二間足らずしかない。
坂の上に立って、源次は見おろした。左側は、舟町の町家、しもたやばかりがならんでいる。町並が切れると、太い柳が枝を垂らして、風にゆれている。その下に、古びた地蔵が立っていた。定市が、
「地蔵はどこだ」
と聞いた。
源次は、定市の手を取ると、地蔵のうしろへみちびいた。定市は、地蔵の土台石の上に、腰をおろし、仕込杖を両手で握り、その上に顎をのせた。
地蔵のうしろに溝川があって、曲がりながら、坂の左側、全勝寺の築地塀の脇を、音をたてて流れ下っている。
塀の内側の椎の古木が、道の上まで枝をのばし、闇をつくっていた。右側は、崖になっていて、灌木が生い茂り、夜鳥の鳴き声がする。
政市とおろくが、手をからませながら、坂を下った。
それっきり、二人の姿は、闇に没した。
源次は、ふと、二人が寺の山門の下あたりで、抱き合っているのではないか――と思い、嫉妬めいた気持ちを抱いた。
「源次……こっちへ引っ込んでいろ」
と、定市が重い声をかけた。
源次は、定市のとなりに腰をおろした。
「おめえは、今、おろくと政が、手を取り合って坂を下るのを見ていたな」
源次は、ぎょっとして、
「へえ」
と、声を詰まらせた。

定市は、それきり押し黙ってしまった。無気味な沈黙だった。
〈定市は、たぶん、おろくと政市が、どこかで肌を寄せ合っていることを想像しているんだろう。怖い男だ〉
と、源次は考えていた。
長い時間が経った。
四半刻（三十分）ほど過ぎたころ、ばたばたと足音が聞こえた。
源次は、地蔵のかげに立ち上がった。政市が、走りこんできた。定市の前に、腰を落とし、
「三人です。嵐の清太と、新八と藤吉らしい奴らが、今、ここへのぼってきます」
と、息をはずませながら言った。
「源次、相手は三人だ。目つぶしは、いくつあるんだ」
定市が、底力のある声で聞いた。
「五つ……持っとりやす」
「嵐の清太は、背の高い奴だ。まず、そいつをめがけて投げろ。次いで、あとの二人だ」
「へえ……必ず……」
源次は、ふるえ声で答えた。
すると、定市は、いきなり政市の襟首をつかみ、引き寄せた。政市の頬のあたりに、鼻をすりつけ、何かのにおいをかいでいる。
「おろくのにおいがするな」
と言って定市が、含み笑いを洩らした。
坂の中段あたりまで、足音が近づいてきた。
定市は、政市をはなすと立ち上がった。
政市が、その手を取った。定市は、一歩ずつ、大地を踏みしめるように、地蔵の横手へまわった。
源次は、走り出る構えを作った。膝頭が、がくがくとふるえている。歯の根が合わず、喉が乾いてきた。
息を殺した。
暗がりの中に、三人の男の影が浮かび上がった。一人は、六尺ゆたかの大男で、他の二人は、小男だった。
源次は、闇の中へ眼をさらし、ごくりと生唾を飲みこんだ。三人が、眼の前を通りすぎようとした。
彼は、思い切ってとび出した。長身の男をめがけ、つぶてを投げつけた。薄紙が破れ、唐辛子の粉がとび散った。第二、第三のつぶてを投げた。
誰かが、
「源次だな」
とわめいた。

定市が、いつのまにか、源次の脇まできていて、前へ踏みこんだ。
銀光が、横に走った。びゅん——という風を切るうなりが聞こえた。
「ぎゃッ」
という悲鳴があがる。
定市の腕が、逆転して、光の弧をえがく。風を切るうなりを、源次は三度聞いた。三人の男の姿は、地に没していた。
「すんだよ」
定市が、錆びた声を出した。
政市が走りこんできた。源次は、二人で、路上にころがる三人の死骸を、一人ずつ引きずっていき、溝の流れの中へ落とした。
死体は、いったん沈んでから、すぐ浮き上がり、流れ下って行った。
おろくが走り寄り、定市の胸に取りすがった。
「よかったね。どうなることかと、心配してたんだけど……さすがに腕は、たしかなもんだった。ほっとしたんですよ」
おろくが、鼻声を出した。
「これで、三人片づいた。あと七人だ」
定市は、おろくに手を取られながら、歩き出した。
源次は、政市とならんで、その後にしたがった。
「三人の死骸は、明日の朝、お城のお堀へ流れつくだろうね」
と、おろくが言った。
「明日も、くらがり坂だ」
と、定市が、声を押しつぶした。
「明日は、やめたらいいと思うけど……」
「なぜだ」
「斬り口からみて、大曲がり一家じゃ、旦那を下手人と見当をつけるにきまってるわ。だから、治作と金平の様子をきいてからのほうが、いいと思うけど……」
おろくが、定市の耳元へ口を寄せて言った。定市は、答えず、歩きつづけていた。
源次は、不安な夜を過ごした。
斬られた奴らの「ぎゃッ」という悲鳴と、溝へ流しこむときの死骸の重さが、いつまでも残っていた。
今にも、大曲がり一家の連中が、斬りこんでくるような気がした。長刀を抜いて、雨戸を蹴破って、踏みこん

できたらどうする？　みんな寝てしまった。俺だけが、眼をさましている。奴らがきたらどうするか——と、同じ思考をくり返していた。
うとうと眠りかけた。
廊下を踏みしめる足音がした。源次は、はっと思い、眼をあけた。真っ暗だから、何も見えない。足音は、廊下をそっと踏んで行く。源次は身支度をととのえた。
襖を開け、廊下をうかがった。黒い人影が、近づいてくる。襖を閉めた。
「源次……俺だ」
と、定市の声がした。
源次は、
「どうかしたんで」
と、ふるえ声で聞いた。
「さっき、外で人の気配がした。もしや——と思い、見まわってるんだ」
「へえ……さようで……」
「おめえ、例のつぶてを、ふところに入れておけ。奴らがきたら、まず、目つぶしを喰(くら)わせろ。おめえの役目は、いつの場合でも、それだけでいいぞ」
「つぶては、用意してありやす。出刃も」
「それでいい。俺は、二晩や三晩、眠らねえでも平気だ。だから、安心して寝るんだ」
源次は、闇の中でうなずくと、布団にもぐりこんだ。
翌朝——五つ刻（八時）。
大曲がり一家の三下、金平が、勝手口からとびこんできた。政市が、金平の顔を知っていて、定市の部屋の外まで案内し、襖の外から、
「金平さんが参りました」
と、声をかけた。
「なんだ、言ってみろ」
と、中から定市の声がした。
「けさ六つ刻（六時）、お堀へ流れこむ堰(せき)のところで、嵐の清太と、新八、藤吉が死骸となって流れつきやした。それで、大さわぎとなり、親分が、死体を検分したところ、一刀のもとに、三人とも胸元を斬られているので、まちがいなく、座頭定市の仕業だ——ときめやした」
「それで、仕返しでもしにくるのか」
「へえ……あしたの夜、六つ半（七時）、四谷左門丁、美濃屋という米屋から、小僧を使いによこし、借りた四十両を耳を揃えて返すから、取りにきてくれ——と嘘をついて、旦那を誘い出すことにきめたんです」

「わかった。六つ半だな」
「へえ……ご用心なすって……」
襖がわずかに開いて、
「ごくろう、駄賃だ」
と言って、定市が二分銀一枚をほうり出した。

朝がきた。

源次は、胸を撫でおろした。定市夫婦が、朝風呂へはいった。風呂から出ると、政市が、師匠の肩揉みをはじめた。

おろくが、源次の部屋へはいってきた。湯上がりの肌が、匂い立つように、桜色に見えた。おろくは、源次に膝をくっつけてすわった。

「今夜は、いよいよ旦那が斬られる番だよ」

源次は、

「あんまり、そばへ寄らねえでくれ」

と言って、あとずさりをした。

「何を言ってるんだね。あたしが好きなくせに……」

おろくの膝が迫ってきた。

「いけねえ、旦那の勘は、ただもんじゃねえんだ」

「だから、六つ半すぎたら、あたしたちは、おおっぴらの夫婦になれるんだよ。お金はくさるほどあるし……」

「六つ半……旦那は、出かけるのか」

「あの人は、敵に後ろをみせない人なんだよ。行くにきまってるじゃないか。左門丁の美濃屋に、何人もの子分たちが、張りこんでいるのさ。うちの旦那の、おさらばの姿を拝みたいね」

おろくは、うふふと喉を鳴らし、源次の太股を痛いほどつねって、部屋を出て行った。

源次は、おろくの言うとおりだと思った。くらがり坂は、不意をねらったから、こっちが勝ったが、美濃屋じゃ、向こうが準備をして待っている。勝てるはずがない。

〈そのときは、どうする？　つる屋へ帰れば、俺は、奴らに殺られてしまう。どこかへ逃げるにしても、銭がない。結局、おろくと一緒にずらかるより手はなさそうだ〉

——と思ったのだ。

源次は、終日、そんなことを考えて過ごした。日が暮れてきた。

定市が、女中まで、全員を座敷へ呼び集めた。源次は、定市のまん前に、膝をそろえた。おろくが、例のと

おり、定市の肩を揉みながら、源次をちらちら眺めている。

「今夜、四谷左門丁の美濃屋へ出かけるのは、取りやめにする。というのは、敵の罠にはまっちゃ、負けいくさとなるからだ。こっちが、出かけなけりゃ、向こうさまからやってくる」

定市は、唇をなめ、見えない眼で、みんなを見回した。

「だから、これから、支度をするんだ。源次は、例の唐辛子を、ありったけ、袋に入れておけ。女中二人は、麻縄をできるだけ、多く用意し、通りから玄関先までの間に、少なくとも、三本を、木と木をつないで、張っておけ。小僧二人は、梯子を二つ、両側で持っていて、奴らが縄につまずいたら、倒しかけろ。政は、屋根から水をぶっかけるんだ」

定市が、語尾に力をこめ、顎を突き出した。

「源次は、奴らがころんだら、木の上に乗っていて、唐辛子をぶんまけるんだ。政は、ありったけの手桶へ、水と下肥を入れ、屋根の上へ運べ。奴らのうち何人かが、玄関へとびこんでくる。そんとき、水と下肥をぶんまけろ」

全員が、それぞれ、

「へえ」

と答えた。

「あたしは、どうするんですかい」

と、おろくが聞いた。

「おめえは、俺と一緒に玄関の中にいるんだ。勝手口、廊下、窓という窓は、ぜんぶ、内側から、釘づけにしておく。玄関だけを開けておく。俺は、玄関に腰をかけて、待機する。おろくは、簞笥の中にある匕首を持っていろ。何しろ、敵の数は多い。おそらく二、三十人はくるだろう」

「勝てるんだね」

「勝負は、五分と五分だ」

「じゃ、負けることもあるんだね」

「あるかもしれねえ」

「そんなときは、どうなるのかい」

「みんな死ぬんだ。けど、勝たにゃならねえ。負けを怖れて逃げる奴は、生かしちゃおかねえ。もっとも、俺が今、命じた持ち分を果たした奴は、ずらかってもいい。けどな、あんまり遠くへ行くな。勝ったときは、奴らの死骸のあと片づけをしなくちゃならねえ」

定市の言葉が終わると、全員が、こまねずみのように

働きだした。
源次は、台所から唐辛子の粉を持ってきて、大袋二つへ詰めこんだ。
政市が、源次に話しかけた。
「大丈夫だろうか」
「やっぱり、五分五分だろう」
「俺、死にたかねえんだ」
「おめえは、おろくさんとできてるからだろ」
政市の頬が赤くなった。
源次は、政市の手をつかみ、
「おめえとおろくさんが、できてること、旦那は、お見通しだぜ。うっかりすると、殺されちまうよ。屋根からのぶんまけの仕事がすんだら、ずらかったほうがいいぜ」
と言った。
「旦那が、何か言ったのかい」
「くらがり坂の地蔵の前で、そのことを言っていたんだ」
政市は、黙ってうなずいた。
源次の心の中に、おろくと逃げる決意が固まりつつあった。その際、政市がいないほうがいい——と考えついたからだ。
政市と入れ代わりに、おろくがはいってきた。
「今夜、いちかばちかの勝負だよ」
おろくが、そう言って、帯の間から、匕首を抜き放った。冷たい銀光をみて、源次は、生唾をのみこんだ。
「どさくさにまぎれ、旦那の脇腹を、ぐさりとやるのさ」
おろくの眼が、ぎらぎらと燃えたった。

五　夜の死闘

番衆丁の定市の家から、四谷左門丁の美濃屋まで、ざっと二十町ある。美濃屋は、米穀商だけあって、構えは堂々たる商家だ。二階建で、店先に米俵を積み上げ、米桶には米があふれるほど入れてある。
その店の奥座敷で、大曲がり助十が床の間を背にしてあぐらをかき、その前に子分の面々が、長刀(どす)を小脇に置いたまま、酒を飲んでいる。
助十は、五十にはまだ間のある年ごろで、てらてらと光った赤ら顔をしている。右眼の下に、赤いアザがあって、みるからに人相がわるい。
その前にすわっているのは、鬼政だ。三十七、八の壮年で、枯木のように痩せている。その左に、二十七、八の色白の小桜吉三が、湯呑みで、酒をあおるように飲んでいる。
その左右に十五人の子分が、いずれも喧嘩支度で、とぐろを巻いていた。
主人の美濃屋四郎兵衛が、助十の右脇に、膝をそろえてすわり、しきりに、杯をすすめている。
助十が、
「ちょうど六つ（六時）だ。小僧を使いに出せ。六つ半（七時）に、お出まし願いたい。借りた四十両は、耳を揃えてお返し申す——と、口上をのべてこい」
と、主人に言った。
四郎兵衛が、隣室にいる小僧を呼んで、同じことを言いつけた。小僧が、走り出た。
「美濃屋さん、あんた今まで、定市に利息をいくら払ってるのかい」
と、助十が開いた。
「さよう、かれこれ四十両は、払っております。何しろ、定市さんの利息は、めっぽう高こうございまして」
「利息は、年一割五分ときまってるじゃねえか」
「へえ、それを定市さんは、三月(みつき)で一割五分、年にしますと六割、そのほかに、礼金といって、半年ごとに一割、つまり一年で八割の利息を取られてきました」
美濃屋四郎兵衛が、そう言って眼をしばたたいた。六十に手のとどく年ごろで、皺をきざんだ顔は、ただの商人に見えない面相をしている。
「ふてえ野郎だ。どだい、座頭をのさばらしたのは、お上(かみ)がいけねえ。座頭金は名目金だから、払わなけりゃ、町人百姓を身代限りにするのは、片手落ちだ。牛込、四谷界隈で、定市に苦しめられた者が、何十人、いや何百人いるかしれねえ」
助十が、唾をとばした。
座頭の保護は、江戸開府以前からの伝統である。江戸幕府は、座頭に官位を与えたばかりでなく、持ち金を利殖することを許し、その債権を保護してきた。助十の言うとおり、未払い者は、身代限りといって土地から追放処分をうけるのだった。
四郎兵衛が、大曲がり助十に泣きついたのは、すでに利息を元金相当額払っており、幕府法定の年一割五分なら払うが、後金はとても払えなかったからだ。
助十が、定市を目の敵にしたのは、町の人々からもっとも憎まれている定市を叩くことによって、大曲がり一

家の名声を上げたかったし、かなりの収入も見込まれたので、定市の債務者を片っ端から訪ね、助力を申し出たのである。
　現に、助十は四郎兵衛から、礼金十両を前渡し金としてもらっている。定市の得意先が、三十数軒あったから、一軒当たり十両とすると、ざっと三百数十両の収入となっているわけだ。
「野郎ども、定市の奴を叩き斬ったら、死骸を、くらがり坂の溝川へ持ってって捨てろ。それが、清太と、新八、藤吉の供養というもんだ。ぬかるな」
　と、助十がわめいた。
「板前の源次の奴、こいつも斬らしておくんなせえ」
　と、末席から声がかかった。
　鬼政が、子分たちをじろりと見渡してから、
「定市の居合い抜きは、ただ者じゃねえ。びゅんと風を切れば、おめえらの首が、胴からはなれているぜ。野郎を斬るのは、から元気だけじゃだめだ」
　と、語尾に力をこめた。
「政、何か策があるか」
　と、助十が聞いた。
「奴を殺る手だては、道路じゃだめだ。家の中、狭いほどいい。そこへおびき寄せる。できれば四畳ぐらいが、いいあんばいだ。幸い、竹槍を八本持ってきている。定市を、うまく誘いこんで、四方から障子、唐紙を突き破って、刺し殺すってわけだ」
「なるほど、俺も腕に覚えがねえわけじゃねえが、安全確実な方法がいいにきまっている。その段取りを、どうきめるか」
　助十が、顎を引いて一座を見まわしたとき、小僧が、帰ってきた。主人のそばへすわると息をはずませ、
「六つ半、おいでくだされば、四十両、耳をそろえて、お返ししますと、口上のべてきました」
　と言った。
「誰に伝えたのかい」
　と、助十が聞いた。
「やっぱり、めくらの、男振りのいい男です」
「源次だな。野郎、うまく座頭に化けやがった」
　助十が、眼をむいた。小僧がぶるっとふるえて引っ込んだ。
「親分、店から奥へ、だんだん人数を増やしていくのがうめえやり方のようだ。たとえば、店に若いもん二人、次の間が三人、その次が五人というように、おとりを置

いて、みんなが、順々に奥へ逃げこむ。そして……」
　鬼政が、分別くさい顔で言った。助十が、眼を光らせ、うなずいた。
　暮れ六つの鐘が鳴ってから、半刻経った。約束の時刻である。
　一座の顔が、緊張で青ざめた。誰もが定市の仕込杖を知っているからだろう。助十が、
「時刻だ」
　と言った。全員が、鬼政の指示にしたがい、部署についた。
　店、次の間というように、順々に人数を増やしておいた。子分たちの顔々が、堅く口を結び、呼吸を静めている。
　息詰まるような時間が経過した。初夜の鐘が、いんいんと鳴りひびいた。定市を呼び寄せた六つ半から一刻(二時間)経ったのだ。
「誰か、定市のとこへとんで行き、様子を見てこい」
　と、助十が怒鳴った。
「親分、様子を見にいくまでもありませんぜ。野郎は、こっちの手の内を知って、出向いちゃこねえ。このうえは、押しかけるより仕方がありませんや」
　鬼政が、底力のあふれる声で言った。
「攻めこむのか」
「そうです」
　助十が、腕を組んだ。
「定市に、地の利がある」
　その声が、重く沈んだ。小桜の吉三ら、四、五人が二人を取り囲んだ。
「定市のところは、袋小路……逃げ道はない。それだけに、死にもの狂いの抵抗をうけるおそれがある」
「けどな、大曲がり助十が、このまま引っ込むわけにゃいかねえ」
「そりゃそうです。しかし、むやみに踏みこむのは不利……」
　鬼政が、痩せた顔の皺を深くきざんだ。
　小桜の吉三が、酒に上気した顔を突き出し、
「定市のところは、男は、源次と定市の二人きりだ。あとは、めくらの小僧が三人、おろくと二人の女中だけ……なんてこたあ、ねえと思うが」
　と言った。
「無謀はいけねえ。現に嵐の清太と新八、藤吉の三人が

斬られているんだ。袋小路だけに、なおさら、むずかしいんだ」
「なぜ、なんだ。袋のねずみじゃねえのか」
「定市のことだから、必ず、深い策がある。うっかり乗ったら、ひでえ目に会うぜ。俺は、今夜の勝負が、大曲がり一家にとって、のるかそるかの喧嘩と思える。うかつな真似はできねえ」
「兄いは、おじけをふるったのか。勘吉の敵を見のがすのか。清太のうらみをどうするんだ。俺は、一人でも斬り込むぜ」
「おめえは、なぜそんなに死に急ぎをしたがるんだ。何もあわてるこたあねえじゃねえか。じっくり、策を練ろうというだけの話だ」
「俺は、待てねえ」
「一人でも行く気か」
「そうだ。べらぼうめ、めくらに負けてたまるもんか」
「吉、待て……」
と、助十が錆びた声を出した。
「親分、俺にやらせてくれ。俺は、さっきからじりじりして、我慢がならねえんだ」
「鬼政、やっぱり、これから斬りこむぜ。その前に、おめえさんの策を聞こうじゃねえか。それによって、手だてを考えてもいい」
助十が、鬼政を眺めた。その眼が、ぎらぎら光っている。
鬼政が、その眼を受けとめ、顎を引いた。
「考えられるのは、全員もぬけの空(から)――ということだ。したがって、定市の屋敷の路地口まで行ったら、吉三に中へはいってもらう。もちろん、二人ぐらいをつけて行く」
「なるほど、もぬけの空か。ありそうなことだ」
「定市の家は、路地から奥まで、ざっと十四、五間ある。突き当たりが垣根。左へ曲がったところが、玄関。吉三が、玄関まで行きついて何事もなかったら、口笛を吹け。そしたら、二番隊として、俺が、五、六人を連れて走り込む」
「なぜ、十八人全員が、一気に斬り込んじゃいけねえのか」
助十が、語尾に力を入れた。
「路地の幅がせまい。九尺足らずだ。せまい道へ、どっと押し寄せれば、味方同士で肩がぶつかり、腕が触れ、身動きが取れなくなる。しかも暗がりだ。そこへ定市

が、抜き身をふりまわしてきたら、結局、先頭の二人ぐらいと、定市の勝負となる」
「なるほど……」
助十がうなずいた。
「つまり、吉三の組三人が、先へとびこむ。二番手が、俺の組六人、これくらいの人数なら、九尺幅の道でも、十分あばれることができる」
「そして、どうするんだ」
「玄関の左手に、勝手口へ通ずる木戸がある。俺は、その木戸を押し破り、裏へまわる。吉三が、二度目の口笛を吹く。そしたら、親分が、残りの八人を連れておどり込む」
助十が、黙ってうなずいた。
「八人のうち、四人が、垣根の木戸を蹴破って、中庭へ駆けこむ。庭は、大して広くはないようだ。こうなったとき、吉三を先頭にして、親分、そして四人の子分の順に、家の中へはいるわけだ」
「せまい道で、斬り込んできたら、どうするんだ」
と、吉三が聞いた。
「そのときは、野郎――と掛け声をかけ、斬り結ぶとみせて、吉三と三人は、逃げろ。近よると、野郎の仕込杖で斬られる。物音を聞いたら、俺と六人がおどり込む」
「なるほど、面白れえ。久しぶりで、長刀(どす)を振りまわせるわけだ」
吉三が、そう言って徳利口から酒を飲んだ。
総勢十八名が、美濃屋を出た。
あたりの商家の大戸がおろされ、番衆丁へはいると、人通りはまったく絶えていた。夜道を、十八名が、わらじの足を踏みしめて進んだ。
先頭を行くのは、小桜の吉三と二人の子分。その後から、鬼政と助十が、肩をならべ、後ろに十三人が二列縦隊で、尾いて行く。
暗い空だ。
番衆丁は、内藤新宿の大久保村寄りの裏通りである。右手に土手があって、黒々と樹木が覆いかぶさり、はるか前方に、正覚寺、成覚寺、太宗寺の森が無気味に静まり返っている。
「親分、くれぐれも定市に近寄っちゃいけませんぜ」
と、鬼政が、聞きとれぬくらいの声をかける。助十は、ぶるっと身ぶるいをした。噂の高い定市の居合い抜きと、対決したい気持ちもあったし、怖い気持ちもあった。が、どうしても勝負をつけなければ、男の意地が立

たない――と思った。
「まさか、大曲がりの助十が、へっぴり腰で、やあやあと、遠まきに声をかけていたと知れると、しまりがつかねえ」
助十は、今まで、何度か経験してきた喧嘩出入りを思い出した。五、六人の相手を叩き斬ったことがある。ずしりと手ごたえがあって、相手がのけぞり倒れたいくつもの場面が、瞼の裏に浮かんできた。
「誰かが、定市に斬られる。その刀が返ってくるまでには、間がある。その間なら、斬りこんでもいいでしょう」
助十は、
「なるほど」
と言ってうなずいた。暗がりに白刃が見えるような気がした。
「あっしは、定市と会ったことがある。彼奴が腰をひねる構えを見せたことがあるんだ。思わず、二、三歩後へとびのいたんだ。背筋に冷たい水を流しこまれたような、ぞっとする気持ちになった」
「何人かの犠牲者が出るな」
「半分、助かりゃ、おんの字でしょうな」
「頼みは、おめえだ。大曲がり一家で、多少でも剣術を習ったのは、おめえ一人だ」
「習った、やっとうなんか、役に立つもんじゃない。要は、野郎の白刃の下を、どうかいくぐるかだけです」
「あんまりでけえ声を出すな。子分どもの士気がにぶるぜ」
定市の家の路地が左手に見えてきた。
鬼政が、
「待てッ」
と、底力のある声をかけた。全員が足を止めた。小桜の吉三が、振り返った。
鬼政は、後ろにいる子分の二人に、
「おめえら、まず、あの路地のとば口まで行け。そしたら、奥へじっと眼を据え、しばらく様子を見ろ。何事もなかったら、長刀を抜き、振りかざせ」
と命じた。
二人の子分が、すばやく進み出た。

六　屍の山

源次は、定市に命ぜられ、隣の屋敷の庭へ潜りこみ、

丸太垣の間から、大曲がり一家のくるのを見張っていた。
隣家といっても、正覚寺の飛び地で、樹木を育てている場所となっている。丸太を組んだ垣がつづき、中は、びっしりと樹木が植えてある。
大曲がり一家の先頭が見えた。源次は、二、三十間の間隔を保ちながら徐々に、定市の家へ戻っていく。
「ひい、ふう、みい……」
源次は、人数をかぞえた。十八人いた。〈こっちは、小僧、女中を除けば、たたかえるのは、俺と定市だけ。とても勝ちめはねえ〉
一行が、眼の前で止まった。二人の子分が、路地まで走った。源次は、すばやく林間をぬけ、定市の家の玄関横の垣の破れから出た。
「十八人……きた」
と、源次は、詰まった声を出した。定市が、
「言われたとおり、部署につけ」
と怒鳴った。小僧、女中が走り、梯子、引縄を張った。源次は、縄梯子で、太い槇の木にのぼり、梯子をたぐり上げた。
足音がした。
三人だった。三人とも、張縄に足をとられて、もんどり打って倒れた。その後から四、五人が、走りこんできた。両側から、梯子が倒れ、何人かがつまずいてのめった。源次は、樹木の枝に腰をかけ、唐辛子の粉を、袋口を逆にして、ぶちまけた。
くしゃみをする声がある。
「痛え、眼が見えねえ」
と、叫ぶ奴がいる。路上に倒れている者につまずいて、後続の者が、将棋倒しとなった。
源次は、ありったけの目つぶしを撒いた。夜目にも、その粉末が、粉雪のようにちらばり降った。十八人のほとんどが、唐辛子の粉をあびた。咳をする者、くさみをする者。
「野郎はかりやがったな」と叫ぶ者。源次は、縄梯子を伝い、隣家の樹間に、とびおりると、台所口の奥から、定市の家の敷地へ抜け、家の中へとびこみ、玄関口へ走った。
玄関の土間のまん中に、定市が、両足を踏んばって、外の気配をうかがっていた。おろくが、上がり框に、立膝をして、定市を睨んでいる。灯りが消えているので、はっきり見えたわけではない。定市のねずみ色の着物

が、ぼんやりと見え、おろくの白粉をぬった襟足と、立膝をしている素足が、ほのかに見えたのだ。
　源次は、衝立の陰に身を潜め、出刃を握りしめた。異常な緊張感がみなぎっている。が、不思議なくらい、恐怖の思いはしない。一度でも、人を殺したことのある経験から、度胸がすわってきたのかもしれない。
　足音がした。
「定、出てこい」
　と怒鳴りながら、一人が玄関へとびこんできた。
　定市の腰が動いた。
　ぴかりと光った。
「ううッ」
　と言って、一人が前に倒れた。後から、二人とびこんできた。刃光が、二度うごいた。二人とも倒れ伏した。
　四人が、一度にとび込んできた。
　白銀の光が、横から斜め上へ走り、それが元へ戻ったと思われただけで、四人が折り重なって倒れた。
　定市が、二歩ほどさがった。
　そのとき、
「鬼政だ」と怒鳴って踏みこんできた。が、その名のりが「ぎゃあ」という絶叫に代わり、長刀を握ったままの腕が、血しぶきを上げ、天井板へはねとんだ。
　同時に、鬼政の首が、胴からはなれた。
　定市が、死体で埋まった土間から、上がり框へとび上がった。おろくが、その足をささえながら、
「腕は、たしかなもんだね」
　と、鼻にかかった声を出した。
「危ねえから、離れていろ」
　と定市が、声を押しつぶした。おろくが、衝立のうしろへ、とびのいた。源次は、裾を乱したおろくの肌に、手を触れた。おのずからそうなったのだ。
　おろくが、頬をすり寄せた。
　そのとき、玄関の外へ、多勢の者が殺到した。屋根の上から、どしゃぶりの雨のように異臭のある水が、降ってきた。およそ、十人ぐらいの者が、下肥にまみれた。
「定市、出てこい、大曲がり助十が、勝負をつけてやる」
　と、助十が、怒鳴った。が、定市は、足を踏んばったまま、動こうとしない。外の何人かが、土間へ走りこみ、死骸につまずいた。
「定、助十が怖いのか」
　また、怒鳴る声がした。
　睨み合いがつづいた。外の者が、木戸口を開けようと

して叩いている。他の者は、竹垣の木戸へ、体をぶっつけている。が、両方とも、びくりともしない。内側から、太い材木で、支えてあるからだ。
　三、四人が、玄関へ踏みこんだ。そこに死骸のあることを知って、手さぐりしながら、歩を運んだ。が、上がり框へ近づくか近づかないうちに、定市の抜き放った白刃で、崩れ落ちてしまった。
　また、二、三人が、踏みこんできた。びゅっ、びゅっという音を、二、三度耳にしただけで、あっけなく斬られている。源次は、落着きを取り戻し、眼を据えていた。自分のいのちに心配ない――と思われたからだ。
　そのとき、助十らしい男が、いきなり、死骸を跳び越えてきた。反動をつけ、上へあがりながら、定市めがけて、抜き身の長刀を突き出してきた。
　源次は、思わず、
「あッ」
　と叫んだ。定市が、刺されたと思ったからだ。
　定市は、助十の長刀を感じとると右へかわし、下から、斜めに助十の脇腹を斬り上げていた。助十の体がくずれ、定市の刀が、鞘に納まったとき、衝立の後ろから、おろくの右腕がのび、定市の脇腹を刺し貫いていた。
「おろく、裏切ったな」
　と、定市が、苦しげな呻き声をあげながら、白刃が鞘走った。衝立が、真っ二つに割れた。白刃が、衝立の木部へ深くめりこみ、定市が、たたらを踏んだ。源次の右手の出刃が、よろめく定市の胸板を突き抜いた。
　定市は、けもののような呻き声をあげ、ひびきをたてて倒れ伏した。
　あたりに、血臭がたちこめた。
「さ、早く、玄関の戸を閉めるんだよ」
　と、おろくが言った。
　源次は、雨戸を閉め、格子をとざし、しっかりと、かんぬき鍵をかけた。土間から、上がり框にかけて、十九人の死骸でうずまった。
　奥の茶の間に明りがついた。
　源次が、奥へはいると、おろくが、風呂を焚いていた。源次は、窓から首をつき出し、
「どうするんだ」
　と聞いた。
「風呂へはいってさっぱりするのさ」
「政市や小僧、女中は、どうした」
「前もって、お手当をやって、暇を出したんだよ」

「じゃ、大曲がり一家が押しよせてきて、みんなの役割がすんだら、暇を取ってもいい——と言ってあったんだな」
「そうだよ。でもね、ほんとのこと言うと、あたしは、こううまくいくとは、思わなかったのさ」
　おろくが、うふふと喉を鳴らした。焚口の炎のあかりに映し出されたおろくの頬に、血糊がべっとりと付いていた。
　源次は、思わず身ぶるいした。にわかに、玄関の中の死骸の山が、気になってきた。
「玄関先の死人……どうするんだ」
「そんなことは、知らないよ。あいつら、勝手に斬り合いをやってたんだもの。でもね、あたしは、源さんを見直したんだよ。うちの旦那が、苦しい息を吐きながら、衝立を斬りつけてきたとき、あたしもあんたも斬られちまうと思ったんだよ」
　源次は、そのときの光景を思い出した。なぜ、出刃で定市を刺したのかわからない。言えることは、定市が衝立を割ったので、敵愾心を持ったことだけはまちがいない。殺されるから、あべこべに相手を殺す——その行為が、衝動的に行なわれたようだ。
「あたしは、あんたが、あの人を刺したとき、あんたの心もちが、痛いほどわかったのさ。うれしかったよ。これほど確かな男の気持ちは、ないからね」
　おろくが、そう言って源次をみつめた。
　風呂が沸いた。
　二人は、裸になると、一緒にはいり、体を流し合った。源次は、おろくに対し、深いえにしでつながっているような親近感を抱いた。決死の覚悟で、大曲がり一家と対決し、二人とも血しぶきをあびた。
　しかも二人の意思が合致し、定市を殺した。〈俺は、この女と一緒になるように生まれついているのかもしれねえ〉と思った。
　血をあびた衣類は、二人とも、風呂の焚口から、ほうりこんで燃やした。源次は、おろくの心づくしで、定市の持物であるめくら縞の着物をきて、角帯をしめた。
　おろくが、絹物の着物をきて、薄化粧をほどこした。
　二人は、あり合わせの肴で酒を少し飲み、腹ごしらえをすると、抱き合った。源次は、おろくの体の奥処へ、いのちの泉をほとばしらせた。
　それは、情事というには、あまりにも異常な状況下の行為だった。屍臭が、家の中にたちこめ、息苦しいほ

ど、空気がよどんでいたし、めらめらと燃える行灯の灯あかりさえ、無気味に、息づいていた。
　おろくが、
「源さん、そこの畳を上げておくれな」
と言って、指さした。源次は、言われるままに畳を上げた。
　おろくが、首をのばし、床板をはずし、手をさし入れた。手が、重そうな皮袋をつかみ上げた。
　源次が、床板と畳を元へ戻した。
「この袋の中、銀で、ざっと二百両の金があるんだよ。これを、しっかりと腰にまきつけておくれ」
と言って、おろくが風呂敷をさしだした。源次は、皮袋を包むと、腰にまきつけた。
「さ、逃げるんだよ」
「どこへ行くんだ」
「ひとまず、鳴子坂まで行って、今夜はそこの旅籠泊まり……明日、暗いうちに発って、甲斐の国まではいるつもりだよ」
「小諸の叔父さんの家にかい?」
「信州の諏訪まで行くのさ。お父っつぁんの弟子だった清吉という男が、大工の棟梁をしてると、風の便りに聞いているから、頼って行くつもりだよ」
「俺と、夫婦になるつもりだな」
「二人とも、人殺しだよ。とても江戸にいられるはずがないからね」
　源次は、ふと、おしのと、お葉の面影をちらりと思いうかべた。その眼を、おろくが追いかけてきた。
「あんたが、何を考えてるか、わかっているよ。でも、仕方がないじゃないか。二人が、これから、生まれ変わったつもりで、仲よくやれば、きっといいことがあるよ」
　おろくが、源次の手をつかんだ。源次は、握り返しながら立ち上がった。二人は、台所口から外へ出ると、丸太垣の破れ目から、樹間の闇にまぎれ消えた。

　鳴海屋弁蔵が、定市の家へ出向いたのは、翌朝六つ刻（六時）だった。美濃屋四郎兵衛の手代が、左門丁の弁蔵の家へきて、十八人の大曲がり一家が、座頭定市方へ斬り込み、そのまま、一人も戻ってこない——と、知らせにきたからだ。
　弁蔵は、子分の平六を連れ、美濃屋の小僧に案内され、番衆丁へ急いだ。
「暮れ六つ半に、四十両の借りを返しますから、きてく

ださいと、嘘の呼出しをかけたんだけど、定市さん、こなかった。初夜の鐘が鳴ると、親分助十、鬼政、みんなで十八人が、喧嘩支度で出かけたんだ。俺、言いつけられ、定市さんの路地まで、様子を見にいった。まっくらで、なんだか薄気味、わるかったんだ」

と、道々、小僧が、説明した。

小僧は、路地口まできて、戻った。弁蔵は、路地へ踏みこんだ。路上に縄が二本、張ってあった。

「平六、定市は一人で十八人を相手にするため、楠流軍学の手法を使ったな」

「親分、梯子が二つ……」

弁蔵は、路上にしゃがみこみ、唐辛子の粉末が、おびただしく散乱しているのをみた。玄関へ着いた。平六が、開けようとしたが、鍵がかけてあった。平六が、左手の丸太垣へよじのぼり、屋根へのぼり、姿を消した。

弁蔵は、あたりにちらばる下肥の跡を眺め、頷いた。まもなく、中から、

「親分、大変だ」

と平六が大声をあげ、玄関を開けた。

屍臭が、鼻をついた。

弁蔵は息を飲み、眼をみはった。まさに屍の山だ。

「数えてみろ」

と、弁蔵が怒鳴った。平六が、腰をかがめ、数えた。

「十九人……一人多い」

弁蔵は、屍の間をぬけ、上がり框へ上がった。そこに、大曲がり助十と、定市が死んでいた。助十は、横腹から顎にかけ、斬り上げられていた。

定市の死骸を調べた。右脇腹に、うしろから匕首が刺されたままになっていて、みぞ落ちに、出刃が突き刺さっている。定市の白刃が、衝立を割り、食いこんだままだった。

「親分、ここにゃ塩丁のつる屋の板前、源次が逃げこんでおりやした。からすの勘吉を殺した野郎で。定市には、おろくという情婦もいたんだが……」

弁蔵は、うなずいた。

「みごとな居合い抜きだ。十八人をことごとく斬った。が、定市に油断があった。おろくと源次だ。二人に刺されて死んだ」

「二人は、逃げたんで……」

「追うな。ごみ掃除ができたんだ。定市も助十の一家も町の毒虫だった」

弁蔵は、死体の始末だけを考えた。

古着と小判

一　一文字屋吉蔵

江戸牛込、赤城下から古川町にかけて、古着屋が多い。狭い横丁に軒をならべ、古着屋ばかりがならんでいる。

その通りへ、一歩踏みこんだだけで、カビ臭いにおいがしたという。なにしろ、軒先まで、古着をぶら下げているから、通りから見ると、着物ばかりで、薄暗い店内に、人がいるのか、いないのかわからないほどだ。

江戸中期の記録によると、この界隈に、五十八軒の古着屋があったと言われている。店構えは、貧弱で、間口二間以上の家はない。

そんなうす汚ない町へ、絶えず、人々が出たりはいったりしている。午下がりともなると、古着をあさりにくる客がぞろぞろとつづき、異様な雑踏をかもし出していた。

又八は、大きな木綿風呂敷に、ぎっしりと古着を包み、これを背中に担ぎ、古着の町へ帰ってきた。ひる前から、通寺町の寺の湯灌場をまわり歩き、死人が着ていた着物を買ってきたのだ。一枚三両もする縮緬の着物が一朱で買えた。中には、めくら縞の安物もあったが、肩にめりこむほど背負っていながら、全部で一両そこそこで買えたのである。

湯灌場——とは、寺で死人の湯灌をするところだ。この時代の町家では、自家用の井戸を持っているところは少なかった。土地が自分の物で、井戸のある家だけが、自分での湯灌を許されていた。

したがって、借家人、借地人、井戸のない者の家で、死人がでると、寺へ持ち込み、湯灌をしてもらった。死出の旅路を飾るため、死人には、最高の晴着をきせるのが人情だった。

この着物を、古着屋が狙った。が、古川町だけで五十軒以上の店があったのだから、湯灌場は、古着屋の競争の場所となった。湯灌場坊主が、これにつけこみ、飲代稼ぎをやった。

又八は、古着屋一文字屋吉蔵の手代だった。が、一文字屋——とは、世を忍ぶかりの姿で、吉蔵は、すりの親分だった。又八は、それとは知らず、十五のとき、住込みの小僧となり、二十歳になるまで、古着屋の仕事と、すりの道を叩きこまれてきた。

その店は、古川町の出はずれにある。古着商い一文字屋——と、木の看板が出ているが、古着にかくれて見えない。又八は、店の前までくると、いったん立ち止まり、後ろをふり向いた。誰かに尾けられているかどうかを、確かめるためだった。

人混みがつづいているのが眼にはいった。その雑踏の中に、目明かし弁蔵の子分、平六が見えかくれに尾いてきていたが、もちろん、又八には、わからなかった。

彼は、古着の間を抜け、店の中へ走りこんだ。小僧の熊吉と、与市が、

「お帰りなさい」

と言った。

奥の間を抜け、台所の手前の、自分の部屋までできて、風呂敷包みをおろした。きちんと折りたたみ、主人の吉蔵に報告しなければならなかったからだ。

四畳半の暗い部屋だ。

台所から、かすかに陽の光が射しているが、いきなりはいってきたのでは、暗がり[illegible]じだ。いったいに、一文字屋の中は、とくに暗くできている。だから、小僧たちは、自分らをもぐらと呼んでいた。

又八は、風呂敷包みをひろげ、眼が慣れてくるまで、じっとすわり、十五枚の着物を買った順序をたどってみた。

遺族たちが、泣き声をあげ、死人に帷子を着せているとき、又八は、今、脱がせたばかりの着物に、眼をそそぎ、値ぶみをつける。五十文とか八十文とかの見当をつけておくのだ。

読経がはじまる。

湯灌場坊主が、脱がした着物を片づけ、湯灌場の裏へ持ってくる。又八は、その都度、坊主に袖の下をつかませ、買い取るのだ。

又八は、ようやく暗がりに眼が慣れてきた。着物を一枚ずつ、袖たたみにした。三枚目のつむぎの男物をたたもうとして、つかみ上げたとき、ほかの着物とはちがう、ずしりとした重みを感じた。

又八は、袂の中へ手を入れた。何もはいっていない。襟をつかんだとき、硬い物が手に触れた。襟の縫い込みをさわった。何かが、中に縫い合わせてある。

又八は、手ざわりから、小判だ——と直感した。縫い合わせの糸を、歯で嚙みきった。両方の襟の中から、小判が十枚ずつ、二十枚出てきた。

胸の動悸が波を打った。

「小判だ。二十両……」

又八は、吃った声を吐きだした。彼は、押入れを開けると、自分の下着にくるみ、布団の下のうすべりの下へ押し込んだ。手がふるえ、喉が乾いてきた。

又八は、その場に、へたへたと崩れすわった。〈どうなるんだ。俺が、盗んだ金じゃねえ。拾ったんだ。罪にはなるまい。運がよかった。あの着物は、たしか、安養寺の湯灌場だ。死人は、五十がらみの男だった。遺族の者は、たった二人、若い男がいただけだ〉

彼は、そんなことを考え、問題の古着をもう一度、調べた。もっと小判が、縫いこんであるかもしれない——と思ったからだ。

血臭が、ぷんと鼻を衝いた。

湯灌場の着物は、死人の臭いがする。血臭ではない。慣れない者は、この臭いをきらうが、又八のように五年も古着買いをしていると、鼻がきかなくなってくる。

が、血臭はちがう。

生ぐさい臭いを知ると、ふるえながら、着物に眼をさらした。

着物の前側が、べっとり濡れていた。

血だ——と思うと、歯の根が合わなくなり、息苦しくなってきた。そのとき、うしろの襖が開いた。にぶい陽光が、又八の姿を浮かび上がらせた。襖が閉まった。

女の匂いがした。

ふり向くと、そこに吉蔵親分の情婦ともかみさんともつかぬ、おしんが近よってきた。

「お帰り……」

と、甘い声がかけられた。

「ただいま……」

又八の声が、かすかに震えた。

〈小判……と血……見られたか〉

との考えが、頭の中を掠めた。

おしんが、又八の右脇にすわると、着物をつかみ、顔を傾けて眺めた。

「血だね。ほれ、ちょうど胸元にあたるところじゃないか。長刀か匕首で刺されたんだよ。あんた、この死人、見たのかい」

「へえ、通寺町の安養寺の湯灌場で、これを買ったんだ」
「どんな死人だったね」
「五十がらみ……あきんどみたいな男で」
「遺族の人は？」
「二十二、三の若い奴、鳶か火消人足みたいな奴が二人だけ……」
　おしんが、着物を持ち、立ち上がると、襖を五寸ほど開け、陽の光にひろげた。両手を開いたほどの部分が、血に染まり、その中央に、わずかな細い、まるい穴が透いているのが見えた。
　おしんが、襖を閉め、戻ってきた。
「その死人は、千枚通しのキリで刺されて死んだよ」
と、おしんが、声をひそめた。
　又八は、
「ええッ」
と口ごもった。千枚通しとは、帳面作りが、重ねた紙の穴をあけるとき使うキリだ。そのキリは、一文字屋吉蔵が、いつも護身用に、何本か持ち歩いている。捕吏に追われ、切羽詰まったとき、吉蔵は、手裏剣代わりに投げるのだ。百発百中といわれていた。
　又八も、二階の座敷で、吉蔵から手ほどきをうけたことがある。吉蔵は、子どものころから帳面屋の小僧となり、やがて手代までなったが、手くせがわるいのと、キリを投げる術に長けていて、人を殺し、行方をくらまし、やがてすりの本職になったということだ。
「じゃあ、どうしたらいいんで……」
「この着物は、あたしが預かっとくよ。旦那や、伝吉が帰ってきても、何も言うんじゃないよ」
　おしんは、そう言うと、又八をいきなり抱きしめ、頬をすり寄せた。
「おかみさん、いけねえ。旦那にみつかったら、キリで殺されちまう」
　又八が、おののきながら言った。
「あたしが、こんなにあんたを思ってるのに、なんていう人だね」
　おしんの腕に力がこめられ、又八は、まるで呪縛に会ったように、身うごきもできなくなった。
　おしんの熱い呼吸が、又八の耳朶をくすぐった。
「いけねえ。とんでもねえこった」
　又八は、口でこそそう言っているが、体は、しびれ、男のいのちが、火のように燃えてくるのを自覚した。
　おしんの太腿がむきだしとなり、又八の膝の間を押し

割った。又八の自制は消しとび、おしんの体の上へ、覆いかぶさった。
　男と女のいとなみを知らなかった。ただ、体中が熱くなり、呼吸を荒らげ、胸をはだけたおしんの乳房の谷間へ、顔を埋めたのだ。
　おしんの動作によって、みちびかれ、又八は、はじめて女体の奥処を知った。長い時間のようでもあったし、まばたきするほど、短い時間のようでもあった。
　それは、雲の上を浮遊するような、陶酔の一瞬であった。
「あんたは、初めて、あたしによって男になったんだよ」
「すんません」
「何を言ってるんだね。あたしは、うれしいんだよ。旦那の目を盗んでの火あそびとは、ちがうんだよ。あんたに、前々から、いのちをかけていたのさ」
「でも……もう二度と……」
「一度すんじまった以上、二度も三度もおんなじだよ。あたしは、どんなことがあっても、あんたを放しゃしないから」
「ど、どうなるんで……」
「旦那は、まもなく御用のお縄をちょうだいするのさ。そしたら、二人で、どこか遠いところへ……」
「暮しは、どうなるんで……」
「何を言ってるんだね。あんたは、今、血染めの古着の襟から、小判で二十両、抜き取ったじゃないか。それがあれば、当分は、食いはぐれることがないじゃないか」
　又八は、ぎょっとした。小判を見られたと思うと、なんと答えていいかわからなかった。
「俺……盗んだんじゃない」
　又八が、呻くように言った。
「きまってるじゃないか。湯灌場の古着は、捨てたもんだよ。それをいくらかでも金を出すのは、ほとけに対する功徳さ。気にしないほうがいいよ」
「へえ……」
「ところで二十両、それも、あたしが預かっておくからね。誰にも、言うんじゃないよ」
　表口で、吉蔵の声がした。
　おしんは、又八の返事も聞かず、立ち上がると、押入れを開け、下着にくるんだままの小判を、つかみ取った。
「誰か、俺のことを聞いても、いねえと答えるのだ」
と、吉蔵が、小僧に言いつけ、足音をたてて駆けこんできた。おしんは、台所へはいり、そこから、顔を出し

て、
「おや、お帰りなさい。早かったんですね」
と、笑い声をかけた。吉蔵が、又八のいる部屋へはいってきた。
又八は、両手を畳について、
「私も、今、戻ったところです」
と、あいさつした。
吉蔵が、又八の前へあぐらをかいた。おしんが、湯呑茶碗に冷や酒を入れて持ってきた。吉蔵は、それをつかみとると、一気に飲み干した。
吉蔵の呼吸が、かすかにはずんでいる。又八は、追われてきたんだ——と思った。
「又八、おめえ、通寺町の安養寺湯灌場へ、仕入れに行ったろ」
吉蔵が、声を重く沈ませた。うす暗がりの中で、吉蔵の眼が、らんらんと光っているのがわかった。
「へえ、参りました」
「男物のめくら縞の単物を買わなかったか。血のついているやつだ」
「さあ……血がついてるのは、買ったおぼえがありません。何しろ、買ったのは、これだけで……」
吉蔵が、折りたたんである着物を、一枚一枚調べた。
「ねえじゃねえか。めくら縞だ」
「これだけ背負って、今、戻ったばかりなんで……めくら縞、気がつきません」
「おかしいな。湯灌場坊主は、たしかに一文字屋の又八に売った——とぬかしていたんだ。おめえ、誰かに、襲われやしねえかい」
「へえ……誰も……」
「それとも、御用聞きに、跡をつけられやしなかったか」
「気がつきませんが」
吉蔵が、腕を組んだ。額のせまい眼のくぼんだ、顎のしゃくれた顔だ。頬骨が尖り、小鼻が張っている。怖い顔だった。
「旦那、何か思いちがいをしてるんじゃないかしら。あたしは、又八が戻ってくると、今、古着の勘定をしてたとこなんですよ。それとも、何か、まちがいでもあったんですかね。なんだか心配になってきたんですよ」
おしんが、吉蔵にしなだれかかった。
「ちっとばかり、やばいことがあったんだ。ゆんべ、夜の五つ刻（八時）、四谷の谷町でな。でも……てえしたことはねえ。すんじまったことさ。さ、二階へ上がろ

う。酒の支度をしてくれ」
吉蔵が、そう言って立ち上がった。おしんの手が、吉蔵の手にからみついた。二人は、次の間を通り、みしみしと階段の音をたてながら、上がって行った。

二　谷町の殺人

前日の夜、四谷の谷町、松岩寺の土塀の裏で、殺人があった。発見者は、千日谷の無縁墓地の管理人だった。左門丁の自身番へ、とんでいき知らせた。
鳴海屋弁蔵は、子分の平六を連れて、現場へ急行した。御用提灯をかざして、死人を見たが、四谷界隈では見かけない顔だった。年は、五十か、五十一、二のようだ。めくら縞の着物をきているが、長旅をしてきたような、汗臭いにおいがした。日焼けした顔は、引き締まっていて、旅の行商人のような感じもした。傷口は、みぞおちのあたりに、キリで突いたような跡があり、血が噴き出していた。持物は何もなかった。
弁蔵は、死骸を、無縁墓地の管理人に預け、いったん引き揚げた。管理人は、つい一カ月ほど前、前任の老人と代わって、小屋に住みついた藤吉という四十前後の男だった。
「あっしが、酒を飲んで、ごろりと横になっているとき、ばたばたという足音がしたんで、表へ出てみたんです。月のない夜なので、真の闇で、よくわかりやせんが、黒い影が二つ、土塀の前でもつれ合い、やがて一人が倒れ、もう一人の奴は、土塀をまわり、須賀丁のほうへ、逃げていきやしたんで」
弁蔵は、帰り道をゆっくり歩きながら、藤吉の言葉を考えていた。
「親分、どうしやす。被害者の身元が割れなけりゃ、なんとも手のつけようが、ありやせんな」
平六が、肩をならべながら言った。
「そうだな。ただ、傷口に特徴がある。手がかりは、それだけだ」
弁蔵は、それきり口を噤み、夜の道を、黙々と歩いた。〈あの顔は、どこかで見たことがある〉弁蔵は、死んだ男の記憶をたどろうとした。
が、記憶がはっきり浮かんでこない。彼は、若いころからの自分の生活をかえりみた。十手を預かっている現在の身分とくらべ、頬のほてる思いがした。
〈あの男は、俺が目明かしになってから知った男じゃな

い。俺が、夜の稼業をやっているとき、どこかで会った男のようだ。とすると、殺された奴は、盗っ人ということになるな〉

弁蔵は、十五のとき荏原郡の百姓をしている親元をとび出し、浮浪者の群れに身を投じた。それから、数年の間、役人の目をかすめ、忍び込み窃盗を働いてきた。その折り折りの出来事が、次から次へ、思い出された。

「俺も、年を取った証拠だ」

と、弁蔵の口から、つぶやきが洩れた。

平六が、はっと思い、

「親分、何か言いやしたか」

と聞いた。

「あの男、どこかで会った顔なんだ。それを思い出そうとしていたんだ。ま、いい、明日の朝、もう一度、千日谷まで出かけ、男の顔を、もう一度たしかめてみよう」

左門丁の弁蔵の家へ着いた。

「平六、いっぱい飲んでってくれ。死人の邪気ばらいにな」

と、弁蔵が声をかけた。

平六が、よごれた歯をみせ、奥へ上がりこんできた。

茶室用に建ててある奥まった離れ座敷で、二人は向き合って腰をおろした。弁蔵の内儀が、酒肴を持ってきた。

弁蔵は、酒は冷やが好きだった。若いころは、一升酒を飲んだ経験もある。年を取ってからも、燗酒を飲むとむせ返る癖があったのだ。

彼は、平六を相手に、だいぶ酒を過ごした。十指にあまる子分がいたが、弁蔵は、鼻の低い、みるからに醜男な平六が好きだった。十手を預かるようになってから二十数年経つが、その間、平六がいつも、弁蔵につきまとっていた。

平六は、弁蔵の長屋に住んでいて、女房が、針仕事で稼いでいる。腕がいいので、四谷はいうまでもなく、牛込、赤坂あたりから、縫物の依頼があって、暮しには困らなかった。

その平六も三十に近くなり、如才がなく、こまわりがきいて、弁蔵にとっては、手足と頼む子分だった。

平六が、だいぶ酔ってきた。

「親分、谷町の殺し……どうするんで」

「今、考えてるところだ。年を取ると勘がにぶくなってきやがった。困ったもんだな」

そういう弁蔵の髪に、白いものがちらほらと見え、このごろとみに柔和さを増してきた顔には、皺がきざまれ

ていた。

弁蔵は、若いころの思い出をたどっていたのだ。薄れた記憶の映像の中に、谷町で死んでいた五十男の顔が浮かんできた。もちろん、その顔は、若く張りがあった。

夜の町が、深い眠りに落ちているころ、弁蔵は、身軽な黒装束姿で、闇の底を突っ走っていた。土塀があった。植込みの梢の間から、星屑がみえた。

土塀をのり越え、植込みの中へとびおりた。すると、そこにすでに、先着の泥棒が、しゃがみこんでいた。弁蔵は、ぎょっとなって、ふところへ手を入れ、匕首の柄をつかんだ。

「待ちねえ、俺は暗闇の長吉という盗っ人だ、親分もなけりゃ、子分もねえ、まったくの一人ぼっちだ。よかったら、一緒に組んでもいいんだが」

と、男が、低い声で言った。弁蔵は、声をのんだ。暗闇の長吉は、以前はすりで、下谷の連雀町に住んでいたすりの親分、はやぶさ政五郎の子分だった。男振りがいいため、親分の妾と、道ならぬ関係におちいり、破門された。

政五郎が、長吉の右手の人さし指を、切断しようとしたとき、長吉は、親分を蹴り倒し、逃亡し、行方をくらましたのだ。

そのとき以来、長吉は、すりをやめ、のび師になった。すりは、平場といって、人混み、往来などで財布を取る。はやぶさ一家の眼が光っていて、とてもすりは、できなくなったからだ。

のび師——とは、深夜、人の家へ忍びこみ、金品を盗む泥棒をいう。が、すりとのび師では、刑罰がちがった。すりなら、罪を重ねても江戸追放くらいですんだが、のび師は、遠島から打首まであった。

したがってすり師は、

「俺たちは、お上のお慈悲で、刑が軽い、ありがてえこった」

と言っていた。が、事実は、そうではない。すりの盗金は、往来でやるので、金額が少なかったから、刑罰もおのずから軽かったのである。

長吉は、のび師になったが、それだけ重い刑罰におびやかされる羽目になったし、仲間もなく、一人で仕事をするようになったのだ。

弁蔵は、相手が長吉と聞いて、安心した。

「俺は、牛若の弁蔵というけちな盗っ人だ。おめえは、元は、はやぶさ政五郎の身内だったろうが、俺は、根っ

からの一人だ。年は、二十だ」
と、親しみのこもった言葉をかけた。
「そうかい、俺は二十一だ。女の一件で、親分をしくじった。けどな、手に職があるわけじゃねえし、めしが食えねえ。のび師になったってわけだ」
二人は、手を握りあった。半刻（一時間）ほど、膝をつき合わせてから、仕事にかかった。
「すまねえが、おめえは、見張りをやってくれ。俺がへえるのは、縁の下から、台所の上げ板を持ちあげ、座敷へへえるんだ。だから、勝手口にいてくれ」
と長吉が言った。
長吉が、庭の隅をすすみ、縁の下へもぐった。弁蔵は、勝手口へまわった。盗っ人は、いつの場合でも、退路が気になる。忍びこむのはやさしく、少し修業を積んだ者なら、誰でもできた。
が、逃げ路を用心して、家の中へはいったとき、退路に異変が発生していやしないか――との不安は、どうすることもできなかった。だから、盗っ人は、必ず何人かずつ組んで仕事をしたのである。
長吉は、小半刻（三十分）ほどすると、勝手口の土台石を内からはずして、その隙間から出てきた。
その夜、弁蔵は、長吉に誘われるまま、牛込築土丁の、八幡長屋へ行った。六畳一間の、うすぎたない部屋だった。
長吉が、弁蔵に、銀三両をよこした。
「少ねえけど、取っておいてくれ」
「すまねえな」
と言って、受け取ったが、弁蔵の胸に、もやもやしたしこりが残った。長吉の盗金は、少なくとも十両を越えていると思ったからだ。
弁蔵は、長吉に誘われるままに、八幡長屋で寝泊まりするようになった。家財道具は、何もなかった。綿のはみ出た布団と、はげちょろけの茶ぶ台、柳行李と茶箱があるだけの、みすぼらしい暮しだった。
長屋衆は、長吉のことを魚河岸の仲買人と思っていた。夜明け前に戻ってくるのは、商売をすませての帰り――と、いいわけしていたのだ。
弁蔵は、ざっと半年ぐらいの間、長吉と一緒に夜の稼業に精を出した。が、弁蔵が、一人で働いているときより、収入が減ってきた。
長吉は、用心深い男で、盗みにはいる前に、めざす家

の状況を、十日もかけて調査をする。家族の人数、間取り、金のあるなし、屈強な若者の人数などを調べてから、仕事にはいるのだ。
そのため、おおむね、月に二、三回の盗みしかできなかった。弁蔵がもらう分け前が、一両を切ることもあった。その金で、女を買い、酒を飲むと、ほとんど残るところは、なかったのである。
弁蔵の眼に、長吉がひどく老獪に見えてきた。長吉が留守のとき、弁蔵は、押入れの中の茶箱を調べた。二重底になっていて、底板をはずすと、その下に、銀貨ばかりが、厚紙に糊づけして、ならんでいた。ざっと八十両ほどあった。
弁蔵は、底板を元どおりに直すと、一枚の銀もくすねることなく、姿をくらました。その後、弁蔵は、小石川水道丁の女髪結いおくらの家へもぐりこみ、銭がなくなると、夜の仕事へ出かけていった。
弁蔵が、長吉と別れてから半年ほど経ったころ、小石川の茗荷谷で、小判で百両が盗まれる事件が起きた。被害者の家は、麹町の飯田町で、大きく魚屋をしている魚政の隠居所だった。定回り同心が弁蔵の穴を嗅ぎつけ、吟味の筋があるといって引っ立て、魚政の隠居所へ連れていった。
弁蔵は、被害者宅の侵入口の調べをさせられた。縁の下からもぐり、台所の下へ出て、上げ板をもち上げ、室内へ侵入している。退路は、大谷石を積んだ台所の土石の一つを、中からはずして、出ていることがわかった。
定回り同心は、侵入の手口から、犯人が誰であるかを、弁蔵から聞き出そうとした。
「この手口からみると、暗闇の長吉です」
弁蔵は、神妙に答えた。
「そのほうの罪は、お目こぼししてやる。その代わり、長吉のねぐらを言え」
弁蔵は、一瞬、眼をつむり、どうするか――と考えあぐねたが、長吉になんの情も残っていなかったし、この際、定回りの旦那に、よしみを通じておいたほうが得策だと考え、
「長吉のねぐらは、牛込築土丁の八幡長屋」
と、言ってしまったのである。
長吉は、まもなく八幡長屋で、捕まった。弁蔵は、その噂を聞いて、ちくりと胸が痛んだ。仲間を売った――という自責のおもいがあったからだ。

長吉は、死刑になるところ、遠島処分となった。町方の者から、聞いたところによると、長吉は、伝馬牢で血を吐いたので、不治の労咳（肺病）と判定され、死一等を減ぜられ、島流しとなったということだ。

弁蔵は、長吉の差し口をしたことから、同心や目明かしの諜者をつとめるようになった。このことから、弁蔵は、堅気になる機会をつかみ、乾物商鳴海屋の婿養子となったのである。

遠島となった長吉の消息は、不明だった。そのときから三十年以上の歳月が経った。〈谷町で、殺された五十一、二の男、ひょっとしたら、暗闇の長吉ではないのか。体つきがほっそりしていて、端正な顔立ちをしている。持物はなかったな。盗っ人が、旅をするときは、襟元に、銭を縫いこむ癖がある。しまった。さっき検分したとき、見ておけばよかった。襟の中に、小判か銀を入れていれば、あの男、長吉だろう〉

弁蔵は、平六の顔をじろりと眺めた。

「親分、何か、思いだしたんでござんすか」

「あの死人の襟に、銭が縫いこんでなかったかい」

「さあ、何しろ、お面と傷口、それから持物ばかりを気にしていたんで……」

「そうかい。俺もうっかりしていたよ」

「何か心あたりでも……」

「たしかなこたあわからねえが、あの男、暗闇の長吉という盗っ人かもしれねえ」

「聞いたことのねえ、名前でござんすね」

「あたり前だ。おめえが、まだ生まれねえころの、ちょいとした盗っ人だ。今から三十年ぐらい前、長吉は、御用となった。ところが、野郎は、労咳をやんで、血を吐きやがった。それで、遠島となったという話だ。労咳なら、今ごろまで生きていられるはずがねえ。ことによったら、お役人衆に銀をつかませ、斬首をまぬがれたのかもしれんな」

「とすると、その長吉殺しのホシは、どういうことになるんで……やっぱり盗っ人の仲間ということになりやすか」

「そんな筋だな。長吉は、すりの大親分、はやぶさ政五郎の子分だった。親分の妾とくっついて破門され、のび師となった。するてえと、遠島から、島抜けでもしてきた長吉を、はやぶさ政五郎の身内が、狙ったのかもしれねえ。盗っ人を、盗っ人が、銭取り目的で、襲うはずがないな」

「わかりやした。はやぶさ政五郎の身内が、今、どうしているか、聞きだしやしょう。当てがありますんで……」

「とにかく、明朝、千日墓地へ行くんだ」

弁蔵の語尾が、かすかにふるえた。

三　消えた死体

翌朝、弁蔵は平六を連れ、千日墓地へ出かけた。六つ刻（六時）だった。職人の出勤どきには、まだ間があるので、人通りはほとんどなかった。

千日墓地は、谷あいの底で、まわりの小高い崖の樹木には、朝日がさしているが、墓地のあたりはうす暗く、まだ眠りからさめていないようだ。

二人が、石囲いのある墓地へ近づいた。

「ない。死人がみあたりやせん」

と、平六が、うわずった声を出した。

弁蔵は、一瞬、ぎくりとした。あたりをみまわしたが、菰をかぶせてあったはずの死体が、どこにも見あたらなかった。

弁蔵は、管理人小屋へ走った。藤吉は、まだ寝ていた。平六が、雨戸を叩いた。

「藤吉、開けろ。親分のおでましだ」

と、平六が怒鳴った。藤吉が、雨戸を開け、ぺこりと頭を下げ、

「お早ようさんです」

と言った。

「ゆうべの死体……どうした」

弁蔵は、藤吉を睨んだ。

「どうしたかって……墓地にあるはずです」

藤吉が、墓地へ歩きだした。藤吉は、まもなく走り出し、墓地のまわりを、あちこち捜しまわった。

藤吉の四角い顔が、くしゃくしゃにゆがんだ。小鼻の脇を、ひくひくけいれんさせ、

「親分、こりゃ、どういうことなんで」

と、ふるえ声を出した。

「俺が、帰ってから、誰かここへきたか」

「誰もきません」

「おめえが、寝たのは、なんどきだ」

「へえ……かれこれ五つ半（九時）と思いますんで」

「それまで、何をしてたんだ」

「ちびちび、飲んでいたんで……」

「酒は、どうした」

「それが、おかしなことがあったんでげす。暮れ六つの鐘が鳴って、半刻（一時間）ほどすると、見たこともねえ若い衆が二人やってきやして、酒を一升持ってきてくれやした」
「なぜだ。見ず知らずの若いもんが……おかしいじゃねえか」
弁蔵は、藤吉の答えの真偽をみきわめるため、鋭く表情をとらえた。
「そ、それが、本当なんで……二人の若い衆は、俺の身内が、ここの無縁墓地に葬られている。供養を頼みてえ——と言って、二分銀一枚と、酒一升……」
「どんな野郎だ」
「いなせな、二十三か四の若い奴で……」
「職人かい。それとも、盗っ人じゃねえか」
弁蔵の顔面が、引き締まってきた。
「さあ、それは……ただ、小柄で、痩せぎすで、みるからに、すばしっこい奴らで……身なりは、絹物。やっぱり、ただもんじゃありやせん」
「絹物の柄は？」
「ねずみの縞柄でした」
「おめえは、ずっと酒を飲んでいたのか」
「へえ……殺しのある少し前から、飲みはじめ、騒ぎを知って、いったん自身番へとどけを出しやしてから、また、ちびちびやり出したわけで……」
「一升ぜんぶ、飲んじまったのか」
「へえ……申しわけありやせん」
藤吉が、なんども頭を下げた。
弁蔵は、平六を連れ、千日墓地をはなれた。藤吉が、二人を見おくっていた。
「平六……どう判断するかね」
弁蔵は、寺の築地塀の通りへ出ると、そう言ってあたりを見まわした。誰か、尾行者でもいやしないかと、思ったからだ。が、人の影は、見あたらなかった。
「殺しの犯人と、死体を盗んだ奴は、一つ穴のむじなと睨んどりやすが……」
「それが筋だな。が、殺しと死体の盗みとは、別々の人間だろう。盗んだ奴は二人だ。二人は、藤吉に二分銀一枚と、酒をあてがい、酔いつぶさせたんだな」
「その間に、こっそり運び出したってわけでがすな」
「そのとおり……問題は、死体を運び出した目的だ。おそらく、死体をあのままにしといちゃ、役方の調べの手がまわる。早えとこ、片づける必要があったと見られる

な」
「なるほど……あっしは、そこまで頭がまわらなかった。親分、どうしやす」
「死体を、どう処分したか……それだ。夜のうちに、どこかの川へ運び、重りをつけて沈める……こいつはよくやる手だ」
「じゃあ……川という川、ぜんぶ歩いてみますか」
「そんなことしたって、わかるもんじゃねえ」
弁蔵は、それきり口を噤み、歩きつづけた。松岩寺の山門の前まできた。小坊主が三、四人、箒で掃いていた。
弁蔵は、小坊主に近づいた。
「俺は、目明かしの弁蔵というもんだが、この寺に、ゆうべ、湯灌はなかったかい」
「へえ、寺じゃ、夜の湯灌はやりません」
「そうだったな。じゃ、けさは、何人、申し込みがあるんだね」
「二人で……」
「どこのお方だね」
「塩丁の美濃屋の隠居と、大番丁の大工の新八さんです」
「そうかい。ありがとよ……」
弁蔵は、山門をはなれた。
「親分、四谷じゅうの寺を、当たりやしょう。今から、片っ端から湯灌場を覗けば、盗まれた死人に、出っくわすと思いやすが」
と平六が声をかけた。
「まず、牛込を狙え。次は赤坂だ」
弁蔵の声は、ぴいんと張ってきた。
弁蔵は、平六を走らせた。まず、牛込を狙え——と言ったのは、勘である。千日墓地は、四谷にある。そこから消えた死体を、四谷の寺へ持っていけば、足がつきやすい。
二十三、四の絹物の縞の着物をきていた奴らは、おおかた盗っ人だろう。盗っ人の頭の回転は、常人とはちがう。先の先を見越して、処置を取る。
死体は、夜の間は、盗っ人の仲間の家へ運んでおき、朝になって、寺の湯灌場へ持っていく。そして、埋葬——。
弁蔵は、ここまで考えたとき、
〈湯灌場へ持ちこんだとしても、後の埋葬が問題だ。檀家寺でない限り、埋葬はできない。ひょっとすると、投

げ込み寺じゃないか〉
と思った。
平六の姿は、すでにない。体を丸くして突っ走って行った。弁蔵は、平六が走り消えた須賀丁の通りを、伊賀丁へ向かった。〈何十軒もある牛込の寺を、一つ一つ当たっているうちに、埋葬がすんでしまう。内藤新宿の、投げ込み寺を狙え――と言やあよかった〉と、悔いがあったのだ。
投げ込み寺――とは、心中者などの死体を埋める墓穴のある寺のことをいう。が、牛込には、投げ込み寺はなかった。四谷牛込界隈では、内藤新宿の正覚寺しかない。
弁蔵は、しまった――と思った。歩度を急がせた。市ケ谷仲ノ町へ出た。薬王寺をのぞき、安養寺の山門をくぐった。平六はいなかった。湯灌の町人は、まだみえていない。湯灌場の坊主に、今日の予定を聞いてみた。暗闇の長吉らしい持ち込みはなかった。
蓮来寺、浄栄寺、長厳寺、蓮秀寺、月桂寺、妙泉寺、恵光寺、光往院、久成寺とまわり歩き、白銀丁へ向かった。弁蔵は、疲れた。が、歩いているうちに、これでいいのだ――と思い直した。
投げ込み寺へ運びこめば、からくりはばれてしまう。長吉の死体は、檀家の名をかたり、普通の寺へ持ち込むのが筋だ。盗っ人は、俺も、以前そうであったように、町役人の裏をかく。とすると、平六を走らせたのはよかったんだ――。
彼が、通寺町の安養寺に着いたときは、陽が高くのぼり、時刻は四つ半（十一時）をまわっていた。弁蔵は、山門をくぐり、本堂の裏手にまわった。葬式にきていた町の人たちが、三々五々、連れ立って戻ってきた。
が、二十三、四の絹物を着た盗っ人らしい男は見あたらなかった。湯灌場の前まできた。屋根の低い、窓の小さな十坪足らずの建物から、二十六、七の坊主が出てきた。弁蔵は、歩み寄った。
「ちいと聞きてえことがある。五十一、二の痩せぎすのめくら縞をきた男の、湯灌はしなかったかい。御用の筋があってな」
と、弁蔵が声をかけた。坊主は、一瞬、声を呑み、じろじろと弁蔵を眺めた。
「その死骸を持ちこんだのは、二十三、四のいなせな若い衆二人だが……」
「参りました。それで、今、四谷左門丁の弁蔵親分の子分、平六さんという方が……」

「ここへきたのか」
「さようで……若い衆二人は、袋町の左官職三五郎さんとこのもんだと言って、五十一、二のめくら縞を着せたほとけを、運んできました。三五郎さんは、当寺の檀家でして……」
「ほとけの顔は、見たことあるのか」
「いえ……ぜんぜん知らぬお方で。なんでも旅の職人で、三五郎さんのとこへいついて四年になるが、ぽっくり死んじまった。親方が、かわいそうだから、うちの墓へ葬ってやれというんで、湯灌――をと申しますので」
「ほとけのなきがらは、どうした」
「三五郎さんとこの墓地へ、埋めました」
「めくら縞の着物は？」
「古川町の古着屋、一文字屋の手代又八さんが、買っていきました」
「うちの平六は、どうした」
「たぶん、古着屋へ行ったようです」
弁蔵は、考えこんだ。
平六が、追っていったなら、めくら縞の着物が、なくなるはずがない。もう一度、暗闇の長吉かどうか、ほとけの顔を見ておこう――と思った。
「すまねえが、その五十一、二の男……どうやら調べの筋がある奴らしい。すまねえが、今埋めた墓を掘り起こしてもらいてえな」
弁蔵は、坊主が、不服そうな顔をしたので、うしろの帯にはさんであった十手を抜き、てのひらで、もてあそんだ。寺院は、寺社奉行の管轄である。目明かしが、墓をあばくことはできないはずだ。
が、湯灌場坊主が、古着屋からうしろ暗い銭をもらっている。盗品の衣類を売ることもあれば、殺しの死体を、知らんふりして、湯灌してやることもある。そのうしろ暗さをおびやかすため、十手を見せたのだ。
坊主は、湯灌場の縁の下から、鍬を持ってくると、黙って歩きだした。松林がちらほらと点在する間に、おびただしい墓地がある。
坊主は、奥まった墓地へすすむと、塔婆の立っている土の盛り上がりを、掘り起こした。死顔が、土をかぶったまま出てきた。弁蔵は、腰の手拭を抜くと、顔の泥を拭った。
青黒く硬直した痩せた顔が、木洩れ陽に浮かび出た。弁蔵は、息を詰め、生唾を飲みこんだ。眼を閉じている中高の顔は、皺をきざんでいる。

彼は、三十年前の若き日の長吉の面影を、死顔に重ねた。が、長吉と断定するには、あまりにもちがっていた。

「ごくろうさんだった。元どおりにしておいてくれ」

弁蔵は、坊主に言い残し、寺の外へ出た。古川町へ足が向いた。

山門を出て、道を左へとった。

弁蔵の頭の中に、あざやかに、泥にまみれた男の死顔が残っていた。〈長吉なのか、別人なのか。長吉のような気もするし、ちがうような気もする〉

どっちにしても、誰かが男を殺した。その死体を、若い男が二人、盗み出し、袋町の左官職三五郎の住込み職人といつわって、安養寺に葬ったことだけはまちがいない。殺しと、その犯跡の隠蔽（いんぺい）——。

弁蔵は、そんなことを考えたが、〈長吉なのか、ちがうのか〉にこだわる気持ちを捨てかねていた。

古着屋の町へ曲がる角まできた。ばったりと、平六と出会った。二人は、肩をならべて、引き返した。

平六が、安養寺の湯灌場へ出かけたときは、一足ちがいで、一文字屋の又八が、男の着物を買って帰った後だったという経過を語った。

「親分、あっしは、すっとんで又八のあとを追いかけやした。一文字屋へはいるのを見とどけ……」

平六が、大きく呼吸をはずませた。

「で、おめえ、踏みこんだのか」

弁蔵の息も乱れた。

「あっしは、しばらく様子をうかがっていやした。古着屋が、湯灌場から死人の着物を買うのは、ご法度（はっと）でもなんでもねえんで、ちょっと気おくれがしやした。店のまわりをうろついてから、中へはいり、又八いるか——と言って、奥へ進んだんで……」

「着物、めくら縞……調べたか」

「奥の薄暗い四畳半の部屋に、又八がいたんで、聞きやした。買ってきた着物を見せろといって、風呂敷包みをひろげさせ、調べてみやした」

「あったか」

「ありやせん。で、安養寺から買ってきた、めくら縞の着物、どうした——と怒鳴っていると、そこへ、一文字屋の内儀がはいってきやして、めくら縞の着物なら、ここにありますよ——と言いやがった」

「なるほど……」

弁蔵は、足を止め、平六をまじまじとみつめた。

「あっしは、それを受け取ると、さっそく襟元をしらべてみやした。けど、小判も銀も、へえっちゃいやせん」

「襟元は、ほころびていたのか」

「それが……ぜんぜんほころびちゃいやせん。小判を抜いたなら、糸が切れてるはずでがすが」

弁蔵は、大きな失望を味わった。〈これで、あの男が暗闇の長吉だった——というきめ手はなくなった。ただの殺しだ〉

「平六……一文字屋を当分、見張れ」

と、弁蔵は、張りのない声をかけた。

四　又八（またはち）の恋

又八は、おしんに、思いを焦がすようになった。彼の眼は、別人のように光ってきた。その眼は、どこにいても、おしんの姿を捜し求めた。店につるした古着の間から、奥の間をのぞき、おしんの声、影、動作に眼をみはった。

〈もう一度、抱き合ってみてえ〉

その思いが、日ごとに燃えさかってきた。初めて知った女体の神秘が、又八の体に沁みこみ、気が狂うかと思えるほど、おしんを求めた。が、おしんは、眼を合わせても、素知らぬ素振りをするし、又八が、何か話しかけようとしても、何かの用にかまけて、相手になろうとしなかった。

又八は、あせった。なんとかして二人きりになれる機会をつかもうとした。奥の四畳半の暗い部屋で、おしんとすれ違ったとき、又八は、思い切って手を握った。

「おかみさん、どこか外で、会ってくれ。俺、苦しくて……」

「わかってんだよ。でもね、旦那が、何やら感づいて、おめえ、又八とまさか妙な真似は、しねえだろうな——と、聞くんだよ」

おしんが、手を握り返し、頬をすりよせてきた。又八は、返す言葉がなかった。親方の怖い顔が瞼のうらに浮かんできたからだ。又八は、

「でも……なんとか……」

と言って、胸を合わせようとした。

が、足音がしたので、とびのいた。

番頭の辰次がはいってきた。頬のこけた痩せた顔だ。眉毛が釣り上がっていて、ぎょろりとした眼が、大きかった。

又八は、台所へはいりこみ、乱れた呼吸をととのえて

いた。障子の隙間から、四畳半を覗いた。なんとなく、おしんが気になったからだ。辰次が、いきなりおしんを抱きしめ、口元を合わせた。
おしんの手が、辰次の背中を抱き、長い間、そのままの姿勢をつづけていた。
又八は、がくがくと歯の根をふるわせ、思わず拳固を握りしめた。〈おかみさんと、番頭は、できているんだ。俺とも、体の関係を結んだ。どうしたらいいんだ〉
彼は、くらくらする眼まいを感じ、裏口から外へ出ると、しゃがみこんでしまった。又八は、辰次が憎いと思った。殺してやろうと考え、ふらふらと立ち上がった。
そのとき、誰かが、又八の肩を軽く叩いた。振り向くと、そこに親方の吉蔵が、口元に薄笑いを浮かべていた。又八は、ぺこりと頭を下げると、眼を伏せた。叱られるような気がしたからだ。
「又八、おめえ、台所から四畳半を覗いてたようだが、何を見てたんだ」
吉蔵が、やわらかく声をかけた。
「へえ……別に……なんにも……」
又八が、吃りながら答えた。吉蔵の眼が、にわかにけわしくなった。
「今、そこの部屋で、おしんと辰次が、ちちくり合っていたろう」
吉蔵の声が、重く沈んだ。
又八は、
「へえ」
と答え、語尾を飲んだ。
吉蔵が、又八の腕をつかみ、
「ちょっと、その辺まで出よう」
と言って歩き出した。又八は、不安な思いを抱きながら、その後に従った。
溝板のあるせまい路地だ。厠の臭いがするし、台所口の塵溜に蝿がたかっていた。吉蔵は、年齢に似合わず、足が早い。年は、五十を二つか三つ越しているはずだが、体が鋼鉄のように引き締まっていて、身が軽く、歩くときほとんど音をたてない。
路地をぬけ、江戸城の堀割につづく川っぷちに出た。吉蔵が、木橋を渡った。橋を渡りきった右手に、掛茶屋があった。吉蔵は、振り向くと顎をしゃくり、又八に〈はいれ〉という合図をすると、中へはいり、奥まった小座敷へ上がりこんだ。
又八は、食卓をはさんで、吉蔵と向かい合い、腰をお

ろした。吉蔵が、顔なじみらしい女中に、酒と肴をたのんだ。又八は、不安な思いにかられ、吉蔵の表情を見守った。
「又八、このあいだ、安養寺から買ってきためくら縞の着物……どこへやったんだ」
吉蔵の声は、やわらかいが、その表情はけわしくなった。
「へえ……申しわけありません」
又八は、なんと答えていいか、迷った。
「どこへやったと聞いてるんだ」
「おかみさんに……渡しました」
「なんだと……おしんに……なぜだ」
「私が、買ってきた十五枚をひろげ、たたみ直していると……」
「おしんが、はいってきたのか」
又八は、黙ってうなずいた。胸の動悸が高くなってきた。吉蔵の眼が、火のように燃え上がり、腕をのばすと、又八の肩先をつかんだ。
「めくら縞の着物の襟に、小判が縫いこんであったはずだ。その小判、どこへやった」
「し、しりません」
「おめえは、その小判、見たか」
「見ません」
又八は、嘘をついた。本当のことを言えば、殺されるような気がしたからだ。
「おしんが、いきなり取り上げたのか」
「へえ……」
吉蔵が、酒を飲みだした。又八にも注いでくれたが、彼は、飲む気になれなかった。
「又八、おめえ、なんとかして、おしんからその着物を取り上げろ。場合によっちゃ、おしんと体の関係を結んでもいい。おしんは、とっくから、辰次とできていやがる。二人とも眠らせることは、わけのねえこったが、今、それができねえ」
吉蔵が、意外なことを口にした。又八は、まばたきもせず、その顔を見守った。
又八は、背中の粟立つ思いがした。〈やっぱり、辰次さんとおかみさんは、くっついていたんだ。なぜ、親方は、辰次を追い出さないのだろう〉
番頭の辰次は、すでに二十六歳になる。又八は、小僧として住み込んでから、辰次に、ずいぶん殴られた。商売を覚え、同時にすりの道も教えられた。人さし指と中

指で、すれちがう他人のふところや、袂の中から、財布を抜き取る仕事は、容易なことではなかった。又八は、性来不器用のせいか、すりは、一向上達しなかった。
「おめえは、湯灌場買いが、性に合ってるようだ」
と、辰次に言われた。吉蔵も、すりになれる見込みがないと知ってか、
「おめえは、商売をみっちりやれ」
と、言ってくれた。したがって、一文字屋の古着のあきないは、又八とおしんが、取り仕切るようになったのだ。
　又八は、ほっとした思いを抱き、商売に専念してきた。二十三歳になれば、年季が明ける。そうなったら、独立して裏店でもいいから、古着の店を出すのが、のぞみだったのである。
　吉蔵が、しきりに杯を重ね、何やら考えこんでいる。又八は、自分が、怖ろしい事件に巻きこまれたような気がしてきた。
「親方、いったいあの、めくら縞の着物……何かわけでもあるんですか」
「わけは、大ありだよ。その古着を、四谷左門丁の目明かし弁蔵が捜しているんだ。俺は、まさか、おめえが安養寺から、それを買ってくるとは思わなかったぜ。古着屋は、古川町だけでも五十何軒もある。それなのに、おめえの手へへえったんだ。因縁かな……」
　吉蔵の顔に、困惑の色が滲んできた。
「あれ、買っちゃ、いけなかったんですか」
「そうだ。買わんほうがよかった。めくら縞の男物、しかも血まみれの着物……買ったって、いくらの儲けになるもんじゃねえ」
「へえ……申しわけありません」
「買ったから、弁蔵に狙われるようになった。しかも、おしんにつかまれてしまった」
「親方……何か、まずいことでも……」
「大ありなんだ。あの着物が目明かしの手にはいれば、俺は、この町にゃいられねえことになる」
「なぜなんで……」
「おめえが、おしんから取り上げ、こっそり俺によこしたとき、何もかも言ってやろう。その代わり、おめえが、独立して店を出す銭ぐらい、なんとでもしてやるぜ。年季明けには、まだ間があるが、そんなことはどうでもいい。ちゃんと店を出してやる」
　又八は、聞いているうちに、希望がふくれ上がってきた。〈もう一度、おしんを抱き、着物がどこにあるのか、聞いてみよう。そして取り上げてやろう〉と考えた。
「俺は、当分、店には帰らねえ。辰次とおしんをよく見張っていろ。俺の留守を幸いに、二人は、抱き合うにきまっている。考えただけで、眼まいがするぜ。が、何よりも大事なのは、着物と、たぶん襟元に縫いこんであったはずの、小判か銀かだ」
「もし、着物と小判を手に入れたら、どこへ届けておくんです？」
「藤屋という掛茶屋、この店へ、風呂敷へ包んであずけておけばいい。一文字屋吉蔵へ渡してくれといってな。小判か銀かわからねえが、襟の金は、おめえにくれてやる。店を持つのに足りなけりゃ、あと二、三十両は、俺が出してやる」
　又八は、
「へえ、なんとかやってみます」
と答えた。吉蔵は、茶屋を出ると水道丁の通りへ、急ぎ足で消えた。
　そのとき以来、吉蔵は、店へ戻らなかった。吉蔵が、予想したとおり、おしんと辰次は、二階で、夫婦さながらのふるまいをするようになった。昼でも夜でも、二階へ上がったきりで、めったに下へ姿を見せることはなかった。
　又八の苦悩が深くなった。おしんと肌を交えたいという思いと、めくら縞の着物と小判二十両を取り返したい思いとが入りまじり、踏んぎりのつかぬ日を重ねていた。
　辰次が、めずらしく七つ刻（午後四時）になると、外へ出て行った。おしんが、店先まで出て、古着の間から、その後ろ姿を見送った。又八は、辰次がすりの仕事に出かけたものと判断した。
　おしんが、店にいる又八を横目でちらりと見てから、二階へ上がった。又八は、その動作を眼の端に入れ、知らん顔をしていた。おしんは、二階へ上がったきり、おりてこなかった。半刻（一時間）ほど経った。
　又八は、小僧に気づかれないように、足音を忍ばせて二階へ上がった。縁側のある八畳一間で、襖がしまっていた。又八は、襖を静かに開けた。布団が敷いてあり、おしんが、仰向けになって眠っていた。
　花柄模様の掛布団がめくれ、おしんの太腿が、むき出しになっている。又八は、眼を光らせ、生唾を飲みこんだ。体の芯が、めらめらと燃えてきた。

又八は、中へ踏みこんだ。襖を閉め、呼吸をととのえた。布団のそばへにじり寄ると、いきなりおしんの体へ抱きついた。おしんが、
「辰さん、およしな」
と、ねぼけ声を出した。
「俺だ。又八だ。おかみさん、俺、我慢がならねえんだ」
その声が、苦しげに喘いだ。
おしんが、眼をあけ、ぎくりとして、又八を押しのけようとした。又八は、乳房にむしゃぶりついた。
「何をするんだい」
と、おしんが金切り声をあげた。
おしんの手が、又八の顔面を掻きむしった。又八は、腹を立てた。辰次の顔がちらつき、抵抗するおしんが憎くなった。又八の手に力がこめられ、おしんの首を締めつけた。おしんが、ううん——とうめき声をあげ、悶絶した。
彼は、はっと思い、おしんをゆり動かした。おしんが、薄目をあけた。
「さ、あたしの体……自由にしておくれ。殺されちゃ、元も子もなくなるからね」
おしんの口元に、冷たい笑いが浮かんだ。又八は、はね起きると立ちはだかったまま、おしんを見おろした。
「何をしてるんだね。早く、思うとおりしたらいいじゃないか」
又八は背筋へ、冷たい水を流しこまれたような気がした。なぜだかわからない。ただ、そこに寝ている女が、おしんではなく、別人のような感じがした。又八の全身にたぎりたっていた欲求は、嘘のように消え失せ、けがらわしい白い肉塊がころがっているような気がしてきたのだ。
「俺は、おかみさんの体はもういらねえ。辰次さんとできてることを知ったからだ。それより、めくら縞の着物と、二十両、俺に返してくれ」
又八は思い切って、冷たく言い放った。
おしんが、布団の上にすわった。
「なんだって……着物も小判も、店のもんだよ。おまえはたかが手代、なんの権利があると言うんだね」
「俺、親方のゆるしをもらったんだ。俺の小判ぐるみ、おまえにやる——と言われたんだ」
「いつ、どこで、うちの人と会ったんだい。いいかげんなことを言うと、承知しないよ」
おしんの声が、高くなり、眼を釣り上げ、立ち上がる

と、又八の胸元をつかんだ。彼は、むっとなった。おしんの胸を突きとばした。おしんが、のけぞり倒れた。
「俺、嘘なんかつくもんか。あんたは、俺を欺し、着物と小判を取り上げた。返せ。親方は、何もかも見通しなんだ。姿こそ見せねえが、ちゃんとこの家を見張っているんだ。あんたと、辰次さんが、くっついてるのを知って、いたたまれなくなって、姿をかくしているんだ」
「着物も小判もありゃしないよ」
おしんが、乱れた裾を直しながら、そっぽを向いた。
「ど、どこへやったんだ」
「番頭が、あるところへ隠しちまったのさ。そんなに欲しけりゃ、辰さんに談判するんだね。あたしゃ、知らないよ」
又八は怒りにふるえてきた。
いきなり、おしんにおどりかかると、平手で頬を殴りつけ、襟元を締めあげた。おしんが、苦しげな息を吐きながら、
「ほんとだよ。辰さんがかくしちまったんだよ」
と言った。

五　第二の殺人

その夜、初夜の鐘が鳴り、古着屋の町の大戸がおろされるころになっても、辰次は、戻ってこなかった。
すりの平場(ひらば)の仕事は、夕ぐれどきときまっていた。人の心がなんとなく気ぜわしくなり、通行人もふえてくる。そんなとき、どんとぶつかった者がいても、気にもとめないで行きすぎてしまう。
平場——とは、人の集まるところの意味だ。日がとっぷり昏れ、初夜の鐘が鳴ると、ぱったりと人通りが絶えてしまう。すりは、ふところをふくらませて戻ってくるのだ。
おしんが、階下へおりてきた。小僧たちは、夕めしをすませると、風呂へ出かけた。又八が、奥の四畳半の部屋で、ぼんやりと考えこんでいると、おしんが、夕方、又八と争ったのも忘れたように、笑顔ではいってきた。
又八は、いずまいをただした。心の中で、もう二度と化かされないぞ——と思った。
「辰さんおそいね」
おしんは、心細さと不安な気持ちを、一人で耐えられ

ず、口にしたようだ。又八は、表情を堅くし、口を結んだ。
「又八さん、怒っているんだね。かんにんしておくれな。あたしは、ねぼけていたんだよ。つれない素振りをして……」
「嘘は、聞きたかないんだ。俺が、親方からもらった着物と小判、出してくれ」
「だから、辰さんが知ってるんだよ。帰ってきたら、三人で話し合うからね」
又八は、返事をしなかった。辰次とおしんと、俺と三人が談判をしたって、辰次に怒鳴られるか、殴られるかが関の山だと思った。又八は、ふと、万一のときの用意に、匕首でも持っていよう——と考えついた。
おしんが、すり膝で、そばへ寄ってきた。
そのとき、表の大戸を、はげしく叩く音がした。又八は、おしんと顔を見合わせた。行灯のあかりに浮かぶおしんの顔面から、血の気が引き、唇がわなないた。
又八は、おしんを一瞥すると、店へ走った。
「どなたさまで」
と、大戸の内側から声をかけた。
「俺だ。鶴次と金太だ」
又八は、その声を聞くと、大戸のくぐり戸を開けた。金太が、重たそうに、男を背負って、潜り口をまたいできた。又八は、
「あッ」
と短く叫び、奥へ走った。
おしんが、走りこんできた。二人は、店の次の間で、ぶつかり合った。
「大変だ。辰さんが」
と、又八が怒鳴った。
金太と鶴次が、辰次の体を、畳の上に横たえた。
「辰兄いは、赤城神社の崖下の暗がりで、死んでいたんだ。俺たちは、二人つるんで、仕事の帰りだった。俺が、兄いの死体につまずいたんで、びっくりして、顔を見た。兄いは、すでに、息をしていなかったんだ」
金太が、そう言って、おしんの顔を覗いた。おしんは、頰を硬直させたまま、辰次を見つめていた。
「俺たち二人のねぐらは、赤城下だ。今夜は、例によって内藤新宿まで、仕事に行ったけえりだ。今、金太の言ったとおりだ。傷口は、みぞおちを一突き……あっけなく殺られたってわけだ」
と鶴次が言った。鶴次の眼が、おしんの視線と重なった。おしんの唇が、わなわなとふるえだした。
「うちの人はいないし、困ったね。それで、辰次をここまで運んでくる途中、誰かに後を尾けられやしなかったろうね」
おしんが、語尾をふるわせた。
「へえ……そんなこたあ、ありっこねえようだった」
と、鶴次が答えた。
三人は、頭を近づけ、葬式の相談をはじめた。声をひそめたので、又八は、奥の四畳半へ引きさがった。
二人は、相談がまとまると、帰って行った。又八は、死骸のある部屋に戻った。おしんが、上体を傾け、辰次の着物を脱がせ、傷跡を調べた。傷は、みぞおちの左脇を突かれ、血の滲んだあとが、紫色にこびりついていた。
「辰次さんは、親方に殺されたんだよ。千枚通しさ。あんたが欲しがっていた、めくら縞の着物と小判は、今聞くと、鶴さんと金さんのところに預けてあったということだよ。親方は、それが欲しさに、辰さんを千枚通しで刺し殺したんだよ」
「なんだって……親方が……」
又八は、歯を嚙み、辰次の死顔を睨んだ。
鶴次と金太は、吉蔵の子分である。年は、鶴次が二十四で、金太が二十三になる。赤城下の白首長屋に、男二人、住んでいて、しょっちゅう一文字屋へ出入りしている。辰次のことを兄い——と呼び、親しんでいた仲だ。
「明日の朝、二人が、辰さんのなきがらを、通寺町の安養寺へ運びこむことになったのさ。こんどは、湯灌場買いは、やらないでおくれ」
おしんが、そう言うと、又八の手を握って、立ち上がった。二人は、四畳半へはいった。二人の体がもつれた。
「あんたは、辰次さんが死んだのに、悲しくないのかね」
「死んでしまった者は、仕方がないじゃないか。さ、あたしを抱いておくれ。これからは、又八さんだけがたよりなんだよ」
「だって、親方が……」
「うちの人は、あたしを狙うよ。辰さんの次は、あたしさ」
おしんが、うふふと笑った。喉にからんだ寂しげな笑いだった。又八は、無気味な思いがして、ぶるっと身ぶるいをした。
二人は崩れすわった。
おしんが、裾を乱した膝頭を、あらわにして、又八に

しがみついた。
「俺、どうしていいか、わからなくなった」
「うちの人が、あたしを殺しにきたら、どうするんだね」
「そ、そんなこと言ったって……」
おしんが、又八の胸に顔を埋め、何かを考えだした。
又八は、黙ってその背中を抱いた。たなごころに、女の体の弾みとぬくみが伝わってくる。又八の全身が熱くなってきた。
「ねえ、うちの人は、きっとここへくる。あたしは、ほんとのこと言うと、辰さんに誘われ、つい道ならぬことをしていたんだよ。うちの人は、それをちゃんと知っていて、狙っていたのさ」
又八は、おしんの体を想像し、太い溜息を吐いた。
「あたしの力になっておくれな。考えたんだけど、店は閉めてしまい、二人の小僧には暇を出してしまう。あたしたちは、吉蔵がここへ現われるのを待つのさ」
「待ってりゃ、殺されるんだ」
「だから、こっちが先手を打つのさ。表の大戸の鍵をかけ、台所口だけを開けておく。吉蔵は、猫のように足音をたてないで忍び寄ってくると思うよ。台所に、胡麻油を撒いておくのさ。いくら千枚通しの投げわざがうまいからといったって、足もとがすべったんでは、手もとが狂うはずだよ。吉蔵が、ころんだとき、あたしとあんたが、匕首を持って、一度に、吉蔵に襲いかかるのさ」
又八は、答えず息を飲んだ。殺しの場面が瞼の裏に浮かんできた。〈親方は、俺を欺した。古着と小判は、自分が、辰次を殺して召し上げた。俺に、店を出させてやると言ったのは嘘だ。辰次を殺した以上、必ず、おしんを殺しにくる。俺は、どうなるんだ。金もなく、一文字屋から出ていくことになる。五年間ただ働きだ〉
彼は、そこまで考えてから、吉蔵を殺し、おしんと二人で、一文字屋の跡を継ごう――と決意した。
「わかった。おしんさん、俺と二人で、親方を殺したら、夫婦になってくれるかい」
「あたりまえじゃないか。広い世間に、あたしは、誰をたよっていったらいいのさ。又八さん以外にないじゃないか」
おしんが、唇を合わせてきた。又八は、骨がきしむほど抱きしめ、唇を吸った。やがて、二人は、畳に崩折れ、四肢をからませた。隣室に、辰次の死体があるという、異常な環境のもとで、二人は、愛の確証を、たがいの体にきざみつけた。

小僧が、風呂から帰ってきた。おしんは、辰次が死んだことと、旦那が行方知れずになったから――と言って、それぞれ、五両と三両の金をやり、暇を出した。
一文字屋の家の中は、又八とおしんだけとなった。店の大戸は、堅く閉ざされている。次の間には、辰次の死骸がある。その奥の四畳半の部屋に、又八は、黙りこくってすわっていた。
行灯のにぶい光を見ながら、おしんと二人で、一文字屋を継ぐことを考えていた。〈俺は、二十で店持ちになれる。おしんというきれいな女と、夫婦になれる。人間の運なんてわからないもんだ。でも、それには、親方を殺さねばならない。そんなことが、できるかどうか……〉
又八は、ぼんやり考えこんだ。
おしんが台所へはいり、板の間に胡麻油を撒きはじめた。又八は、それをじっと眺めていた。畳なら六枚敷けるほど広い板の間に、油壺から杓子で汲み出して、まんべんなく油を塗り終えた。
おしんは、台所の戸口を一寸ほど開けると、しゃがみこみ、白足袋の足の甲を、荒縄で縛った。油ですべらないためである。おしんは、油びたしになった板の間を、そっと歩き、部屋へ戻った。

又八が、障子を閉めた。

おしんが、いつのまにか、出刃包丁を手に握っていた。ふところから、匕首を取り出すと、おしんが又八の手に握らせた。

「油は、土間にも撒いたよ。吉蔵は、必ずすべってころぶよ。まず、あたしが障子を開け、とび出すから、あんたは、あたしが刺したら、胸か腹をめがけて突き立てておくれ」

おしんの声が、かすかに震えた。

又八は、息を飲んで、その顔をみつめた。色白で、肉付きがよく、顎がくびれている。二重瞼の眼は、灯あかりをうけ、燃えたつように輝やき、だらしなくはだけた襟元から、雪肌をのぞかせている。

又八は、答えずうなずいた。

「怖いのかい」

「俺にはできそうもないよ」

「何を言ってるんだね。一文字屋の店と、あたしがあんたの物になるんじゃないか。しかも、あたしが最初に、出刃で横っ腹をえぐるんだよ」

「親方の死骸、どうするんだ」

「明日の朝、金太と鶴次が、辰次の死骸を取りにくる。どうせ、どこその大工の弟子……ぐらいのことを言って、湯灌場へ持っていくのさ。そのついでに持ってってもらうよ」

「なんと言いわけするんだ」

「親方は、誰かに刺され、半死半生で、ここへたどりつき、死んじまったというのさ」

又八は、おしんが悪鬼のように見えてきた。〈こんな女と夫婦になったら、俺も殺されるかもしれない〉と考えた。

そのとき、台所口に足音がした。おしんは、又八と顔を見合わせてから、行灯の灯を吹き消した。戸口が静かに開いたようだ。

ほとんど音をたてぬように、戸が開き、そして閉まった。又八は、歯を噛み、右手でしっかりと匕首をつかんだ。

ことり——と音がして、誰かが台所の板の間へ上がったようだ。その瞬間、大きな音をたてて、すべったらしい。

おしんが、障子を開け、板の間へ、おどりこんだ。又八は、その後から、板の間へ這いすすんだ。おしんの体が、とびこんだ。

あッ——という声がした。声はまさしく吉蔵だった。出刃の銀光が、闇の中におどった。

「ううん」

と、呻き声がした。又八は、油の板ですべり、腰をおろしてすわりこんだ。

「泥棒……こんちくしょう」

おしんが、大声で叫びながら、出刃を何回も突き立てた。

「お、しん、ま、待ってくれ」

と、吉蔵が、苦しげな声をあげた。

が、おしんは、倒れている吉蔵に、覆いかぶさるように、出刃を突き立てた。そのとき、いきなり戸口が開いて、二人の男がとびこんできた。

月明りがさしこんできた。

「四谷左門丁の鳴海屋弁蔵だ」

と、怒鳴る声がした。

おしんは、弁蔵に襟首をつかまれ、子分らしい男に、両手を後ろに縛された。

「明りをつけろ」

と弁蔵が、底力のある声を出した。又八は、匕首をふところへ入れると、四畳半へ戻り、行灯に明りをつけた。

「ひでえ油だ。誰が撒いた」

弁蔵が、おしんに聞いた。

「あたしだよ」

「なんのためだ」

「吉蔵が、あたしを殺しにくるんで、先手を打つつもりだったんだよ」

そのとき、吉蔵が、喘ぎながら、

「親分、聞いてくれ、おしんは番頭の辰次とくっついていたんだ。俺は、おしんを殺すつもりで、ここへきた。けど、あべこべに殺られちまった。店……店は、手代の又八に、後を継がしてくれ」

と言った。

弁蔵が、吉蔵を抱き起こした。

「一文字屋とは、世を忍ぶ商売、おめえは、すりだな。はやぶさの政五郎の子分で、血桜吉蔵というすりだな」

吉蔵が、わずかに首を縦に振った。

「千日谷で、五十一、二の旅の男が、殺された。その男は、暗闇の長吉じゃねえのか。そして、長吉を千枚通しで刺し殺したのは、吉蔵、おめえじゃなかったのか」

弁蔵は、吉蔵の耳元に口を寄せ、大声で聞いた。が、吉蔵は、がっくりと首を垂れ、呼吸をとどめてしまった。

又八は、体をわななかせながら、このありさまを眺め、〈俺は、匕首を使わなかった〉と、自分に言いきかせた。

六　差し口の恨み

弁蔵は、又八の案内で、隣室の辰次の死体を検分した。死因は、みぞおちのあたりを、千枚通しで一突きしてあった。

又八が、辰次の死体が持ちこまれたいきさつを説明した。弁蔵は、おしんに聞いた。

「めくら縞の着物と、襟元に縫いこんであった小判……どうした」

おしんが、

「着物と小判は、店の畳の下だよ」

と、ふてくさった言い方をした。平六が、店へとんでいき、畳をあげた。めくら縞の着物と小判は、どこにもなかった。

弁蔵は、ない――と知ると、

「おしん、嘘を言っちゃならねえ。どこへかくしたんだ」

と、大声を出した。

「たしかに、あそこへかくしておいたんですよ。誰かが盗んだのかもしれないね」

「なんのためにかくしておいたんだ」

「又八が、安養寺の湯灌場から、買ってきて、そこの四畳半の部屋で、たたみ直しているとき、あたしは、小判を襟元から抜き取るのを見ちまったんだよ」

「それを取り上げたのか」

「又八さんを欺してね……色仕掛けでね。というのは、吉蔵が、前の晩、誰かを殺してきたことを知ってたからだよ。あたしは、古着と小判……この証拠さえ、あたしが握っていれば、吉蔵に追い出されることも、殺される心配もないと思ったのさ」

「吉蔵は、千日谷で、暗闇の長吉を殺したのか」

おしんが、平六に縄尻をつかまれたまま、そのいきさつを語った。その経過は、次のとおりである。

その夜――。

四つ刻（十時）近くなって、吉蔵が戻ってきた。おしんは、吉蔵の体の異変を感じとった。ぷんと血の臭いがしたからだ。

「あんた、やばい（危ない）ことがあったね」

「やばいのは、毎度のこった」

吉蔵は、ぶすっとした言い方をすると、冷や酒をあおるように飲んだ。

「誰を殺したんだね」

「昔の仲間だ」

「はやぶさの親方が、生きてるころの仲間だね」

「ま、そういうわけだ」

「すると、相手は、暗闇の長吉だね」

「聞いてどうするんだ」

「あんたのことは、なんでも知っておきたいのさ。それが女房というもんさ」

「暗闇の長吉は、親方の女とできて破門された。その後、一人でのび師をやっていやがったが、御用になった。本来なら打首になるはずのところ、死罪をまぬがれるために、はやぶさ一家の差し口をしやがった」

「ありそうな話だね」

「そのため、政五郎親方は、御用となり、獄門になっちまった」

「それで暗闇の長吉を殺したんだね」

「はやぶさ一家にとっちゃ、彼奴は、生かしちゃおけねえ相手だ。草の根を分けても、長吉を殺さにゃならねえわけだ」

「よく、長吉が、江戸へ舞い戻ったことがわかったんだね」

「五年前、野郎がご赦免になったと知らせがあった。盗っ人仲間で、八丈島へ送られている者から、こっそり知らせてきたんだ。俺は、仲間の者に触れをまわし、長吉を捜した。皆目、見当がつかなかったんだ。ところが、十五日ほど前、内藤新宿で、旅籠屋の番頭をしている者の仲間から、長吉がいた――という知らせがあった」

おしんは、黙ってうなずいた。すり仲間の鉄の輪のようなつながりと、肌寒いくらいの、復讐心を感じとったのだ。

「裏切者は、必ず消す――のが、掟だ」

吉蔵は、それきり黙ってしまった。

おしんは、そのとき、自分も吉蔵に殺されるような予感を抱いた。まだ、口にこそ出さないが、辰次との密通を感づかれていると思ったからだ。

翌日――。

おしんは、辰次に、暗闇の長吉を殺すまでのいきさつを聞いた。

「親方は、金太と鶴次に命じ、長吉を捜索させたんだ。二人は、長吉の顔は知らねえが、こまかく人相風体を聞くと、内藤新宿を中心に、長吉らしい男を捜し求めたん

だ。とうとう、いどころをつきとめたんだ。千日谷の崖の上にある松岩寺の寺男、熊吉という男の小屋に寝泊まりしていることがわかった」
「熊吉は、昔なじみだったのかい」
「どうやら、長吉が、のび師をやってるころ、仲間だったらしいんだ。六畳一間の小屋で、男二人が、暮らしていたわけだ」
　おしんは、弁蔵の問いに対し、わるびれることなく、ここまで語った。
　弁蔵は、聞きながら、胸が痛んだ。自分も、盗っ人をしているころ、仲間を差し口して、役人に売り、そのおかげで、平穏に生きてこられたことが、思い出されたからだ。
「で、おめえは、なぜ、古着と小判を……」
「あたしは、いざというとき、吉蔵を、おどかすつもりだったのさ。お上へ、おそれながらと訴えてやるよ。証拠は、このとおりだ――と言ってね。そうすれば、吉蔵も、あたしに、めったなことはできないと思ったのさ」
「でもな、亭主を殺したのはいけねえな。吉蔵が、殺しにくるのがわかっていたから、先手を取ったんだろうが、殺したのがまずかったな」
「だったら、どうすりゃよかったんだね。辰次も、吉蔵に殺されたんだよ」
「そりゃ、そうだな。だったら、お白洲で調べをうけるとき、吉蔵が、殺そうとしたんだ、だから殺したと言うんだ」
　弁蔵の胸に悔恨が湧いた。
　ずっと昔、弁蔵もまた、仲間を売って、罪をまぬがれ、十手を預かる身分になっているからだ。
〈吉蔵が、暗闇の長吉を殺したのは、仕方のねえことだ。長吉に差し口され、はやぶさ一家は、めちゃめちゃになってしまった。俺が、吉蔵だったら、やっぱり長吉を生かしちゃおかなかったろう〉
　弁蔵は、暗い気持ちになった。
　又八が、弁蔵のそばへ寄ってきた。
「親分、私は、どうなるんです？」
　弁蔵は、その憂いをふくんだ顔をみて、〈この若者は、おしんに惚れている。ひょっとしたら、二人はできていたのかもしれない。しかも、吉蔵殺しに、おしんと共謀していたと思われる。とすると、又八も、縄をかけねばならない〉と思った。
「おめえ、吉蔵が現われるまで、おしんと何をしていた

んだ」
　弁蔵の語気がするどく尖った。
「へえ……私は、台所の次の間におりましたんで……」
「おしんと、何をしていた？」
「おしんさんが油を撒くのを、見ていました」
「その前は、何をしていたのか」
　又八の唇がわなないた。不安なまなざしが、縛されているおしんの眼とかち合った。
　おしんが、突然、わめき声をあげた。
「親方を殺せ――と言ったのは、又八なんだよ。どうせ、二人は不義密通をしていたので、殺される前に、あべこべに親方を殺しちまったほうがいい――と、この人が言ったんだよ」
　又八が、
「そ、そりゃ嘘だ」
と、おののきながら叫んだ。
「嘘か、ほんとうか、又八のふところを調べてくださいな。匕首を呑んでいるはずだから」
　おしんが、かん高くわめいた。自分は、のがれぬところと覚悟はしているだろうが、できることなら、又八を道づれにしたかったのだろう。
　弁蔵は、一歩踏みこむと又八のふところへ手を入れた。匕首があった。
「又八、こりゃ、なんのために持っていたんだ。ありていに言ってみろ」
「へえ、おしんさんが、油を撒いて、座敷へ上がってくると、私によこしたんです。おしんさんは、出刃を……」
「で、吉蔵がはいってきてから、おめえは、どうしたんだ」
「四畳半にすわったきり、動けなかったんです。とても、親方を刺すなんて……」
　弁蔵は、行灯の明りに、匕首を抜き放った。冷たい銀光がたばしった。が、血糊の付着もなく、鼻先へ近づけたが、血臭は、まったくしなかった。
「おめえは、おしんとできていたのか」
「へえ……おしんさんが、辰次さんと深くなってるのも知らず、誘われるまま……」
「そりゃ、おめえが安養寺の湯灌場買いをして帰ったときだな」
「ちょうど、親方も番頭さんも、出かけて留守でした。私は、おしんさんに……」
　又八の声が、消え入るほど細くなってきた。おしん、

が、上体をのり出すようにして、
「何を言ってるんだね、おまえがあたしを、押えつけたんじゃないか」
と、わめいた。
弁蔵は、苦笑しながら、二人のやりとりを聞いて、おしんの言葉は、嘘だと思った。長年の勘と、おしんの崩れた様子から、判断したのだ。
「又八、一文字屋は、吉蔵の遺言どおり、おめえが後継ぎになること、俺と平六が証人になってやる。くれぐれも、悪い女に引っかかるんじゃねえ。おしんを眼の前にして言うのは、気が引けるが、この女は、おめえのかみさんにゃ、不向きのようだ。女は、きれいなほど、心に毒があるようだな。まっとうな女を、かみさんにしな」
「じゃあ、私は、なんのおとがめも……」
「あるはずがねえよ。おめえは、吉蔵を殺すつもりがなかった。ただ、おしんから匕首を預かっただけだ。おしんが、出刃で、倒れた吉蔵におそいかかったとき、おめえは、おしんのやり方を黙って見ていた。本来なら、おとがめの筋かもしれねえけどな、目明かしというもんは、罪人をこしらえるばかりが能じゃねえ。安心して、店をやってたらいいだろう」
弁蔵は、わめくおしんへ、ぎょろりとした眼を向けた。おしんが縄尻を平六に握られたまま、又八へ襲いかかった。平六が、ふいをつかれ前へつんのめった。おしんが、又八へしがみついた。
「あたしだけが、獄門になるのはいやだよ。言っておくれ。吉蔵殺しは、又八が指図したんだと言っておくれ。そして、あたしと一緒に、お仕置をうけておくれな。あたし一人が、死ぬのはいやなんだよ」
おしんが、金切り声をあげた。平六が、とびこむと、おしんの後ろ襟をつかんで、引き倒した。
「平六、おしんを引き立てろ」
と、弁蔵が怒鳴った。平六が、おしんを抱き起こすと、その尻を、軽く蹴った。おしんは、よろめきながら、表口へ引かれて行った。
「又八、二つの死体の番をしておれ。いずれ定回り同心の旦那が検視にくる」
弁蔵が、歩きかけながら、後ろへ声をかけた。
「明日、金太と鶴次が、葬式にやってきます。どうします?」
と、又八が聞いた。
「金太と鶴次は、縄をかけちまったよ。彼奴らは、吉蔵

から命ぜられ、辰次の後をつけ、いどころを知らせたのさ。赤城下で、吉蔵が待っているところへ、辰次がやってきた」
「金太と鶴次は、すりの一件で、お縄を」
「それもあるが、辰次殺しの共犯者だ」
「小判二十両と、めくら縞の着物、いったいどこへいっちまったんです?」
「二十両、欲しいか」
「へえ……でも……」
「行方はわからねえ。たぶん、吉蔵が手に入れたと思われる。というのは、金太と鶴次のねぐらにもなかった。すると、吉蔵ということになるな。その吉蔵が、死んじまったんじゃ、捜しようがねえよ」
「もったいないことで……」
「おめえは、小判をみているから、そう思うのも無理はねえ。しかし、所詮は他人の銭だ。せっせと、湯灌場買いをやるんだな。きっと、うまい儲け口があるかもしれねえ」
弁蔵は、そう言うと一文字屋を出た。夜もおそいので、人通りはまったくない。大戸をおろした古着屋の町に、古着の臭いだけが、ただよっていた。
月明りで、赤城神社の森が、はるかに見える。縛されたおしんが、重なり合うようにして歩いていくのが眼に映る。
弁蔵は、ゆっくり歩きながら、腰の十手を抜くと、月明りにかざした。磨かれた鉄棒が、にぶい光を放ち、弁蔵の眼を見はらせた。
弁蔵は、十手と共に生きてきた二十年以上の歳月を考えた。十手を初めて預かったときは、その重味を腰に感じ、十手を抜くたびに、胸のおののきを自覚した。
ところが、年が経つにつれ、十手の重味を感じなくなり、それを抜いても、煙管（きせる）を手にしているのと変わりがなくなった。十手は、弁蔵の体と一体をなしていたし、犯人を捕縛することに、血のたぎりたつ興奮をおぼえた。
が、このごろの弁蔵は、犯人に縄をかけることに疑問を持つようになった。真犯人かどうかについての疑問ではない。自分が、捕縛する資格があるかどうかの、疑問だった。
〈俺は、若いころ、盗っ人だった。しかも仲間を差し口することで、御用聞きとなった。差し口された仲間の残党から、俺が、殺されなかったのが、不思議なくらい

だ。どうやら、この十手のおかげがあっただからだろう〉
弁蔵は、足早に平六に追いついた。おしんは、観念したのか、うなだれたまま、ゆっくり歩を運んでいる。
「平六……俺は、今日限り、十手をお返しするつもりだ。八丁堀の榊原の旦那に申し上げ、おめえを左門丁の目明かしにするつもりだ」
平六が、
「親分、そりゃまた、なぜなんで」
と、びっくりしたように反問した。
「俺も年だ。精がなくなったんだよ」
弁蔵は、平六の肩を叩き、寂しげに笑った。

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。
なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
(郵便番号112)
光文社 出版局

連作時代小説 悪の捕物帖（とりものちょう） ￥480

昭和45年10月15日 初版発行
昭和47年5月1日 9版発行

著者 佐賀（さが） 潜（せん）
東京都新宿区喜久井町36
発行者 五十嵐勝彌
印刷者 堀内文治郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽2 振替 東京115347 株式会社 光文社 電話 東京(942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 (榎本製本)
表紙の模様・意匠登録 116613

© Sen Saga 1970
(分)0-2-93(製)02181(出)2271 (0)

發行人　江　明　德
住　址　臺北市重慶北路三段三一三巷二號
發行所
印刷所　廣鴻文出版社
經銷處　文　林　書　店
臺北市武昌街二段六十六號
內政部內版臺業字一〇九六號
中華民國六十一年六月一日

原書經內政部外文書刊小組第232次會議審查清單第104號審查通過